西今井遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

建　　設　　省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料
NO 98-5038
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団保管
平成10年5月13日
01-330
12
2(7)

西今井遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1986

建　設　省
群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

1　試掘調査

2　Ⅰ区

3　Ⅱ区

4　Ⅲ区

5　Ⅲ区

6　Ⅳ区

7　Ⅳ区

8　Ⅵ区

序

国道17号線の混雑緩和のため埼玉県深谷市から利根川を渡り群馬県尾島町へ、さらに赤城南面を北西に進み前橋北部に達する上武道路が建設されることとなり、埋蔵文化財の緊急発掘調査が実施されております。

発掘調査は昭和48年から行われ現在は前橋市の今井、二宮地区に及んで、多くの成果を上げています。また、道路建設も着々と進み、既に、一部で供用され混雑の解消に大きな役割をはたしています。

西今井遺跡の立地しますこの地域は、赤城山東南麓で大間々扇状地の湧水地帯ですが、平安時代後半には空閑の郷々とされた地域であります。一連の発掘調査により、当地域にも古代の人々の生活の証が埋没しており、奈良平安時代の大規模な集落跡が判明し、古代人（びと）の息吹を感じ取れました。

発掘調査は昭和50年～51年度にわたり北風吹きすさぶ厳寒の中、猛暑のなかでも実施されました。

調査実施にあたりまして、多大なる御援助を賜りました建設省高崎工事事務所並びに群馬県教育委員会文化財保護課の各位に感謝申し上げます。

終わりに、発掘調査並びに整理を担当された調査員、作業員、補助員の労をねぎらうとともに、本報告書が群馬の古代社会解明の資料として、県民各位、研究者により活用されることを期して序文とします。

昭和62年３月25日

財群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　清　水　一　郎

例　言

1．群馬県佐波郡境町を中心に位置する西今井遺跡（にしいまいいせき）は1980年３月までに２回の発掘調査が実施された。調査期日と発掘調査主体は以下の如くである。

　１回目　1975年７月28日～1977年１月22日　　群馬県教育委員会による発掘調査

　２回目　1979年４月６日～1980年２月２日　　佐波郡境町教育委員会による発掘調査

2．発掘調査の原因とその主体者は下記の如くである。

　１回目　一般国道17号（上武道路）改築工事　　建設省（関東地方建設局高崎工事事務所）

　　早川河川改修工事　　群馬県（土木部河川課）

　２回目　県営圃場整備事業　　群馬県（農政部耕地建設課前橋土地改良事務所）

3．主体者が３つの行政機関に分れ、発掘主体も町、県の教育委員会が実施した。それぞれ調査年度内には発掘調査の概要が公刊されている。

4．本書は１回目のうち建設省が主体者となった発掘調査の正式報告書で『西今井遺跡』一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書と呼ぶ。１回目のうち群馬県土木部河川課が主体者となった分については「河川改修調査」とすることとし、「上武道路調査」「河川改修調査」合冊として群馬県教育委員会による発掘調査の成果をまとめることにしてある。

5．西今井遺跡の所在地は以下のとおりである。

　　群馬県 佐波郡 境町 大字西今井 小字中道（Ⅰ～Ⅴ区）

　　群馬県新田郡新田町大字下田中小字下課訪下（Ⅵ区）

6．本遺跡の発掘作業は群馬県教育委員会文化財保護課が主体となり実施された。試掘調査から本調査までは５次にわたった。参加者・協力者は以下のとおりである。

発掘担当者	横沢克明　平野進一　柿沼恵介　清水和夫　巾　隆之	
	真下高幸　石塚久則（群馬県教育委員会文化財保護主事）	
指　導　者	新井房夫	群馬大学教授（地理．地質関係）
	楢崎彰一	名古屋大学教授（施釉陶器）
	尾崎喜左雄	群馬大学名誉教授（考古学）
	勝守すみ	群馬大学教授（中世史）
	峯岸純夫	東京都立大学教授（古代史）
協　力　者	佐波郡境町教育委員会	新田郡新田町教育委員会
	新田郡尾島町教育委員会	神奈川大学考古学研究会

7．本遺跡の整理作業及び報告書作成作業は1986年４月１日から1987年３月31日までの期間、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

8．本遺跡の整理作業及び報告書作成作業は石塚久則が担当となり下記の方々の協力を得た。

　新井悦子、佐藤美代子、柳井さよ里、樺沢禄子、高橋真樹子、平林照美

9．本遺跡は発掘調査して記録保存後、消滅した。出土遺物、図面、写真、日誌、記録等の資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

10．発掘調査から整理、報告書作成にまでには多くの方々の御協力を得ることができて、本書が完成した。特に発掘作業員、地元の方々には格段の御配慮をいただいた。それら全ての方々に感謝を捧げたい。

凡　例

1　**報告書**　本書は西今井遺跡の発掘調査のうち群馬県教育委員会が実施した部分の報告書である。

群馬県教育委員会の調査した西今井遺跡の報告書は2冊に分冊されて刊行された。1冊は上武道路部分，他の1冊は早川河川改修部分の調査成果をまとめた。

2　**編　集**　2冊の報告書は全体の流れを調査経過，遺構，遺物，結語の順に並べた。「上武道路調査」にあたる本書はそのうちの調査経過と遺構，遺物のうちの上武道路部分の竪穴住居を登載し，その他は「河川改修調査」にまわした。

3　**遺　跡**　遺跡の位置の基準は平面直角座標系第Ⅸ系を使用し，高さ基準は標高を使用した。

遺跡の基準線は上武道路の計画中心線を通し，20m毎に打ちこまれた杭の直交方向で発掘区を設定した。遺跡の座標北から西へ6°40′が磁北，真北は座標北より東へ20′を測る。

4　**遺　構**　遺構は原則として一遺構を見開きで表記し理解を助けた。このため，遺構間の均質化を計ることはできたものの，遺構，遺物の残存状況の良いものや複雑なものについては逆に手抜きの表記であるとの指摘はまぬがれることはできない。

竪穴住居の実測は発掘調査の段階では1／20の縮尺であった。本書では1／60の縮尺に統一した。平面図には遺構とともに遺物の出土状態を作成し表示した。特に窯前面の焼土の広がりについては単位の短かい破線で表現した。また，床面踏み固め範囲や床面下の構築時の荒堀りと考えられる部分についても一部認められたが，観察結果を文章で表現するにとどめてある。

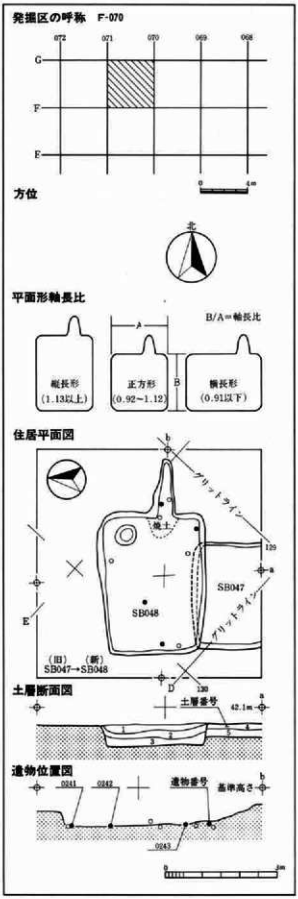
竪穴住居の方位は，竈を天とした中軸線を主軸方向と考え磁北とのなす角度で表示してある。断面図における遺構同士の切り合いについては立地する土壌が砂質の沖積土であることや，覆土が浅いことなどから不確定要素が強く，調査時の観察結果を断面図の表現の中に導入してしまった箇所もある。竈も構築面の土壌の悪さと構築材の粗末さから精度の高い図化ができたものは少なく，平面図と断面図が必ずしも一致していない部分がある。壁の立ち上がり傾斜は土壌の不安定さから測定していない。

5　**土　器**　土器は，実測可能なものが登載する傾向にあったが，住居内からの一括品のうち器種のバランスを考え小破片からでも積極的に復元して登載することにつとめた。

土器の実測は現寸図面を1／2に縮少したものをトレースして1／4の縮尺に統一して報告書に登載した。

土器の図面上の表現は製作技法を重視することとし，調整技法の変換点にヒゲを出し，文章表現と補完関係をもたせた。土器のうち，内黒土器については荒い点描のスクリーントーンを貼付して表現した。土器のうち，須恵器については断面を黒で塗りつぶした。土器のうち，施釉陶器については施釉範囲に網目スクリーントーンを貼付した。報告書が2冊に分かれたため全体をとおした土器の分類基準に不安定さが残る。後半の「河川改修調査」でその欠を補いたい。

土器の色の表現については『標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局1976を使用した。



発掘区の呼称は上武国道センター杭No. 338とNo. 342を結ぶ線に求めてある。この基準線をＦラインとして４ｍ毎に調査区幅をＡ～Ｚラインとした。長さ方向はNo. 340の杭を基準にＦラインの直交線を145ラインとして、杭No. の若い番号から060～200の３桁の数字で呼称した。Ｆ070のグリットは図示の位置の４ｍ×４ｍの範囲を示す。

方位は本報告書では磁北で統一してある。当時の調査技術の段階では平面直角座標の基準線を使用することができなかった。

平面形は窯を上方に置き天地の寸法を縦、左右の寸法を横として表記した。また形状は縦方向寸法を横方向寸法で割った数値の範囲で表示した。正方形は0.92～1.12の範囲、縦長形は1.13以上、横長形は0.91以下である。

住居平面図には遺構周辺の状況も知っておくためにある範囲を方形で表現した。住居の位置は基本的には窯を北とした。発掘区の中での住居の位置はグリット線によって明確にした。住居と他の遺構の切り合い状況（先後）は新住居にかかる旧住居部分を破線で表現した。表示の住居の場合は旧住居ＳＢ047→ＳＢ048新住居となり、文章では新しい方向へ矢印で表現した。焼土は短かい破線で、重複表現は長い破線で、床下掘り方は長い破線で表現した。

土層断面図は方形の表現範囲の交点２点間で表示した。遺構検出面は点によるスクリントーンで表現し、土層から引き出したら、数値で表示した。

遺物位置図は方形の表現範囲の交点の２点間で表現した。基準高さは基本的には右隅の交点に記入した。遺物は白ヌキの丸は遺物の小片なもの、黒丸は遺物と出土位置が照合できるものである。遺物番号は４桁として全ての番号と対応させてある。

西今井遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

目　次

第Ⅰ章　序　言 …… 1

1　発掘調査に至るまでの経緯 …… 1

2　遺跡の立地と環境 …… 3

第Ⅱ章　西今井遺跡の発掘調査 …… 16

1　調査の概要 …… 16

2　調査日誌 …… 20

3　地形の調査 …… 23

第Ⅲ章　竪穴住居の調査（南地区） …… 24

1　遺　　構 …… 24

2　遺　　物 …… 104

彩 色 図 版 （巻首図版）

1 西今井遺跡鳥瞰図
2 発掘調査　1 試掘調査　3 Ⅱ区　5 Ⅲ区　7 Ⅳ区
　　2 Ⅰ区　4 Ⅲ区　6 Ⅳ区　8 Ⅵ区

図 版 （PL.）

1 遺跡の周辺　西今井遺跡周辺の空中写真
　空中写真の地形解説（上図）
2 遺構全景　1 Ⅱ区遺構全景 43、44、45号住居付近
　2 Ⅱ区遺構全景 46、47、48号住居付近
3 遺構全景　1 Ⅳ区50－57号住居付近
　2 Ⅳ区55、56号住居付近
4 遺構全景　1 Ⅳ区62－65号住居付近
　2 Ⅳ区70、71号住居付近
5 住　居　1 1号住居 全景
　2 1号住居 竈
　3 2号住居 全景
　4 2号住居 竈
　5 3号住居 全景
　6 3号住居 竈
　7 4号住居 全景
　8 4号住居 竈
6 住　居　1 5号住居 全景
　2 5号住居 竈
　3 6号住居 全景
　4 6号住居 竈
　5 7号住居 全景
　6 7号住居 竈
　7 8号住居 全景
　8 8号住居 竈
7 住　居　1 9号住居 全景
　2 10号住居 全景
　3 11号住居 全景
　4 11号住居 竈
　5 12号住居 全景
　6 12号住居 竈
　7 13号住居 全景
　8 13号住居 竈
8 住　居　1 14号住居 全景
　2 15号住居 竈
　3 16号住居 全景
　4 16号住居 竈
　5 17号住居 全景
　6 17号住居 竈
　7 18号住居 全景
　8 18号住居 竈
9 住　居　1 19号住居 全景
　2 19号住居 竈
　3 20号住居 全景
　4 21号住居 竈
　5 21号住居 全景
　6 22号住居 全景
　7 23号住居 全景
　8 23号住居 竈
10 住　居　1 24号住居 全景
　2 24号住居 竈
　3 25号住居 全景
10 住　居　4 25号住居 竈
　5 26号住居 全景
　6 26号住居 竈
　7 27号住居 全景
　8 27号住居 竈
11 住　居　1 28号住居 全景
　2 28号住居 竈
　3 29号住居 全景
　4 29号住居 竈
　5 30号住居 全景
　6 30号住居 竈
　7 31号住居 全景
　8 31号住居 竈
12 住　居　1 32号住居 全景
　2 32号住居 竈
　3 33号住居 全景
　4 34号住居 全景
　5 35号住居 全景
　6 35号住居 竈
　7 36号住居 全景
　8 36号住居 竈
13 住　居　1 37号住居 全景
　2 37号住居 竈
　3 38号住居 全景
　4 38号住居 竈
　5 39号住居 全景
　6 40号住居 全景
　7 41号住居 全景
　8 41号住居 竈
14 住　居　1 42号住居 全景
　2 43号住居 全景
　3 44号住居 全景
　4 44号住居 竈
　5 45号住居 全景
　6 45号住居 竈
　7 46号住居 全景
　8 46号住居 竈
15 住　居　1 47号住居 全景
　2 47号住居 竈
　3 48号住居 全景
　4 48号住居 竈
　5 49号住居 全景
　6 49号住居 竈
　7 50号住居 全景
　8 50号住居 竈
16 住　居　1 51号住居 全景
　2 51号住居 竈
　3 52号住居 全景
　4 53号住居 竈
　5 54号住居 全景
　6 55号住居 竈

16	住居	7	56号住居	全景		
		8	56号住居	竈		
17	住居	1	57号住居	全景		
		2	57号住居	竈		
		3	58号住居	全景		
		4	58号住居	竈		
		5	59号住居	全景		
		6	59号住居	竈		
		7	60号住居	全景		
		8	60号住居	竈		
18	住居	1	61号住居	全景		
		2	61号住居	竈		
		3	62号住居	全景		
		4	62号住居	竈		
		5	63号住居	全景		
		6	64号住居	全景		
		7	65号住居	全景		
		8	65号住居	竈		
19	住居	1	66号住居	全景		
		2	66号住居	竈		
		3	67号住居	全景		
		4	67号住居	竈		
		5	68号住居	全景		
		6	69号住居	全景		
		7	70号住居	全景		
		8	70号住居	竈		
20	住居	1	71号住居	全景		
		2	71号住居	竈		
		3	72号住居	全景		
		4	72号住居	竈		
		5	73号住居	全景		
		6	73号住居	竈		
		7	75号住居	全景		
		8	76号住居	全景		
21	住居	1	77号住居	全景		
		2	77号住居	竈		
		3	78号住居	全景		
		4	78号住居	竈		
		5	79号住居	全景		
		6	79号住居	竈		
		7	80号住居	全景		
		8	80号住居	竈		
22	遺物	1	土師器	杯	0002	S B001
		2	土師器	甕	0007	S B001
		3	須恵器	杯	0015	S B003
		4	土師器	杯	0016	S B004
		5	須恵器	杯	0017	S B004
		6	須恵器	杯	0018	S B004
		7	須恵器	長頸瓶	0019	S B004
		8	須恵器	杯	0022	S B005
23	遺物	1	土師器	甕	0026	S B006
		2	土師器	杯	0029	S B007
		3	須恵器	杯	0038	S B008
		4	須恵器	杯	0040	S B008
		5	土師器	甕	0044	S B008
		6	須恵器	杯	0045	S B009
		7	須恵器	杯	0055	S B011
		8	土師器	杯	0065	S B013
24	遺物	1	土師器	甕	0074	S B013
		2	須恵器	杯	0075	S B014
		3	土師器	皿	0077	S B015
		4	須恵器	杯	0080	S B016
24	遺物	5	土師器	杯	0087	S B018
		6	須恵器	杯	0089	S B018
		7	土師器	甕	0093	S B018
		8	土師器	杯	0094	S B019
25	遺物	1	灰釉陶器	長頸瓶	0096	S B019
		2	土師器	甕	0102	S B021
		3	須恵器	杯	0106	S B022
		4	須恵器	杯	0108	S B022
		5	須恵器	杯	0110	S B022
		6	須恵器	杯	0117	S B023
		7	土師器	甕	0129	S B025
		8	土師器	杯	0140	S B030
26	遺物	1	土師器	杯	0144	S B031
		2	土師器	杯	0151	S B032
		3	須恵器	杯	0157	S B033
		4	土師器	杯	0162	S B034
		5	土師器	杯	0163	S B034
		6	土師器	甕	0167	S B034
		7	須恵器	蓋	0180	S B037
		8	土師器	甕	0185	S B037
27	遺物	1	土師器	杯	0190	S B038
		2	土師器	杯	0196	S B039
		3	須恵器	杯	0197	S B039
		4	土師器	杯	0208	S B043
		5	須恵器	杯	0211	S B043
		6	須恵器	杯	0213	S B043
		7	土師器	杯	0216	S B044
		8	土師器	杯	0235	S B048
28	遺物	1	土師器	杯	0239	S B048
		2	須恵器	杯	0240	S B048
		3	須恵器	杯	0242	S B048
		4	土師器	甕	0245	S B049
		5	土師器	甕	0249	S B050
		6	土師器	杯	0252	S B052
		7	土師器	杯	0253	S B052
		8	須恵器	杯	0255	S B052
29	遺物	1	土師器	甕	0262	S B052
		2	土師器	杯	0263	S B054
		3	土師器	杯	0266	S B055
		4	灰釉陶器	皿	0269	S B057
		5	須恵器	杯	0281	S B059
		6	須恵器	杯	0283	S B059
		7	土師器	甕	0289	S B059
		8	土師器	甕	0291	S B059
30	遺物	1	灰釉陶器	杯	0298	S B060
		2	須恵器	杯	0304	S B061
		3	須恵器	杯	0315	S B062
		4	須恵器	杯	0317	S B062
		5	須恵器	杯	0318	S B062
		6	須恵器	杯	0326	S B064
		7	須恵器	蓋	0328	S B064
		8	土師器	甕	0333	S B065
31	遺物	1	土師器	杯	0338	S B067
		2	須恵器	杯	0341	S B067
		3	須恵器	杯	0345	S B068
		4	須恵器	杯	0346	S B068
		5	土師器	甕	0362	S B069
		6	須恵器	杯	0365	S B070
		7	須恵器	杯	0366	S B070
		8	灰釉陶器	杯	0369	S B070
32	遺物	1	須恵器	羽釜	0376	S B070
		2	須恵器	杯	0381	S B071

32	遺	物	3	須恵器	杯	0382	S B071
			4	須恵器	杯	0383	S B071
			5	須恵器	杯	0384	S B071
			6	須恵器	杯	0390	S B072
			7	灰釉陶器	杯	0396	S B072
			8	須恵器	羽釜	0399	S B072
33	遺	物	1	土師器	甕	0417	S B073
			2	須恵器	杯	0418	S B074
			3	須恵器	杯	0427	S B075
			4	須恵器	杯	0429	S B075
			5	土師器	杯	0445	S B078
			6	須恵器	杯	0449	S B078
			7	土師器	鉢	0451	S B078
			8	須恵器	杯	0453	S B078
34	遺	物	1	須恵器	杯	0454	S B078
			2	須恵器	蓋	0459	S B078
			3	土師器	甕	0463	S B078
			4	須恵器	杯	0464	S B079
			5	須恵器	杯	0466	S B080
			6	土師器	杯	0468	S B081
			7	須恵器	杯	0469	S B081
			8	須恵器	羽釜	0476	S B082

挿　　図 (Fig.)

1 西今井遺跡と上武国道 …… 2
2 西今井遺跡周辺の地理概観 …… 4
3 西今井遺跡周辺の遺跡分布 …… 6
4 西今井遺跡の発掘区設定 …… 17
5 発掘区周辺の地形(1)
Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区 …… 18
6 発掘区周辺の地形(2)
Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ区 …… 19
7 西今井遺跡基準土層 …… 23
8 住居分布(1) Ⅰ区
S B001～S B024 …… 25
9 住居分布(2) Ⅱ区
S B025～S B042 …… 26
10 住居分布(3) Ⅲ、Ⅳ区
S B043～S B083 …… 27
11 第1号竪穴住居 …… 28
12 第2号竪穴住居 …… 29
13 第3号竪穴住居 …… 29
14 第4号竪穴住居 …… 30
15 第5号竪穴住居 …… 31
16 第6号竪穴住居 …… 32
17 第7号竪穴住居 …… 33
18 第8号竪穴住居 …… 34
19 第9号竪穴住居 …… 35
20 第10号竪穴住居 …… 36
21 第11号竪穴住居 …… 37
22 第12号竪穴住居
(土層断面図) …… 38
23 第12号竪穴住居
(遺物分布図) …… 39
24 第13号竪穴住居 …… 40
25 第14号竪穴住居 …… 41
26 第15号竪穴住居 …… 41
27 第16号竪穴住居 …… 42
28 第17号竪穴住居 …… 42
29 第18号竪穴住居 …… 43
30 第19号竪穴住居 …… 44
31 第20号竪穴住居 …… 45
32 第21号竪穴住居 …… 45
33 第22号竪穴住居 …… 46
34 第23号竪穴住居 …… 47
35 第24号竪穴住居 …… 48
36 第25号竪穴住居 …… 49
37 第26号竪穴住居 …… 49
38 第27号竪穴住居 …… 50
39 第28号竪穴住居 …… 51
40 第29号竪穴住居 …… 52
41 第30号竪穴住居 …… 53
42 第31号竪穴住居 …… 54
43 第32号竪穴住居 …… 55
44 第33号竪穴住居 …… 56
45 第34号竪穴住居 …… 57
46 第35号竪穴住居 …… 58
47 第36号竪穴住居 …… 59
48 第37号竪穴住居 …… 60
49 第38号竪穴住居 …… 61
50 第39号竪穴住居 …… 62
51 第40号竪穴住居 …… 62
52 第41号竪穴住居 …… 63
53 第42号竪穴住居 …… 64
54 第43号竪穴住居 …… 65
55 第44号竪穴住居 …… 66
56 第45号竪穴住居 …… 67
57 第46号竪穴住居 …… 68
58 第47号竪穴住居 …… 69
59 第48号竪穴住居 …… 70
60 第49号竪穴住居 …… 71
61 第50号竪穴住居 …… 72
62 第51号竪穴住居 …… 73
63 第52号竪穴住居 …… 74
64 第53号竪穴住居 …… 75
65 第54号竪穴住居 …… 75
66 第55号竪穴住居 …… 76
67 第56号竪穴住居 …… 77
68 第57号竪穴住居 …… 78
69 第58号竪穴住居 …… 79
70 第59号竪穴住居 …… 80
71 第60号竪穴住居 …… 81
72 第61号竪穴住居 …… 82
73 第62号竪穴住居 …… 83
74 第63号竪穴住居 …… 84
75 第64号竪穴住居 …… 85
76 第65号竪穴住居 …… 86
77 第66号竪穴住居 …… 87
78 第67号竪穴住居 …… 88
79 第68号竪穴住居 …… 89
80 第69号竪穴住居 …… 90
81 第70号竪穴住居 …… 91
82 第71号竪穴住居 …… 92
83 第72号竪穴住居 …… 93
84 第73号竪穴住居 …… 94
85 第74号竪穴住居 …… 95
86 第75号竪穴住居 …… 96
87 第76号竪穴住居 …… 97
88 第77号竪穴住居 …… 98
89 第78号竪穴住居 …… 99
90 第79号竪穴住居 …… 100
91 第80号竪穴住居 …… 100
92 第81号竪穴住居 …… 101
93 第82号竪穴住居 …… 101
94 第83号竪穴住居 …… 102
95 土器実測図(1) …… 105
96 土器実測図(2) …… 106
97 土器実測図(3) …… 107
98 土器実測図(4) …… 108
99 土器実測図(5) …… 109
100 土器実測図(6) …… 110
101 土器実測図(7) …… 111
102 土器実測図(8) …… 112
103 土器実測図(9) …… 113
104 土器実測図(10) …… 114
105 土器実測図(11) …… 115
106 土器実測図(12) …… 116
107 土器実測図(13) …… 117
108 土器実測図(14) …… 118
109 土器実測図(15) …… 119
110 土器実測図(16) …… 120
111 土器実測図(17) …… 121
112 土器実測図(18) …… 122
113 土器実測図(19) …… 123
114 土器実測図(20) …… 124

表　(Tab.)

1 「西今井遺跡」周辺遺跡一覧 …… 7
2 土器観察一覧 …… 125

第Ⅰ章　序　　言

1．発掘調査に至るまでの経緯

群馬県佐波郡境町は県の東南部に位置する。東は新田町と尾島町、西は伊勢崎市、南は埼玉県本庄市と豊里村、北は佐波郡東村に接している。海抜40m～60mで1/265の緩傾斜を持ち、面積は31.6㎢である。昭和61年12月の資料によれば人口29,576人、世帯数7,738戸で人口密度1㎢あたり936人に当る。町の西端を柏川が北方より南下して広瀬川に注ぎ、広瀬川は町の西を流下し、韮川を合わせて利根川に流入する。この附近での利根川は幅1kmと広くなり、町の南部の島村地区を二分してゆっくりと西から東へ走る。

町の北部は昭和に入るまで平坦な原野、山林であったが、昭和10年代以降急速に開墾、開発が進んで、その当時の面影は全くみられない。現在境町の地目の構成比は、水田13％、畑37％、宅地18％、その他32％になっている。北部は水田と畑地桑園で二毛作と養蚕を行い、南部は畑地桑園による養蚕と野菜栽培である。降雨量は県内でも少ないという欠点があるものの、河川による肥沃な土地は古代から農業適地として早くから開発されていたと考えられる。

これらの河川の合流する境町は、旧石器時代から中世に至るまで間断なく原始、古代の遺跡が続く。鎌倉時代には世良田にあった新田氏の所領となり、戦国時代には太田金山の城主由良氏に属した。江戸時代には伊勢崎藩酒井氏と旗本領と天領に分有されていた。明治初年には約30村落に分割されていたが、明治22年の町村制の施行によって大字伊与久、上淵名、東新井、百々、木島は合併して妥女村となり、小此木、中島、上武士、下武士、保泉は剛志村となり、前河原、島村は島村を成立させた。昭和30年には、境、釆女、剛志、島村地区の合併によって境町となり、32年世良田村の上矢島、西今井、三ツ木、女塚、境町、北米岡、南米岡、平塚地区が合併して今日に至っている。

大字西今井は新田氏の一族今井氏がここに拠っていたと伝えられる。この今井氏の居館が現茂木邸で「西今井居館跡」である。総廻り1,600m、南北560m、東西30m、濠をめぐらせ郭を成している。この館跡を中心とした地区は早川が貫流するので水利に恵まれるものの、湿地帯に属しているのかもしれない。稲作、養蚕を主とするものの、現在、蔬菜類への移行も多い。四囲の水田地帯は稲作に適するものの、水争いに関する「喧嘩田」や落水期にも水の多い「さかさ田」などの地名が残る。また「厄病畑」と呼ばれる地名も残る。古墳の上に首切場があり、道普請の採土中、村人が急死したと故老が伝える。境からの道路はこの地区でさえぎられ、新田町への交通は不便な地区であった。

昭和46年に、高崎、前橋両市街地の渋滞緩和と埼玉県、群馬県を直結させる重要幹線道路として建設省が「上武道路」を計画し発表した。国道17号線を埼玉県熊谷市から分岐させて利根川を横断して、群馬県尾島町、新田町、境町、佐波郡東村、赤堀町、伊勢崎市、前橋市、富士見村を経て、再び前橋市で国道17号線に接続する総延長35.1kmにわたる国道17号線のバイパス道路である。

上武道路の建設が具体化し、当面、尾島町から国道50号線までの開通をめざすことになった。昭和48年度から工事着工前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することになり、「群馬県園芸試験場第二遺跡」から発掘調査を開始した。昭和50年、境町大字三ツ木、大字西今井から新田町下田中地内にかけての約900mの間にわたる埋蔵文化財包蔵地の調査が開始された。この地域は上武道路に接して早川が大きく蛇行しており、河川改修も同時に計画されていた。両者の関係機関の合意のもとに両者を合わせた区域内の発掘調査を同時に進めることになった。

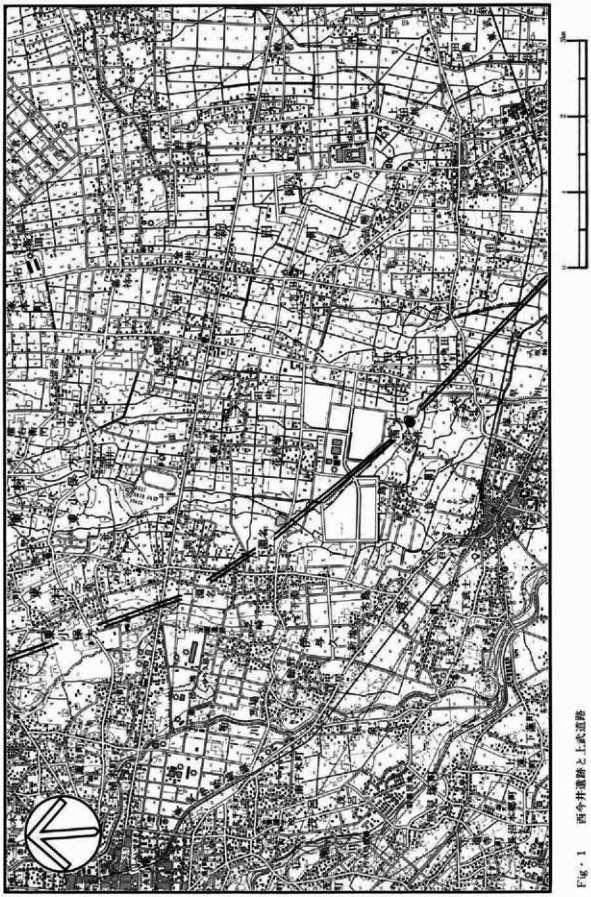


Fig. 1　西今井遺跡と上武道路

2．遺跡の立地と環境

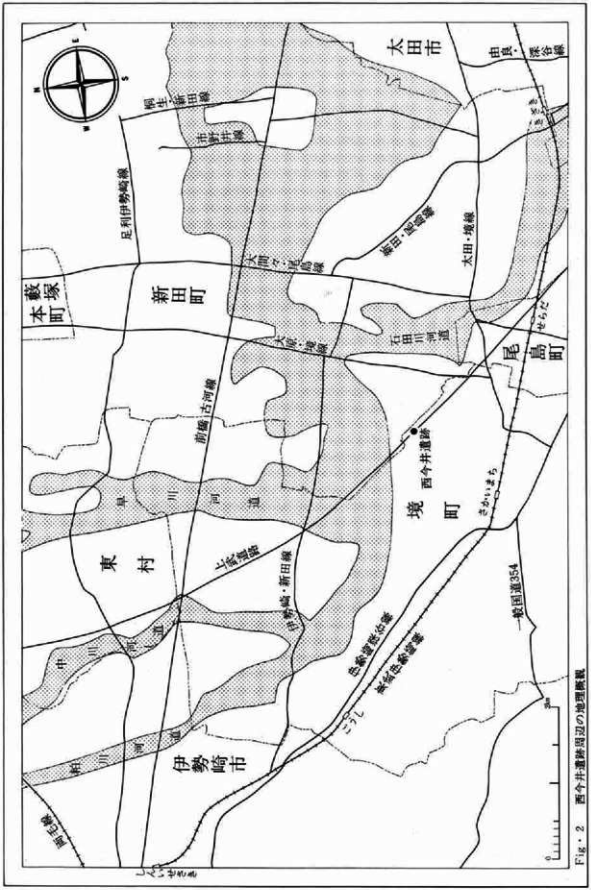
A．地理的環境

交　通　境町の中央、東寄り境町大字東町に東武伊勢崎線境町駅がある。西今井遺跡の駅から東北方向1.5kmに位置する。境町の北方には主要地方道前橋・古河線が東西方向に走り、中央部には一般国道354号が走る。また境町市街では、一般国道354号が深谷から一部分重複しながら主要地方道伊勢崎・深谷線も萩原で分岐して伊勢崎に至る。

地形区分　境町は「赤城南面」「広瀬川自然堤防」「大間々扇状地Ⅰ面」の３つの主要な地形構造から成り立っている。佐波郡境町は、伊勢崎市の東に、新田郡新田町、尾島町の西に接している。北から南へ流下する一級河川は東から早川・粕川である。粕川は上武士、小此木付近で広瀬川に合流し、広瀬川は平塚付近で利根川に合流する。前橋市から伊勢崎市にかけて赤城南面は、榛名泥流の流れ山、新田成層凝灰亜角礫層、大胡軽石流ガラン質火砕流、未区分泥流性二次堆積物などで構成され、この面に放射谷が多数開析している。粕川と中川に挟まれた伊与久地区にあたる。渡良瀬川によって形成した大間々扇状地古期面を大間々扇状地Ⅰ面と呼び湯之口軽石層以上の中部ローム層を乗せている。扇端部には樹枝状侵食谷が発達している。上渕名、下渕名、保泉、上武士、下武士、木島、境、女塚などの市街地がこの面に乗る。大間々扇状地Ⅱ面と呼ぶ上部ローム層を乗せて新期扇状地面の侵食谷は扇端部にとどまり、標高60ｍ前後に湧水帯を形成している。西今井、三ツ木地区はこの面に乗る。旧利根川の氾濫原による自然堤防を主体に烏川合流点以下の現利根川による近世以降の乱流を含み、幅の広い自然堤防を形成している。小此木、中島、米岡、平塚、島村などの地区がこの面に該当する。

土壌区分　現在の表層土壌の分布状況は、農業生産を主体としたであろう奈良・平安時代を中心とした西今井遺跡の周辺環境を類推させる。大間々扇状地面は黒ボク土で畑地として利用されているが、表土層は厚いものの透水性大で保水性小で過乾のおそれが大きい。自然堤防面は褐色低地土で有効土層は深いものの、透水性大、保水性小で過乾のおそれがある。樹枝状の河道が３本境町の北部に流れ込み、屈曲、蛇行気味に新田町木崎の台地に向かう。粕川河道、中川河道の中流部は灰色低地土で自然肥沃度は高く養分状態は良好である。早川河道全流域と粕川、中川下流域は細粒グライ土層からグライ土下層有機質土である。土性は強粘質から粘質で透水性は小さい。湧水面は高く還元化が進み水稲根系障害のおそれもある。粕川、中川、早川の河道は上矢島の北で大きく湾曲し、境町市街の乗る大間々扇状地Ⅰ面を貫通することなく東へ蛇行して、本流は新田町下田中、尾島町小角田を流れて石田川へ流入するものと考えられる。また、もう一つの流れは新田町花香塚、上田中、上江田の北を流れて、木崎の市街地東を流れて石田川に合流するものを考えたい。

遺跡と旧地形　東に隣接する三ツ木遺跡を含めて調査範囲の約１㎢は、北側に展開する低地帯に面する微高地上の遺跡である。遺跡は大きくは２つの地形面に立地している。１つの面は表土（耕作土）直下を黄色ローム層の基盤とする。この面に該当するⅠ区は古墳時代の遺構を主体として存在する。もう１つの面は表土下で灰白色の砂質、ローム層上に黒色沖積土を乗せており、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅵ区がそれである。平安時代の遺構が存在する。それにしても、平安時代の集落が沖積土層に埋没して展開することは、現況の地形、土壌の区分のみからでは地理的環境の復元に慎重さが必要である。また、遺跡の立地する微高地の北側には北西から蛇行して流れる早川によって侵食崖を形成しており、旧地形の復元をさらに困難にしている。



Fig・2　西今井遺跡周辺の地理概観

B．歴史的環境

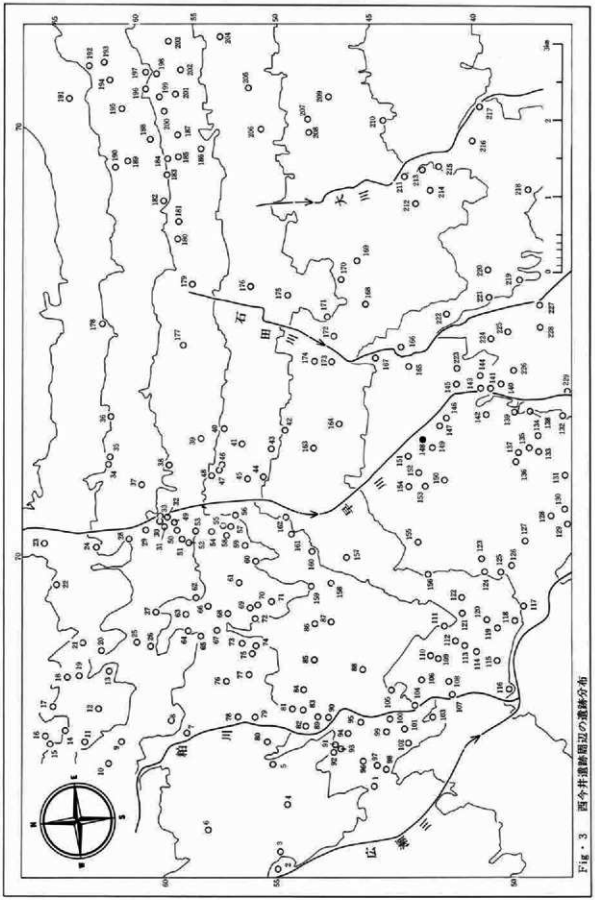
旧石器時代　赤城南麓、大間々扇状地Ⅰ面、邑楽台地など中部ローム層以上の火山灰を乗せる台地縁辺に遺跡がある。伊勢崎市権現山遺跡（遺跡番号15）、境町上淵名遺跡（59）、神谷遺跡（63）、十三宝遺跡（65）、裏神谷遺跡（68）、新田町台遺跡（222）などである。上淵名遺跡、神谷遺跡ではナイフ形石器、十三宝遺跡では武井Ⅱ文化相当の尖頭器と武井Ⅲ文化相当の尖頭器の発見がある。

縄文時代　柏川下流域の境町保泉、上武士、下武士地区、中川流域の上淵名、下淵名地区、早川流域の佐波郡東村の下谷、境町の上淵名、東新井、三ツ木地区、石田川流域の新田町全体、大川流域の新田町赤堀、木崎地区などの河川流域の台地縁辺を中心に遺跡が存在する。草創期の遺跡は境町三ツ木遺跡G区（146）で微隆起線文土器、爪形文土器、槍器が発掘されている。神谷遺跡（63）では爪形文土器、局部磨製石斧、撚糸文土器が採集されている。雷電前遺跡（72）では細身の尖頭器が発見されている。中期初めの土器は西林遺跡（142）で検出され、後期初頭の竪穴住居、配石遺構が北米岡遺跡で発掘されている。

弥生時代　標高45m付近に点々と後期後半から古墳時代前期の遺跡が点在している。南関東系、東海東部系、東海西部系、赤井戸系、樽系などそれぞれの地域の弥生時代後期の特徴的な土器の文様、器形を踏襲している点が留意される。それぞれの地域の土器の系譜が複雑に組み合わされており、古墳時代前期前半の様相とも考えられる。境町三ツ木遺跡（146）、西今井遺跡（147）、新田町下曲輪遺跡（165）、登戸遺跡（169）、雁子遺跡（210）、角田遺跡（211）などが代表的な遺跡である。

古墳時代　前期の集落立地は柏川、中川、早川、石田川、大川などの中小河川、又は旧河道などに面する微高地上に立地している。これらの遺跡は突然に爆発的に出現、定着、拡散、拡大をみせる。境町はもちろんのこと、佐波郡東村、新田町も例にもれない。たとえば境町の場合、吉田遺跡（49）、上淵名遺跡（62）、土橋遺跡（86）、保泉遺跡（103）、宮谷戸遺跡（125）、下田遺跡（139）、西林遺跡（142）、三ツ木遺跡（147）、上矢島遺跡（153）、下淵名遺跡（157）、出口遺跡（158）などがある。後期の集落、遺物散布地はこれまで以上にその数を増加するとともに各遺跡の面的増大がうかがえる。前期集落の点的な分布域の中から、更に安定した生産適地へと集落が拠点化してゆくことが考えられる。境町で最も代表的な遺跡は淵名台地の早川側がそれである。生産域に対応するであろう集落域の周辺には墓域が想定された発掘調査によりその一部分が確認される。前期に属する前方後方型周溝墓、及び方形周溝墓が中川流域では佐波郡東村流通団地遺跡（20）、境町出口遺跡（158）、早川流域では西林遺跡（142）、三ツ木遺跡（147）で検出されている。後期に属する古墳群は、前方後円墳を中核に小円墳群が分布する。代表的なものに伊勢崎市羽黒台古墳群（1）、権現山北古墳群（16）、佐波郡東村三室古墳群（21）、境町上淵名古墳群（50～53など）、下武士古墳群（115）などがある。

奈良、平安時代　古墳時代後期（6世紀）に中核的な集落を営んだ地域は平安時代の集落においても安定的に住み続けているようである。境町の伊与久地区、上淵名から下淵名地区にかけて栄地区、三ツ木地区、西今井地区、新田町花香塚地区に広範囲に遺跡の存在が認められる。この500年にわたる時代については、考古学的な時代認定となる尺度、すなわち、土器編年が確定されていない。律令制下における8世紀代の佐位、新田郡下の一般集落と、官衙と考えられる境町十三宝塚遺跡（65）との関係や、大規模な古代の用水路と考えられる遺跡番号7から31方向に東西に直線的に走る牛堀遺跡との関係、また、平安時代後半の新田荘西荘の成立や、中世における新田氏の擡頭の歴史的風景など考古学的な研究成果からの接近も残されている。



Fig・3　西今井遺跡周辺の遺跡分布

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	時代 田石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
1	上壱町田遺跡	かみいっちょうだいせき	伊勢崎市神谷上諏訪町壱町田にかけて									2―七七二	
2	羽黒台古墳群	はぐろだいこふんぐん	伊勢崎市茂呂町字羽黒台							○		3―三	
3	飯福神社古墳	いいふくじんじゃこふん	伊勢崎市大字茂呂町				●					2―八〇一	
4	茂呂城	もろじょう	伊勢崎市美茂呂町				●					2―三七七九	
5	茂呂古墳群	もろこふんぐん	伊勢崎市大字茂呂町				○					2―七六六	
6	下赤沼遺跡	しもあかぬまいせき	伊勢崎市南千木町				●					2―八一九	
7	八幡宮境内古墳	はちまんぐうけいだいこふん	伊勢崎市今泉町字本郷				●					2―七七一	
8	下諏訪遺跡	しもすわいせき	伊勢崎市下諏訪町				○					2―七七五	
9	蛇塚古墳	へびづかこふん	伊勢崎市下諏訪町				●					2―七八七	
10	下諏訪遺跡	しもすわいせき	伊勢崎市下諏訪町				○					2―七七八	
11	西山遺跡	にしやまいせき	伊勢崎市下諏訪町				○					2―七七一	
12	浅間山古墳	せんげんやまこふん	伊勢崎市上諏訪町				●					2―七八九	
			伊勢崎市神谷上諏訪町壱町田にかけて				○					2―七七二	

『西今井遺跡』周辺遺跡一覧

それらについての細かな現地確認の調査はしていない。

◦遺跡の範囲は各調査者に若干の齟齬がみられたが、

◦遺跡時期の○印は集落全般・●印は墓址を表わす。

◦文献番号以下の漢数字は文献の一覧表の番号である。

◦文献番号は左記の文献に対応する。

◦遺跡番号は前ページの遺跡分布図の番号に対応する

文献6　重殿遺跡　一九八三年度　新田町教育委員会

文献5　上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ　一九七七年度　群馬県教育委員会

文献4　境町の遺跡　一九八五年度　佐波郡境町教育委員会

文献3　三ツ木遺跡　一九八四年度　群馬県教育委員会

文献2　群馬県遺跡台帳　Ⅰ（東毛編）　一九七〇年度　群馬県教育委員会

文献1　佐波郡東村鬼ケ島遺跡　一九七九年度　佐波郡東村教育委員会

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
13	流通団地遺跡	りゅうつうだんちいせき	伊勢崎市日乃出町						○	○		1―二七	
14	権現山南古墳群	ごんげんやまみなみこふんぐん	伊勢崎市豊城町									2―七六三	
15	権現山遺跡	ごんげんやまいせき	伊勢崎市豊城町									2―七六七	
16	権現山北古墳群	ごんげんやまきたこふんぐん	伊勢崎市豊城町		○							2―七八一	
17	西ノ畑遺跡	にしのはたけいせき	佐波郡東村大字東小保方				○					1―二四	
18	御手洗遺跡	みたらしいせき	佐波郡東村大字東小保方			●	○					1―二四	
19	鬼ケ島遺跡	おにがしまいせき	佐波郡東村大字東小保方				○		○			1―七	
20	流通団地遺跡	りゅうつうだんちいせき	佐波郡東村大字東小保方				○	○	○			1―七	
21	長溝祭祀遺跡	ながみぞさいしいせき	佐波郡東村大字東小保方				○					2―三四四二	
22	遺上遺跡	みちうえいせき	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四四四	
23	下ノ西遺跡	みむろこふんぐん	佐波郡東村大字東小保方					○				2―三四四三	
24	大東神社居館址	しものにしいせき	佐波郡東村大字東小保方							○		2―三四六二	
25	頼光塚遺跡	だいいちとうじょうきょかんし	佐波郡東村大字東小保方									2―三四五〇	
26	下原遺跡	らいこうづかいせき	佐波郡東村大字東小保方				●	○				2―三四四一	
27	三室A遺跡	しもはらいせき	佐波郡東村大字東小保方		○							2―三四四〇	
28	鶴巻古墳	みむろAいせき	佐波郡東村大字東小保方子三室				○					3―四三	
29	下谷遺跡	つるまきこふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四四〇	
30	佐波郡東村32号墳	したやいせき	佐波郡東村大字東小保方									1―三二	
31	下谷遺文遺跡	したやじょうもんいせき	佐波郡東村大字東小保方		○							2―三四四九	
32	佐波郡東村31号墳	さわぐんあずまむら31ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七四	
33	佐波郡東村30号墳	さわぐんあずまむら30ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七三	
34	佐波郡東村28号墳	さわぐんあずまむら28ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七二	
35	佐波郡東村3号墳	さわぐんあずまむらさいもれさごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七一	
36	佐波郡東村6号墳	さわぐんあずまむら6ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七〇	
37	小保方地遺跡	おばかたさかいいせき	佐波郡境町大字上渕名、字小保方境									4―三一一	
38	佐波郡東村32号墳	さわぐんあずまむら32ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七九	
39	佐波郡東村31号墳	さわぐんあずまむら31ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七八	
40	佐波郡東村28号墳	さわぐんあずまむら28ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七七	
41	佐波郡東村32号墳	さわぐんあずまむら32ごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七六	
42	佐波郡東村記録簿2号墳	さわぐんあずまむらきいもれさごうふん	佐波郡東村大字東小保方				●					2―三四七五	

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
38	矢ノ原遺跡	やのはらいせき	佐波郡境町大字矢ノ原									4―三―二	
39	矢ノ原遺跡	やのはらいせき	佐波郡境町大字宮新井字矢ノ原									4―三―三	
40	稲荷前遺跡	いなりまえいせき	佐波郡境町大字宮新井字稲荷前									4―六―九	
41	西関遺跡	きいかいいせき	佐波郡境町大字宮新井字西関				○	○	○			4―六―八	
42	柳沢遺跡	やなさわいせき	佐波郡境町大字宮新井字柳沢				○	○	○			4―六―七	
43	宅地付遺跡	たくちつけいせき	佐波郡境町大字宮新井字宅地付					○	○			4―六―六	
44	一丁田遺跡	いっちょうだいせき	佐波郡境町大字宮新井字一丁田		○		○	○	○			4―六―五	
45	堂面遺跡	どうめんいせき	佐波郡境町大字宮新井字堂面		○							4―六―四	
46	戌亥遺跡	いぬいいせき	佐波郡境町大字宮新井字戌亥				○	○	○			4―六―三	
47	戌亥遺跡	いぬいいせき	佐波郡境町大字宮新井字戌亥				○	○	○			4―六―二	
48	戌亥遺跡	いぬいいせき	佐波郡境町大字宮新井字戌亥				○	○	○			4―六―一	
49	吉田遺跡	よしだいせき	佐波郡境町大字上淵名字吉田				●	○				4―三―五	44号
50	上淵名古墳址	かみふちなこふんし	佐波郡境町大字上淵名字三筆				●	●	○			4―一―八	栄女村第5～
51	上淵名古墳址	かみふちなこふんし	佐波郡境町大字上淵名字三筆				●	●	○			4―一―六	
52	上淵名古墳址	かみふちなこふんし	佐波郡境町大字上淵名字三筆				●	●	○			4―一―五	
53	雙児山古墳	ふたごやまこふん	佐波郡境町大字上淵名字鼠杏				●	●	○			4―三―四	栄女村第11号
54	三筆遺跡	かみふちなこふんし	佐波郡境町大字上淵名字三筆				●	●	○			4―一―七	
55	上淵名古墳址	かみふちなこふんし	佐波郡境町大字上淵名字三筆				●	●	○			4―一―十	
56	栄女村第7号	うねめむらだい7ごう	佐波郡境町大字本屋敷				●	●	○			4―六―一三	
57	上淵名古墳址	かみふちなこふんし	佐波郡境町大字上淵名字横町				●	●	○			4―六―一一	栄女村第8号
58	上淵名古墳址	かみふちなこふんし	佐波郡境町大字上淵名字横町									4―六―一二	
59	上淵名遺跡	かみふちないせき	佐波郡境町大字上淵名字横町						○			4―五―十四	17号含む
60	笠遺跡	かさいせき	佐波郡境町大字下淵名字笠					○	○			4―五―八	栄女村第12～
61	上淵名遺跡	かみふちないせき	佐波郡境町大字上淵名字横町					○	○			4―五―七	
62	新町遺跡	しんまいせき	佐波郡境町大字上淵名字新田				○					1―三―二	
63	上淵名遺跡	かみふちないせき	佐波郡境町大字上淵名字横町・馬場・新町・新田・他		○							4―一―三	
64	神谷遺跡	かみやいせき	佐波郡境町大字上淵名字神谷		○			○	○			4―一―二	
65	伊与久遺跡	いよくいせき	佐波郡境町大字伊与久字上・下十三宝塚・上梅初		○		●	○	○	○		2―三四八〇	
65	十三宝塚遺跡	じゅうさんほうづかいせき	佐波郡境町大字伊与久字上・下十三宝塚・上梅初				○	○	○	○		4―一―二	

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
66	裏神谷遺跡	うらかみやいせき	佐波郡境町大字上泊名字裏神谷									4―二一四	
67	中川西台地遺跡	なかがわにしだいちいせき	佐波郡境町大字伊与久					○	○				
68	裏神谷遺跡	うらかみやいせき	佐波郡境町大字上泊名字沼		○			○				4―五―三	
69	田端山遺跡	たばたやまいせき	佐波郡境町大字下泊名字田端山				●					4―五―九	
70	田渕山遺跡	たばたやまいせき	佐波郡境町大字下泊名字田渕山				●					4―五―十	栄女村第49号
71	田渕山遺跡	たばたやまいせき	佐波郡境町大字下泊名字田渕山		○			○	○			4―五―一二	
72	雷電前遺跡	らいでんまえいせき	佐波郡境町大字伊与久字雷電前・田渕山				○					4―五―一一	
73	雷電裡遺跡	らいでんうらいせき	佐波郡境町大字伊与久字十三宝塚・雷電裡				○					4―五―四	
74	雷電神社古墳	らいでんじんじゃこふん	佐波郡境町大字伊与久字雷電裡				●					4―五―一七	栄女村第1号
75	雷電裡古墳	らいでんうらこふん	佐波郡境町大字伊与久字雷電裡				●					4―五―一六	栄女村第2号
76	矢中遺跡	やなかいせき	佐波郡境町大字伊与久字矢中・西之西				○					4―五―一一	
77	宮之西遺跡	みやのにしいせき	佐波郡境町大字伊与久字宮之西・矢中・明神社					○				4―五―一二	
78	上荻原遺跡	かみはぎわらいせき	佐波郡境町大字伊与久字上荻原					○				4―四―一一	
79	釈迦遺跡	しゃかいせき	佐波郡境町大字伊与久字上荻原・釈迦					○				4―四―一二	
80	田島遺跡	たじまいせき	佐波郡境町大字伊与久字上荻原				●		○			4―四―一八	
81	須久茂塚遺跡	すくもづかいせき	佐波郡境町大字伊与久字西馬場				●					4―四―一三	栄女村第3号
82	前新田遺跡	まえしんでんいせき	佐波郡境町大字伊与久字前新田・西久保				○					4―四―一五	
83	東馬場遺跡	ひがしばばいせき	佐波郡境町大字伊与久字東馬場・西馬場・細谷戸東				○					4―四―一七	
84	西馬場遺跡	にしばばいせき	佐波郡境町大字伊与久字西馬場				○					4―四―一四	
85	木之下遺跡	きのしたいせき	佐波郡境町大字伊与久字木之下・後香・上八反田					○				4―五―五	
86	上横遺跡	どばしいせき	佐波郡境町大字下泊名字中田・雷電前・上横・三古屋				○	○				4―五―一三	
87	島浦戸遺跡	しまがいっこうてていせき	佐波郡境町大字下泊名字島浦戸				○	○				4―五―一一	
88	栄女小学校校庭遺跡	うめねしょうがっこうてていせき	佐波郡境町大字下泊名字中田・雷電前・上横・三古屋				○	○				3―一二	
89	若宮遺跡	くぼたこしいせき	佐波郡境町大字伊与久字若宮・本郷・細谷戸				○	○	○			4―八―一	
90	細谷戸遺跡	わかみやいせき	佐波郡境町大字伊与久字細谷戸				○	○	○			4―四―六	
91	行人山遺跡	ほそがいといせき	佐波郡境町大字保泉字行人山				●					4―七―三	剛志村第90号
92	行人山遺跡	ぎょうにんやまいせき	佐波郡境町大字保泉字行人山・伊勢崎市				●					4―七―一	剛志村第92号
		ぎょうにんやまいせき	佐波郡境町大字保泉字行人山										
		ほそがいといせき	佐波郡境町大字伊与久字細谷戸										
		わかみやいせき	佐波郡境町大字伊与久字若宮・本郷・細谷戸										
		くぼたこしいせき	佐波郡境町大字伊与久字久保田西・東・駒見・熊										
		しまがいといせき	佐波郡境町大字下泊名字島浦戸										
		うめねしょうがっこうてていせき	佐波郡境町大字下泊名字中田・雷電前・上横・三古屋										
		どばしいせき	佐波郡境町大字下泊名字中田・雷電前・上横・三古屋										
		きのしたいせき	佐波郡境町大字伊与久字木之下・後香・上八反田										
		ひがしばばいせき	佐波郡境町大字伊与久字東馬場・西馬場・細谷戸東										
		にしばばいせき	佐波郡境町大字伊与久字西馬場										
		まえしんでんいせき	佐波郡境町大字伊与久字前新田・西久保										
		すくもづかいせき	佐波郡境町大字伊与久字西馬場										
		たじまいせき	佐波郡境町大字伊与久字上荻原・釈迦										
		しゃかいせき	佐波郡境町大字伊与久字上荻原										
		かみはぎわらいせき	佐波郡境町大字伊与久字上荻原										
		みやのにしいせき	佐波郡境町大字伊与久字宮之西・矢中・明神社										
		やなかいせき	佐波郡境町大字伊与久字矢中・西之西										
		らいでんうらこふん	佐波郡境町大字伊与久字雷電裡										
		らいでんじんじゃこふん	佐波郡境町大字伊与久字雷電裡										
		らいでんうらいせき	佐波郡境町大字伊与久字十三宝塚・雷電裡										
		らいでんまえいせき	佐波郡境町大字下泊名字雷電前・田渕山										
		たばたやまいせき	佐波郡境町大字下泊名字田渕山										
		たばたやまいせき	佐波郡境町大字下泊名字田端山										
		たばたやまいせき	佐波郡境町大字下泊名字田端山										
		うらかみやいせき	佐波郡境町大字上泊名字沼										
		なかがわにしだいちいせき	佐波郡境町大字伊与久										
		うらかみやいせき	佐波郡境町大字上泊名字裏神谷										

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	時代 旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
93	行人山遺跡	ぎょうにんやまいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字行人山				●					4 十一 二	
94	行人山遺跡	ぎょうにんやまいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字行人山				●	○	○			4 十一 四	剛志村第87号
95	丸山東遺跡	まるやまひがしいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山東・間場				○					4 十一 二	剛志村第88号
96	丸山北遺跡	まるやまきたいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山北					○	○			4 十一 五	
97	丸山東遺跡	まるやまひがしいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山東				○	○	○			4 十一 六	
98	丸山西遺跡	まるやまにしいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山西		○		○	○	○			4 十一 七	
99	丸山東遺跡	まるやまひがしいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山東				○	○	○			4 十一 十	
100	丸山東遺跡	まるやまひがしいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山東・間場		○							4 十一 十一	
101	丸山東遺跡	まるやまひがしいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山東		○		○					4 十一 九	
102	丸山北遺跡	まるやまきたいせき	佐渡郡堺町大字俵泉字丸山北・池の上		○		○		○			4 七 八	
103	保泉遺跡	ほずみいせき	佐渡郡堺町大字俵泉・北原				○					4 十一 一	
104	新井遺跡	あらいいせき	佐渡郡堺町大字上武字新井		○		○	○	○			4 八 一 二	
105	一丁畑遺跡	いっちょうばたけいせき	佐渡郡堺町大字伊久孝一丁畑・下一丁畑・馬見塚・塩北				○	○	○			4 七 三	
106	新井遺跡	あらいいせき	佐渡郡堺町大字上武字新井		○		○	○	○			4 八 三	
107	新井遺跡	あらいいせき	佐渡郡堺町大字上武字新井・堀南		○		○	○	○			4 一一 一	
108	堀南遺跡	ほりみなみいせき	佐渡郡堺町大字上武字堀南		○		○	○	○			4 一一 二	
109	堀南遺跡	ほりみなみいせき	佐渡郡堺町大字上武字堀南		○		○	○	○			4 一一 二	
110	堀北遺跡	ほりきたいせき	佐渡郡堺町大字上武字堀北・大字下武字野々宮		○		○	○	○			4 一一 三	
111	堀南遺跡	ほりみなみいせき	佐渡郡堺町大字上武字堀南		○		○	○	○			4 一一 四	
112	前畑遺跡	まえはたけいせき	佐渡郡堺町大字上武字前畑		○		○					4 一一 十	
113	前畑遺跡	まえはたけいせき	佐渡郡堺町大字上武字前畑		○		○					4 一一 九	
114	前畑遺跡	まえはたけいせき	佐渡郡堺町大字上武字前畑・大字上武字宮前		○		●					4 一一 七	剛志村第45号94～97号
115	武士古墳群	たけしこふんぐん	佐渡郡堺町大字上武字宮前		○		○					4 一一 七	剛志村第1～
116	御岳山遺跡	しもたけしいせき	佐渡郡堺町大字上武字西久保		○		●			○		4 十一 三	剛志村第66号
117	天王塚古墳	おんたけやまいせき	佐渡郡堺町大字上武字相生				●					4 一一 六	剛志村第47～
118	三社神社古墳群	てんのうつかこふん	佐渡郡堺町大字上武字相生				●					4 一一 三	剛志村第76号
119	宮前遺跡	みやまえいせき	佐渡郡堺町大字下武字西畑・大字上武字宮前				○					4 一一 二	

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
120	六反田遺跡	ろくたんだいせき	佐波郡境町大字下武士字六反田									4―二―一	
121	西六反田遺跡	にしろくたんだいせき	佐波郡境町大字下武士字西六反田									4―二―一	
122	野々宮遺跡	ののみやいせき	佐波郡境町大字下武士字野々宮									4―二―七	
123	石塚遺跡	いしづかいせき	佐波郡境町大字下武士字石塚									4―二―八	
124	宮谷戸遺跡	みやがいといせき	佐波郡境町大字下武士字宮谷戸									4―二―九	
125	宮谷戸遺跡	みやがいといせき	佐波郡境町大字下武士字宮谷戸・大字萩原字綱葉		○		○	○	○			4―二―四	
126	宮谷戸遺跡	みやがいといせき	佐波郡境町大字萩原				●					4―二―八	境町朝1号
127	萩原遺跡	はぎわらいせき	佐波郡境町大字武士字宮谷戸									4―二―五	
128	町並遺跡	まちなみいせき	佐波郡境町大字境字町並				○					4―二―六	
129	境の前遺跡	さかいのまえいせき	佐波郡境町大字境字境の前				○		○			4―二―六	
130	境の前遺跡	さかいのまえいせき	佐波郡境町大字境字境の前					○	○			4―二―六	
131	本郷遺跡	ほんごういせき	佐波郡境町大字米岡字本郷・新屋敷		○							4―二―六	
132	堀込遺跡	ほりこめいせき	佐波郡境町大字女塚字堀込・諏訪・熊野									4―二―七	
133	柳ノ内遺跡	やなのうちいせき	佐波郡境町大字女塚字柳ノ内				○	○	○			4―二―六	
134	女塚遺跡	おなづかいせき	佐波郡境町大字女塚字堀込・道西・居所・中原・吹上・諏訪				○	○	○			4―二―七	
135	道西遺跡	みちにしいせき	佐波郡境町大字女塚字道西					○	○			4―二―七	
136	谷口遺跡	たにぐちいせき	佐波郡境町大字栄字谷口				○	○	○			4―二―十	
137	堀込遺跡	おおくらづかいせき	佐波郡境町大字女塚字大蔵塚					○	○			4―二―九	
138	堀込遺跡	ほりこめいせき	佐波郡境町大字女塚字堀込				○	○	○			4―二―五	
139	下田遺跡	しもだいせき	佐波郡境町大字女塚字下田・三ツ木前・尾鳥町				○	○	○			4―二―一	
140	堀込遺跡	ほりこめいせき	佐波郡境町大字女塚字堀込				○	○	○			4―二―四	
141	三ツ木宇越戸遺跡	みつきあざけいどいせき	佐波郡境町大字三ツ木字越戸				●	○	○			4―二―三	
142	三ツ木宇越戸遺跡	みつきあざけいどいせき	佐波郡境町大字三ツ木字西林・中耕地				○					4―二―二	
143	越戸遺跡	じゅうりんじいせき	佐波郡境町大字三ツ木字住林寺・新田・尾鳥町									4―二―一	
144	皿沼遺跡	さらぬまいせき	佐波郡境町大字三ツ木字皿沼					○	○			4―三―一	
145	三ツ木宇越戸遺跡	みつきあざけいどいせき	佐波郡境町大字三ツ木字越戸					○	○			4―二―一	
146	三ツ木遺跡G区	みつきいせきG区	佐波郡境町大字三ツ木字自光坊・堂之前					○	○			4―二―三	
147	三ツ木遺跡	みつきいせき	佐波郡境町大字三ツ木字才取ケ谷戸・自光坊		○	○	○	○	○			4―二―一四	

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
148	西今井遺跡	にしまいいせき	佐波郡境町大字西今井字中道・二ツ塚									4―九―西	
149	西今井居館址	にしまいきょかんし	佐波郡境町大字西今井字中道・二ツ塚									4―九―五	
150	上矢島遺跡	かみやじまいせき	佐波郡境町大字上矢島字南東・下二ツ塚									4―二―一五	
151	諏訪遺跡	すわいせき	佐波郡境町大字上矢島字諏訪・堀越									4―九―二	
152	諏訪遺跡	すわいせき	佐波郡境町大字上矢島字諏訪									4―九―三	
153	上矢島遺跡	かみやじまいせき	佐波郡境町大字上矢島									3―一八	
154	後遺跡	うしろいせき	佐波郡境町大字上矢島字後・林・諏訪									4―九―七	
155	後遺跡	うしろいせき	佐波郡境町大字上矢島字後									4―九―一	
156	雉子尾遺跡	きじおいせき	佐波郡境町大字木島字雉子尾									4―八―五	
157	下河名遺跡	しもかわいせき	佐波郡境町大字下河名字堀込・塚越・明神・新屋敷・他		○	○	●	○	○			4―五―一五	6・52・53号
157	明神遺跡	みょうじんいせき	佐波郡境町大字下河名字堀込・塚越・明神・新屋敷・他		○	○	●	○	○			4―五―一五	含む
157	寺家前遺跡	じけのまえいせき	佐波郡境町大字下河名字堀込・塚越・明神・新屋敷・他		○	○	●	○	○			4―五―一五	
158	出口遺跡	でぐちいせき	佐波郡境町大字下河名字出口				○	○	○			3―一一	
159	三ツ古屋遺跡	みつこやいせき	佐波郡境町大字下河名字出口・三ツ古屋				○	○	○			4―八―六	
160	大国神社	だいこくじんじゃ	佐波郡境町大字下河名									3―一七	
161	下河名遺跡	しもかわいせき	佐波郡境町大字下河名				○			○		3―一六	
162	寺家前遺跡	じけのまえいせき	佐波郡境町大字下河名字寺家前									3―四八	
163	花香塚西遺跡	はなかずかにしいせき	佐波郡境町大字花香塚							○		2―三六二九	
164	下田中遺跡	しもたなかいせき	新田郡新田町大字下田中									2―三六二一	
165	下曲輪新田遺跡	しもくるわしんでんいせき	新田郡新田町大字下田中				○	○	○			2―三六三二	
166	谷津遺跡	やついせき	新田郡新田町大字上江田字谷津				○	○	○			3―三八	
167	源六堰遺跡	げんろくせきいせき	新田郡新田町大字上田中字源六堰						○			6―八	
168	竜得寺西遺跡	りゅうとくじにしいせき	新田郡新田町大字上江田						○			2―三六二二	
169	登戸遺跡	のぼりといせき	新田郡新田町大字上江田			○			○			2―三六二〇	
170	庚申塚遺跡	こうしんづかいせき	新田郡新田町大字上江田						○			2―三六二一	
171	江田館遺跡	えだやかたあと	新田郡新田町大字上江田字西郭						○			3―四〇	
172	西田遺跡	にしだいせき	新田郡新田町大字上江田字西田								○	2―三六三〇	
173	八幡遺跡	はちまんいせき	新田郡新田町大字下田中									2―三六二一	

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
174	村田古墓	むらたこば	新田郡新田町大字村田字上野井									6—四〇	
175	浜野宅内古墓	はまののたくないこば	新田郡新田町大字村田字上野井									6—四一	
176	村田銀座	むらたやかたあと	新田郡新田町大字村田字上野井									6—三九	
177	上野井遺跡	うえのいいせき	新田郡新田町大字村田				●					2—三五八九	
178	飯田宅内古墳	いいだたくないこふん	新田郡新田町大字村田				○					6—三五	
179	白髭寺跡	びゃくごうじあと	新田郡新田町大字村田									2—三五九〇	
180	猪塚八幡遺跡	せづかはちまんいせき	新田郡新田町大字村田									2—三五九一	
181	入谷堂寺跡	いりやはいじあと	新田郡新田町大字村田									2—三五九一	
182	原宿遺跡	はらじゅくいせき	新田郡新田町大字小金井字弦松									6—三一	
183	好野遺跡	よしのいせき	新田郡新田町大字省		○			○	○			2—三五八二	
184	原宿遺跡	はらじゅくいせき	新田郡新田町大字村田									6—三五	
185	長者塚遺跡	ちょうじゃぼりいせき	新田郡新田町大字村田									6—一五	
186	御倉堀遺跡	おくらぼりあといせき	新田郡新田町大字村田									2—三五九四	
187	原宿経塚遺跡	はらじゅくきょうづかいせき	新田郡新田町大字野井字原宿									2—三五九三	
188	境ケ谷戸遺跡	さかいがいといせき	新田郡新田町大字村田字境ケ谷戸									2—三五九七	
189	揚原遺跡	あげはらいせき	新田郡新田町大字野井		○		○			○	○	2—三五九一	
190	絶壁敷遺跡	へびやしきいせき	新田郡新田町大字野井									2—三五九八	
191	生品神社南古墓	いくしなしんじゃんなみこば	新田郡新田町大字揚原									6—一〇	
192	生品神社	いくしなしんじゃ	新田郡新田町大字野井									6—一〇	
193	萩原遺跡	はぎわらいせき	新田郡新田町大字野井字萩原				○	○		○		6—一一	
194	観音堂遺跡	かんのんどういせき	新田郡新田町大字野井									2—三五九六	
195	鉈堂遺跡	じゅうどのいせき	新田郡新田町大字野井字木刈							○		2—三五九五	
196	重殿遺跡	じゅうどのいせき	新田郡新田町大字市野井字重殿・町田									6—一	
197	重殿遺跡	やだいいじんいせき	新田郡新田町大字市野井字重殿・町田									6—一	
198	矢大神遺跡	だいいせき	新田郡新田町大字大根									2—三六二五	
199	大遺跡	だいけいじいせき	新田郡新田町大字大									6—三	
200	大東寺遺跡	あらやしきいせき	新田郡新田町大字大根									2—三六二六	
201	新屋敷遺跡	きたしゅくいせき	新田郡新田町大字上江田字北宿									2—三六二七	
174	東六供遺跡	ひがしろっくいせき	新田郡新田町大字上田中									2—三六二八	

番号	遺跡名	いせきめい	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	文献	備考
202	川島館跡	かわしまやかたあと	新田郡新田町大字村田							○		6―三七	
203	上野井遺跡	うえのいいせき	新田郡新田町大字小金井				○					2―三五八八	
204	中溝遺跡	なかみぞいせき	新田郡新田町大字小金井				○		○			2―三五八七	
205	妻場東遺跡	ばばひがしいせき	新田郡新田町大字村田字妻場東					○				2―三五九九	
206	中村東遺跡	なかむらたいせき	新田郡新田町大字反町				○	○		○		6―一六	
207	反町館跡	そりまちやかたあと	新田郡新田町大字反町								○	2―三六〇二	
208	中村田遺跡	なかむらたいせき	新田郡新田町大字村田				○	○	○			2―三六〇〇	
209	竹之内遺跡	たけのうちいせき	新田郡新田町大字村田				○	○				2―三六〇一	
210	堀子遺跡	がこいいせき	新田郡新田町大字反町			○						2―三六〇三	
211	角田遺跡	つのだいいせき	新田郡新田町大字木崎			○						2―三六〇四	
212	宮田稲荷遺跡	みやたいなりいせき	新田郡新田町大字赤堀				○					2―三六〇五	
213	大通寺裏遺跡	だいつうじうらいせき	新田郡新田町大字木崎				○					2―三六〇六	
214	堀之内遺跡	ほりのうちいせき	新田郡新田町大字木崎		○		○					2―三六〇七	
215	大通寺前遺跡	だいつうじまえいせき	新田郡新田町大字木崎		○		○					2―三六〇八	
216	遠陸神遺跡	どうろくじんいせき	新田郡新田町大字木崎		○		○					2―三六〇九	
217	大豆柄遺跡	だいずがらいせき	新田郡新田町大字木崎		○		○					2―三六一〇	
218	花園遺跡	はなぞのいせき	新田郡新田町大字木崎		○		○					2―三六一一	
219	本郷遺跡	ほんごういせき	新田郡新田町大字中江田		○		○					2―三六一二	
220	本郷遺跡	ほんごういせき	新田郡新田町大字江田		○		○			○		2―三六一六	
221	中江田遺跡	なかえだいせき	新田郡新田町大字中江田・原		○		○					2―三六一七	
222	白遺跡	だいいせき	新田郡新田町大字篤尾	○	○		○					2―三六一八	
223	中道遺跡	なかみちいせき	新田郡新田町下田中字中道				○	○	○			3―二四	
224	小角田郡遺跡(1)	こすみだまえいせき(1)	新田郡尾島町大字世良田小角田前				○	○	○			3―二四	
225	小角田郡遺跡(2)	おじまこうぎょうだんちいせき	新田郡尾島町大字世良田小角田前				○					3―二五	
226	歌舞伎遺跡	かぶきいせき	新田郡尾島町大字世良田字歌舞伎				○					3―二六	
227	小角田郡遺跡(2)	こすみだまえいせき(2)	新田郡尾島町大字世良田小角田前				○					2―三五四九	
228	世良田駅構内遺跡	せらだえきこうないいせき	新田郡尾島町大字世良田						○			3―二五	
229	世良田上新田遺跡	せらだかみしんでんいせき	新田郡尾島町大字世良田上新田				○					2―三五四七	
202	川島館跡	かわしまやかたあと	新田郡新田町大字村田									5―五	
203	上野井遺跡	うえのいいせき	新田郡新田町大字小金井									2―三六〇六	
204	中溝遺跡	なかみぞいせき	新田郡新田町大字小金井									2―三六一六	
205	妻場東遺跡	ばばひがしいせき	新田郡新田町大字村田字妻場東									2―三六一九	
206	中村東遺跡	なかむらたいせき	新田郡新田町大字反町									2―三六一一	
207	反町館跡	そりまちやかたあと	新田郡新田町大字反町									2―三六一二	
208	中村田遺跡	なかむらたいせき	新田郡新田町大字村田									2―三六一七	
209	竹之内遺跡	たけのうちいせき	新田郡新田町大字村田									2―三六一八	
210	堀子遺跡	がこいいせき	新田郡新田町大字反町									2―三六一九	
211	角田遺跡	つのだいいせき	新田郡新田町大字木崎									2―三六一〇	
212	宮田稲荷遺跡	みやたいなりいせき	新田郡新田町大字赤堀									2―三六一一	
213	大通寺裏遺跡	だいつうじうらいせき	新田郡新田町大字木崎									2―三六一二	
214	堀之内遺跡	ほりのうちいせき	新田郡新田町大字木崎									2―三六一六	
215	大通寺前遺跡	だいつうじまえいせき	新田郡新田町大字木崎									2―三六一七	
216	遠陸神遺跡	どうろくじんいせき	新田郡新田町大字木崎									2―三六一八	
217	大豆柄遺跡	だいずがらいせき	新田郡新田町大字木崎									2―三六一九	
218	花園遺跡	はなぞのいせき	新田郡新田町大字木崎									2―三六二〇	
219	本郷遺跡	ほんごういせき	新田郡新田町大字中江田									2―三六二一	
220	本郷遺跡	ほんごういせき	新田郡新田町大字江田									2―三六二二	
221	中江田遺跡	なかえだいせき	新田郡新田町大字中江田・原									2―三六二六	
222	白遺跡	だいいせき	新田郡新田町大字篤尾									2―三六二七	
223	中道遺跡	なかみちいせき	新田郡新田町下田中字中道									2―三六二八	
224	小角田郡遺跡(1)	こすみだまえいせき(1)	新田郡尾島町大字世良田小角田前									2―三六二九	
225	小角田郡遺跡(2)	おじまこうぎょうだんちいせき	新田郡尾島町大字世良田小角田前									2―三六三〇	
226	歌舞伎遺跡	かぶきいせき	新田郡尾島町大字世良田字歌舞伎									2―三六三一	
227	小角田郡遺跡(2)	こすみだまえいせき(2)	新田郡尾島町大字世良田小角田前									2―三六三〇	
228	世良田駅構内遺跡	せらだえきこうないいせき	新田郡尾島町大字世良田									2―三六三二	
229	世良田上新田遺跡	せらだかみしんでんいせき	新田郡尾島町大字世良田上新田									2―三六三四	

第Ⅱ章　　西今井遺跡の発掘調査

1．調査の概要

東部鉄道伊勢崎線の境町駅より東北方1kmの新田郡新田町下田中地内より佐波郡境町西今井地内にかけて流れる早川の付近に上武道路が通過することになった。この道路建設に伴い，蛇行する早川も河川改修が計画された。この道路建設と河川改修の2つの事業に先立ち，記録保存を目的に発掘調査が実施された。調査されたこの遺跡の名称が「西今井遺跡」と呼ばれる。発掘調査は群馬県教育委員会が主体となり，昭和50年7月28日から昭和52年1月22日まで足かけ3年，5次にわたり継続的に調査された。遺跡は標高42mの平坦な地形に位置する。東に木崎台地，西に洞名台地に挟まれたこの平坦な遺跡も，柏川，中川，早川の河道を合流した石田川河道に面しており，度重なる河川氾濫により埋没した低平な洪積台地上に立地していたと考えられる。

発掘調査の予定区域は，上武道路予定地の道路中心線に打たれた南東部No.320から600mである。北西部No.350までの長さ，幅は道路及び河川部分を含めた80mで，調査予定面積は約48,000㎡であった。試掘調査の成果をふまえ，また生活道路を除いた調査の実面積は26,500㎡で予定面積の55％を発掘したことになる。

発掘区の設定は，上武道路中心杭No.338とNo.342の80mの距離を直線に結び4mの方眼を組んだ。各中心杭間は20mに打たれており5分割とした。中心杭No.338はF－135と呼称した。また，磁北と中心線のなす角度は，N－37°50′－Wを測る。

発掘区は地形の変化に合わせて6区分した。Ⅰ区は西今井館から流出する排水口より東側で区画した。Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ区はこの排水口から上流の取水口の間に南北に走る道路2本によって区画し，東から順に番号に付した。Ⅴ区は西今井館の取水口と考えられる2本の水路に区画された範囲内，Ⅵ区は早川の大きく蛇行する新田町地番の部分である。

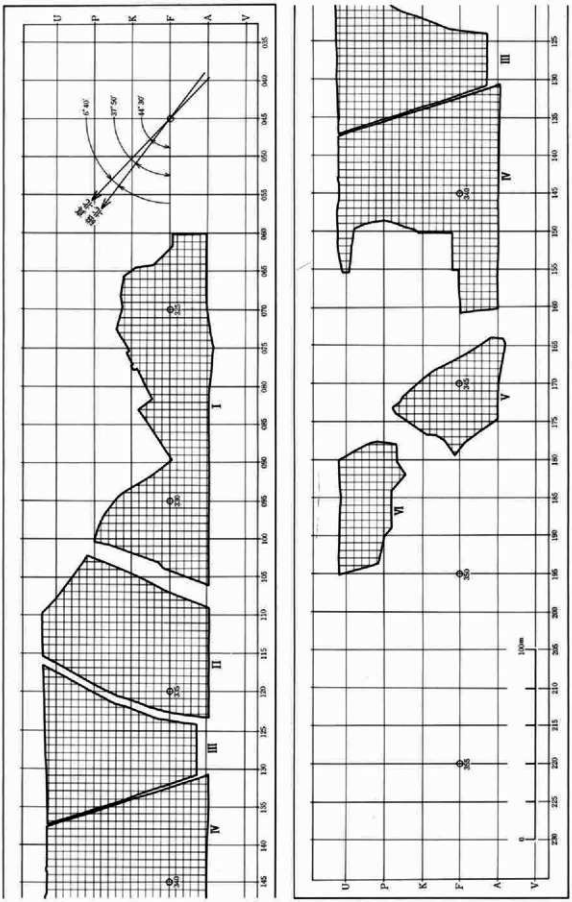
第1次調査は試掘調査が主体である。調査事務所がⅣ区に置かれたため，Ⅰ区とⅣ区については河川によって地形が区切られて調査が遠距離なため簡単な遺構確認だけで本調査にまわさざるを得なかった。調査の結果，Ⅴ区を除く5つの地区に遺構の存在が確認された。

第2次調査はⅣ区を発掘調査した。本地区はⅥ区とともに本遺跡で最も標高の高い地域で42.5mの等高線が巡る。遺構の集中度も高く，集落地がより標高の高い地域を志向していることがうかがえる。調査事務所を建設したため第5次調査にまわした本調査部分を含めて検出された竪穴住居は93軒，掘立柱建物1棟，土壙233基，溝1条であった。

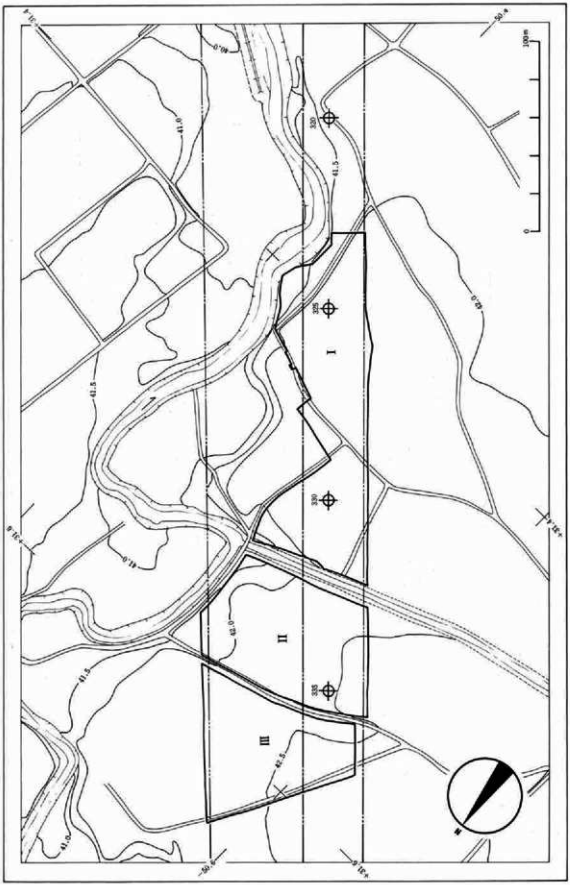
第3次調査はⅢ区とⅥ区を発掘調査した。Ⅲ区の検出された遺構は標高42mの等高線の高位置に占地している。竪穴住居40軒，掘立柱建物9棟，土壙128 基，溝1条であった。Ⅵ区の検出された遺構は早川の蛇行で島状にとり残された地域から検出された。竪穴住居93軒，掘立柱建物4棟，土壙233基，溝1条であった。

第4次調査はⅡ区を発掘調査した。竪穴住居18軒，土壙3基，溝3条であった。

第5次調査はⅠ区の全域と第2次調査で残されたⅣ区の調査事務所部分の発掘調査を実施した。Ⅰ区の遺構は竪穴住居24軒，掘立柱建物1棟，土壙41基，溝3条であった。



Fig・4　西今井遺跡の発掘区設定



Fig・5　発掘区周辺の地形（1）　I・II・III区

Fig・6　発掘区周辺の地形（2）　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区

2．調査日誌

A　第1次発掘調査　　試掘調査

1975年7月28日～9月13日

7・28　発掘調査事務所建設開始。第1次発掘調査開始。
7・29　発掘器材搬入。
7・31　関係機関及び地元関係者へ発掘開始の挨拶。
8・1　発掘区の下草刈り開始。
8・2　発掘区の測量開始。
8・4　本日より発掘作業員雇用。本格的に草刈り、発掘区の測量作業。Ⅳ区155ライン試掘調査開始。
8・5　発掘区は建設省の用地中心杭を基準に4ｍ×4ｍの発掘土壙を設定。
8・6　トレンチによる発掘作業を開始。
8・11　Ⅳ区140ライン試掘調査開始。
8・13　Ⅲ区125ライン試掘調査開始。
8・14　猛暑のため作業員疲労みられる。
8・15　Ⅱ区110ライン試掘調査開始。
8・20　Ⅳ区160ライン試掘調査開始。
8・22　Ⅳ区148ライン試掘調査開始。
8・23　台風6号接近。発掘区の巡検、資材類の保全作業
8・24　Ⅳ区150、153ライン試掘調査開始。
8・25　Ⅳ区145ライン試掘調査開始。
8・26　Ⅳ区143ライン試掘調査開始。
8・27　Ⅳ区158ライン試掘調査開始。
8・28　Ⅳ区135、138ライン試掘調査開始。Ⅲ区130、133、135ライン試掘調査開始。
8・29　Ⅲ区128ライン試掘調査開始。
9・1　Ⅳ区表土剥ぎ重機導入（9/1～9/9）。Ⅱ区118、115、113ライン試掘調査開始。
9・2　Ⅱ区105、108ライン試掘調査開始。
9・8　390、391号土壙発掘開始。
9・9　392、393、394、395号土壙発掘開始。
9・10　8号溝発掘開始。
9・12　388、389号土壙発掘開始。
9・13　第1次発掘調査終了、次回調査方法について打合せ。器材手入れ。

B　第2次発掘調査　　Ⅳ区

1975年9月16日～1976年3月13日

9・16　第2次発掘調査開始。発掘器材点検、遺構検出作業。
9・17　豊受地区郷土史懇談会会員見学。
9・19　70、71、72号住居発掘開始。
9・22　73、75、76号住居発掘開始。
9・25　81号住居発掘開始。
10・1　80、82号住居発掘開始。
10・6　台風一過。秋晴れに作業進む。
10・9　74号住居発掘開始。
10・14　ＮＨＫ教養特集班取材。
10・20　59、60、68、79、83号住居発掘開始。354、355、356、357号土壙発掘開始。
10・22　69号住居発掘開始。
10・29　77、78号住居発掘開始。Ⅳ区表土剥ぎ重機導入（10/29～11/13）。
10・30　129、132号住居発掘開始。
11・1　128号住居発掘開始。
11・8　64号住居発掘開始。
11・10　61、62、65号住居発掘開始。
11・11　385、386、387号土壙発掘開始。
11・13　382、383、384号土壙発掘開始。
11・17　58、63号住居発掘開始。
11・19　119号住居発掘開始。
11・28　67、127、149、153、154、157、158、174、175号住居発掘開始。14号掘立柱建物発掘開始。221、222、223、224、225、226、227、228、229、230、231、232、233、234、235、236、237、238、239、240、241、242、243、244、245号土壙発掘開始。
12・1　遺跡より焼夷弾痕跡の土壙検出。境町警察署に調査依頼。
12・2　123、133、135号住居発掘開始。
12・3　霜の害が遺跡に及び、遺構の破損、作業員の安全確保に注意する。
12・4　赤堀村教育委員会遺跡見学。
12・13　139、140、155、156号住居発掘開始。
12・15　131号住居発掘開始。219、220号土壙発掘開始。
12・16　130、134号住居発掘開始。
12・17　126、141号住居発掘開始。
12・18　159、160、161号住居発掘開始。
12・19　66号住居発掘開始。
12・20　125号住居発掘開始。
12・25　遺跡発掘作業は本年御用納め。
1・10　本日より新年の発掘作業開始。遺跡巡検、器機点検。作業員確保。
1・12　Ⅳ区表土剥ぎ重機導入（1/12～2/4）。
1・14　246、247、248、249、250、251、252、253、

254、255、256、257、258、259、260、261、262号土壙発掘開始。
1・19　137、138号住居発掘開始。
1・20　146号住居発掘開始。
1・26　136号住居発掘開始。201号土壙発掘開始。
1・28　144号住居発掘開始。345、346、347、348、349、350、351、352、353号土壙発掘開始。
1・29　145号住居発掘開始。
1・30　147号住居発掘開始。344号土壙発掘開始。北風終日強し。
2・2　184、185、186、187、188、189、190、191、192、193、194、195、196、197、198、199、202、321、322、323、324、325、326、327、328、342号土壙発掘開始。
2・3　166、168号住居発掘開始。168、169、170、171、172、173、174、175、176、177、178、179、180、181、182、183号土壙発掘開始。
2・6　167号住居発掘開始。212、213、214、215、216、217、218号土壙発掘開始。
2・12　120号住居発掘開始。
2・13　142号住居発掘開始。275号土壙発掘開始。
2・14　122、164号住居発掘開始。
2・16　124号住居発掘開始。209、210、211号土壙発掘開始。
2・17　343号土壙発掘開始。
2・18　171号住居発掘開始。
2・19　150、151号住居発掘開始。
2・20　118、121、143、163、169、172号住居発掘開始。200、203、204、205、206、207、208号土壙発掘開始。
2・23　152、170、173号住居発掘開始。329、330、331、332、333、334、335、336、337、338、339、340、341号土壙発掘開始。
2・25　162号住居発掘開始。
2・26　263、264、265、267、268、269、270、271、272、273、274号土壙発掘開始。
2・27　50、51、54、55、57号住居発掘開始。13号掘立柱建物発掘開始。276、277、278、279、280、281、282、283、284、285、301、304、305、306、307、308、315、316、319、320、358、359、381号土壙発掘開始。
2・28　56号住居発掘開始。286、287、288、289、290、291、292、293、294、295、296、297、299、300号土壙発掘開始。
3・1　374、375、376、377、378、379号土壙発掘開始。
3・2　148号住居発掘開始。
3・3　11号掘立柱建物発掘開始。
3・4　53、165号住居発掘開始。309、310、311、312、313、314、360、361、362、380号土壙発掘開始。
3・6　5号掘立柱建物発掘開始。47、48、49号土壙発掘開始。
3・8　Ⅴ区A・B・Cトレンチ試掘調査開始。
3・9　50、51、52、53、54、55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65、66、67号土壙発掘開始。
3・11　68、69、70、71、72、73、74、75、76、77、78、79、80、81、82、83、84号土壙発掘開始。
3・13　第2次発掘調査終了。

C　第3次発掘調査　　Ⅲ、Ⅵ区

1976年3月19日～1976年9月25日

3・19　第3次発掘調査開始。101、103、109、11号住居発掘開始。148、149、150、151、152、153、154、155号土壙発掘開始。
3・22　100号住居発掘開始。Ⅵ区1、2、3トレンチ試掘調査開始。
3・23　111号住居発掘開始。Ⅲ、Ⅳ区表土剝ぎ重機導入(3/23～5/26)、Ⅵ区4、5、6、7トレンチ試掘調査開始。
3・24　156、157、158、159、160、161、162、163、164、165号土壙発掘開始。
3・25　143、144、145、146、147号土壙発掘開始。Ⅵ区8、9、10トレンチ試掘調査開始。
3・26　88、99、107、112、113号住居発掘開始。Ⅵ区11、12トレンチ試掘調査開始。
3・29　年度末、年度初の事務所引継ぎの為発掘作業中止。
4・5　本年度発掘作業開始。188、195、197、198、200、203号住居発掘開始。
4・6　105、115、181、182、186、196、199、201号住居発掘開始。
4・8　191号住居発掘開始。
4・17　43、44、45、46号土壙発掘開始。
4・22　194、202号住居発掘開始。
4・24　94号住居発掘開始。
4・26　114号住居発掘開始。166号土壙発掘開始。
5・10　群馬大学新井房夫教授現地調査。
5・11　92、93、98、108、178、180、184、185号住居発掘開始。
5・14　90、97、106、183、185号住居発掘開始。112、113、114、115、116、167号土壙発掘開始。
5・17　春雷鳴り響く。
5・18　89、189号住居発掘開始。
5・20　190号住居発掘開始。
5・22　116、179号住居発掘開始。
5・25　104、117、176号住居発掘開始。
6・2　95号住居発掘開始。5号掘立柱建物発掘開始。
6・4　86号住居発掘開始。
6・10　10号掘立柱建物発掘開始。93、94、95、96、97、98、99、100、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110号土壙発掘開始。
6・14　2号掘立柱建物発掘開始。
6・15　85、102号住居発掘開始。
6・17　96号住居発掘開始。87、89、90号土壙発掘開始。

6・18　84号住居発掘開始。7号溝発掘開始。6、8、9号掘立柱建物発掘開始。118、119、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131、132、133、134、135、136、137、138、139、140号土壙発掘開始。
6・21　141、142号土壙発掘開始。
6・23　87号住居発掘開始。
6・24　47号住居発掘開始。
6・29　Ⅰ区B、Fライン試掘調査開始。
7・2　Ⅰ区K、Pライン試掘調査開始。
7・3　都立大学助教授峯岸純夫先生現地調査。
7・6　Ⅲ区表土剥ぎ重機導入（7/6～7/10）。
7・7　群馬大学名誉教授尾崎喜左雄先生生現地指導。
7・14　Ⅰ区H、M、Rライン試掘調査開始。
7・21　本日より神奈川大学考古学研究会、学生考古学実習に7名参加。
7・23　431、432、433号土壙発掘開始。
8・4　412、426号土壙発掘開始。
8・13　48号住居発掘開始。Ⅲ区表土剥ぎ重機導入（8/13－9/8）。
8・17　3、4号掘立柱建物発掘開始。117号土壙発掘開始。
8・19　7号掘立柱建物発掘開始。
8・20　神奈川大学考古学研究会、学生考古学実習本日にて終了。
8・23　45号住居発掘開始。396、397、398号土壙発掘開始。
8・24　46号住居発掘開始。
8・27　415、416、417、418、419号土壙発掘開始。
8・30　歴史教育研究協議会会員による巡検。43号住居発掘開始。
8・31　406、407、408号土壙発掘開始。
9・1　44号住居発掘開始。399、400、401、402、403、404、405、423、424、425、427、428号土壙発掘開始。
9・6　群馬大学教授勝守すみ先生現地視察。
9・9　台風17号接近。降雨激しい。
9・17　Ⅱ、Ⅳ区表土剥ぎ重機導入（9/17～10/4）。430号土壙発掘開始。
9・20　193号住居発掘開始。Ⅰ区Cライン試掘調査開始。
9・21　429号土壙発掘開始。
9・24　177号住居発掘開始。総力戦で作業進める。
9・25　第3次発掘調査終了。

D　第4次発掘調査　　Ⅱ区

1976年9月27日～1976年11月6日

9・27　第4次発掘調査開始。4、5、6号溝発掘開始。40、41号土壙発掘開始。
9・30　Ⅰ区Aライン試掘調査開始。
10・1　42号土壙発掘開始。
10・8　3号溝発掘開始。
10・19　Ⅱ、Ⅳ区表土剥ぎ重機導入（10/19～10/22）。
10・21　34、39、41、42号住居発掘開始。
10・25　37、38号住居発掘開始。
10・27　33、35、36号住居発掘開始。
10・29　40号住居発掘開始。
11・6　第4次発掘作業終了。「文化財のつどい」を開き、復元家屋を中心に、発掘された遺構、遺物を見ていただく。参加者250名。

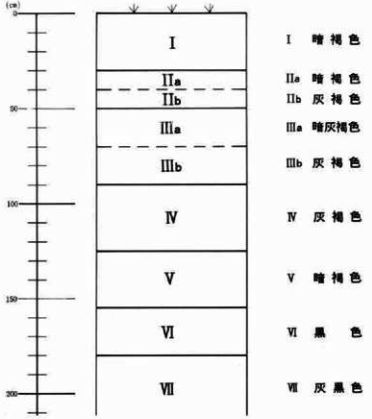
E　第5次発掘調査　　Ⅰ、Ⅳ区

1976年11月8日～1977年1月22日

11・8　第5次発掘調査開始。17号住居発掘開始。
11・17　18号住居発掘開始。13、14、15号土壙発掘開始。
11・20　25、26、27、28号住居発掘開始。
11・25　29、30号住居発掘開始。Ⅰ、Ⅱ区表土剥ぎ重機導入（11/25－12/1）。
11・27　31、32号住居発掘開始。2号溝発掘開始。
12・2　22、23号住居発掘開始。31、32、33、34、35、36、37、38号土壙発掘開始。
12・3　19、20、21、24号住居発掘開始。39号土壙発掘開始。
12・4　1号掘立柱建物発掘開始。16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、30号土壙発掘開始。
12・6　12号住居発掘開始。
12・10　10、11、15号住居発掘開始。6、7、8、9、10、11号土壙発掘開始。1号溝発掘開始。
12・13　3、7、14号住居発掘開始。5号土壙発掘開始。
12・14　4、5、6、8、9号住居発掘開始。1、4号土壙発掘開始。
12・15　1号住居発掘開始。2、3号土壙発掘開始。
12・17　13号住居発掘開始。
12・18　16号住居発掘開始。
12・23　本日にて発掘作業御用納め。
1・10　本日より発掘開始。遺跡巡検。発掘器材点検。作業員の確保。
1・11　Ⅳ区表土剥ぎ重機導入（1/11～1/18）。発掘事務所下の遺構検出。
1・13　49、52号住居発掘開始。363、364、365、366、367、368、369、370、371、372、373号土壙発掘開始。
1・14　12号掘立柱建物発掘開始。
1・22　第5次発掘作業終了。本日にて延1年7ヶ月にわたる西今井遺跡の発掘調査は全て終了した。

3．地形の調査

Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅵ区の発掘時に使用した土層はⅣ区のＦ－145を基準としている。Ⅰ区には関東ローム層がところどころに残っている部分があり、その他の発掘区の表土下はⅤ層に比せられる土を中心に堆積しており、早川による氾濫が微高地を侵食したと考えられる。Ⅱb層の浅間山Ｂ軽石層の堆積は部分的に分布しており、その範囲も少なく遺講検出面上には殆んど観察されていない。遺構の切り込みはⅢb層、ないしはⅣ層で確認される。この層序は場所により複雑な変化を示し、Ⅱ層～Ⅳ層は土質の差異、色調の変化等が微妙に異なり、Ⅲ層、Ⅳ層の区分基準さえも不明瞭になる発掘区もみられる。Ⅴ層下半部には、榛名山二ツ岳噴出物とみられる薄茶色の軽石層（FP層）が、２～３㎝の厚さで凹凸を呈して堆積しているが、全ての層に認められるわけではなかった。Ⅴ層、Ⅵ層は遺構基盤面に比較的安定してみられる層だが、厚さや土質に変化があり、区域によってかなりの高低の差がみられる。深い住居跡やピットの底はⅥ層にまで達しているところもある。Ⅵ層以下には、粘土層、砂質土層、シルト層が入り乱れて続き、約３ｍ下は厚い砂礫層に到達する。Ⅲ区の早川地域には、前述のⅤ層、Ⅵ層が表土下に堆積している部分が島状に残る所があり、周辺のⅡ区、Ⅳ区に比べ地層の安定した場所だった様である。Ⅴ層、Ⅵ層はある時期に河川によって切断され、その部分には遺構がみられない。住居やピット埋土はⅢ層、Ⅳ層に近似した土層が多く、Ⅴ層やⅥ層近似の土層がブロック状に入った遺構もみられた。



Fig・7　西今井遺跡基準土層（Ⅳ区　Ｆ－145周辺を参照）

第Ⅲ章　　竪穴住居の調査（南地区）

1．遺構

遺構の分布は，本遺跡のように乱流する河川の台地の侵食と複雑な埋没経過をたどる低地が複合している場合，各発掘区の状況をまわりくどく述べてもその意味は少ないと考えられる。地形と占地を含めた集落のまとめについては「河川改修調査」に譲りたい。

Ⅰ区は上武道路中心杭No.323からNo.332の間で発掘実面積は6,980 ㎡である。東側には大きく蛇行する旱川がせまり，台地縁辺を削り込む。更に最悪なことに，この東側に公有地化に便乗した衛生業者による大量の糞尿投棄のための溝が2,200 ㎡にわたって縦横に走って調査が不可能になっていたことが重なっていた。本地区は標高42ｍの等高線上に位置する。竪穴住居は北寄り５軒と東寄り19軒の２ケ所に分かれて分布している。発掘区の中央部の住居付近は東方から旱川の大きな蛇行が台地縁辺を侵食している。

Ⅱ区は東西に走る生活道路と西今井館からの排水路にはさまれた5,200 ㎡の面積を発掘した。標高42ｍの等高線上に竪穴住居は検出され発掘区の北寄りに14軒，中央部にはまばらに４軒が散見する。この北寄りのまとまりは道路を挟むⅢ区の竪穴住居のまとまりに連続する。

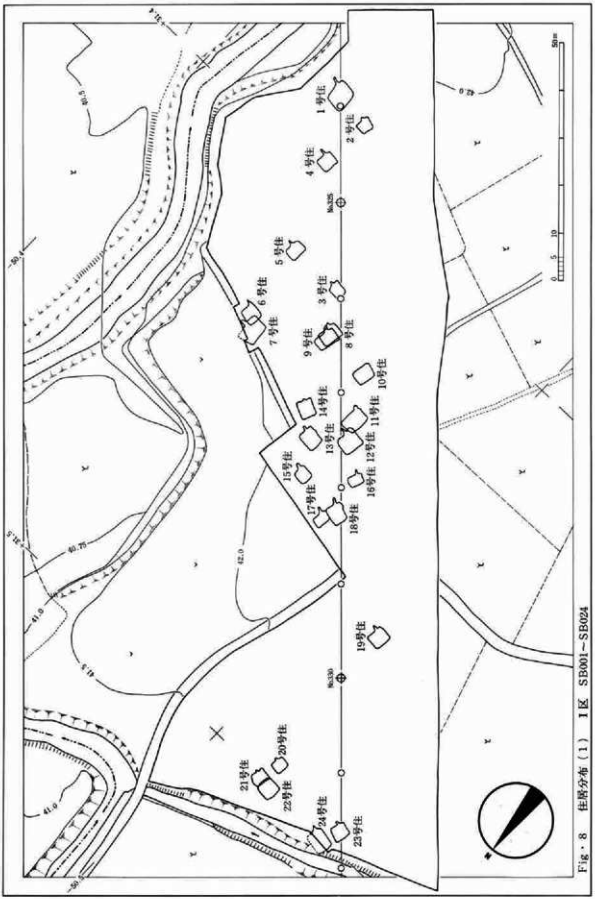
Ⅲ区は東西に走る２つの生活道路に区画された4,180㎡を発掘した。西方に撥状に拡がる発掘区の南西方向にはより南西方向に竪穴住居が拡散するように６軒が検出された。また，南東方向の壁際には４軒ほどの竪穴住居がⅡ区に隣接して分布している。発掘区中央部から北東方向にかけては，30軒の竪穴住居が馬の背状に細長く集中している。

Ⅳ区は北方向から南に向かって流下する旱川の蛇行によって発掘区の北川は大きくえぐり取られている。この部分は第１次試掘調査時点で削除した。標高は42.5ｍで比較的平坦な台地が広がる。この台地が北東方向に突出して旱川の乱流によって改変させられたと考えられる。このため発掘実面積は6,400㎡であった。本地区で検出された竪穴住居は93軒である。これらの竪穴住居は大きくは８つのまとまりに集約される。Ｃ137に４軒，Ｃ145に９軒，Ｃ154に９軒，Ｄ159に５軒，Ｐ140に12軒，Ｏ146に10軒，Ｖ142に25軒，Ｖ149に５軒である。またその他の竪穴住居もこれらのまとまりの間にまばらに分布している。

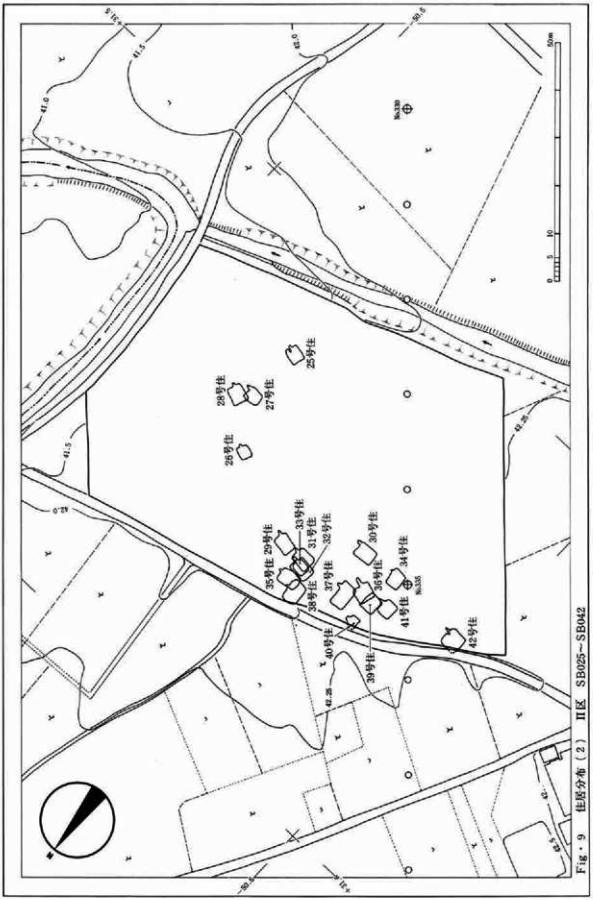
Ⅴ区は西今井館へ取水したと考えられる２本の水路に挟まれた狭小な低地帯である。標高42ｍの等高線は西から東に向かって緩傾斜をもち下る。試掘調査の結果ではこの部分には遺構の存在は認められなかった。遺跡の存否の決定については，旱川と館の水利の関係，それから平地を流れる小河川の乱流が複雑な地形環境を長期にわたって形成した結果を慎重に検討して，判断を下してゆかねばならない。

Ⅵ区の周辺で旱川は特に大きくうねり蛇行を繰り返す。この旱川の東側より新田町地籍が舌状にのびてきている。標高42.5ｍの等高線に占地し周辺は袋状にすぼまるように侵食を受けている。発掘面積は1,740㎡と狭い。けれども検出された竪穴住居は28軒と多い。Ｑ180周辺には６軒が，Ｒ186周辺には14軒が，Ｏ191周辺には８軒が一部重複しながら集中している。

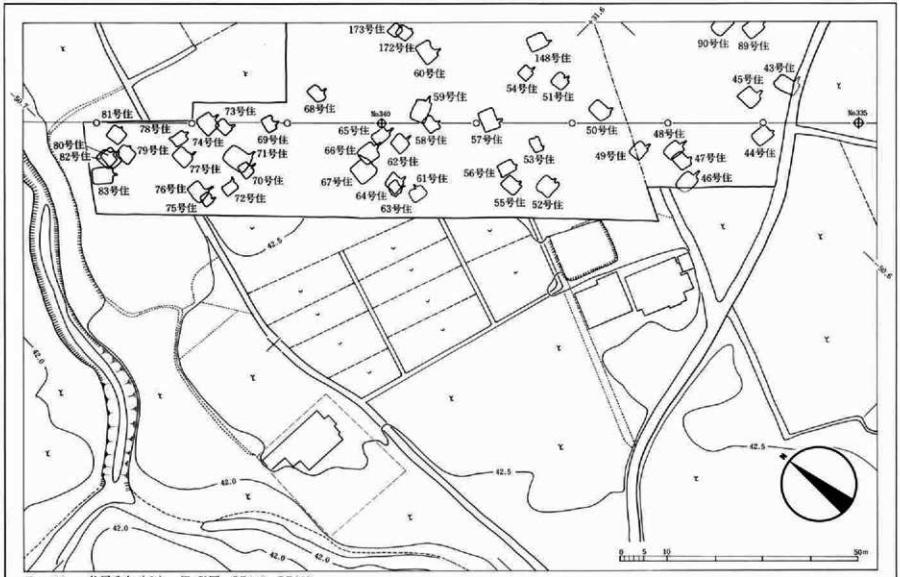
多時期における集落の同時存在については，遺物・遺構を遺跡全体のなかで検討をせざるを得ないが，限られた発掘区のなかではあるが竪穴住居の密度から集落の中心部分を推定しておきたい。発掘区100㎡あたり何軒の竪穴住居が存在するのかを数値で表わしてみると，Ⅰ区は0.3軒，Ⅱ区も0.3軒，Ⅲ区は１軒，Ⅳ区は1.5軒，Ⅵ区は1.6軒となる。このことはⅣ区とⅥ区にかけてが竪穴住居の密度が高いことを示す。



Fig．8　住居分布（1）　I区　SB001－SB024



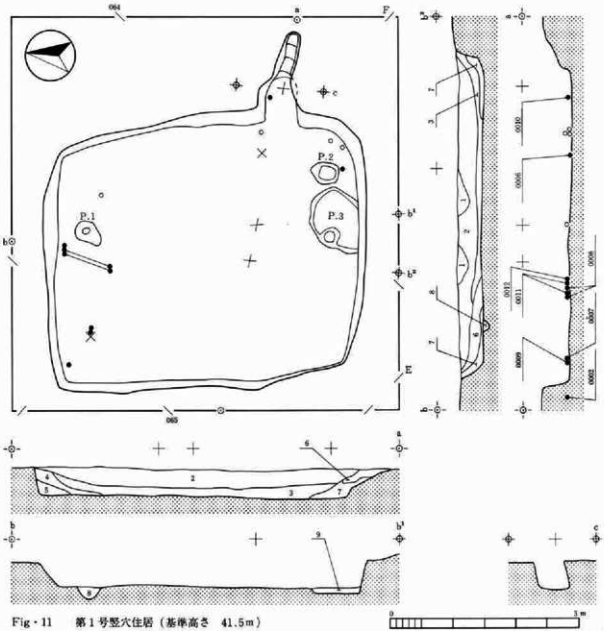
Fig・9　住居分布（2）　ⅡEK　SB025～SB042



Fig・10　住居分布（3）　Ⅲ・Ⅳ区　SB043～SB083

1号住居　SB001（遺構 PL. 5、遺物 PL. 22、Fig. 95）

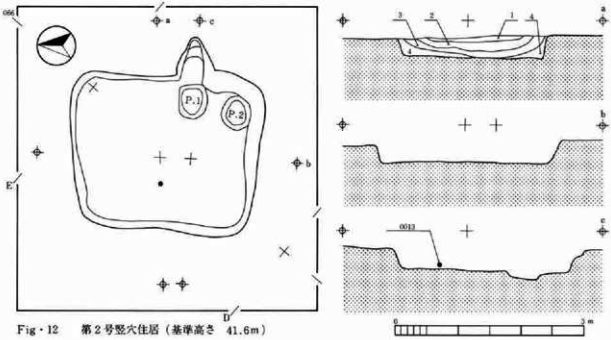
発掘区Ⅰ区のF064に位置する。平面形は横長形、縦4.32m、横5.13mを測り、面積は約22.2㎡である。住居の方位はN－99°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は38cm、周溝はなく、床面高は40.01mである。覆土は9層に分けられた。1～5層は住居内覆土、6、7層は窯体埋没土、8、9層は住居に関連するピット埋土である。土質は1層灰白色土層、2層暗褐色土層、3層暗灰色土層、4層赤褐色土層、5層暗褐色土層、6層黒褐色土層、7層褐色土層、8層暗褐色土層でややしまって硬く、9層は黄褐色土層で軟質である。竈焚口部分の焼土の広がりは少なく、炭化物、焼土の混入も少ない。床面から穿たれたピットは3ケ所である。1号ピットは深さ21cmである。2号ピットは深さ24cmで少量の焼土を含む軟質黒褐色土の埋土である。3号ピットは深さ11cmの浅い不定形のピットである。本住居に伴う遺物は、土師器杯3、土師器鉢2、土師器甕5、須恵器杯2の合計12点である。



Fig・11　第1号竪穴住居（基準高さ　41.5m）

2号住居　S B 002 (遺構 PL. 5、遺物 Fig. 95、土層 103P)

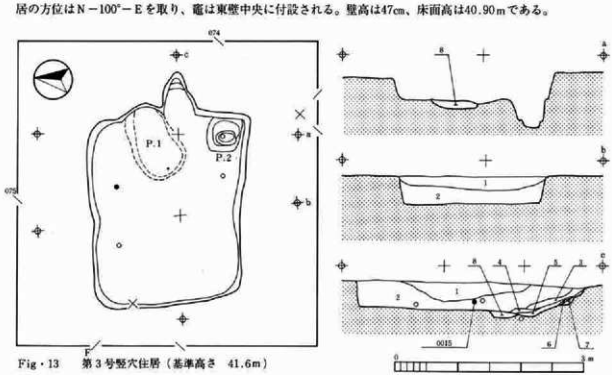
発掘区Ⅰ区のE066に位置する。平面形は横長形、縦2.37m、横2.98mを測り、面積は約7.1m²である。住居の方位はN－102°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。壁高は37cm、床面高は41.01mである。



Fig・12　第2号竪穴住居（基準高さ　41.6m）

3号住居　S B 003 (遺構 PL. 5、遺物 PL. 22, Fig. 95、土層 103P)

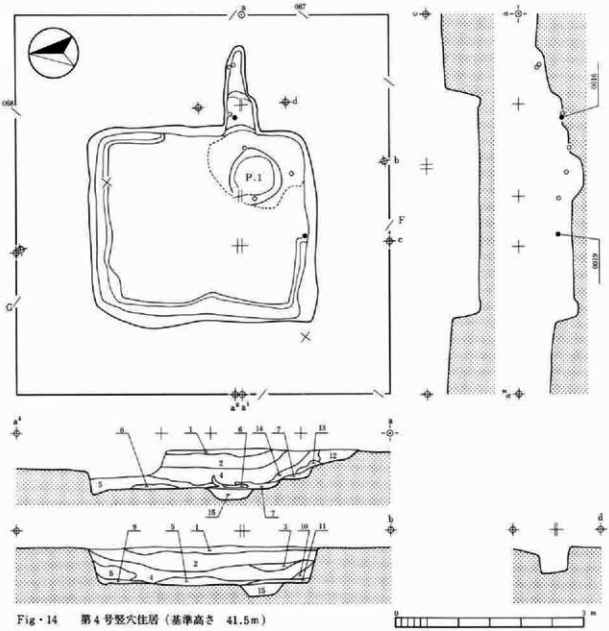
発掘区Ⅰ区のF075に位置する。平面形は縦長形、縦3.01m、横2.40mを測り、面積は約7.2m²である。住居の方位はN－100°－Eを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は47cm、床面高は40.90mである。



Fig・13　第3号竪穴住居（基準高さ　41.6m）

4号住居　SB004（遺構　PL. 5、遺物　PL. 22, Fig. 95）

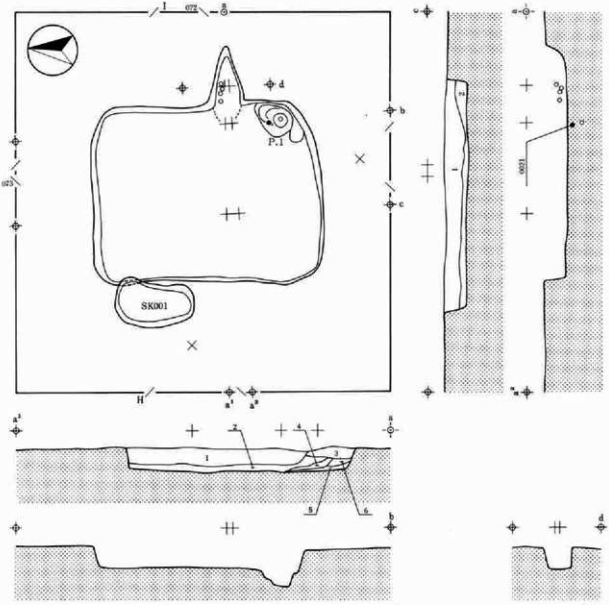
発掘区Ⅰ区のG068に位置する。平面形は横長形、縦3.05m、横3.67mを測り、面積は約11.2m²である。住居の方位はN－104°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は60cm、周溝はなく、床面高は40.64mである。覆土は15層に分けられた。1～5、9～11層は住居内覆土、6～8、12～14層は窯崩落土、15層は窯前のピット埋土である。土質は1層暗褐色土層、2層暗褐色土層、3層褐色土層、4層暗褐色土層、5層褐色土層、6層灰白色土層、7層灰褐色土層、8層暗褐色土層、9層暗褐色土層、10層暗褐色土層でやや硬くしまっている。11層暗褐色土層、12層暗褐色土層、13層赤褐色土層、14層赤橙色土層、15層は灰と焼土を含む赤褐色土層である。竈の燃焼部は緩やかで2段に落ちる。焚口前の焼土範囲は広い。この焼土下に径8cm、深さ18cmの1号ピットがある。本住居に伴う遺物は土師器杯1、須恵器杯・2、須恵器瓶1の合計4点である。



Fig・14　第4号竪穴住居（基準高さ　41.5m）

5号住居　SB005（遺構 PL. 6、遺物 PL. 22、Fig. 95）

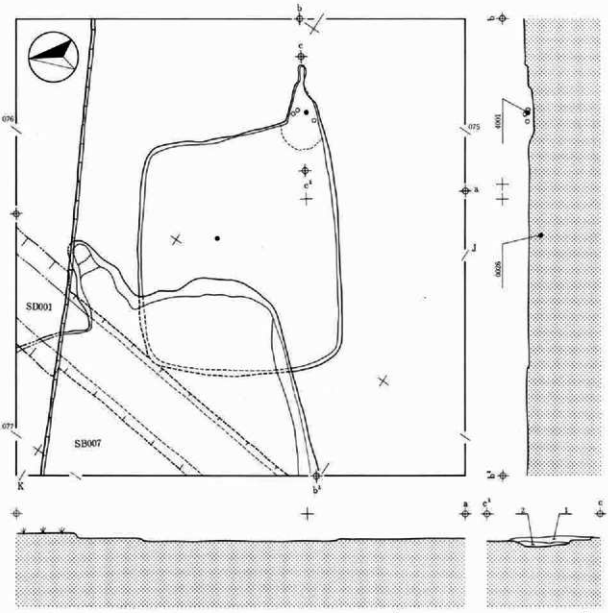
発掘区Ⅰ区のH072に位置する。平面形は横長形、縦2.73m、横3.68mを測り、面積は約10.0m²である。住居の方位はN－100°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は40cm、周溝はなく、床面高は40.84mである。覆土は6層に分けられた。1、2層は住居内覆土、3層は窯崩落土、4～6層は窯体埋没土である。土質は1層暗褐色土層で地山の粘土ブロックを処々に混入する。2層黒色土層で粘土ブロックは混入していない。3層暗褐色土層で焼土と粘土ブロックを混入している。4層赤褐色土層で天井部焼土の落ち込み下層に炭化物が見られる。5層暗褐色土層である。6層暗灰色土層は灰層、焼土、炭化物が見られる。土層断面の観察から、遺構の重複関係は5号住居→1号土壙となる。1号ピットは貯蔵穴で上端平面形は不定形で、深さは25cmを測る。埋土は焼土、赤色粘土ブロック、灰を少量含む黒褐色土である。本住居に伴う遺物は、土師器杯1、土師器甕2、須恵器杯1、須恵器蓋1，須恵器内黒1の合計6点である。



Fig・15　第5号竪穴住居（基準高さ　41.5m）

6号住居　ＳＢ006（遺構　PL. 6、遺物　PL. 23、Fig. 96）

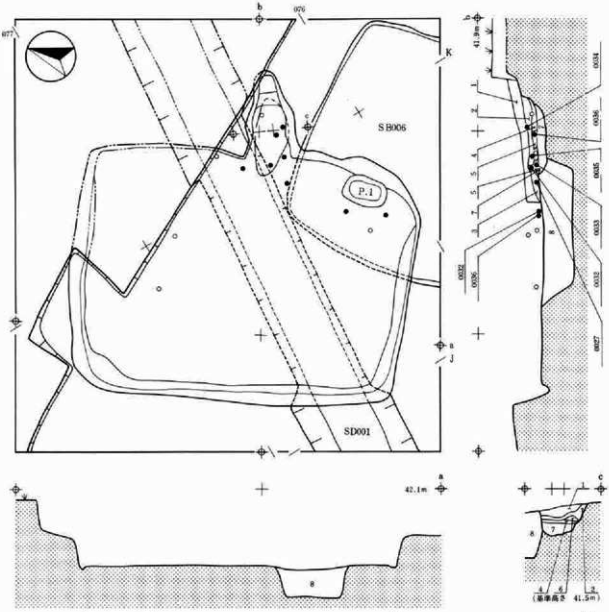
発掘区Ⅰ区のＫ076に位置する。平面形は縦長形、縦3.83m、横3.25mを測り、面積は約12.4m²である。北側は発掘区の範囲が残る。北西隅は、住居に接するように南西方向から北東方向に１条の溝が直線に走る。また、住居の北西隅には７号住居と切り合っている。住居の方位はＮ－107°－Ｅを取り、竈は東壁右隅に付設される。確認された壁高は15cm、周溝はなく、床面高は41.49mである。覆土は２層に分けられた。１層は窯崩落土、２層は窯構築材である。土質は１層灰褐色土と暗褐色土の混土層で焼土粒が全体にまじる。２層暗褐色土層を中心に灰白色粘土ブロックを含む。土層断面の観察から、遺構の重複関係は１号溝→６号住居→７号住居となる。竈の焚口前には、扇状に焼土と灰層の混入する暗褐色土の層が広がる。焚口幅は50cmを測り、燃焼部分の奥行き35cmである。煙道部前方部幅は約20cmで長さ55cmを測る。２層上面が焼成の上面である。本住居に伴う遺物は、土師器甕１、埴輪１の合計２点である。



Fig・16　第６号竪穴住居（基準高さ　42.0m）

7号住居　ＳＢ007（遺構 PL. 6、遺物 PL. 23, Fig. 96）

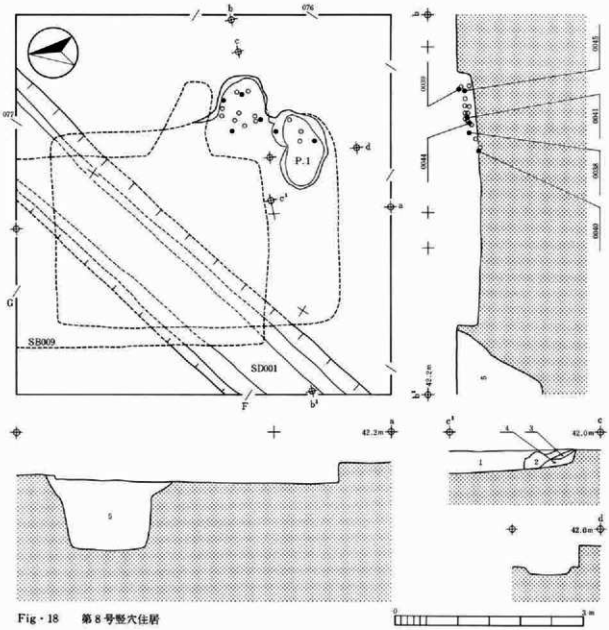
発掘区Ⅰ区のＫ077に位置する。平面形は横長形、縦3.93ｍ、横5.50ｍを測り、面積は約21.6㎡である。北側は発掘調査外である。住居中央を１号溝が走り東南隅を６号住居と重複する。住居の方位はＮ－83°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。確認された壁高は10.4cm、周溝はなく、床面高は40.90ｍである。覆土は８層に分けられた、１層は窯崩落土、２～６層は窯体埋没土、７層は窯構築材、８層は１号溝覆土である。土質は１層暗褐色粘土層でローム細粒及び焼土粒を含む。２層焼土塊とローム塊の混土する赤褐色土層、３層暗褐色土層でローム塊を含む。４層暗灰色土層は灰と焼土塊の混土層で固い、５層灰層で灰褐色土、６層暗灰色の灰層に焼土が入る。７層暗褐色土と灰、焼土粒、ローム粒の混土層、８層黒褐色粘質土層である。土層断面の観察から、遺構の重複関係は１号溝→６号住居→７号住居となる。１号ピットは貯蔵穴と考えられ深さ25cmを測る。本住居に伴う遺物は、土師器杯１、土師器鉢４、土師器甕５、紡錘車１の合計11点である。



Fig・17　第７号竪穴住居

8号住居　ＳＢ008（遺構　PL. 6、遺物　PL. 23、Fig. 96）

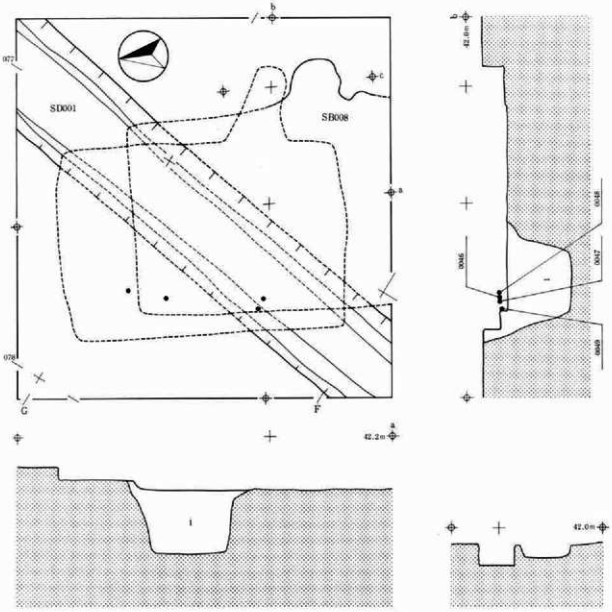
発掘区Ⅰ区のＦ077に位置する。平面形は横長形、縦3.17ｍ、横4.55ｍを測り、面積は約14.4㎡である。住居の北側は９号住居と１号溝が重複している。住居の方位はＮ－108°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は40㎝、周溝はなく、床面高は41.36ｍである。覆土は５層に分けられた。１層は住居内覆土、２層は窯崩落土、３層は窯体埋没土、４層は窯構築材、５層は１号溝覆土である。土質は１層暗褐色土層で軽石を含む。２層暗褐色土層で多量の粘土を混入する。３層赤褐色土層で焼土ブロックである。４層黒色土層である。５層黒褐色粘質土層である。土層断面の観察から、遺構の重複関係は１号溝→９号住居→８号住居となる。竈は小型で焚口前の焼土範囲は明瞭でない。焚口右側の位置に貯蔵穴があり、焼土、灰を少量含む黒褐色土層で深さ20㎝を測る。本住居に伴う遺物は、土師器鉢１、土師器甕３、須恵器杯４、須恵器甕１の合計９点である。



Fig・18　第８号竪穴住居

9号住居　SB009（遺構 PL. 7、遺物 PL. 23、Fig. 96）

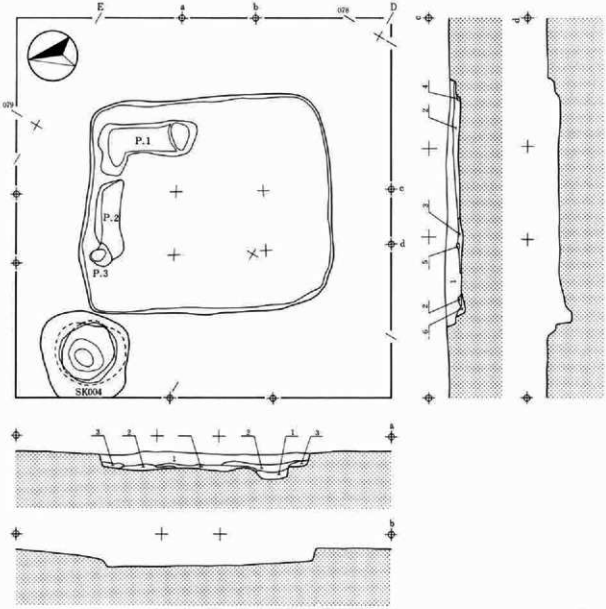
発掘区Ⅰ区のG077に位置する。住居の中央を南西から北東に向かって直線的に1号溝が走る。南東隅には8号住居が大きく重なる。溝の検出作業と8号住居の検出作業を進めるあまり、本住居の発見が遅れてしまった。遺物の分布範囲や床面の拡がりから、住居の形を消極的に確定した。1号溝は本住居よりも古いもので覆土中より出土の遺物には弥生土器片、古式土師器片が出土している。本住居に伴う遺物は4点であった。いずれも床面に密着していたものである。4点とも高台杯で小形である。回転糸切りを杯底面に残し、高台は多様であるが、全体的には退化傾向にある。0046の杯は灯明皿のように口縁部に油煙がべったりと厚く付着している。平面形は横長形、縦3.02m、横4.61mを測り、面積は約13.9m²である。住居の方位はN－111°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は23cm、周溝はなく、床面高は41.53mである。覆土1層は1号溝覆土である。土質は黒褐色粘質土層で下面にロームブロック細粒を混土する。



Fig・19　第9号竪穴住居

10号住居　ＳＢ010（遺構　PL. 7、遺物　Fig. 97）

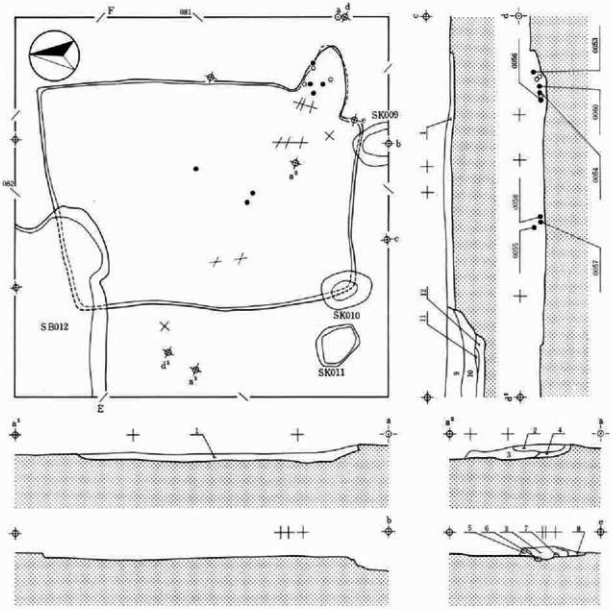
発掘区Ⅰ区のＥ079に位置する。平面形は正方形、縦3.45ｍ、横3.44ｍを測り、面積は約11.9㎡である。北西隅に接して４号土壙が存在する。住居の方位はＮ－111°－Ｅを取り、竈はなかった。確認された壁高は29㎝、周溝はなく、床面高は41.30ｍである。覆土は６層に分けられた。１～５層は住居内覆土、６層は住居に関連するピット埋土である。土質は１層暗黒褐色土層で軽石混入、ローム粒がわずかに見られる。２層暗褐色土層は黒色土層中にローム粒が混入している。３層黒色土層とロームが半々に混入。４層ロームブロックで黄褐色土層を呈する。５層暗褐色土層中にロームブロック細粒含む。６層暗黒灰色土層に焼土ブロックを混入する。床面から穿たれたピットが３ケ所ある。北東の壁寄りから北壁にかけて、床面下の掘り方状に幅広にめぐる。１号ピットの深さは11㎝、２号ピットの深さは５㎝、３号ピットは26㎝である。本住居に伴う遺物は、土師器甕２、須恵器杯１の合計３点である。



Fig・20　第10号竪穴住居（基準高さ　41.8ｍ）

11号住居　S B011 (遺構 PL. 7、遺物 PL. 23, Fig. 97)

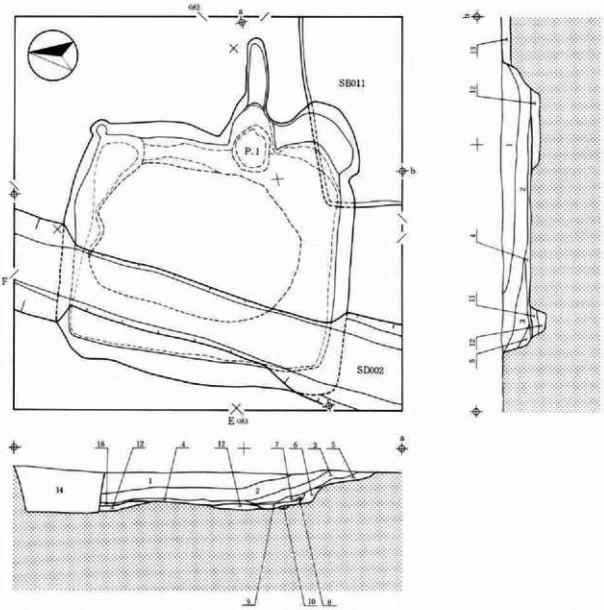
発掘区Ⅰ区のE081に位置する。平面形は横長形、縦3.60m、横4.87mを測り、面積は約17.5m²である。南壁寄りに9号、10号、11号土壙が位置しており、北西隅を12号住居が重複する。住居の方位はN－101°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は26cm、周溝はなく、床面高は41.53mである。覆土は12層に分けられた。1層は住居内覆土、2、3、5～8層は窯体埋没土、4層は窯構築材、9～12層は12号住居覆土である。土質は1層黒褐色土層、2層赤褐色土層、3層黒褐色土層、4層暗褐色土層、5層赤褐色焼土ブロック、6層灰褐色粘土ブロック、7層赤色焼土中に灰層を含む（灰褐色）、8層暗灰色粘土中に焼土を含む。9層暗褐色土層、10層暗褐色土層、11層赤褐色焼土を少量含む層、12層黒褐色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は11号住居<12号住居 / 9号土壙、10号土壙となる。焚口部分の灰や焼土の分布範囲は不明確である。本住居に伴う遺物は、土師器甕1、須恵器杯6、灰釉1の合計8点である。



Fig・21　第11号竪穴住居（基準高さ　41.9m）

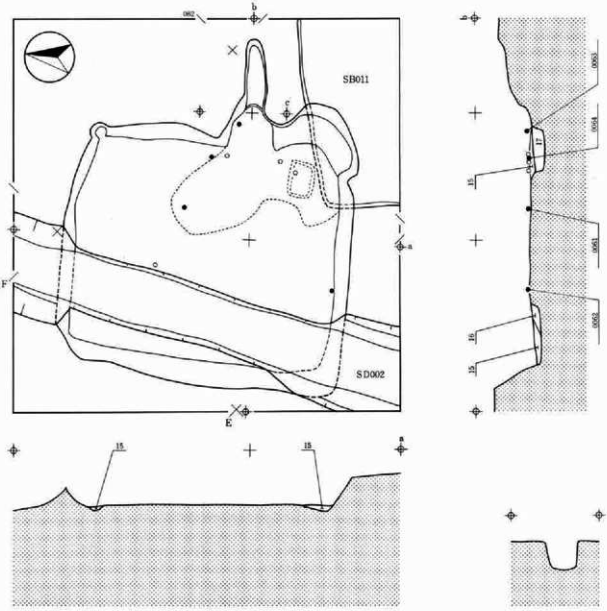
12号住居　ＳＢ012（遺構　PL. 7、遺物　Fig. 97）

発掘区Ⅰ区のＦ082に位置する。平面形は横長形、縦4.08m、横4.63mを測り、面積は約18.9m²である。本住居は南南西から北北東に向かう２号溝と切り合っている。また、南東隅も11号住居と重なっている。確認できた壁高は高く下方にゆくほど直立気味に堅固になる。床面は貼り床で中央の破線内は堅く、壁寄りは軟質となる。住居の方位はＮ－97°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は72cm、周溝はなく、床面高は41mである。覆土は18層に分けられた。１、２層住居内覆土、３層窯崩落土、５層窯体埋没土、６、17層窯構築材、７～10層住居に関連するピット埋土、４、11、12、18層床面整地土、13層11号住居覆土、14～16層２号溝覆土である。土質は１層暗褐色土にローム細粒の混じった層で固い。２層暗褐色土とロームの混土層、３層暗褐色土層でローム塊が少なくなる。４層ロームと黒褐色土の混土層で固いロームが多い。５層黒褐色土層でロームブロックを混入する。６層暗褐色土層でローム粒を多量に含む焼土、灰との混合土層、



Fig・23　第12号竪穴住居（土層断面図）　（基準高さ　42.0m）

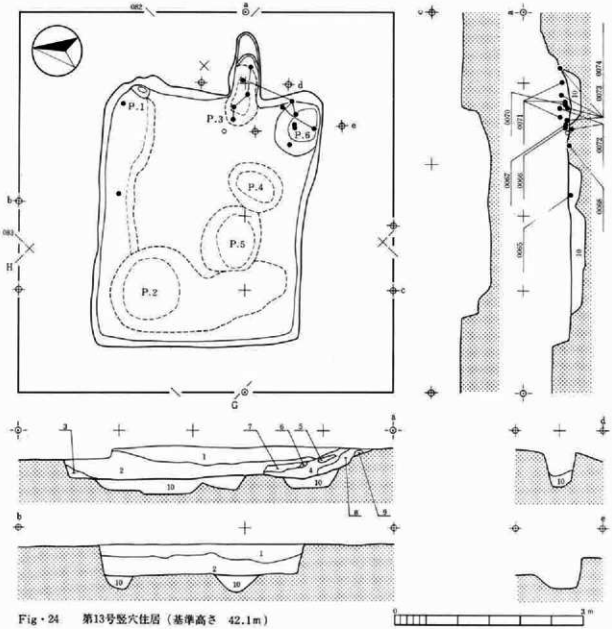
7層暗灰色土層でローム粒、焼土、炭化物を含む。8層焼土ブロックで赤褐色を呈する。9層灰色の灰層で若干の炭化物を含む。10層黄褐色ロームブロックに少量の黒色土を含む。11層ロームと黒褐色土の混土層、12層黄褐色ロームブロック中に少量の黒色土を含む。13層暗褐色土層で少量のロームブロック混土。14層黒褐色土層中にロームブロック混土、15層黒褐色土層中にロームブロック混土、16層黒褐色土層中にロームブロック混土、17層赤褐色焼土ブロック、18層は黄褐色ロームブロックである。土層断面の観察から、遺構の重複関係は、11号住居→12号住居→2号溝となる。本住居の北東隅には深さは床面と同じであるがピットが張り出している。南東隅は瘤状の張り出しがあり、平坦な面を一段形成する。竈の焚口部は幅70cm、燃焼部の奥行き80cmで卵形の平面形である。焼成面下の焚口前庭部から燃焼部前半部に左右60cm、前後70cmの灰層掻き出しのピットがあり、深さ12cmを測る。煙道部は幅30cm、長さ102cmでゆるやかに傾斜している。焚口前庭部の灰層のひろがりは右袖の壁際にまで達する。南東隅に地山を掘り出した長方形の台が検出された。縦55cm、横40cm、高さ10cmである。本住居に伴う遺物は、土師器杯2、土師器甕2の合計4点である。



Fig・23　第12号竪穴住居（遺物分布図）　（基準高さ　42.0m）

13号住居　S B013（遺構　PL. 7、遺物　PL. 23, 24, Fig. 97）

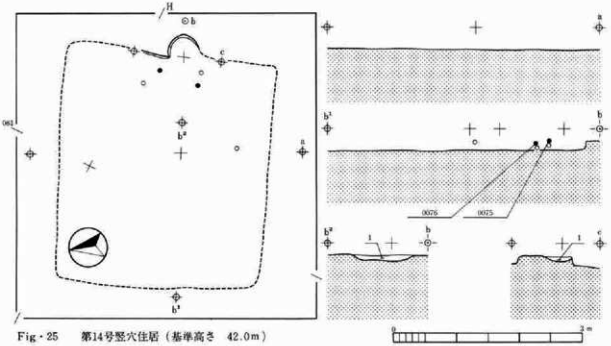
発掘区Ⅰ区のH082に位置する。平面形は縦長形、縦4.03m、横3.30mを測り、面積は約13.3㎡である。住居の方位はN－98°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は48cm、周溝はなく、床面高は41.37mである。覆土は10層に分けられた。1～3層は住居内覆土、4～8層は窯体埋没土、9層は竈構築材、10層は床面整地土である。土質は1層暗褐色土層、2層暗褐色土層、3層暗褐色土層、4層黒褐色土層、5層黄褐色ローム、6層赤褐色焼土ブロック、7層黒色土層、8層黒褐色土層、9層黒褐色粘質土層、10層は黄褐色ロームブロックである。3号ピットは燃焼部下の灰の掻き出し穴と考えられ、少量の灰、焼土も埋土に混入している。6号ピットは竈右側に位置しており、16cmと浅い。また、1号、2号、4号、5号ピットが床面下に検出されている。深さは1号ピットは5cm、2号ピットは19cm、5号ピットは17cmを測る。本住居に伴う遺物は、土師器杯4、土師器甕5、須恵器蓋1の合計10点である。



Fig・24　第13号竪穴住居（基準高さ　42.1m）

14号住居　ＳＢ014（遺構 PL. 8、遺物 PL. 24、Fig. 97、土層 103P）

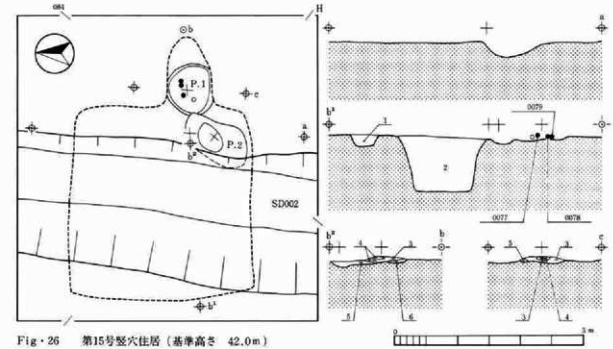
発掘区Ⅰ区のＨ081に位置する。平面形は正方形、縦3.74ｍ、横3.36ｍを測り、面積は約12.6㎡である。住居の方位はＮ－117°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は16㎝、床面高は41.66ｍである。



Fig・25　第14号竪穴住居（基準高さ　42.0ｍ）

15号住居　ＳＢ015（遺構 PL. 8、遺物 PL. 24、Fig. 97、土層 103P）

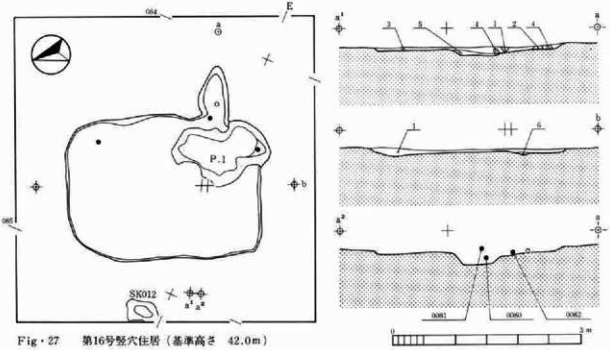
発掘区Ⅰ区のＨ084に位置する。平面形は正方形、縦3.05ｍ、横2.90ｍを測り、面積は約8.8㎡である。住居の方位はＮ－102°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。壁高は５㎝、床面高は41.77ｍである。



Fig・26　第15号竪穴住居（基準高さ　42.0ｍ）

16号住居　ＳＢ016（遺構 PL. 8，遺物 PL. 24，Fig. 98，土層 103P）

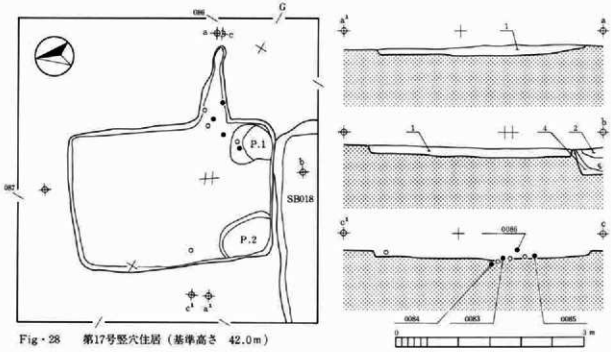
発掘区Ⅰ区のＥ084に位置する。平面形は横長形、縦2.28m、横3.10mを測り、面積は約7.1㎡である。住居の方位はＮ－118°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。壁高は11cm、床面高は41.65mである。



Fig・27　第16号竪穴住居（基準高さ　42.0m）

17号住居　ＳＢ017（遺構 PL. 8，遺物 Fig. 98，土層 103P）

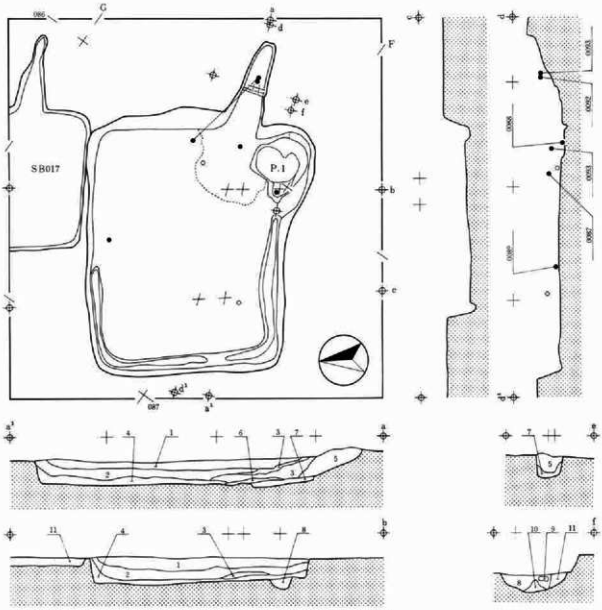
発掘区Ⅰ区のＧ087に位置する。平面形は横長形、縦2.25m、横3.24mを測り、面積は約7.3㎡である。住居の方位はＮ－111°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。壁高は19cm、床面高は41.61mである。



Fig・28　第17号竪穴住居（基準高さ　42.0m）

18号住居　ＳＢ018（遺構 PL. 8、遺物 PL. 24、Fig. 98）

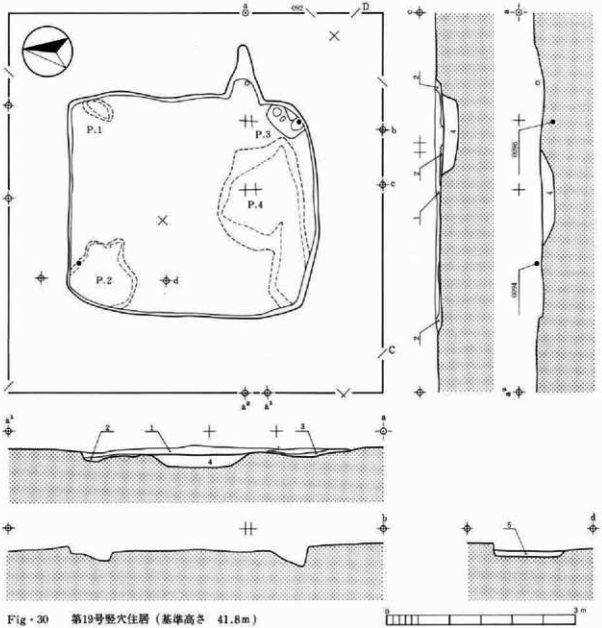
発掘区Ⅰ区のＦ086に位置する。平面形は縦長形、縦4.18m、横3.15mを測り、面積は約13.2m²である。北東隅には17号住居が本住居に接して位置する。住居の方位はＮ－107°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は60cm、周溝は明瞭でなく、床面高は41.28mである。覆土は11層に分けられた。１～４層は住居内覆土、５、６層は窯崩落土、７層は窯構築材、８～11層は住居に関連するピット埋土である。土質は１層暗褐色土層、２層暗褐色土層、３層明赤褐色土層、４層暗褐色土層、５層暗褐色土層、６層暗褐色土層、７層灰褐色土層、８層暗褐色土層、９層黄褐色土層、10層黄褐色土層、11層黄褐色土層を呈する。竈焚口範囲は広範囲に及び、床面の暗褐色土中に焼土ブロック、灰が混入する。焚口右側に貯蔵穴が検出された。なだらかな落ち込みで深さは18cmと浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯２、土師器甕３、須恵器杯１、須恵器短頸壺１の合計７点である。



Fig・29　第18号竪穴住居（基準高さ　42.1m）

19号住居　ＳＢ019（遺構　PL. 9、遺物　PL. 24、25、Fig. 98）

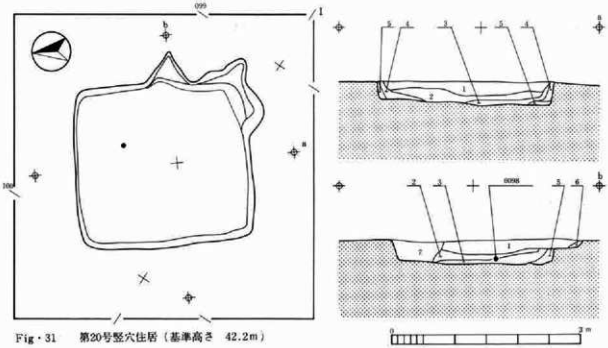
発掘区Ⅰ区のＤ093に位置する。平面形は横長形、縦3.48m、横3.98mを測り、面積は約13.9㎡である。住居の方位はＮ－98°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は８㎝、周溝はなく、床面高は41.48mである。覆土は5層に分けられた。１層は住居内覆土、３層は窯体埋没土、４、５層は住居床面下のピット埋土、２層は床面整地土である。土質は１層黄褐色土層で多量のロームブロックを混入する層、２層暗褐色土層で炭化物、焼土等は混入していない。３層暗褐色土層で焼土、炭化粒を混入する。４層黒褐色土に炭化物を少量含む。５層明褐色土層で焼土を少量含む。焚口部分の灰、及び焼土の拡がりは明瞭でなく、またその堆積も薄い。床面下にピットが検出されている。１号ピットは深さ10㎝、２号ピットは深さ約12㎝、４号ピットは25㎝である。３号ピットは貯蔵穴で20㎝を測る。本住居に伴う遺物は、土師器杯１、須恵器杯１、灰釉１の合計３点である。



Fig・30　第19号竪穴住居（基準高さ　41.8m）

20号住居　ＳＢ020（遺構 PL. 9、遺物 Fig. 98、土層 103P）

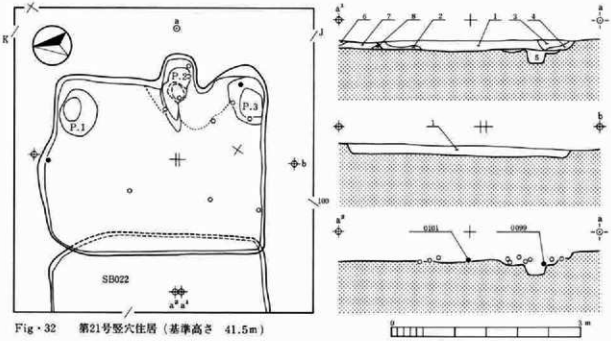
発掘区Ｉ区のＩ100に位置する。平面形は正方形、縦2.59ｍ、横2.80ｍを測り、面積は約7.3㎡である。住居の方位はＮ－109°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は38㎝、床面高は40.96ｍである。



Fig・31　第20号竪穴住居（基準高さ　42.2ｍ）

21号住居　ＳＢ021（遺構 PL. 9、遺物 PL. 25、Fig. 98、土層 103P）

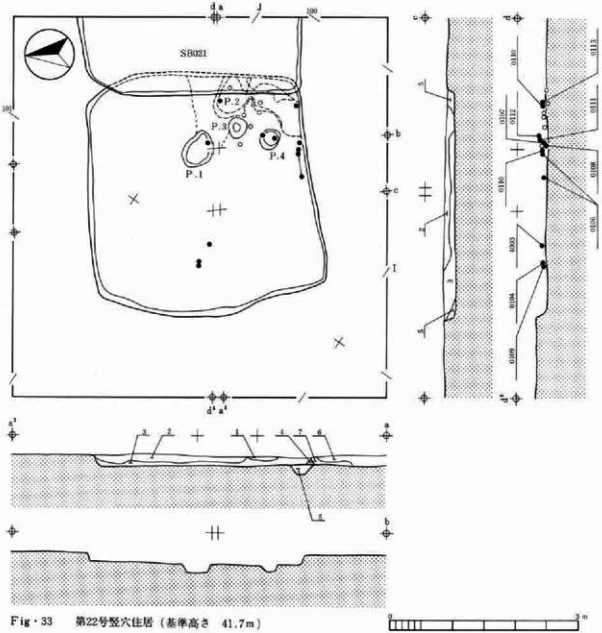
発掘区Ｉ区のＪ100に位置する。平面形は横長形、縦2.25ｍ、横3.62ｍを測り、面積は約8.1㎡である。住居の方位はＮ－108°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。壁高は23㎝、床面高は41.21ｍである。



Fig・32　第21号竪穴住居（基準高さ　41.5ｍ）

22号住居　ＳＢ022（遺構　PL. 9、遺物　PL. 25、Fig. 99）

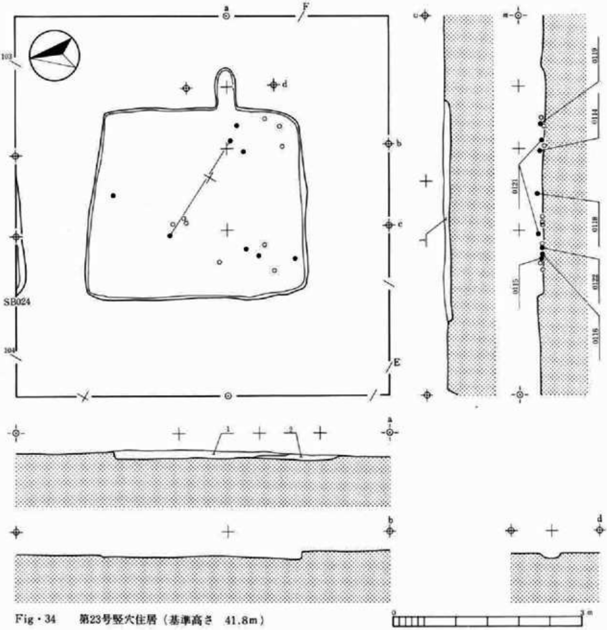
発掘区Ⅰ区のＪ101に位置する。平面形は正方形、縦3.85ｍ、横3.65ｍを測り、面積は約14.1㎡である。住居の方位はＮ－108°－Ｅを取り、竈は21号住居に切られている。確認された壁高は18cm、周溝はなく、床面高は41.22ｍである。覆土は７層に分けられた。１～４層は住居内覆土、５層は住居床面下のピット、６、７層は21号住居覆土である。土質は１層灰白色土層で炭化物を少量含む。２層灰白色土層で鉄分凝集混入、３層暗灰色土層で砂質分を多量に含む。４層明赤褐色の焼土ブロック、５層黄褐色ロームブロック、６層灰褐色土層で黄色ロームブロック混土、７層灰白色土層で灰と炭化物を含む。土層断面の観察から、遺構の重複関係は、22号住居→21号住居となる。竈焚口付近と考えられる東壁南寄りは少量の焼土、灰が散布し、床上面から穿たれたピットは４ケ所で、１号ピットは深さ11cm、２号ピットは11cm、３号ピットは14cm、４号ピットは11cmである。本住居に伴う遺物は、土師器杯３、土師器甕３、須恵器杯４、紡錘車１の合計11点である。



Fig・33　第22号竪穴住居（基準高さ　41.7ｍ）

23号住居　S B 023（遺構　PL. 9、遺物　PL. 25、Fig. 99、土層　103P）

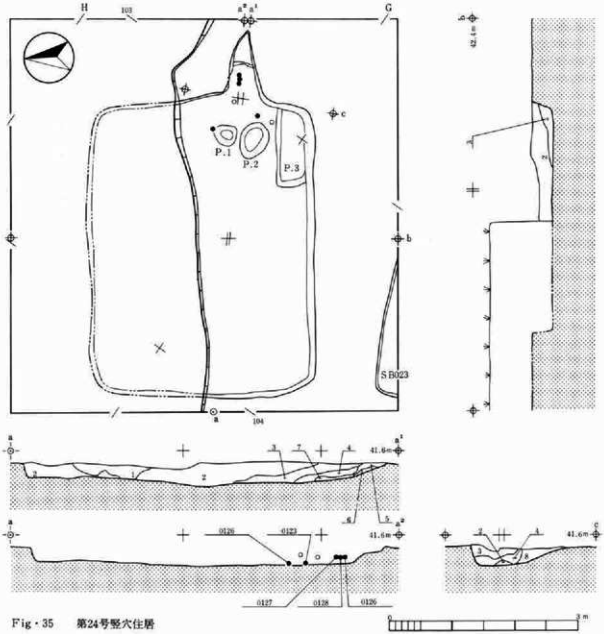
発掘区Ｉ区のＦ103に位置する。平面形は横長形、縦3.00ｍ、横3.47ｍを測り、面積は約10.4㎡である。住居の方位はＮ－112°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は14cm、周溝はなく、床面高は41.40ｍである。覆土は２層に分けられた。いずれも住居内覆土である。土質は１層暗褐色土層で粘質を持ち固い。鉄分凝集と炭化物粒が若干混入する。乾燥するとボロボロの覆土。２層暗褐色土層で竈の崩れ、焼土、炭化物混入する。若干の粘土粒が見えるが、竈に使用したのかは不明。竈構造についてはほとんど不明と言わざるを得ない。壁より突出した竈の燃焼部より先端の窯底はなだらかで、いわゆる掻き出し穴状のものも見られなかった。また、焚口部分の床面には焼土、赤色粘土ブロック、灰も少量のみの検出であった。焚口幅は30cm、奥行は65cmで、燃焼部と煙道との区別はできない。遺物の分布は竈左袖寄りを床東壁寄りの２ケ所である。本住居に伴う遺物は、土師器杯２、土師器甕２、須恵器杯４、須恵器蓋１の合計９点である。



Fig・34　　第23号竪穴住居（基準高さ　41.8ｍ）

24号住居　ＳＢ024（遺構 PL. 10、遺物 Fig. 99）

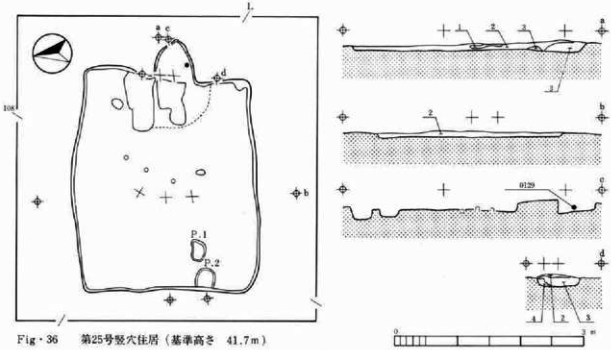
発掘区Ⅰ区のＧ103に位置する。平面形は縦長形、縦4.71ｍ、横3.62ｍを測り、面積は約17.1㎡である。北半分は発掘区域外のため、平面形は想像の域を出ないが、本遺跡における他の住居形態から縦位置とした。住居の方位はＮ－107°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は34㎝、周溝はなく、床面高は41.86ｍである。覆土は８層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４、５層は窯崩落土、６、７層は窯体埋没土、８層は窯構築材である。土質は１層暗褐色土層、２層暗褐色土層、３層暗褐色土層、４層暗褐色土層、５層赤褐色土層、６層黄褐色土層、７層黒色土層、８層灰褐色土層を呈する。竈の底面はなだらかに煙道方向に立ち上がり、焚口部分の焼土、灰層の分布は弱く、広がりは不明瞭である。竈前の１号、２号ピットの深さは29㎝と13㎝で、両方ともやや焼土を含む軟質黒褐色土が埋土である。３号ピットは貯蔵穴と考えられ深さは15㎝と浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯２、土師器甕３、須恵器杯１の合計６点である。



Ｆｉｇ・35　第24号竪穴住居

25号住居　ＳＢ025（遺構 PL. 10、遺物 PL. 25、Fig. 99、土層 103P）

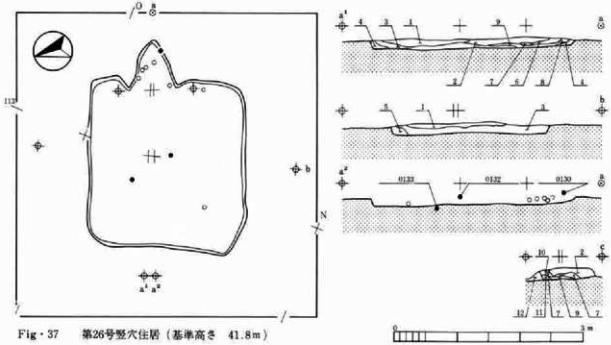
発掘区Ⅱ区のＬ108に位置する。平面形は縦長形、縦3.53ｍ、横2.97ｍを測り、面積は約10.5㎡である。住居の方位はＮ－111°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は20㎝、床面高は41.30ｍである。



Fig・36　第25号竪穴住居（基準高さ　41.7ｍ）

26号住居　ＳＢ026（遺構 PL. 10、遺物 Fig. 100、土層 103P）

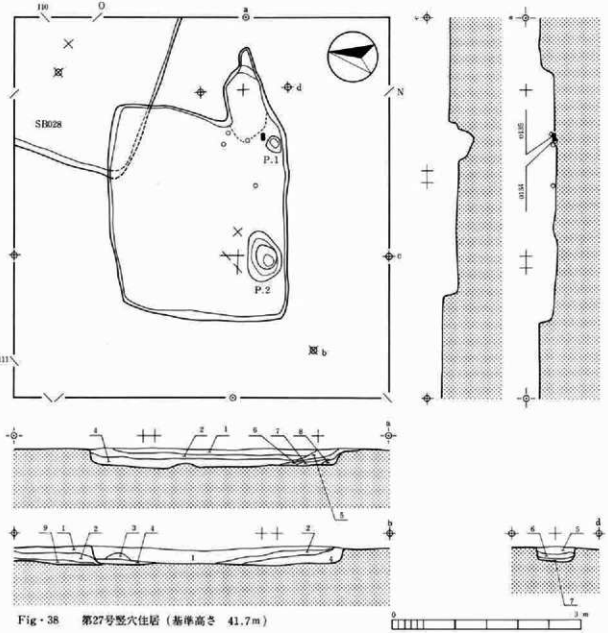
発掘区Ⅱ区のＯ113に位置する。平面形は正方形、縦2.70ｍ、横2.50ｍを測り、面積は約6.8㎡である。住居の方位はＮ－120°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は16㎝、床面高は41.43ｍである。



Fig・37　第26号竪穴住居（基準高さ　41.8ｍ）

27号住居　ＳＢ027（遺構　PL. 10, 遺物　Fig. 100）

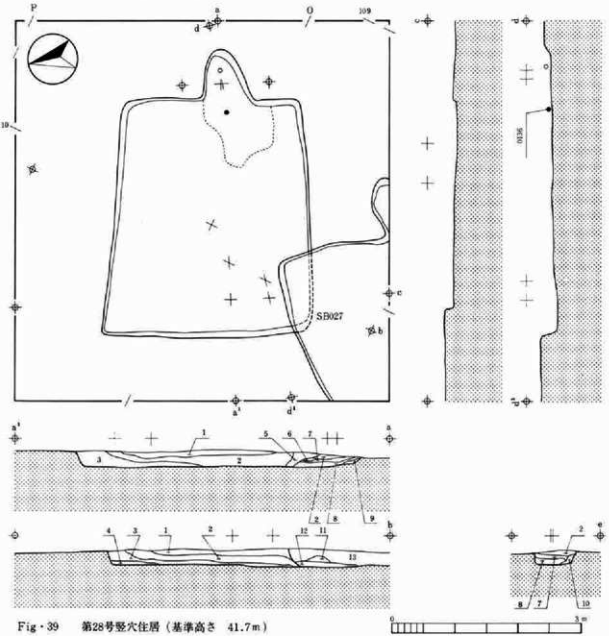
発掘区Ⅱ区のＮ110に位置する。平面形は縦長形、縦3.27ｍ、横2.35ｍを測り、面積は約7.7㎡である。本住居の北東隅は28号住居が重複している。住居の方位はＮ－95°－Ｅを取り、竈は東壁右隅に付設される。確認された壁高は29㎝、周溝はなく、床面高は41.21ｍである。覆土は９層に分けられた。１～４層は住居内覆土、５層は窯崩落土、６、７層は窯体埋没土、８層は窯構築材、９層は28号住居覆土である。土質は１層暗灰色土層、２層暗灰色土層、３層暗灰色土層、４層暗灰色土層、５層暗灰色土層、６層黄褐色土層、７層黄褐色土層、８層黄灰色土層、９層灰白色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は28号住居→27号住居となる。竈の焚口部分の焼土及び灰の分布範囲は狭い。１号ピットは貯蔵穴の位置にあり、若干の焼土混入があるものの深さは６㎝と浅く適していない。２号ピットは住居南西壁寄りに穿たれており深さは29㎝を測る。本住居に伴う遺物は、土師器甕２点である。



Fig・38　第27号竪穴住居（基準高さ　41.7ｍ）

28号住居　S B 028（遺構 PL. 11、遺物 Fig. 100）

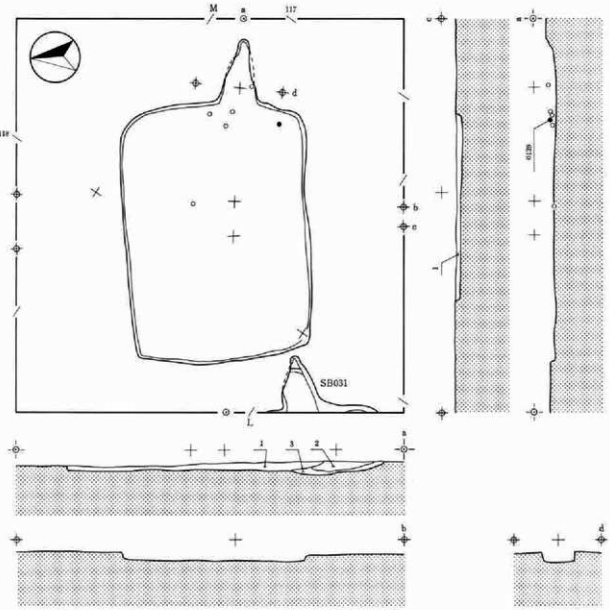
発掘区Ⅱ区のO110に位置する。平面形は縦長形、縦3.78m、横3.13mを測り、面積は約11.8㎡である。本住居の南西隅は27号住居と重複している。住居の方位はN－117°－Eを取り、竈は東壁中央に付設される。確認された壁高は24cm、周溝はなく、床面高は41.22mである。覆土は13層に分けられた。1～4層は住居内覆土、5層は窯崩落土、6～8層は窯体埋没土、9、10層は窯構築材、11～13層は27号住居覆土である。土質は1層暗褐色土層、2層暗褐色土層、3層灰白色土層、4層黒褐色土層、5層暗褐色土層、6層赤褐色土層、7層暗褐色土層、8層黒灰色土層、9層黄褐色土層、10層暗褐色土層、11層暗褐色土層、12層は暗灰色土層、13層は暗褐色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は28号住居→27号住居となる。竈構造の全容は復元できない。焚口部分の焼土、灰の拡がりは竈前面から南方向に向かい、その面はやや黒色強く硬い。本住居に伴う遺物は、須恵器杯1点である。



Fig・39　第28号竪穴住居（基準高さ　41.7m）

29号住居　ＳＢ029（遺構 PL. 11、遺物 Fig. 100）

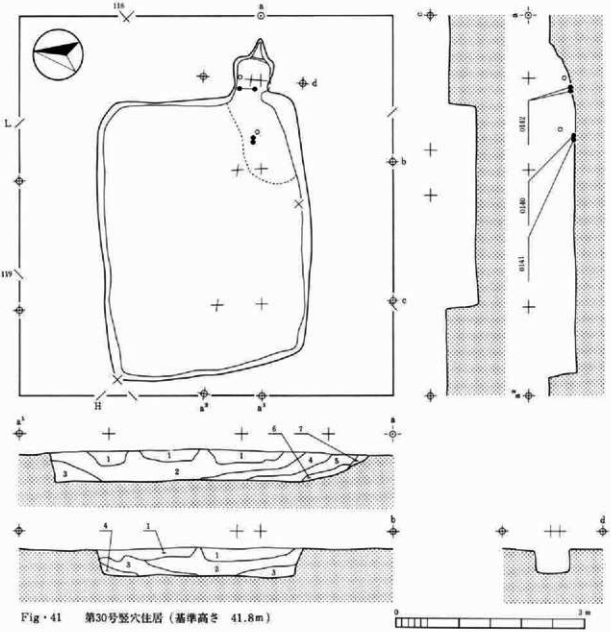
発掘区Ⅱ区のＬ118に位置する。平面形は縦長形、縦4.10m、横2.97mを測り、面積は約12.8㎡である。本住居の西南壁寄りに重複せずに31号住居の竈が接近して位置する。住居の方位はＮ－108°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は14cm、周溝はなく、床面高は41.37mである。覆土は３層に分けられた。１層は住居内覆土、２層は窯体埋設土、３層は窯構築材である。土質は１層暗灰色土層は砂質分を含む。炭化粒、鉄分凝集層で、本住居跡全体を一挙に埋めており粘質で固い。２層赤褐色土層で、炭化物、焼土を含む層で若干軟質である。３層炭化物層で黒灰色を呈し、赤色焼土も含む。竈の燃焼部から煙道にかけては緩やかに立ち上がる。また、焚口前面にまで窯底は窪んでおり使用段階での掻き出しの結果であろう。焚口部分の広がりは不明確である。また竈部分は、人為的な破壊によってえぐり取られ、その後に住居に一括の覆土が埋埋したとも推考されよう。本住居に伴う遺物は土師器甕２、須恵器杯１の合計３点である。



Fig・40　第29号竪穴住居（基準高さ　41.7m）

30号住居　S B030（遺構 PL. 11、遺物 PL. 25、Fig. 100）

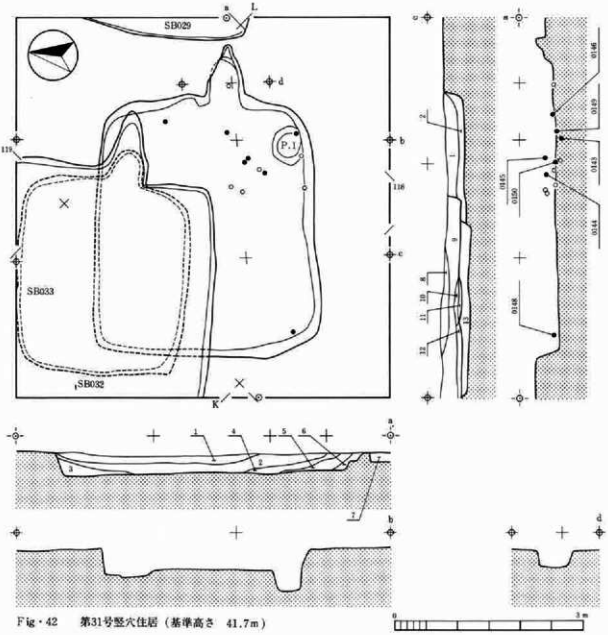
発掘区Ⅱ区のL118に位置する。平面形は縦長形、縦4.37m、横3.40mを測り、面積は約14.9㎡である。住居の方位はN－96°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は50cm、周溝はなく、床面高は41.04mである。覆土は7層に分けられた。1～4層は住居内覆土、5、6層は窯体埋設土、7層は窯構築材である。土質は1層暗灰色砂質シルト層で鉄分凝集が見られる。2層暗灰色砂質シルト層で鉄分凝集が若干混入する。3層暗褐色砂質シルトの比較的単純層、4層暗褐色砂質シルト層、5層暗褐色砂質シルト層で比較的粘性を増す。6層暗褐色砂質シルト層で焼土及び灰を混入、7層暗灰色の粘土ブロックである。竈の焚口は幅広で燃焼部は短かく収束する。小さく残った煙道は段を持って立ち上がり緩やかに終わる。右袖部分に凝灰岩の立石の基部が残り、その構造の一端をうかがい知ることができる。焚口前には焼土ブロック、灰層が薄く堆積し東南壁際まで及ぶ。本住居に伴う遺物は土師器杯1、土師器甕2の合計3点である。



Fig・41　第30号竪穴住居（基準高さ　41.8m）

31号住居　ＳＢ031（遺構　PL. 11、遺物　PL. 26、Fig. 100）

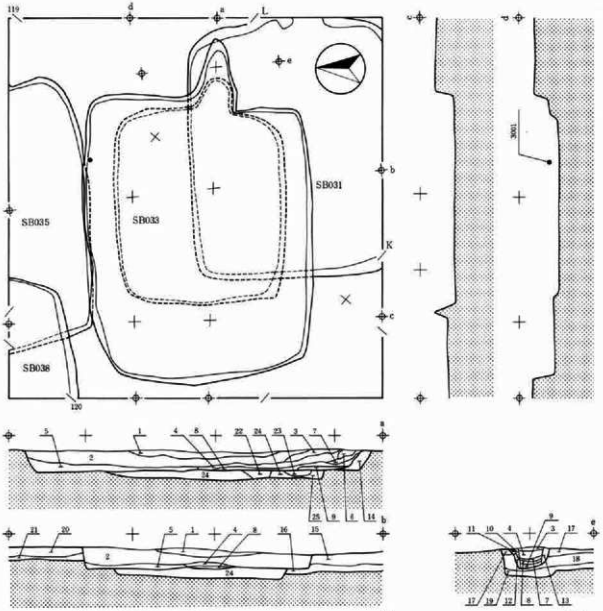
発掘区Ⅱ区のＬ119に位置する。平面形は縦長形、縦4.13ｍ、横3.50ｍを測り、面積は約14.5㎡である。住居の方位はＮ－97°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は37㎝、周溝はなく、床面高は41.09ｍである。覆土は13層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４層は窯崩落土、５層は窯体埋没土、６層は窯構築材、７層は29号住居覆土、８～12層は32号住居覆土、13層は33号住居覆土である。土質は１層暗灰色土層、２層暗灰色土層、３層暗灰色土層、４層黄褐色土層、５層赤橙色土層、６層灰褐色土層、７層暗灰色土層、８層暗灰色土層、９層暗灰色土層、10層赤褐色土層、11層黒褐色土層、12層暗灰色土層、13層暗灰色土層を呈する。土層断面の観察から遺構の重複関係は33号住居→31号住居→32号住居となる。竈の焚口部分と考えられる焼土の範囲は不明瞭である。南東壁際に貯蔵穴が穿たれており、その深さは約33㎝を測る。本住居に伴う遺物は土師器杯４、土師器甕２、須恵器杯２、土錘１の合計９点である。



Fig・42　第31号竪穴住居（基準高さ　41.7ｍ）

32号住居　S B 032（遺構　PL. 12、遺物　PL. 26、Fig. 100）

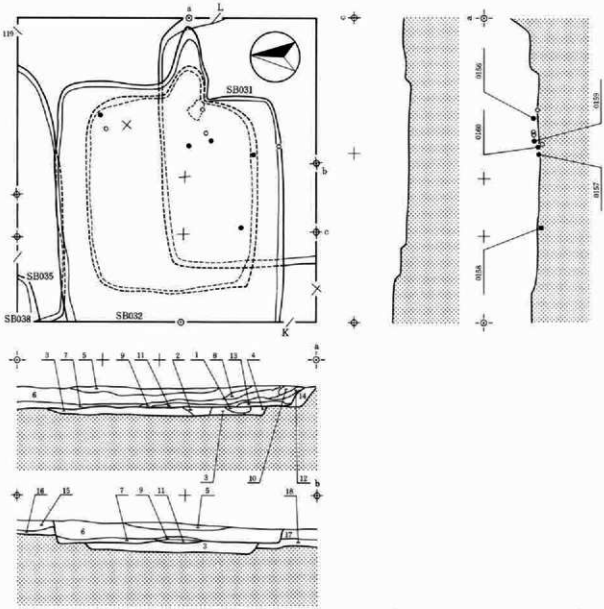
発掘区Ⅱ区のL119に位置する。重複が多いが、平面形は縦長形、縦4.50m、横3.62mを測り、面積は約16.3㎡である。住居の方位はN－102°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は50cm、周溝はなく、床面高は41.00mである。覆土は25層に分けられた。1、2、5層は住居内覆土、3、4、6～9層は窯体埋没土、10～14層は窯構築材、15～19層は31号住居覆土、20、21層は35号住居覆土、22～24層は33号住居覆土、25層は33号住居窯構築材である。土質は1層暗灰色土層、2層暗褐色土層、3層暗灰色土層、4層赤褐色土層、5層暗褐色土層、6層赤褐色土層、7層黒色土層、8層黒褐色土層、9層暗灰褐色土層、10層黒色土層、11層灰白色土層、12層赤橙色土層、13層暗褐色土層、14層灰褐色土層、15～21層暗灰色土層、22層暗褐色土層、23層赤褐色土層、24層暗灰色土層、25層黒褐色土層を呈する。本住居に伴う遺物は、土師器杯3、須恵器杯2、砥石1、土錘2の合計8点である。



Fig・43　第32号竪穴住居（基準高さ　41.7m）

33号住居　ＳＢ033（遺構　PL. 12、遺物　PL. 26、Fig. 101）

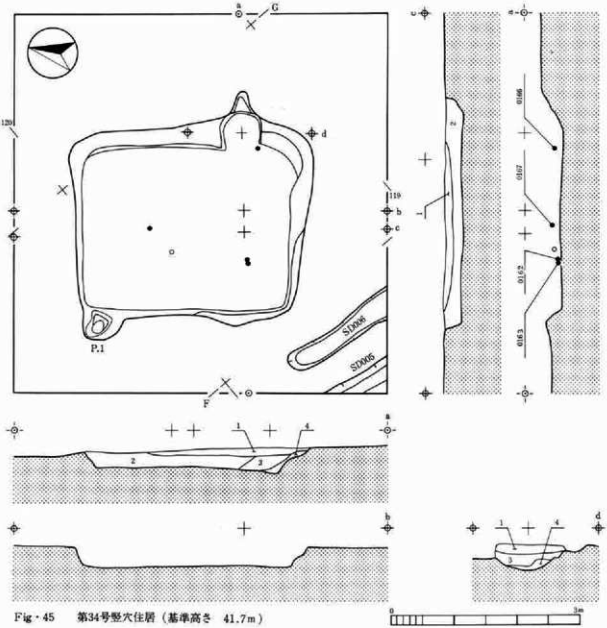
発掘区Ⅱ区のＬ119に位置する。重複により、ほとんど積極的で正確な寸法は示せないが、平面形は縦長形、縦3.08ｍ、横2.64ｍを測り、面積は約8.1㎡である。住居の方位はＮ－92°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は49㎝、周溝はなく、床面高は41.01ｍである。覆土は18層に分けられた。１～４層は住居内覆土、10～12層は窯崩落土、13層は窯体埋没土、５～９層は32号住居覆土、14、17、18層は31号住居覆土、15、16層は35号住居覆土である。土質は１層赤褐色土層、２層暗褐色土層、３層暗灰色土層、４層黒褐色土層、５層暗灰色土層、６層暗褐色土層、７層暗褐色土層、８層暗灰色土層、９層赤橙色土層、10層赤褐色土層、11層黒灰色土層、12層黒色土層、13層黄褐色土層、14層暗灰色土層、15層暗灰色土層、16層暗灰色土層、17層暗灰色土層、18層暗灰色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は33号住居→35号住居→38号住居、33号住居→31号住居→32号住居となる。本住居に伴う遺物は、土師器杯１、土師器甕２、須恵器杯２の合計５点である。



Fig・44　第33号竪穴住居（基準高さ　41.9ｍ）

34号住居　S B 034（遺構 PL. 12、遺物 PL. 26、Fig. 101）

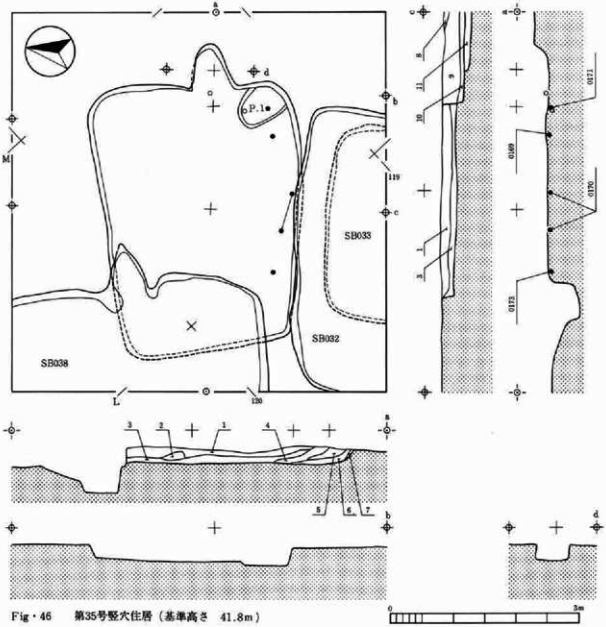
発掘区Ⅱ区のG120に位置する。平面形は正方形、縦2.96m、横3.16mを測り、面積は約9.4m²である。南西隅に5号溝、6号溝が近接している。住居の方位はN－92°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は34cm、周溝はなく、床面高は41.09mである。覆土は4層に分けられた。1、2層は住居内覆土、3層は窖崩落土、4層は窖構築材である。土質は1層暗褐色シルト層で鉄分凝集が見られる。2層暗褐色シルト層で鉄分が若干多い。3層暗赤褐色土層で焼土及び炭化物の混入が増してゆく。4層暗灰色土層で焼土と炭化物と灰と竈壁ブロックと土器片が多量に混入する層である。竈の構造は焚口幅の広い、燃焼部の短いものである。煙道部も段を持って緩やかに立ち上がる。焚口前の面は焼土、灰層の拡がりも弱く不明瞭であった。北西隅には突出したピットが穿たれており黒褐色の埋土の類似から本住居に伴うものと推断され、深さは12cmである。本住居に伴う遺物は、土師器杯4、土師器甕3、須恵器杯1の合計8点である。



Fig・45　第34号竪穴住居（基準高さ　41.7m）

35号住居　ＳＢ035（遺構　Pl.. 12、遺物　Fig. 101）

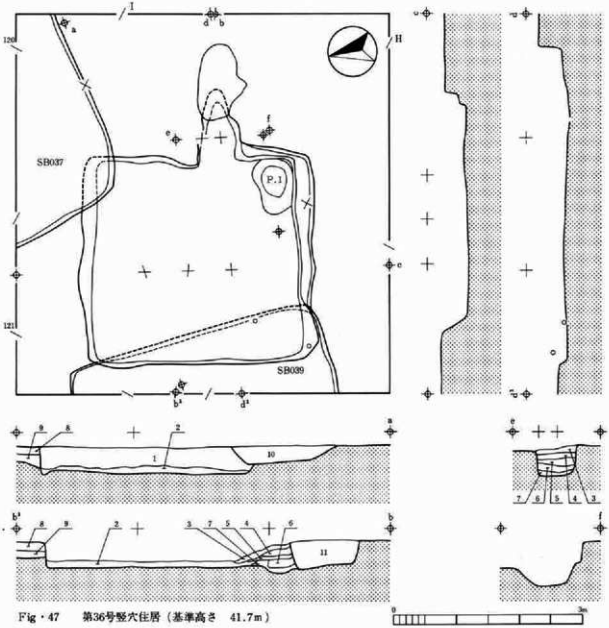
発掘区Ⅱ区のＬ120に位置する。本住居の北西隅に38号住居が重複し南壁に32号住居が接している。平面形は縦長形、縦4.28ｍ、横3.14ｍを測り、面積は約13.4㎡である。住居の方位はＮ－95°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は24㎝、周溝はなく、床面高は41.30ｍである。覆土は11層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４層は竈崩落土、５、６層は竈体埋没土、７層は竈構築材、８～10層は32号住居覆土、11層は33号住居覆土である。土質は１層暗灰色土層、２層黄褐色土層、３層暗灰色土層、４層暗灰色土層、５層暗灰色土層、６層暗灰色土層、７層黄褐色土層、８層暗灰色土層、９層暗灰色土層、10層暗灰色土層、11層灰褐色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は、35号住居→38号住居→33号住居→32号住居となる。４層が床面を覆う範囲までが焚口前の床部分と考えられるが、焼土、灰の堆積は薄い。１号ピットは貯蔵穴だが7.5㎝と浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯2、須恵器杯３の合計５点である。



Fig・46　第35号竪穴住居（基準高さ　41.8ｍ）

36号住居　S B 036 (遺構 PL. 12, 遺物 Fig. 101)

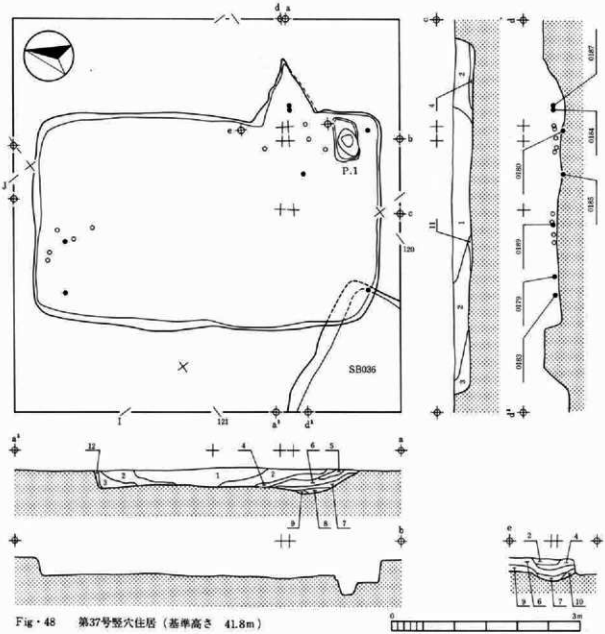
発掘区Ⅱ区のH120に位置する。平面形は横長形、縦3.28m、横3.71mを測り、面積は約12.2m²である。北東隅に37号住居が、西壁も39号住居が重複している。竈の煙道部に攪乱土壙がある。住居の方位はN－95°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は45cm、周溝はなく、床面高は41.07mである。覆土は11層に分けられた。1、2層は住居内覆土、3層は窯崩落土、4、5層は窯体埋没土、6、7層は窯構築材、11層は攪乱、8、9層は39号住居覆土、10層は37号住居覆土である。土質は1層暗灰色土層、2層暗灰色土層、3層灰色土層、4層灰褐色土層、5層黄灰色土層、6層暗灰色土層、7層灰褐色土層、8層暗灰色土層、9層暗灰色土層、10層暗灰色土層、11層黄褐色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は39号住居→36号住居→37号住居となる。竈の焚口前の焼土、灰の堆積は薄く範囲は不明瞭であった。南東壁寄りに貯蔵穴が穿たれ深さは23cmを測る。本住居に伴う遺物は土師器杯1点である。



Fig・47　第36号竪穴住居（基準高さ　41.7m）

37号住居　ＳＢ037（遺構　PL. 13、遺物　PL. 26、Fig. 101、102）

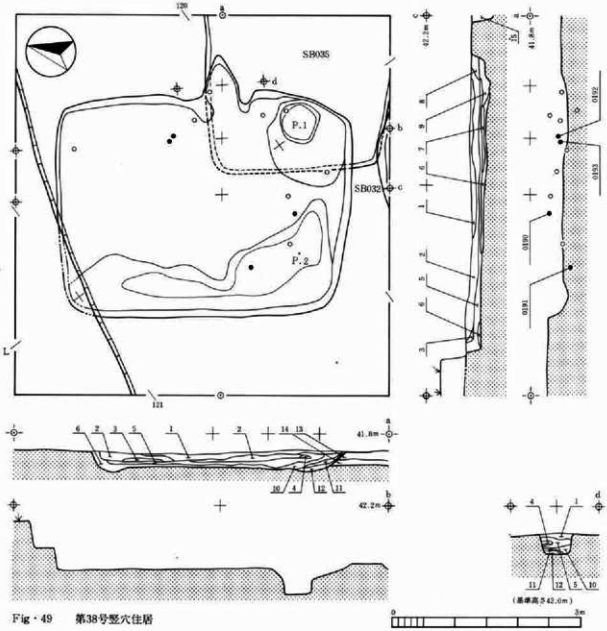
発掘区Ⅱ区のＩ120に位置する。平面形は横長形、縦3.41ｍ、横5.55ｍを測り、面積は約18.9㎡である。南西隅は36号住居が重複している。住居の方位はＮ－89°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は28㎝、周溝はなく、床面高は41.25ｍである。覆土は12層に分けられた。１～３層、11、12層は住居内覆土、４層は窯崩落土、５～７層は窯体埋没土、８～10層は窯構築材である。土質は１層暗灰色土層、２層暗灰色土層、３層暗灰色土層、４層暗灰色土層、５層赤褐色土層、６層暗灰色土層、７層灰色土層、８層暗灰褐色土層、９層灰褐色土層、10層灰褐色土層、11層黒灰色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は36号住居→37号住居となる。竈の焚口部分の前面の焼土及び灰層の拡がりは明瞭でない。住居南東隅には貯蔵穴があり、上端部の平面形は長方形で短辺35㎝×長辺60㎝、深さは39㎝を測る。本住居に伴う遺物は、土師器杯２、土師器甕８、須恵器杯２、須恵器瓶１、須恵器蓋２、土錘１の合計16点である。



Fig・48　第37号竪穴住居（基準高さ　41.8ｍ）

38号住居　ＳＢ038（遺構　PL. 13, 遺物　PL. 27, Fig. 102）

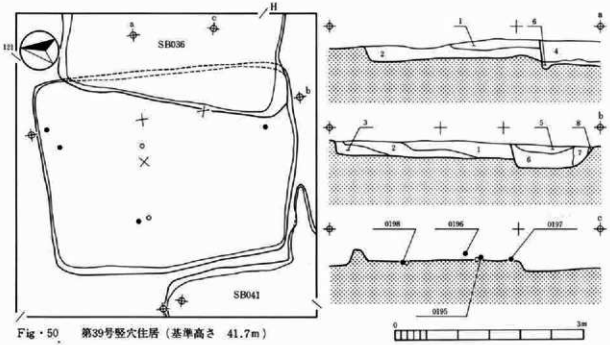
発掘区Ⅱ区のＬ120に位置する。平面形は横長形、縦3.52ｍ、横4.72ｍを測り、面積は約16.6㎡である。北西隅は未発掘部分が残り南東隅は35号住居が重複している。住居の方位はＮ－89°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は78cm、周溝はなく、床面高は41.19ｍである。覆土は15層に分けられた。1～3、5～9層は住居内覆土、4層は窯屑落土、10～12層は窯体埋没土、13、14層は35号住居覆土、15層は32号住居覆土である。土質は1層暗灰色土層、2層灰白色土層、3層黒褐色土層、4層灰白色土層、5層灰白色土層、6層青灰色土層、7層灰白色土層、8層暗灰色土層、9層暗褐色土層、10層黒褐色土層、11層赤褐色土層、12層黒灰色土層、13層暗灰色土層、14層暗灰色土層、15層暗褐色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は35号住居→38号住居→32号住居となる。1号ピットは貯蔵穴で深さ41cm、2号ピットは軟質で14cmと浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯2、土師器甕2、須恵器杯1の合計5点である。



Fig・49　第38号竪穴住居

39号住居　ＳＢ039（遺構　PL. 13、遺物　PL. 27、Fig. 102、土層　103P）

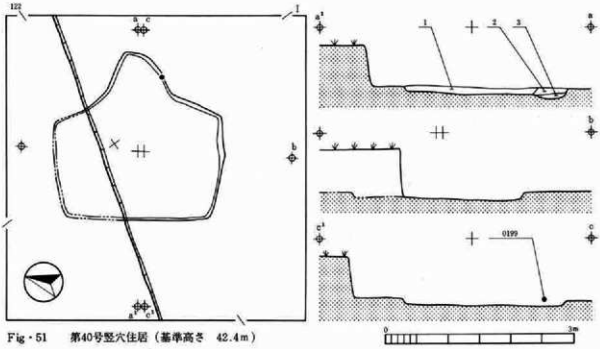
発掘区Ⅱ区のＨ121に位置する。平面形は横長形、縦3.20ｍ、横4.07ｍを測り、面積は約13.0㎡である。住居の方位はＮ－98°－Ｅを取り、竈はなかった。壁高は26cm、床面高は41.22ｍである。



Fig・50　第39号竪穴住居（基準高さ　41.7ｍ）

40号住居　ＳＢ040（遺構　PL. 13、遺物　Fig. 102、土層　103P）

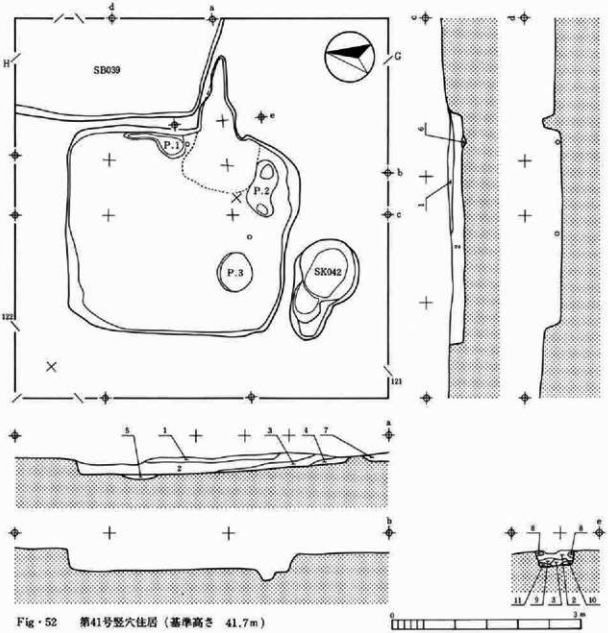
発掘区Ⅱ区のＩ122に位置する。平面形は横長形、縦1.92ｍ、横2.72ｍを測り、面積は約5.2㎡である。住居の方位はＮ－88°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は80cm、床面高は41.35ｍである。



Fig・51　第40号竪穴住居（基準高さ　42.4ｍ）

41号住居　SB041（遺構 PL. 13、遺物 Fig. 102）

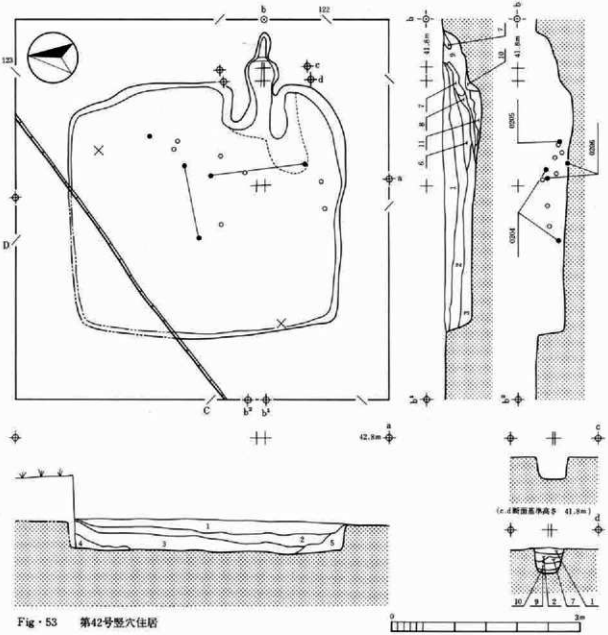
発掘区Ⅱ区のG121に位置する。平面形は正方形、縦3.50m、横3.57mを測り、面積は約12.5㎡である。本住居の北東部分に39号住居が、南壁には42号土壙が近接して位置する。住居の方位はN－94°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は33cm、周溝はなく、床面高は41.12mである。覆土は11層に分けられた。1、2層は住居内覆土、3層は窯崩落土、4、8～11層は窯体埋没土、5層は住居に関連するピット埋土、6層は住居床面下のピット埋土、7層は39号住居覆土である。土質は1層暗灰色土層、2層暗灰色土層、3層暗灰色土層、4層暗灰色土層、5層黒褐色土層、6層黄褐色土層、7層暗灰色土層、8層赤褐色土層、9層暗灰褐色土層、10層黒灰色土層、11層赤橙色土層を呈する。竈焚口前庭に焼土、灰層が広範囲に確められ、踏み固められたように固い。3ケ所にピットが検出され、深さは1号ピット3cm、2号ピット8cm、3号ピット6cmと浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯2、土師器甕2、土錘1の合計5点である。



Fig・52　第41号竪穴住居（基準高さ　41.7m）

42号住居　ＳＢ042（遺構　Pl.. 14、遺物　Fig. 103）

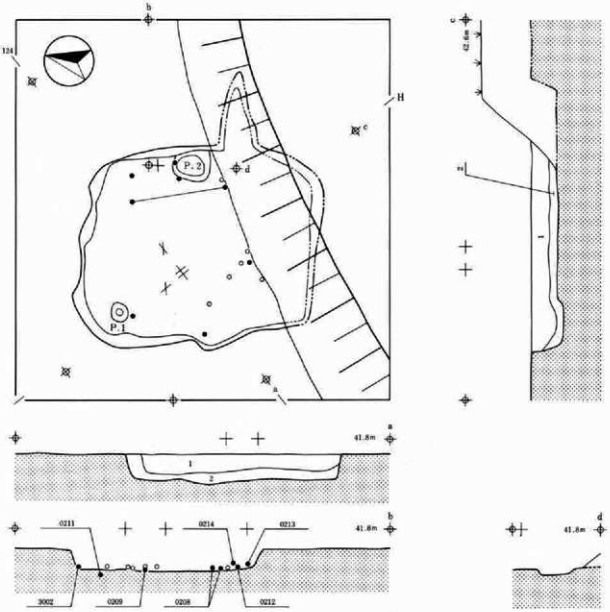
発掘区Ⅱ区のＣ123に位置する。平面形は正方形、縦4.03ｍ、横4.32ｍを測り、面積は約17.4㎡である。北西隅は未発掘区である。住居の方位はＮ－100°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は59㎝、周溝はなく、床面高は41.01ｍである。覆土は11層に分けられた。１～５層は住居内覆土、６層は窯崩落土、７～11層は窯体埋没土である。土質は１層暗灰色土層、２層暗褐色土層、３層黒褐色土層、４層乳灰色土層、５層暗褐色土層、６層暗褐色土層、７層赤橙色土層、８層黒灰色土層、９層青灰色土層、10層黒褐色土層、11層暗灰色土層を呈する。竈の焚口部の両袖残欠部分は住居内に張り出し、右袖部の方がやや長い。燃焼部分はふくらんで丸い。煙道は段を形成して曲線を描き立ち上がる。燃焼部から煙道にかけて窯底は船底状に窪む。焚口前庭には焼土や灰の散布は少なく、むしろ右袖側に拡がっている。本住居に伴う遺物は、土師器杯２、土師器甕１の合計３点である。



Fig・53　第42号竪穴住居

43号住居　ＳＢ043 (遺構 PL. 14、遺物 PL. 27、Fig. 103)

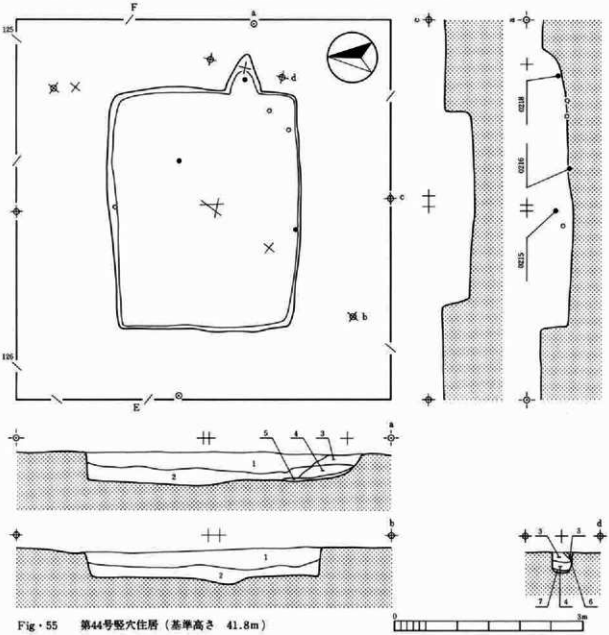
発掘区Ⅲ区のＨ124に位置する。本住居の南半分は生活道路のため発掘は不可能となった。また、調査可能な残存部分の各壁も直線を描いていない。ここでの住居形態や計測値は周辺の住居群との比較で算出したものである。平面形は横長形、縦3.05ｍ、横3.80ｍを測り、面積は約11.6㎡である。住居の方位はＮ－91°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は43cm、周溝はなく、床面高は41.13ｍである。覆土は２層に分けられた。いずれも住居内覆土である。土質は１層灰色砂質土層中に鉄分凝集層がまだら状に混土、２層暗灰色砂層中に径２cm大のロームブロックを混入する。床面は暗褐色を呈し、しっかりとしている。ピットは２ケ所から検出されている。１号ピットは埋土は暗灰色軟質土で、径30cmの円形で深さ17cmである。２号ピットは埋土に焼土、灰を若干含む暗灰色土層で、40×60cmの楕円形で深さ９cmと浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯４、土師器甕１、須恵器杯３、砥石１の合計９点である。



Fig・54　第43号竪穴住居

44号住居　ＳＢ044（遺構　PL. 14、遺物　PL. 27、Fig. 103）

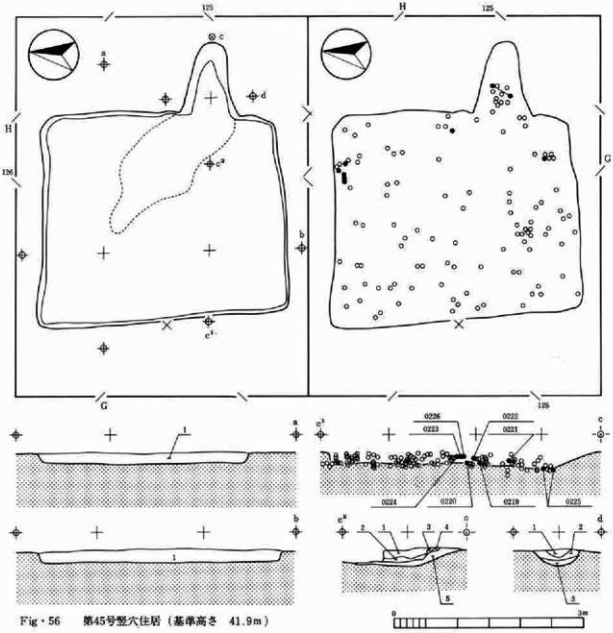
発掘区Ⅲ区のＥ125に位置する。生活反応の薄い住居であった。平面形は縦長形、縦3.82ｍ、横3.08ｍを測り、面積は約11.8㎡である。住居の方位はＮ－103°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は55cm、周溝はなく、床面高は41.05ｍである。覆土は７層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３、４層は窯崩落土、５～７層は窯体埋没土である。土質は１層暗灰色砂層中に鉄分のまだら状凝集とロームブロック混土、２層暗灰色砂層中に径３～５㎝大のロームブロック混土、３層灰色粘土質層に鉄分を含むまだら層と炭化物を混土、４層暗灰色砂層に炭化物と灰層を混入、５層黒灰色の炭化物層、６層赤橙色を呈する焼土ブロック、７層灰褐色を呈する灰層である。窯は焚口前幅60cm、奥行き60cmで平面形は三角形を呈し、窯底は緩やかな曲線を描き煙道部に到る。焚口前庭の焼土や灰の拡がる面は明瞭ではないが黒灰色の炭化物層が窯底内から連続的に前庭にかけて拡がる。本住居に伴う遺物は、土師器杯４点である。



Fig・55　第44号竪穴住居（基準高さ　41.8ｍ）

45号住居　S B045（遺構　PL. 14、遺物　Fig. 103）

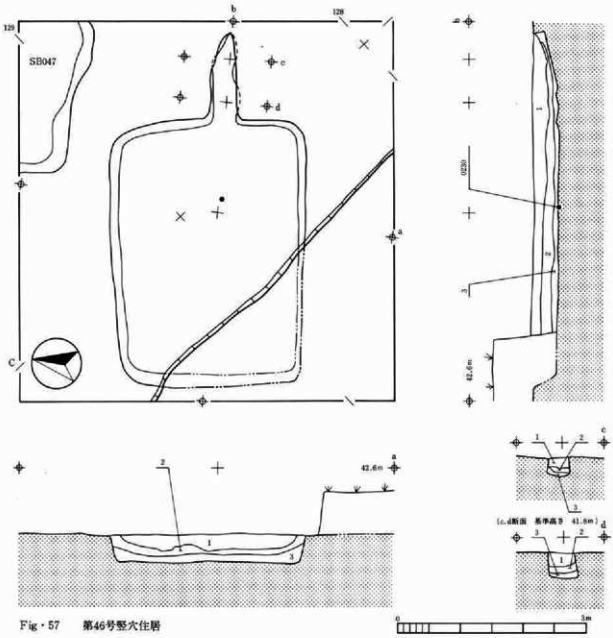
発掘区Ⅲ区のG126に位置する。平面形は横長形、縦3.32m、横3.91mを測り、面積は約13.0㎡である。住居の方位はN－99°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は17cm、周溝はなく、床面高は41.43mである。覆土は5層に分けられた。1層は住居内覆土、2～5層は窯体埋没土である。土質は1層暗灰色土層中に灰色砂層鉄分の凝集あり。2層暗灰色砂層に炭化物を含む。3層焼土層で赤橙色を呈する。4層炭化物層で黒灰色を呈する。5層は黄色ロームブロックと黄褐色土を混土する黒褐色土層である。焚口幅は1m、東壁からの奥行き1.2mを測る大形の竈が残存していた。窯底は幅50cm、奥行き90cmで2層と5層の土層の境界が最終使用面と考えられる。燃焼部分が最も凹む掘り方面は焚口前庭に向かって高くなり床面と同一になる。焚口前庭には焼土、灰を分布する面が存在し住居中央の北寄りに拡散している。本住居に伴う遺物で復元可なものは、土師器杯4、土師器甕2、須恵器甕1、須恵器内黒1の合計8点である。



Fig・56　第45号竪穴住居（基準高さ　41.9m）

46号住居　ＳＢ046（遺構 Pl. 14、遺物 Fig. 103）

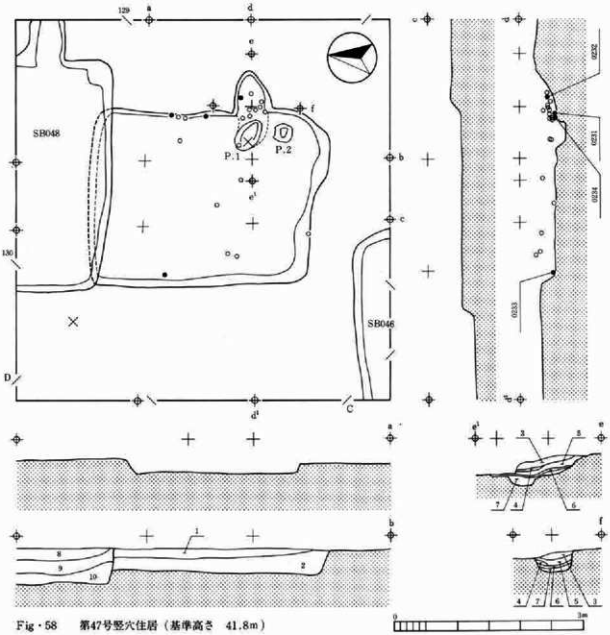
発掘区Ⅲ区のＣ129に位置する。住居の南西隅は発掘調査区域外であった。北東70cmに近接して47号住居が位置する。平面形は縦長形、縦4.23ｍ、横3.11ｍを測り、面積は約13.2㎡である。住居の方位はＮ－95°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は43cm、周溝はなく、床面高は41.13ｍである。覆土は３層に分けられた。いずれも住居内覆土である。土質は１層暗灰色粘土質砂層中に鉄分のまだら状の凝集層を混土、２層暗灰色砂層に径２～３cm大のロームブロック混土、３層灰色砂層に径１～２cmのロームブロックを混土する。竈は焚口幅40cm、長さ1.4ｍを測る。底面はなだらかに曲線を描いて立ち上がる。焚口前庭部の焼土及び灰層の分布は不明瞭で範囲を確定できなかった。本住居に伴う遺物は、土師器杯３、須恵器杯１の合計４点である。安山岩のこぶし大の円礫が４点床面に接して出土している。使用痕跡は認められなかった。



Fig・57　第46号竪穴住居

47号住居　ＳＢ047（遺構 PL. 15、遺物 Fig. 104）

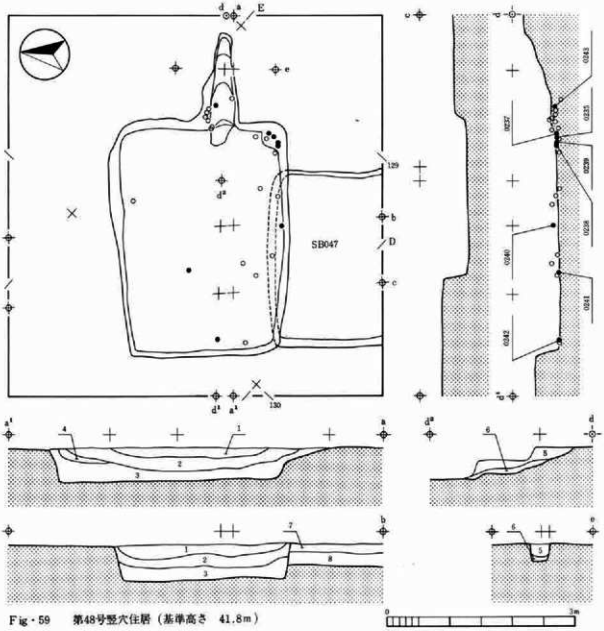
発掘区Ⅲ区のＤ129に位置する。平面形は横長形、縦2.77ｍ、横3.60ｍを測り、面積は約10.0㎡である。住居の方位はＮ－97°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は18cm、周溝はなく、床面高は41.44ｍである。覆土は10層に分けられた。１、２層は住居内覆土、3～6層は窯体埋没土、７層は窯構築材、８～10層は48号住居覆土である。土質は１層灰色土層、２層灰色土層、３層暗灰色土層、４層灰褐色土層、５層黒褐色土層、６層暗灰色土層、７層暗灰色土層、８層暗灰色土層、９層灰色土層、10層灰色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は47号住居→48号住居となる。竈の焚口前幅は50cm、奥行きは60cmを測る。燃焼部の底面は緩やかな曲線を描きながら立ち上がる。竈使用時の底面は、７層上面、６層中にあったものと考えられる。１号ピットは灰の掻き出し部と推考され深さ約20cm、右袖に接する２号ピットは貯蔵穴にしては小さく深さ約12cmを測る。本住居に伴う遺物は、土師器杯４点である。



Fig・58　第47号竪穴住居（基準高さ　41.8ｍ）

48号住居　ＳＢ048（遺構　PL. 15、遺物　PL. 27, 28, Fig. 104）

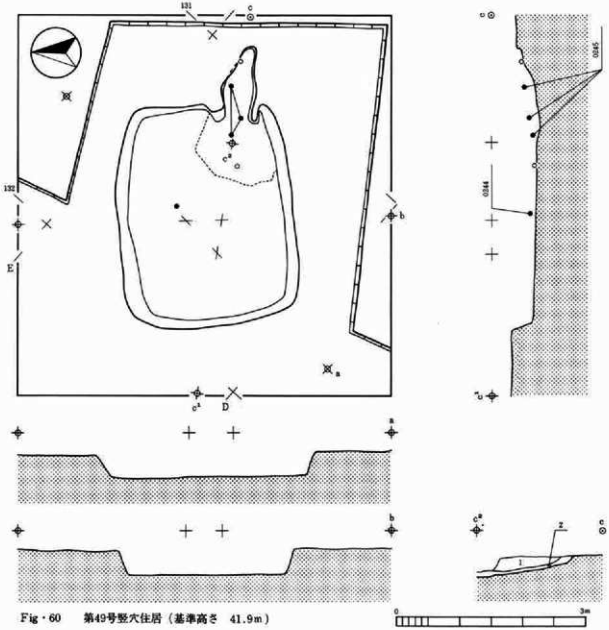
発掘区Ⅲ区のＥ130に位置する。平面形は縦長形、縦3.74m、横2.76mを測り、面積は約10.3m²である。住居の方位はＮ－99°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は58cm、周溝はなく、床面高は41.02mである。覆土は８層に分けられた。１～４層は住居内覆土、５、６層は窯体埋没土、７、８層は47号住居覆土である。土質は１層鉄分凝集が多く見られ炭化物とローム風化粒の混入した粘質砂層で暗灰色土層、２層炭化物を含む灰色砂層、３層炭化物とロームブロックを含む灰色砂層、４層ロームブロックを多量に含む粘質暗灰色土層、５層暗灰色粘土質砂層、６層暗灰色砂層に炭化物層と焼土を含む。７層鉄分凝集の強い灰色砂質層、８層灰色砂質層に黒色粘土ブロックを混土する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は47号住居→48号住居となる。焚口前幅40cm、奥行き1.5mを測る。底面は３つの小さな段を持ちながら緩やかに立ち上がる。本住居に伴う遺物は、土師器杯５、土師器甕１、須恵器杯３点の合計９点である。



Fig・59　第48号竪穴住居（基準高さ　41.8m）

49号住居　ＳＢ049（遺構　PL. 15、遺物　PL. 28、Fig. 104）

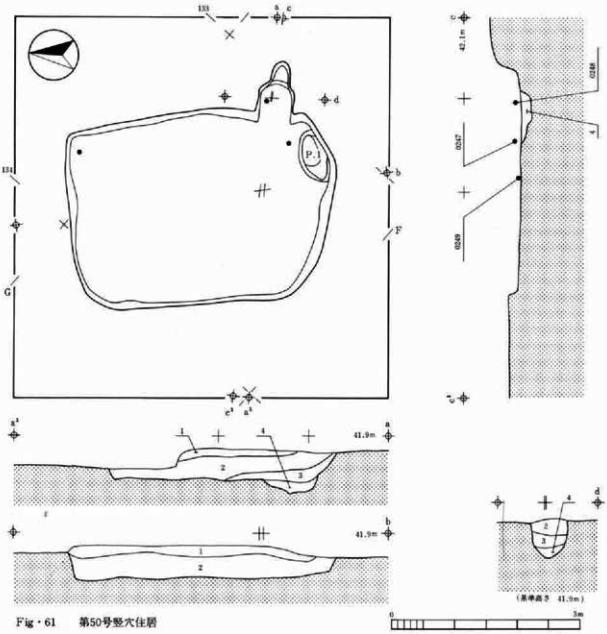
発掘区Ⅳ区のＥ131に位置する。平面形は縦長形、縦3.50m、横2.81mを測り、面積は約9.8m²である。住居の方位はＮ－102°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は44cm、周溝はなく、床面高は41.18mである。図示できなかったが本住居址の検出面までは表土から約50cmを測り、上下約25cmずつの２層に分層できた。上層は褐色の現耕作土、下層は粘質の灰褐色土層であった。住居址内の覆土は２層に分層され上下それぞれ約25cmを測る。上層は灰褐色粘質土、下層は灰褐色軟質土層であった。表示した覆土は２層に分けられた。１層は窯崩落土、２層は窯体埋没土。土質は１層灰褐色粘質土中に、黒色粘土ブロック混入、２層黒色粘質土層で下部は灰白色の砂質分になるが粘性強く固い。竈の焚口幅40cm、奥行き1.2mで両袖は粘土で固定した凝灰岩の立石が使用されていた。灰層と焼土は、焚口前庭から右寄りに広範囲に分布していた。本住居に伴う遺物は、土師器甕１、須恵器内黒１の合計２点である。



Fig・60　第49号竪穴住居（基準高さ　41.9m）

50号住居　ＳＢ050（遺構　PL. 15、遺物　PL. 28、Fig. 104）

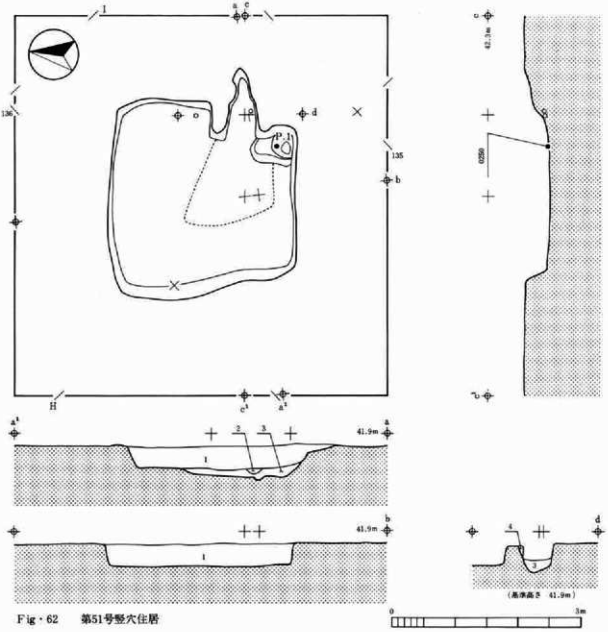
発掘区Ⅳ区のＧ134に位置する。平面形は横長形、縦3.10ｍ、横4.17ｍを測り、面積は約12.9㎡である。住居の方位はＮ－100°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は44㎝、周溝はなく、床面高は41.18ｍである。覆土は４層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３層は窯崩落土、４層は窯構築材である。土質は１層褐色土層で焼土粒子及び暗褐色粘土粒子をわずかに含み、砂質でしまっている。２層褐色土層で暗褐色土粒を大きくブロック状に含む。３層褐色土層で焼土粒と暗褐色粘土粒を多量に含む。４層暗灰色土層で粘土ブロックが主体である。竈の焚口幅は50㎝、奥行き60㎝の平面は半球形を呈し、煙道は更に小突起状にのびる。断面形は焚口から燃焼部は平坦で続き急に立ち上がって煙道に移行する。焚口右隅の南壁に接して長円形のピットが穿たれていた。深さ20㎝を測り炭化物、焼土を混入する暗褐色土を埋土とすることから貯蔵穴と推考される。本住居に伴う遺物は、土師器杯３、土師器甕１の合計４点である。



Fig・61　第50号竪穴住居

51号住居　ＳＢ051（遺構 PL. 16、遺物 Fig. 104）

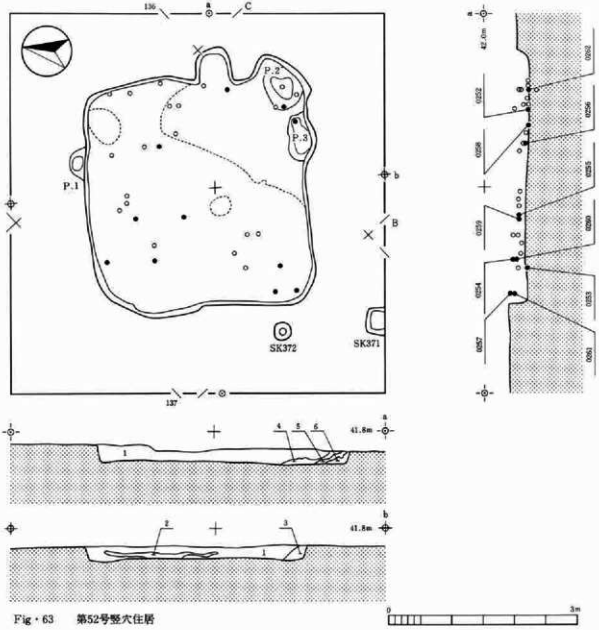
発掘区Ⅳ区のＨ136に位置する。平面形は正方形、縦3.05ｍ、横3.00ｍを測り、面積は約9.2㎡である。住居の方位はＮ－96°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は44㎝、周溝はなく、床面高は41.18ｍである。覆土は４層に分けられた。1層は住居内覆土、3層は窯体埋没土、4層は窯構築材、2層は住居床下のピット埋土である。土質は１層暗褐色粘質土層、２層黄褐色ローム質土層、３層灰褐色土層でしまっており、炭化物、焼土ブロックを含む。４層赤橙色を呈し、粘土で焼けている層。竈の焚口幅は45㎝、煙道までの全長は1.15ｍを測る。燃焼部までの奥行きは長さ65㎝で幅は焚口幅と同じ45㎝を測る。底部は焚口部よりなだらかに立ち上がり煙道部分で屈曲して煙道に至る。竈の位置は、東壁の南東隅を利用して構築するために右袖は壁より50㎝も突出している。焚口前面は焼土と炭化物を含む灰層が分布する。南東隅に貯蔵穴が穿たれ南北方向に細長い平面形状で深さは20㎝を測る。本住居に伴う遺物は、須恵器壺１点である。



Fig・62　第51号竪穴住居

52号住居　ＳＢ052（遺構　PL. 16、遺物　PL. 28, 29, Fig. 104, 105）

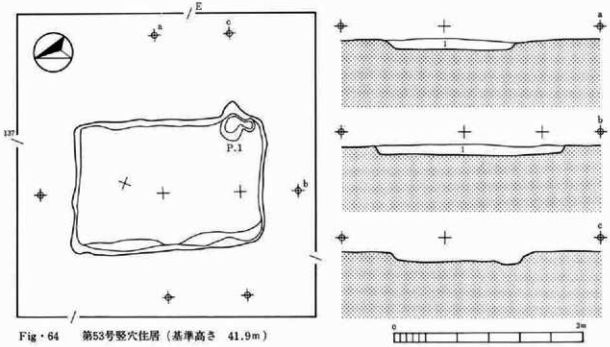
発掘区Ⅳ区のＣ131に位置する。平面形は正方形、縦3.70ｍ、横3.57ｍを測り、面積は約13.2㎡である。住居の方位はＮ－96°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は44cm、周溝はなく、床面高は41.18ｍである。覆土は６層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４層は窯崩落土、５、６層は窯体埋没土である。土質は１層暗灰色土層で黒色ブロック混入、２層暗灰色土層で砂質が強い。３層暗褐色土層で黒色ブロックを含むが１層より若干明るい。４層暗褐色土層で若干焼土を含む。５層暗褐色土層で多量の焼土を含み、灰、炭化物も混入する。６層黒褐色土層で地山の崩れも含む。竈の焚口前幅は50cm、奥行きは45cmで丸くすぼまる。焚口前庭部は炭化物、焼土を含む灰層が南東隅全体に分布している。１号ピットは北壁の外に接するように検出面から深さ16cm、２号ピットは20cm、３号ピットは15cmで貯蔵穴と考えられる。本住居に伴う遺物は、土師器杯４、土師器甕６、須恵器杯２の合計12点である。



Fig・63　第52号竪穴住居

53号住居　ＳＢ053（遺構 PL. 16、土層 103P）

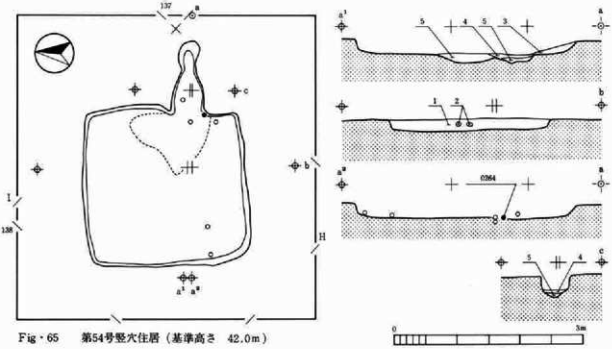
発掘区Ⅳ区のＥ137に位置する。平面形は横長形、縦2.05ｍ、横3.00ｍを測り、面積は約6.2㎡である。住居の方位はＮ－121°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。壁高は18㎝、床面高は41.52ｍである。



Fig・64　第53号竪穴住居（基準高さ　41.9ｍ）

54号住居　ＳＢ054（遺構 PL. 16、遺物 PL. 29、Fig. 105、土層 103P）

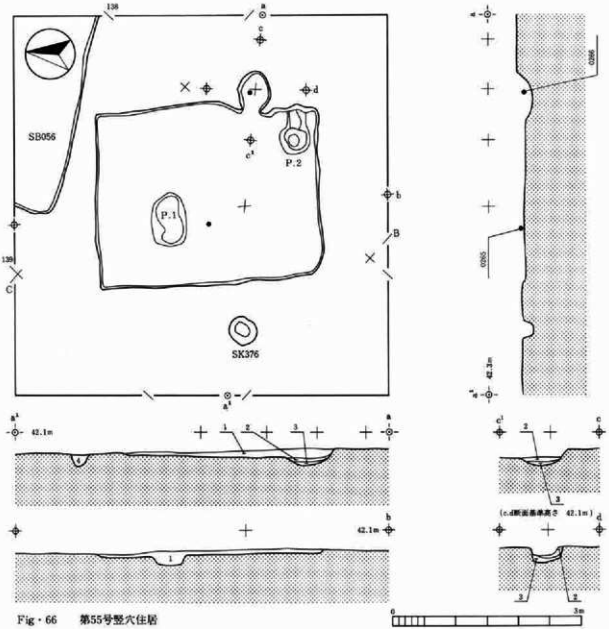
発掘区Ⅳ区のＩ137に位置する。平面形は正方形、縦2.55ｍ、横2.65ｍを測り、面積は約6.8㎡である。住居の方位はＮ－99°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。壁高は23㎝、床面高は41.57ｍである。



Fig・65　第54号竪穴住居（基準高さ　42.0ｍ）

55号住居　ＳＢ055（遺構　PL. 16、遺物　PL. 29、Fig. 105）

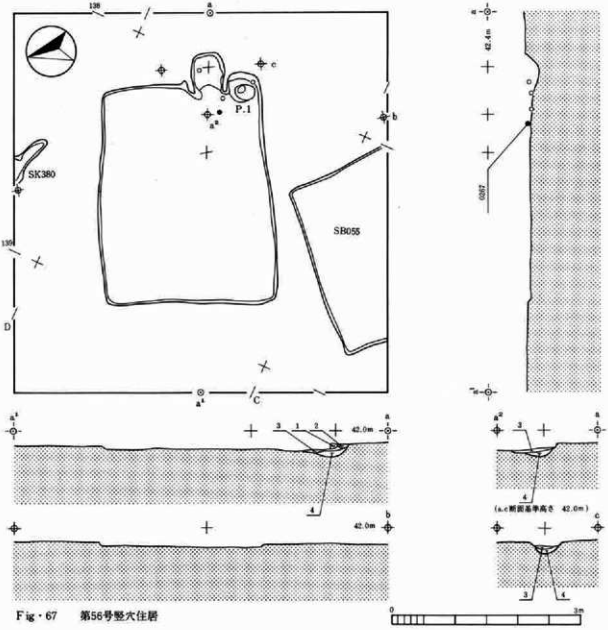
発掘区Ⅳ区のＣ138に位置する。竈は焚口前幅25cm、最大幅50cm、燃焼部までの奥行きは56cmを測る。袋状の平面形である。断面形は底部が平坦で煙道部で急激に立ち上がっている。燃焼部の底面には船底状にピットが残り、２、３層が埋っている。床面から穿たれたピットは２ケ所ある。１号ピットは床面中央北寄りに平面形が楕円形を呈し深さ13cmを測る。南東隅には貯蔵穴と考えられる２号ピットが位置し深さ31cmで、円形ピットに深さ６cmの溝が連接する。平面形は横長形、縦2.89ｍ、横3.57ｍを測り、面積は約10.3㎡である。住居の方位はＮ－100°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は14cm、周溝はなく、床面高は41.70ｍである。覆土は３層に分けられた。１層は住居内覆土、２、３層は窯構築材である。土質は１層灰褐色土層で粘性を有し炭化物、暗褐色粘質粒を含む。２層は焼土及び灰の堆積層で赤橙色を呈する。３層は褐色土層でわずかに暗褐色ブロックを含むしまった層である。本住居に伴う遺物は、土師器杯２点である。



Fig・66　第55号竪穴住居

56号住居　S B056（遺構　PL. 16, 遺物　Fig. 105）

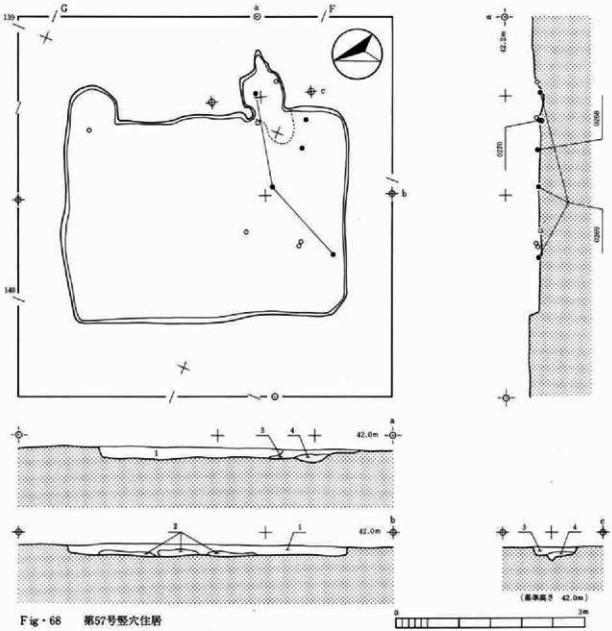
発掘区Ⅳ区のD138に位置する。平面形は縦長形、縦3.45m、横2.80mを測り、面積は約9.7m²である。住居の方位はN－118°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は12cm、周溝はなく、床面高は41.67mである。覆土は4層に分けられた。1層は住居内覆土、2、3層は窯崩落土、4層は窯構築材である。土質は1層褐色土層でややしまった鉄分を含む層、2層暗褐色土層で粘質土でしまっている。3層焼土及び灰の堆積層で赤褐色を呈する。4層褐色土層でわずかに暗褐色ブロックを含むしまった層である。竈の平面形は口のすぼまった袋状を呈する。焚口前幅は25cm、中央最大幅は40cm、燃焼部奥幅は35cmとなる。全長は70cmを測る。燃焼部底面は4層上面である。焚口部でややくぼみなだらかに立ち上がりながら煙道に至る。焼土、炭化物を含む灰層は竈内部のみに堆積し、焚口前庭部分では僅かに認められるのみであろう。南東隅には貯蔵穴が穿たれ深さは12cmと浅かった。本住居に伴う遺物は、土師器甕1である。



Fig・67　第56号竪穴住居

57号住居　ＳＢ057（遺構　PL. 17、遺物　PL. 29、Fig. 105）

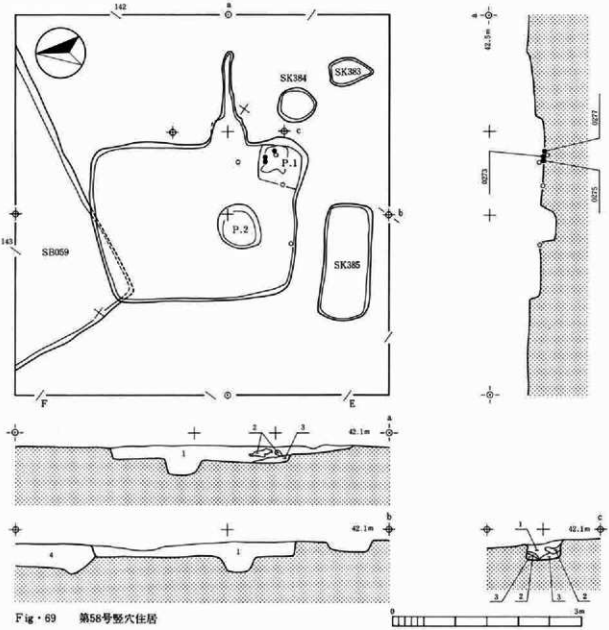
発掘区Ⅳ区のＦ139に位置する。平面形は横長形、縦3.28ｍ、横4.50ｍを測り、面積は約14.8㎡である。住居の方位はＮ－121°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は18cm、周溝はなく、床面高は41.65ｍである。覆土は４層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３層は窯崩落土、４層は窯体埋没土である。土質は１層褐色土層でわずかに炭化物を含みしまっている。２層褐色土層で灰白粘土粒と焼土粒を含む砂質土層、３層灰褐色土層で灰白色粘土粒を多量に含む。４層灰と焼土の堆積層で赤橙色を呈する。現状での焚口前幅は40cmを測り、中央最大幅は60cm、燃焼部奥幅は50cmとすぼまる。窯全長は１ｍを測り、燃焼部までは65cm、小さく突起する煙道は35cmを測る。焚口前庭から燃焼部煙道にかけて竈底面はゆるやかに立ち上がってゆく。燃焼部下面には灰の掻き出しのための凹みがある。焚口前庭には右袖前方側に向かって小範囲の灰堆積層が広がる。本住居に伴う遺物は、土師器甕１、灰釉２の合計３点である。



Fig・68　第57号竪穴住居

58号住居　S B058（遺構 PL. 17, 遺物 Fig. 105）

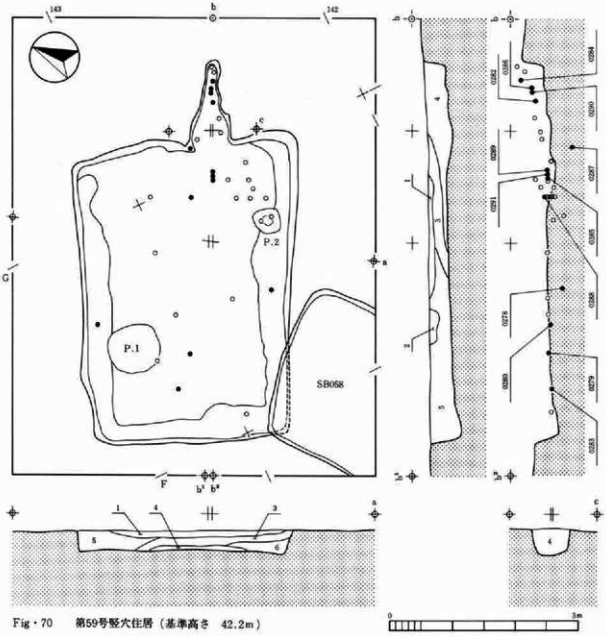
発掘区Ⅳ区のＦ142に位置する。平面形は横長形、縦2.47ｍ、横3.27ｍを測り、面積は約8.1㎡である。住居の方位はＮ－106°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は31cm、周溝はなく、床面高は41.63ｍである。覆土は４層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４層は59号住居覆土である。土質は１層褐色土層でわずかに炭化物を含む砂質土層、２層暗灰色土層、３層灰と焼土、炭化物の堆積層で黒褐色を呈する。４層暗褐色砂質土層である。土層断面の観察から、遺構の重複関係は59号住居→58号住居となる。竈の焚口前幅は50cm、燃焼部奥幅も50cm、奥行き40cmで平面形は長方形を呈する。燃焼部は平坦な面を持ち約10cmの段差を持って立ち上がり煙道部に連接する。煙道は前幅20cmで長さ1.1ｍを測り緩傾斜を持つ。ピットは２つ検出され、１号ピットは貯蔵穴で南東隅に位置し深さ20cmを測る。２号ピットは竈前面に位置し円形を呈し深さは６cmと浅い。本住居に伴う遺物は、土師器甕５、須恵器杯１、須恵器瓶１の合計７点である。



Ｆig・69　第58号竪穴住居

59号住居　ＳＢ059（遺構　PL. 17、遺物　PL. 29、Fig. 106）

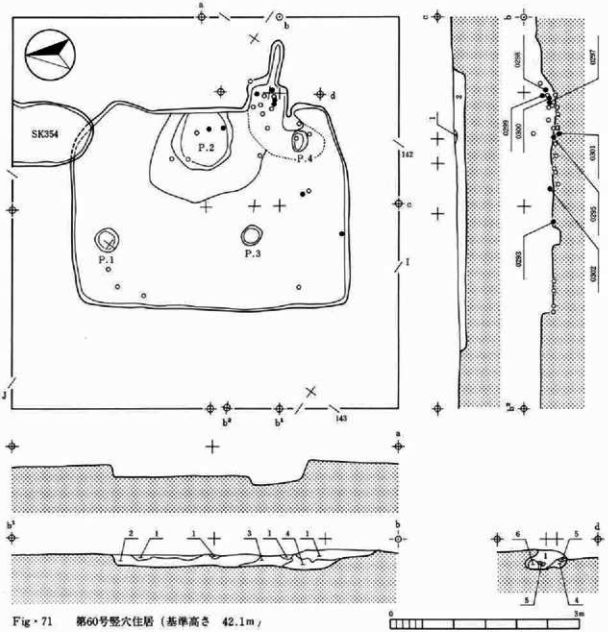
発掘区Ⅳ区のＧ143に位置する。平面形は縦長形、縦4.77ｍ、横3.35ｍを測り、面積は約16.0㎡である。住居の方位はＮ－78°－Ｅを取り、竈は北東壁右寄りに付設される。確認された壁高は44㎝、周溝はなく、床面高は41.60ｍである。覆土は６層に分けられた。１～３、５、６層は住居内覆土、４層は窯崩落土である。土質は１層暗褐色土層で砂質分が多く含まれ、鉄分の凝集が見られる。２層暗褐色砂質層、３層青灰色粘土層でまだらロームブロックを含む。４層青灰色粘土ブロックを多量に含む層。５層砂質分の多いサラサラした暗褐色土層で、６層砂質で鉄分を含む暗褐色土層である。土層断面の観察から、遺構の重複関係は59号住居→58号住居となる。竈の焚口は前幅は50㎝、煙道までの全長1.4ｍを測る。竈の底面は小さな起状をもつものの平坦であり煙道部分で急に立ち上がる。１号ピットは10㎝、２号ピットは３㎝といずれも浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯３、土師器甕８、須恵器杯３の合計14点である。



Fig・70　第59号竪穴住居（基準高さ　42.2ｍ）

60号住居　ＳＢ060（遺構 PL. 17、遺物 PL. 30、Fig. 106）

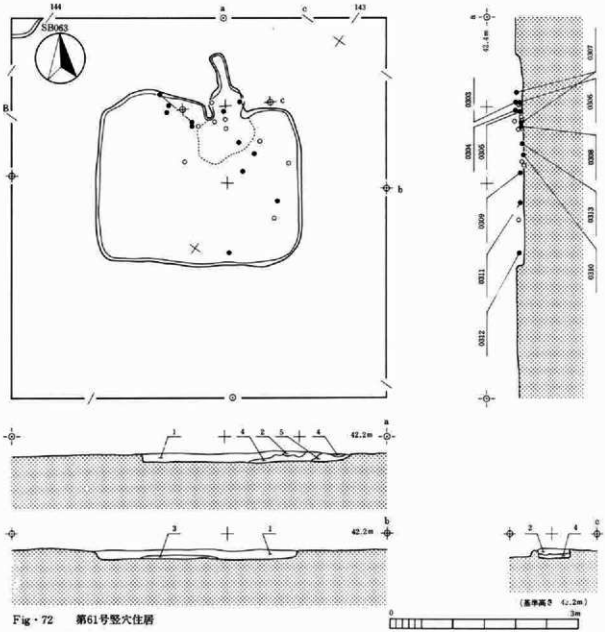
発掘区Ⅳ区のＪ143に位置する。平面形は横長形、縦3.18ｍ、横4.43ｍを測り、面積は約14.1㎡である。住居の方位はＮ－107°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は26cm、周溝はなく、床面高は41.66ｍである。覆土は６層に分けられた。１、２層は住居内覆土、５、６層は窯体埋没土、３、４層は住居に関連するピット埋土である。土質は１層褐色土層で砂をわずかに含み鉄分の凝集も見られる。２層灰褐色土層で鉄分の凝集が見られ炭化物も含む。３層灰褐色土層で炭化物、粘土を含む。４層灰褐色土層で灰、焼土と青灰色粘土を含む。５層青灰色粘土層、６層軟かくふわふわした褐色土層である。土層断面の観察から、遺構の重複関係は60号住居→354土壙となる。床面からのピットは４ケ所あり、１号ピットは12cm、２号ピットは９cm、３号ピットは12cm、４号ピットは10cmと浅い。２号ピットの周辺には灰白色粘土が分布している。本住居に伴う遺物は、土師器杯２、土師器甕４、須恵器杯１、須恵器内黒１、灰釉３の合計11点である。



Fig・71　第60号竪穴住居（基準高さ　42.1ｍ）

61号住居　ＳＢ061（遺構　PL. 18、遺物　PL. 30、Fig. 107）

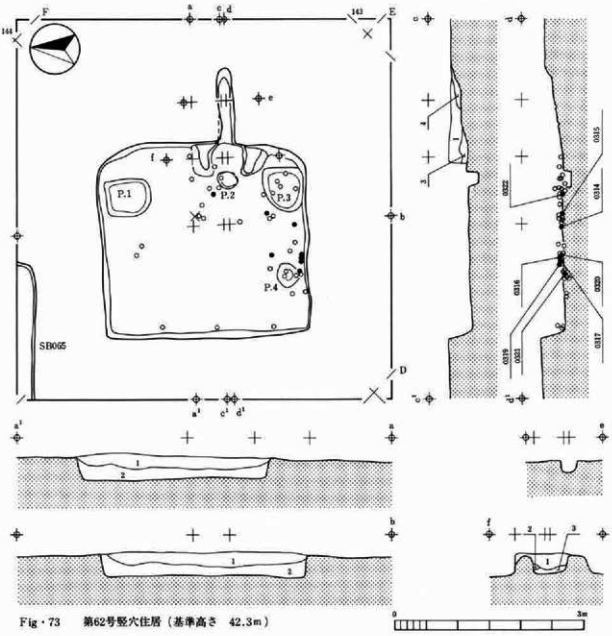
発掘区Ⅳ区のＢ143に位置する。平面形は横長形、縦2.65ｍ、横3.29ｍを測り、面積は約8.7㎡である。住居の方位はＮ－16°－Ｅを取り、竈は北壁右寄りに付設される。確認された壁高は14cm、周溝はなく、床面高は41.80ｍである。覆土は５層に分けられた。1、3層は住居内覆土、2、4、5層は窯崩落土である。土質は１層褐色土層でやや軟かな砂質土、２層青灰色粘土層、３層褐色土の砂層、４層褐色土層で粘土と焼土と灰を含む。５層黒褐色土の砂層である。竈の焚口部分の両袖は10cmから20cmほど残存しており地山を削り残して白色粘土を被覆している。焚口前幅は40cmで燃焼部分の幅も同寸法を測り奥行き部分は丸く始末する。煙道部分は幅15cmで長さ50cmと細長く続く。竈の底面は焚口部分から燃焼部分にかけては平坦で、煙道部分からは緩やかな曲線を描いて立ち上がる。焚口前底部の灰層の範囲は幅95cm、前方に70cmであり、踏み固められている。本住居に伴う遺物は、土師器甕５、須恵器杯３、灰釉２、緑釉１の合計11点である。



Fig・72　第61号竪穴住居

62号住居　ＳＢ062（遺構 PL. 18、遺物 PL. 30、Fig. 107）

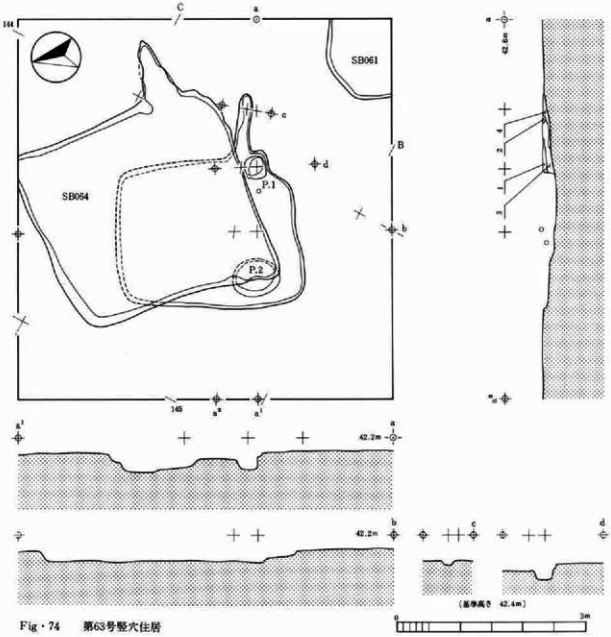
発掘区Ⅳ区のＥ144に位置する。平面形は正方形、縦3.08m、横3.32mを測り、面積は約10.2m²である。住居の方位はＮ－99°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は38cm、周溝はなく、床面高は41.62mである。覆土は４層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３、４層は窯体埋没土である。土質は１層褐色土層で暗灰色の粘土ブロックを含みやや砂質土を含む。２層褐色の砂質土層で鉄分の凝集が見られる。３層灰白色土層で砂質を帯び、焼土ブロックも混入、４層焼土と灰と炭化物の堆積層で赤褐色を呈する。竈の燃焼部分は幅50cm、奥行き40cmを測り、平面形は楕円に近い。煙道は幅15cmで長さ1.2mと細長い。ピットは４ケ所で検出された。１号ピットは19cmと深く埋土中に焼土の混入が認められ貯蔵穴の可能性もある。２号ピットは13cmである。３号ピットは22cmと深くその位置から貯蔵穴と推考される。４号ピットは４cmと浅い。本住居に伴う遺物は、土師器甕３、須恵器杯４、須恵器甕１、須恵器内黒１の合計９点である。



Fig・73　第62号竪穴住居（基準高さ　42.3m）

63号住居　ＳＢ063（遺構　PL. 18、遺物　Fig. 107）

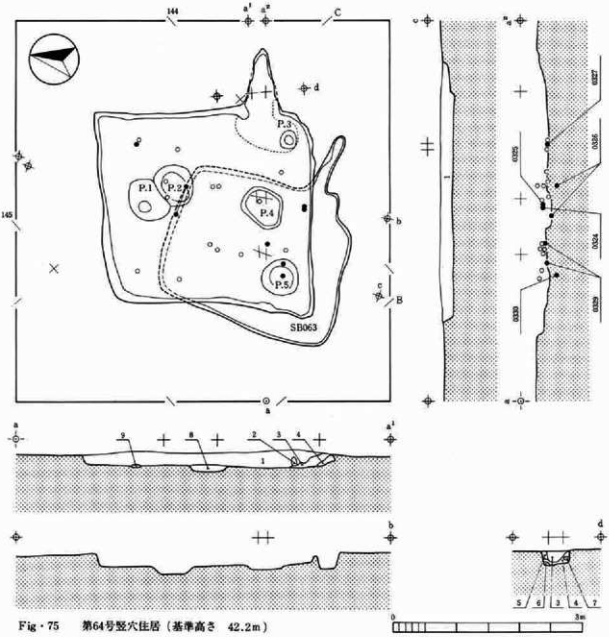
発掘区Ⅳ区のＣ144に位置する。本住居は64号住居と重複している。平面形は横長形、縦2.33m、横2.90mを測り、面積は約6.8㎡である。住居の方位はＮ－116°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は16cm、周溝はなく、床面高は41.84mである。覆土は４層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３層は窯崩落土、４層は窯体埋没土である。土質は１層褐色砂質土層で鉄分の凝集が見られる。２層焼土層で暗褐色を呈する。３層褐色砂質土層で焼土を含む。４層赤橙色土層で灰と焼土と炭化物の堆積がみられる。土層断面の観察から、遺構の重複関係は63号住居→64号住居となる。前述のように64号住居によって竈の一部分と南壁寄りが残されていただけであった。竈の焚口前庭部の範囲は重複により不明である。煙道部分は幅20cmで長さ90cmと細長い。右袖の位置付近に１号ピットが穿たれている。埋土に焼土や灰を混入しているが10cmと浅い。２号ピットは深さ11cmで床面から穿たれたものである。本住居に伴う遺物は、須恵器杯１点である。



Fig・74　第63号竪穴住居

64号住居　ＳＢ064（遺構　PL. 18、遺物　PL. 30、Fig. 108）

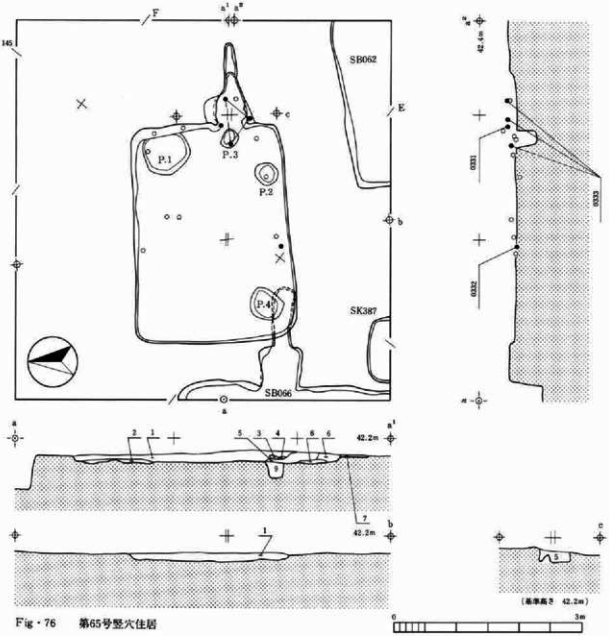
発掘区Ⅳ区のＣ144に位置する。平面形は横長形、縦3.00ｍ、横3.35ｍを測り、面積は約10.1㎡である。住居の方位はＮ－93°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は23cm、周溝はなく、床面高は41.74ｍである。覆土は９層に分けられた。1、２層は住居内覆土、３層は窯崩落土、４層は窯体埋没土、５～７層は窯構築材、８、９層は住居に関連するピット埋土である。土質は１層褐色土層、２層赤橙色土層、３層暗褐色土層、４層黒灰色土層、５層暗灰色土層、６層暗灰色土層、７層赤橙色土層、８層黒褐色土層、９層黒灰色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は63号住居→64号住居となる。竈の焚口前幅は50cmを測り煙道までの長さは1.1ｍで平面形は三角形を呈する。焚口前庭部の灰層は右袖に近く穿たれた貯蔵穴まで覆う。ピットの深さは、１号は31cm、２号は10cm、３号は18cm、４号は７cm、５号は21cmと比較的深い。本住居に伴う遺物は、土師器杯１、土師器甕１、須恵器杯３、須恵器甕２の合計７点である。



Fig・75　第64号竪穴住居（基準高さ　42.2ｍ）

65号住居　ＳＢ065（遺構　PL. 18、遺物　PL. 30、Fig. 108）

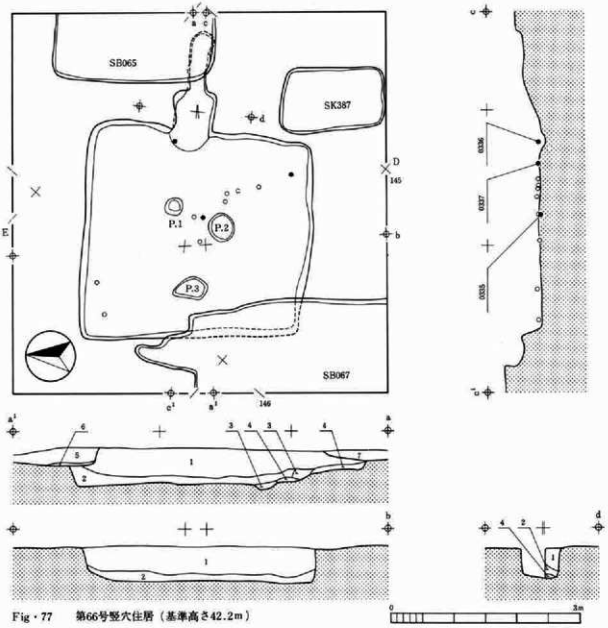
発掘区Ⅳ区のＥ145に位置する。平面形は縦長形、縦3.47ｍ、横2.50ｍを測り、面積は約8.7㎡である。住居の方位はＮ－104°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は12㎝、周溝はなく、床面高は41.81ｍである。覆土は９層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３～５層は窯崩落土、６、８層は窯体埋設土、７層は窯構築材、８層は窯前ピット埋土である。土質は１層褐色土層、２層暗褐色土層、３層暗灰色土層、４層赤橙色土層、５層灰褐色土層、６層暗褐色土層、７層暗灰色土層、８層灰褐色土層、９層赤褐色土層を呈する。土層断面の観察から遺構の重複関係は66号住居→65号住居となる。竈の焚口前幅は35㎝、燃焼部の奥行きは90㎝を測る。緩やかに曲線を描いて立ち上がる燃焼部の底面は段差を持って煙道に移行する。煙道の幅は20㎝長さは50㎝である。ピットは４ケ所にあり、深さは、１号ピット25㎝、２号ピット11㎝、３号ピット25㎝、４号ピット14㎝を測る。本住居に伴う遺物は、土師器甕１、須恵器杯２の合計３点である。



Fig・76　第65号竪穴住居

66号住居　S B066（遺構 PL. 19、遺物 Fig. 108）

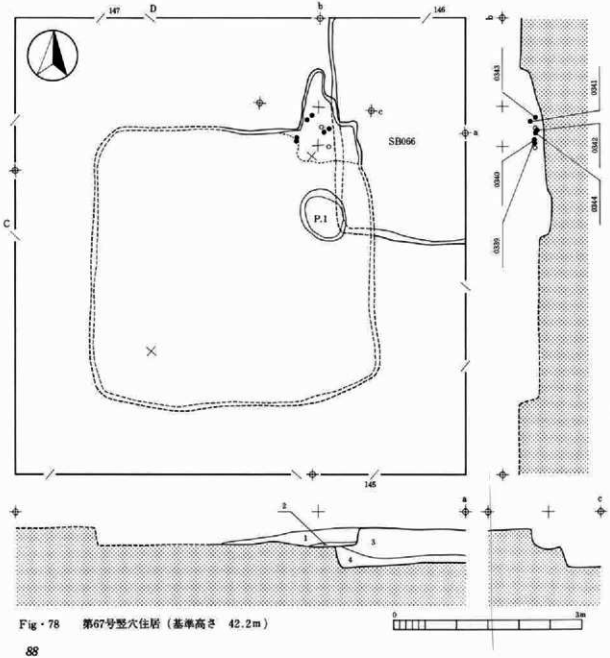
発掘区Ⅳ区のD146に位置する。平面形は横長形、縦3.19m、横3.70mを測り、面積は約11.8㎡である。住居の方位はN－100°－Eを取り、竈は東壁中央に付設される。確認された壁高は60cm、周溝はなく、床面高は41.33mである。覆土は7層に分けられた。1、2層は住居内覆土、3、4層は竈体埋没土、5、6層は67号住居覆土、7層は65号住居覆土である。土質は1層褐色土層で鉄分が含まれる砂質土層、2層褐色土層で砂質である。3層暗褐色土層でサラサラした砂を含む粘質土層、4層暗灰色土層、5層褐色土層で鉄分を含む砂質層である。6層暗灰色砂質土層である。土層断面の観察から遺構の重複関係は66号住居<67号住居<65号住居となる。竈の焚口前幅は55cmで燃焼部幅と同寸法である。奥行きは70cmを測る。煙道幅は25cm位で長さは95cmを測る。竈の底面は燃焼部と煙道の境で段差を持ち緩やかに立ち上がる。ピットの深さは、1号ピット6cm、2号ピット4cm、3号ピット8cmである。本住居に伴う遺物は、土師器杯1、土師器甕3の合計4点である。



Fig・77　第66号竪穴住居（基準高さ42.2m）

67号住居　ＳＢ067（遺構　PL. 19、遺物　PL. 31、Fig. 108）

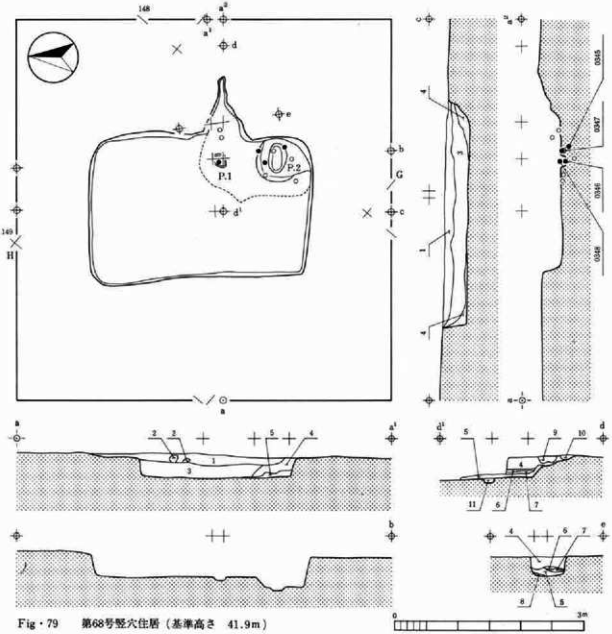
発掘区Ⅳ区のＤ146に位置する。本住居の北東隅は66号住居と重複している。平面形は正方形、縦4.37ｍ、横4.55ｍを測り、面積は約19.9㎡である。住居の方位はＮ－12°－Ｗを取り、竈は北壁右寄りに付設される。確認された壁高は52㎝、周溝はなく、床面高は41.42ｍである。覆土は４層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３、４層は66号住居覆土である。土質は１層褐色土層で鉄分を含む砂質層である。２層暗褐色土層で灰と焼土の堆積層、３層褐色土層で鉄分が含まれる砂質土、４層褐色砂質土層である。土層断面の観察から遺構の重複関係は66号住居→67号住居となる。竈は焚口前庭部の灰、焼土の分布範囲は明確にできなかった。焚口前幅は55㎝で全長は約95㎝である。燃焼部分の最大幅と奥行きは55㎝で平面は方形を呈する。竈の底面は緩やかに立ち上がり急に屈曲して煙道に至る。遺物は竈周辺に集中し、全て灰層の上からの出土であった。本住居に伴う遺物は、土師器杯２、土師器鉢１、土師器甕３、須恵器杯１の合計７点である。



Fig・78　第67号竪穴住居（基準高さ　42.2ｍ）

68号住居　S B 068（遺構 PL. 19、遺物 PL. 31、Fig. 109）

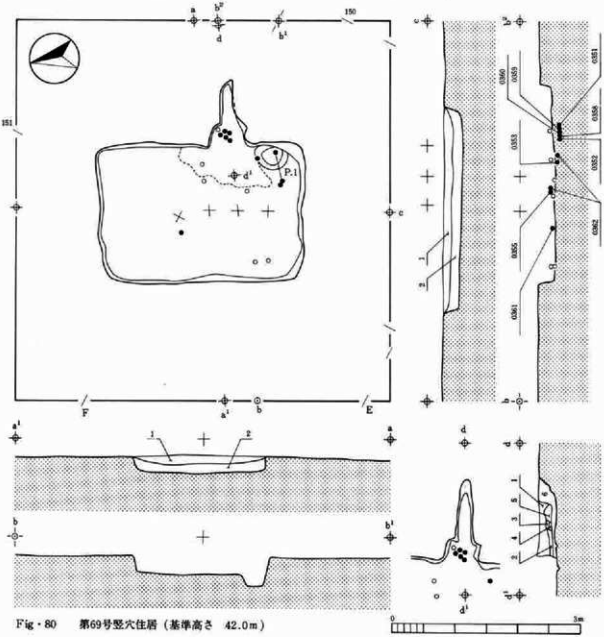
発掘区Ⅳ区のH148に位置する。平面形は横長形、縦2.25m、横3.58mを測り、面積は約8.1㎡である。住居の方位はN－102°－Eを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は45cm、周溝はなく、床面高は41.24mである。覆土は11層に分けられた。1～4層は住居内覆土、9、10層は竈崩落土、5～8層は竈体埋没土、11層は竈前のピット埋土である。土質は1層暗灰色土層、2層暗褐色土層、3層灰褐色土層、4層暗灰褐色土層、5層赤橙色土層、6層赤橙色土層、7層暗灰色土層、8層灰色土層、9層暗灰色土層、10層赤橙色土層、11層赤褐色土層を呈する。竈の焚口前幅は50cm、燃焼部幅もほとんど変わらず、奥行きは35cmのみが残存している。焚口部から燃焼部までは竈の底部は緩傾斜、煙道部で段差を持ち傾斜を強め検出面まで至る。焚口前庭の灰層は南東隅、右袖側に広範囲に広がっている。1号ピットは5cmと浅く、貯蔵穴と考えられる2号ピットは22cmと深い。本住居に伴う遺物は、土師器甕3、須恵器杯2の合計5点である。



Fig・79　第68号竪穴住居（基準高さ　41.9m）

69号住居　ＳＢ069（遺構　PL. 19、遺物　PL. 31, Fig. 109）

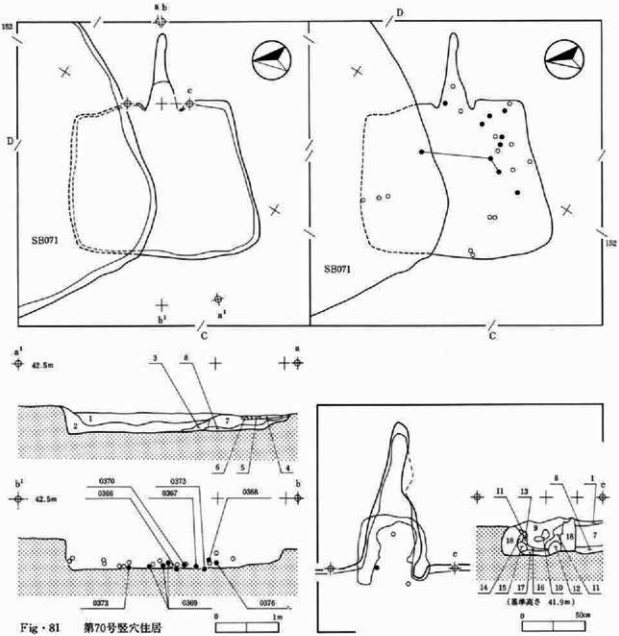
発掘区Ⅳ区のＦ151に位置する。平面形は横長形、縦2.18ｍ、横3.22ｍを測り、面積は約7.0㎡である。住居の方位はＮ－115°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は33㎝、周溝はなく、床面高は41.41ｍである。覆土は６層に分けられた。１、２層は住居内覆土、３～５層は窯崩落土、６層は窯構築材である。土質は１層褐色土層、２層褐色土層で焼土の小粒子と炭化物を含む粘質土層、３層赤褐色土層、４層黒灰色土層、５層焼土、炭化物を含む粘質土で灰褐色土層を呈する。６層は灰褐色粘土ブロックである。竈の焚口前幅と燃焼部最大幅とも55㎝を測り燃焼部分の奥行きは35㎝と短かい。両袖は欠落してなかった。煙道最大幅25㎝は手前にあり、長さは60㎝を測る。竈の使用断面は６層直上にあり、焚口前面から煙道部までは平坦で煙道奥で急に立ち上がる。右袖側、住居の南東隅には貯蔵穴が穿たれ深さは19㎝と浅い。本住居に伴う遺物は、土師器杯１、土師器甕６、須恵器杯４、灰釉２の合計13点である。



Fig・80　第69号竪穴住居（基準高さ　42.0ｍ）

70号住居　ＳＢ070（遺構 PL. 19、遺物 PL. 31, 32, Fig. 110）

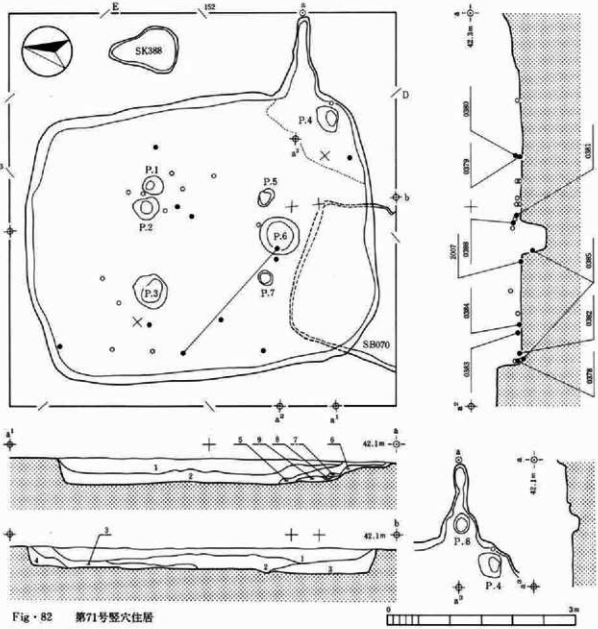
発掘区Ⅳ区のＣ152に位置する。平面形は横長形、縦2.50ｍ、横3.22ｍを測り、面積は約7.2㎡である。住居の方位はＮ－108°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。確認された壁高は47㎝、周溝はなく、床面高は41.41ｍである。覆土は18層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４～８層は窯崩落土、９～17層は窯体埋没土、18層は窯構築材である。土質は１層暗灰褐色土層、２層暗灰褐色土層、３層暗褐色土層、４層赤褐色土層、５層黒灰色土層、６層赤橙色土層、７層灰褐色土層、８層黒灰色土層、９層暗褐色土層、10層白色土層、11層黒灰色土層、12層暗褐色土層、13層暗赤橙色土層、14層暗褐色土層、15層赤橙色土層、16層赤褐色土層、17層黒色土層、18層灰褐色土層を呈する。土層断面の観察から、遺構の重複関係は70号住居→71号住居となる。竈の遺存状況は大変良好であった。焚口幅は35㎝、長さ1.25ｍを測る。燃焼部長さは80㎝、煙道部長さは45㎝である。本住居に伴う遺物は、土師器甕３、須恵器杯６、須恵器甕４、灰釉２の合計15点である。



Fig・81　第70号竪穴住居

71号住居　ＳＢ071（遺構 PL. 20、遺物 PL. 32、Fig. 110）

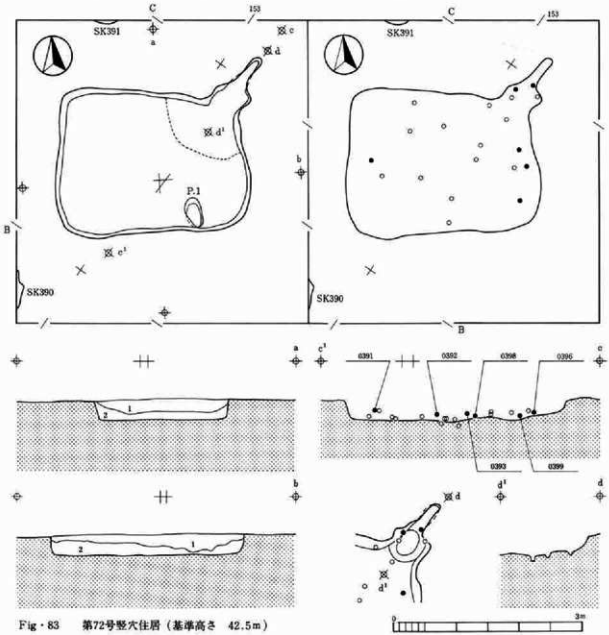
発掘区Ⅳ区のＤ152に位置する。平面形は横長形、縦4.47m、横5.59mを測り、面積は約25.0㎡である。住居の方位はＮ－95°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は45cm、周溝はなく、床面高は41.47mである。覆土は９層に分けられた。１～４層は住居内覆土、５層は窯崩落土、６層は窯構築材、７～９層は窯体埋没土である。土質は１層褐色土層、２層灰色土層、３層灰色土層、４層灰色土層、５層赤橙色土層、６層灰白色土層、７層暗灰色土層、８層灰白色土層、９層赤褐色土層を呈する。土層断面の観察から遺構の重複関係は70号住居→71号住居となる。竈の焚口幅は50cm、全長1.3mを測る。床面から穿たれたピットは７ケ所である。それぞれの深さは１号ピットは２cm、２号ピットは21cm、３号ピットは20cm、４号ピットは９cm、５号ピットは19cm、６号ピットは36cm、７号ピットは19cm、８号ピットは13cmである。本住居に伴う遺物は、須恵器杯６、須恵器内黒２、灰釉４、土錘１の合計13点である。



Fig・82　第71号竪穴住居

72号住居　S B072（遺構 PL. 20、遺物 PL. 32、Fig. 111）

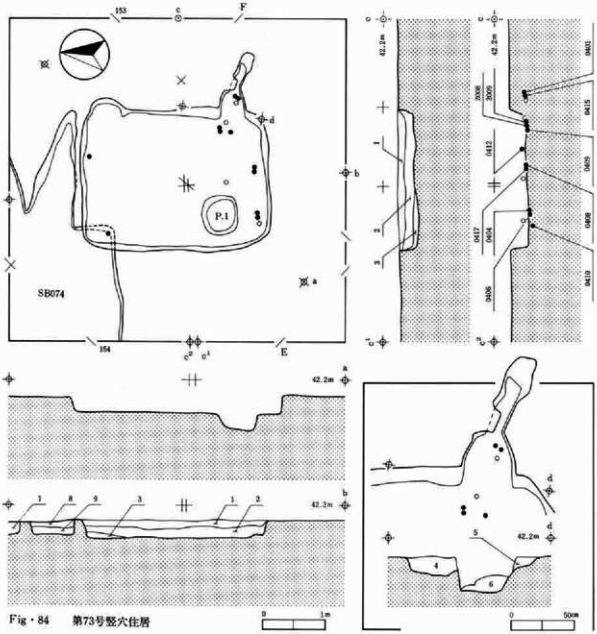
発掘区Ⅳ区のC153に位置する。平面形は横長形、縦2.26m、横3.10mを測り、面積は約7.0m²である。住居の方位はN－18°－Eを取り、竈は北東隅に付設される。確認された壁高は36cm、周溝はなく、床面高は41.54mである。覆土は2層に分けられた。いずれも住居内覆土である。土質は1層褐色土層で炭化物、焼土の小塊を含み鉄分の凝集も見られる。2層灰褐色土層で粘性の増す砂質土でわずかに鉄分の凝集が見られる。竈は北東隅に位置する。残存する焚口幅は50cmで燃焼部幅と同じである。燃焼部の奥行きも50cmを測り、平面形は隅の落ちた方形を呈する。煙道部は手前幅は最大で20cm、長さは50cmを測る。燃焼部の床面下には幅30cm、長さ40cm、最深5cmの楕円形の灰掻き出しのためと考えられる浅いピットが認められた。焚口前庭部の灰層は同心円状に広がる。ピットは南壁に寄って1ケ所検出された。長さ50cm、幅25cmの偏楕円形で深さ37cmと深い。本住居に伴う遺物は、須恵器杯6、須恵器甕2、灰釉2の合計10点である。



Fig・83　第72号竪穴住居（基準高さ　42.5m）

73号住居　ＳＢ073（遺構　PL. 20、遺物　PL. 33、Fig. 111、112）

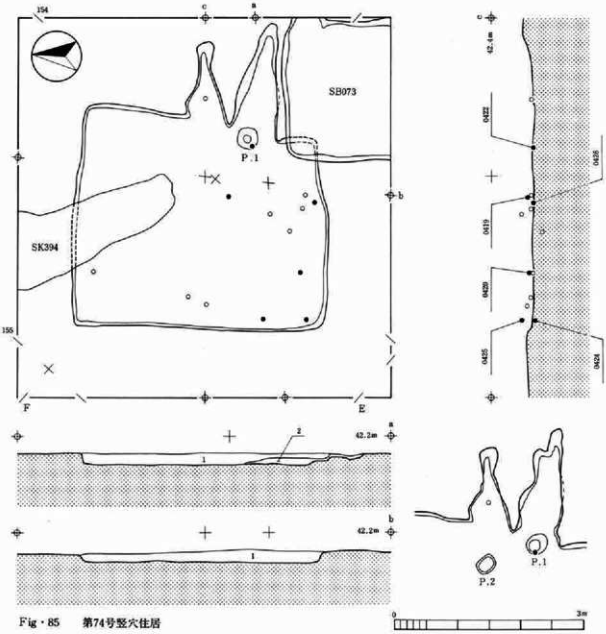
発掘区Ⅳ区のＦ153に位置する。北西隅に74号住居が重複している。平面形は横長形、縦2.20m、横3.11mを測り、面積は約6.8m²である。住居の方位はＮ－100°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は34cm、周溝はなく、床面高は41.62mである。覆土は６層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４、５層は窯構築材である。土質は１層褐色土層でやや粘性を持つ砂質土、２層灰褐色土層で砂質分が強い。３層灰褐色土層で砂層、炭化物をわずかに含む。４層赤褐色土層で粘土ブロックを含む。５層灰褐色土層で炭化物＋灰＋焼土を含む。６層は灰褐色粘土ブロックである。土層断面の観察から遺構の重複関係は74号住居→73号住居となる。竈の焚口幅は40cm、煙道部までの長さは1.2mを測る。燃焼部内には凝灰岩の熱で割れた石が落ち込んでいた。西壁寄りにはピットが検出され、深さは16cmを測る。本住居に伴う遺物は、土師器杯１、土師器甕８、須恵器杯７、須恵器甕１、須恵器蓋１、土錘２の合計20点である。



Fig・84　第73号竪穴住居

74号住居　ＳＢ074（遺物　PL. 33, Fig. 112）

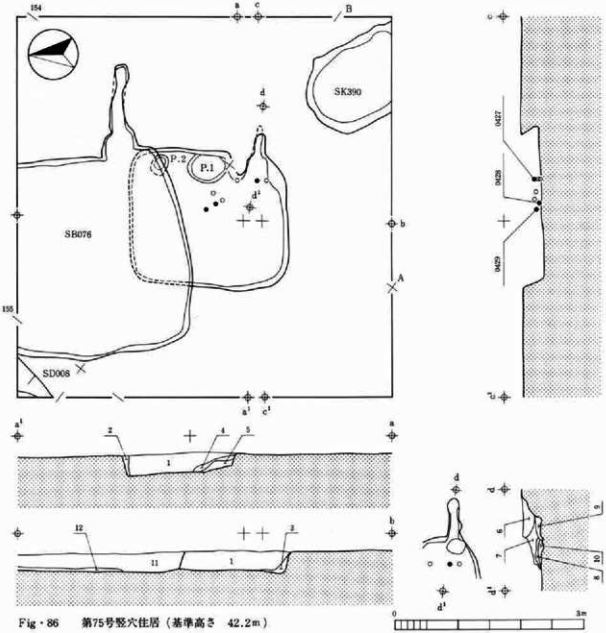
発掘区Ⅳ区のＦ154に位置する。平面形は横長形、縦3.34ｍ、横4.11ｍを測り、面積は約13.7㎡である。住居の方位はＮ－101°－Ｅを取り、竈は東壁右寄り、東壁中央に付設される。確認された壁高は23㎝、周溝はなく、床面高は41.71ｍである。覆土は２層に分けられた。１層は住居内覆土、２層は窯崩落土である。土質は１層褐色土層でややしまった粘土まじりの砂質土層、２層褐色土層で炭化物と焼土が含まれる。土層断面の観察から遺構の重複関係は74号住居→73号住居→394号土壙となる。北竈の焚口幅は60㎝、全長1.2ｍ、南竈の焚口幅は50㎝、全長1.7ｍを測る。焚口前庭部の灰層の広がりは北竈では認められなかったが南竈では前庭から右袖方向にかけて灰に炭化物、焼土の混入する薄い層が認められた。これから考えると南竈の方が北竈よりも新しいとも考えられようか。ピットは２ケ所検出され、１号ピットは18㎝、２号ピットは28㎝の深さである。本住居に伴う遺物は、土師器甕２、須恵器杯４、須恵器壺１、灰釉２、土錘６の合計15点である。



Fig・85　第74号竪穴住居

75号住居　ＳＢ075（遺構　PL. 20、遺物　PL. 33、Fig. 111、112）

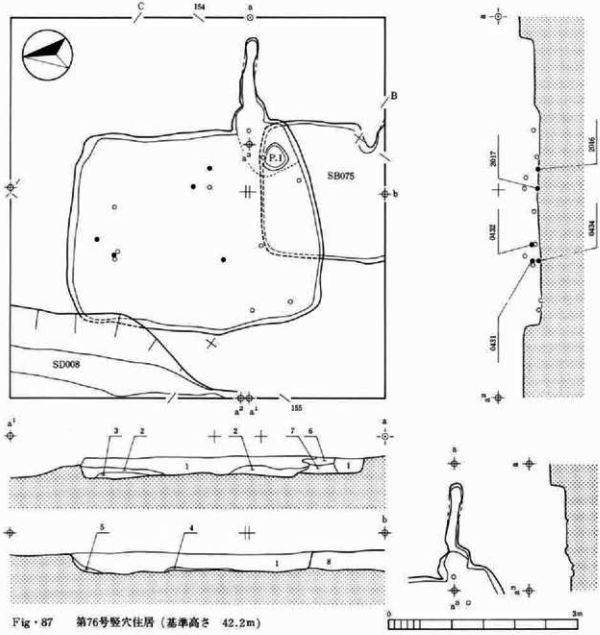
発掘区Ⅳ区のＢ154に位置する。平面形は横長形、縦2.18ｍ、横2.53ｍを測り、面積は約5.5㎡である。住居の方位はＮ－105°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は35cm、周溝はなく、床面高は41.61ｍである。覆土は12層に分けられた。１～３層は住居内覆土、４～７層は窯崩落土、８～10層は窯体埋没土、11、12層は76号住居覆土である。土質は１層灰褐色土層、２層暗褐色土層、３層暗褐色土層、４層褐色土層、５層灰褐色土層、６層灰褐色土層、７層褐色土層、８層青白色土層、９層赤褐色土層、10層黒灰色土層、11層褐色土層、12層褐色土層を呈する。土層断面の観察から遺構の重複関係は、75号住居→76号住居となる。竈は南東隅に位置する。焚口は羽釜の胴部破片で左右とも袖を補強していたらしくその左右幅は35cmを測る。燃焼部分の奥行きは40cmであった。煙道は幅15cmで長さ65cmであった。床面から穿たれた２つのピットは両方とも11cmの深さであった。本住居に伴う遺物は、土師器甕１、須恵器杯３の合計４点である。



Fig・86　第75号竪穴住居（基準高さ　42.2ｍ）

76号住居　ＳＢ076（遺構 PL. 20、遺物 Fig. 112）

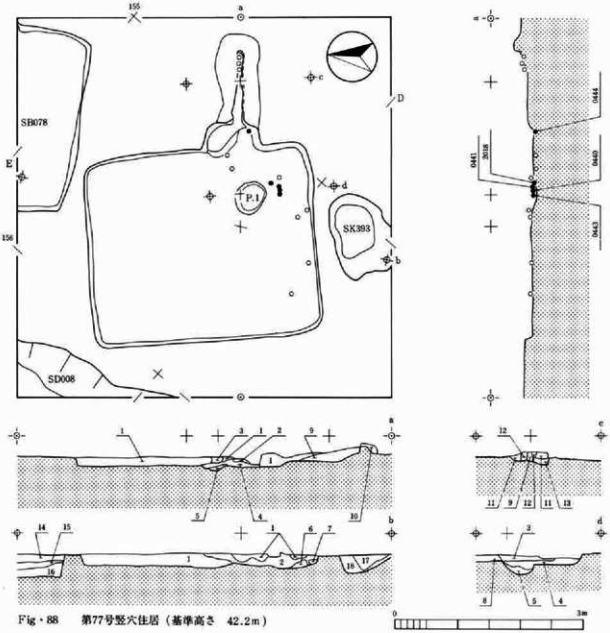
発掘区Ⅳ区のＢ155に位置する。平面形は横長形、縦3.14ｍ、横4.05ｍを測り、面積は約12.7㎡である。住居の方位はＮ－107°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は36cm、周溝はなく、床面高は41.52ｍである。覆土は９層に分けられた。1～5層は住居内覆土、６層は窯崩落土、７層は窯体埋没土、９層は攪乱、８層は75号住居覆土である。土質は１層褐色土層、２層暗褐色土層、３層灰褐色土層、４層やや黄色を帯びた褐色土層、５層暗褐色土層で砂質土中に黄色ロームブロック混土、６層赤褐色土層で粘土と炭化物を混土する。７層赤橙色の焼土層、８層灰褐色土層、９層暗褐色砂質土層である。土層断面の観察から遺構の重複関係は75号住居→76号住居→８号溝となる。竈の焚口幅は45cm、煙道までの長さは1.4ｍを測る。焚口前庭の灰層の広がりは前面から右袖にかけて認められた。貯蔵穴と考えられる１号ピットは29cmと深い。本住居に伴う遺物は、土師器甕1、須恵器杯６、須恵器甕２、土錘２の合計11点である。



Fig・87　第76号竪穴住居（基準高さ　42.2ｍ）

77号住居　ＳＢ077（遺構　PL. 21、遺物　Fig. 113）

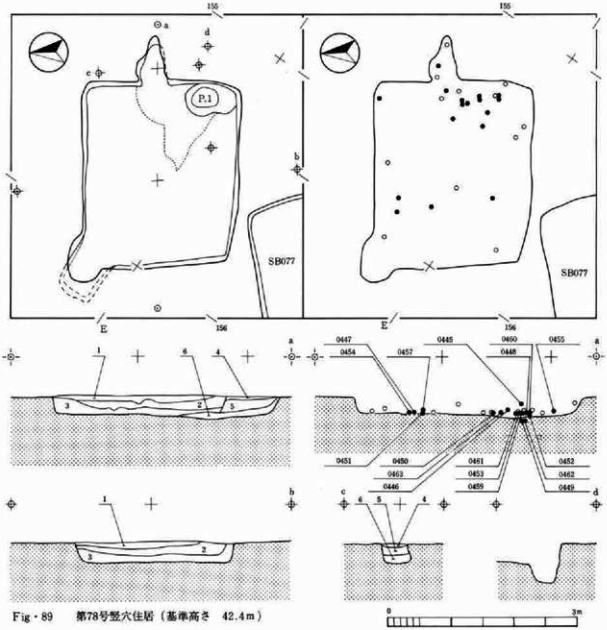
発掘区Ⅳ区のＤ155に位置する。平面形は横長形、縦3.05ｍ、横3.65ｍを測り、面積は約11.1㎡である。住居の方位はＮ－101°－Ｅを取り、竈は東壁右寄りに付設される。確認された壁高は33㎝、周溝はなく、床面高は41.69ｍである。覆土は18層に分けられた。１、８層は住居内覆土、２、６、７層は窯崩落土、９～13層は窯構築材、３～５層は窯前のピット埋土、14～16層は78号住居覆土、17、18層は393号土壙覆土である。土質は１層灰色土層、２層暗褐色土層、３層褐色土層、４層暗褐色土層、５層明褐色土層、６層灰色土層、７層黄褐色ロームブロック、８層灰色土層、９層暗赤褐色土層、10層灰白色土層、11層灰褐色土層、12層赤橙色土層、13層灰褐色土層、14層灰褐色土層、15層褐色土層、16層褐色土層、17層暗褐色土層、18層暗褐色土層を呈する。竈の焚口幅は崩壊部分も含めて１ｍ、燃焼部分の奥行きは55㎝、煙道部分の前方幅は15㎝、長さは1.2ｍを測る。本住居に伴う遺物は、土師器甕１、須恵器杯３、灰釉１、土錘１の合計６点である。



Fig・88　第77号竪穴住居（基準高さ　42.2ｍ）

78号住居　S B 078（遺構　PL. 21、遺物　PL. 33、34、Fig. 113）

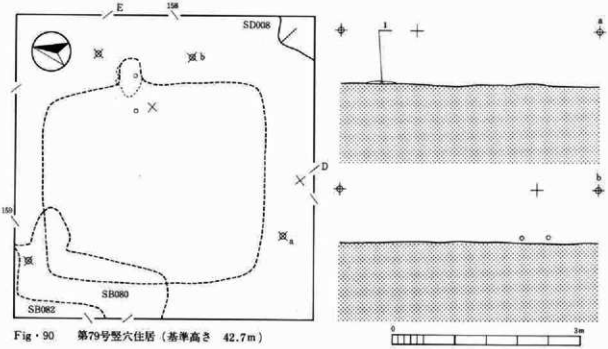
発掘区Ⅳ区のE156に位置する。平面形は縦長形、縦2.95m、横2.50mを測り、面積は約7.4㎡である。住居の方位はN－107°－Eを取り、竈は東壁中央に付設される。確認された壁高は32cm、周溝はなく、床面高は41.48mである。覆土は6層に分けられた。1～3層は住居内覆土、4、5層は窯崩落土、6層は窯体埋没土である。土質は1層灰褐色土層でやや粘性を持ち鉄分の凝集が見られる。2層褐色砂質土層、3層褐色の砂層で焼土、炭化物が少量にみとめられる。4層しまった灰褐色粘土層、5層やわらかな砂質の黄褐色土層で灰、焼土を少量含む。6層灰と焼土の堆積層で赤褐色を呈する。竈の焚口幅は40cm、全長80cmを測る。焚口部から燃焼部分は平坦で、煙道部分は急に立ち上がる。竈右袖部分に貯蔵穴が穿たれ深さは29cmを測る。住居北西隅に突出する地下式ピットが掘り込まれており、底面は床と同じ高さである。本住居に伴う遺物は、土師器杯4、土師器鉢1、土師器甕3、須恵器杯7、須恵器蓋1、須恵器内黒2、灰釉1の合計19点である。



Fig・89　第78号竪穴住居（基準高さ　42.4m）

79号住居　ＳＢ079（遺構　PL. 21、遺物　PL. 34、Fig. 114、土層　103P）

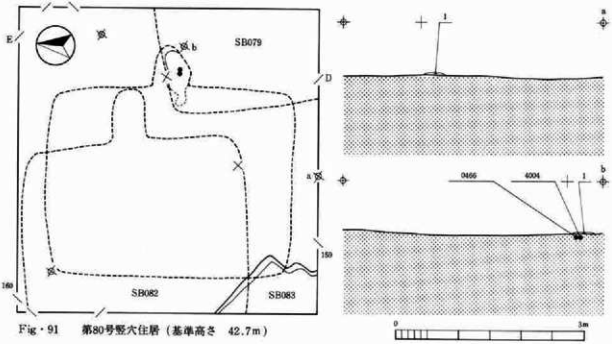
発掘区Ⅳ区のＥ158に位置する。平面形は横長形、縦3.15ｍ、横3.55ｍを測り、面積は約11.2㎡である。住居の方位はＮ－90°－Ｅを取り、竈は東壁左寄りに付設される。壁高は0㎝、床面高は41.88ｍである。



Fig・90　第79号竪穴住居（基準高さ　42.7ｍ）

80号住居　ＳＢ080（遺構　PL. 21、遺物　PL. 34、Fig. 114、土層　103P）

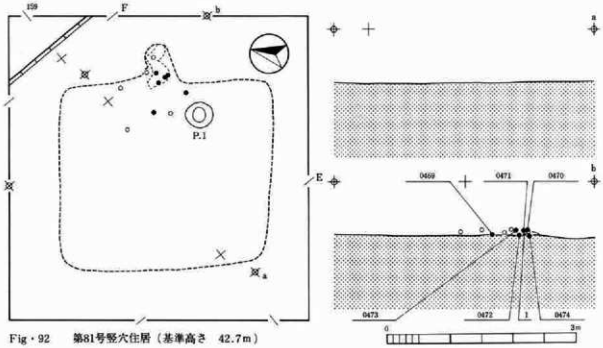
発掘区Ⅳ区のＥ159に位置する。平面形は横長形、縦3.02ｍ、横3.43ｍを測り、面積は約10.4㎡である。住居の方位はＮ－99°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は0㎝、床面高は41.92ｍである。



Fig・91　第80号竪穴住居（基準高さ　42.7ｍ）

81号住居　ＳＢ081（遺物　PL. 34、Fig. 114、土層　103P）

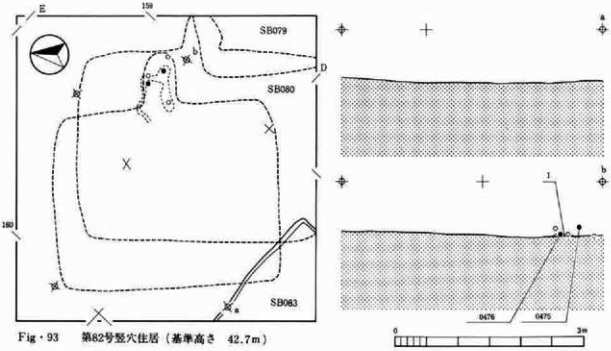
発掘区Ⅳ区のＦ159に位置する。平面形は横長形、縦2.93ｍ、横3.40ｍを測り、面積は約10.0㎡である。住居の方位はＮ－92°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は0cm、床面高は41.90ｍである。



Fig・92　第81号竪穴住居（基準高さ　42.7ｍ）

82号住居　ＳＢ082（遺物　PL. 34、Fig. 114、土層　103P）

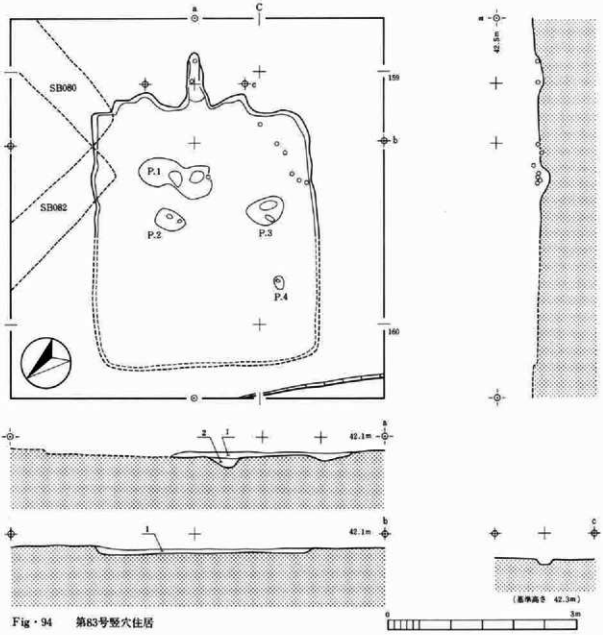
発掘区Ⅳ区のＥ159に位置する。平面形は横長形、縦2.90ｍ、横3.60ｍを測り、面積は約10.4㎡である。住居の方位はＮ－99°－Ｅを取り、竈は東壁中央に付設される。壁高は0cm、床面高は41.94ｍである。



Fig・93　第82号竪穴住居（基準高さ　42.7ｍ）

83号住居　ＳＢ083（遺物 Fig. 114）

発掘区Ⅳ区のＣ160に位置する。北壁は80号住居と82号住居が重複している。特に住居の西半分は発掘時の掘り下げのため床面も無くなっており復元図である。平面形は縦長形、縦4.15ｍ、横3.60ｍを測り、面積は約14.9㎡である。住居の方位はＮ－142°－Ｅを取り、竈は南東壁中央に付設される。確認された壁高は14㎝、周溝はなく、床面高は41.79ｍである。覆土は１、２層とも住居内覆土である。土質は１層暗褐色の砂質土層で少量の黄褐色ブロックと炭化物と灰と焼土を含む。２層暗褐色の砂質土層中に黒褐色粘土ブロックを少量含む。80住と82住との重複関係は不明。竈の焚口幅は35㎝、全長は90㎝を測る。焚口前庭部分の灰層の広がりは認められなかった。右袖部分の南隅には土器の破片が散布するものの貯蔵穴は検出されなかった。ピットが住居の床中央あたりに４ケ所検出された。いずれも床面から穿たれたもので、１号ピットは18㎝、２号ピットは５㎝、３号ピットは11㎝、４号ピットは14㎝を測る。本住居に伴う遺物は、土師器杯１点である。



Fig・94　第83号竪穴住居

＜補遺＞ 住居の土層分類

住居番号	土層番号	分　類	観　察
SB002	1	住居内覆土	暗褐色土層　軽石、ローム粒混入、固い砂質土塊。
	2	住居内覆土	暗灰色土層　1層と3層の混土層がしみ込み軟質。
	3	住居内覆土	灰白色土層　軟質であるが若干粘質を持つ。
	4	住居内覆土	暗褐色土層　土や山崩れ層、1層に似ている。
SB003	1	住居内覆土	暗灰褐色土層。
	2	住居内覆土	暗灰褐色土にロームを含む。
	3	窯体埋没土	暗灰黒色土にロームを含む。
	4	窯体埋没土	暗灰黒色土にロームを含む。
	5	窯体埋没土	暗灰黒色土とロームの混土層。
	6	窯体埋没土	赤褐色土層。
	7	窯構築材	暗褐色土層。
	8	床下ピット	黄褐色土にロームを含む。
SB014	1	窯体埋没土	暗褐色土に軽石と焼土を含む。
SB015	1	住居ピット	暗褐色ローム質土。
	2	2号溝覆土	黒褐色土中にローム塊を混土。
	3	窯体埋没土	暗褐色土に焼土を含む。
	4	窯体埋没土	赤褐色混土層。
	5	窯体埋没土	暗褐色土にロームを含む。
	6	窯構築材	黄褐色ロームブロック。
SB016	1	住居内覆土	暗褐色土に焼土と炭化物を含む。
	2	窯崩落土	赤褐色土層。
	3	窯崩落土	暗褐色粘土層。
	4	窯崩落土	黄褐色ロームブロック。
	5	窯崩落土	赤褐色土で焼土塊と灰を含む。
	6	住居ピット	赤色土焼土ブロック。
SB017	1	住居内覆土	暗褐色土中にローム塊を混土。
	2	18号住覆土	暗褐色粘土層。
	3	18号住覆土	暗褐色粘質土を主体にする層。
	4	18号住覆土	暗褐色粘質土。
SB020	1	住居内覆土	暗灰色土層中に鉄分凝集あり。
	2	住居内覆土	灰色土層に粘土ブロックを含む。
	3	窯崩落土	暗褐色土層に粘土塊混土。
	4	住居内覆土	灰色土層中に粘土ブロック含む。
	5	住居内覆土	暗褐色土層。
	6	窯構築材	暗褐色砂質土層。
	7	攪乱	灰褐色土層に粘土塊混入。
SB021	1	住居内覆土	灰褐色土層に炭化物塊を含む。
	2	住居内覆土	灰白色砂質土層。
	3	窯崩落土	暗褐色土層に焼土ブロック混入。
	4	窯構築材	黒色土層に焼土、炭化物、灰混入。
	5	床下ピット	黄褐色ブロック。
	6	22号住覆土	灰白色土層。
	7	22号住覆土	暗褐色土層に焼土と灰を混入。
	8	22号住覆土	明赤褐色土層。
SB025	1	住居内覆土	黒褐色土層に灰を含む。
	2	住居内覆土	暗褐色軟質土層に粘土粒を含む。
	3	窯崩落土	灰白土層に粘土ブロックを含む。
	4	窯崩落土	暗褐色砂質土層。
SB026	1	住居内覆土	暗褐色土層中に炭化物を含む。
	2	住居内覆土	暗褐色土に炭化物と焼土を含む。
	3	住居内覆土	暗褐色砂質土層。
	4	住居内覆土	黄褐色砂層。
	5	窯構築材	暗褐色砂質土層。
	6	窯崩落土	暗褐色土層中に焼土を含む。
	7	窯崩落土	赤褐色土層に焼土塊を含む。
	8	窯崩落土	暗褐色粘質土層。
	9	窯体埋没土	黒色土中に炭化物を含む。
	10	窯体埋没土	暗褐色土層中に焼土を含む。
	11	窯体埋没土	暗褐色土層中に焼土を含む。
	12	窯構築材	暗褐色砂質土層。
SB039	1	住居内覆土	暗灰色砂質シルトで鉄分凝集あり。
	2	住居内覆土	暗灰色砂質シルト。
	3	住居内覆土	暗灰色シルトでローム塊混入。
	4	36号住覆土	暗灰色砂質シルト。
	5	36号住覆土	暗灰色砂質シルト。
	6	36号住覆土	暗灰色砂質シルトで粘性を増す。
	7	36号住覆土	黄褐色ロームブロック。
	8	36号住覆土	黄色ローム。
SB040	1	住居内覆土	黒褐色土層で鉄分凝集あり。
	2	窯体埋没土	暗灰色土層で炭化物混入。
	3	窯構築材	暗灰色砂質土層。
SB053	1	住居内覆土	褐色土で炭化物を僅かに含み、やや粘性のある層。
SB054	1	住居内覆土	褐色で比較的しまった砂質土層に暗褐色粘質土を混土する。
	2	住居内覆土	暗褐色砂質土層。
	3	窯崩落土	暗褐色土で粘性が強く黒味がかった層。
	4	窯崩落土	焼土と炭化物の混土層。
	5	窯崩落土	褐色土で暗褐色粘質土と浮石を僅かに含む層。
SB079	1	窯構築材	赤橙色を呈する焼土
SB080	1	窯構築材	赤橙色を呈する焼土
SB081	1	窯構築材	赤橙色を呈する焼土
SB082	1	窯構築材	赤橙色を呈する焼土

2．遺物

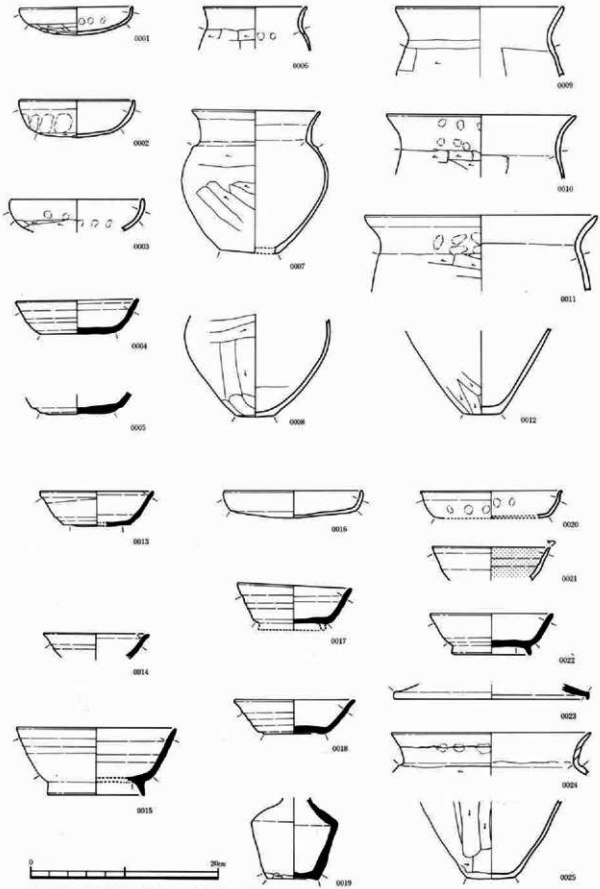
集落を分析するには各遺構の構造的把握とともに伴出した遺物の遺構内での原位置の確認作業と，遺物個々の性格認定作業が必要となる。この遺構，遺物を遺跡のなかで位置付けることが必要となる。当然，遺構外出土遺物の分布状況も加味されることとなる。

特に出土遺物の編年作業，とりわけ普遍性の高い出土土器の分析をとおしての型式把握が実年代決定の単位となり，その尺度を遺跡のなかに還元することが始めの集落分析にたどりつくということになる。前記のような視点を常に念頭におきつつ出土土器の分類作業を進めてみた。

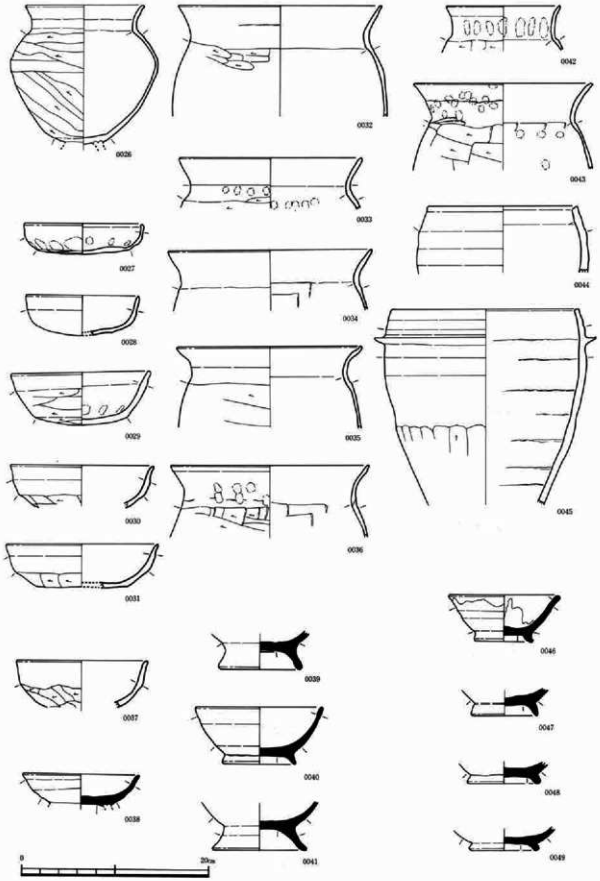
土器は「土師器」「須恵器」「施釉陶器」に大別される。もちろん器形や製作技法が「須恵器的」で焼成が酸化炎焼成に近い「土師器的」なる一群は，須恵器の範疇である。

土師器は杯，鉢，甕の器形に分類される。杯は口径10～15cm大のもので底部は丸底である。口縁部が内湾するもの（0169），口縁部が直立気味のもの（0161），口縁部が外反するもの（0221）がある。鉢の底部は小さく浅い丸底を呈するもので長い口縁部は内湾気味に立ち上がる。口径20cm大のもの（0451），口径15cm大のもの（0029），口径12cm大のもの（0338）に分類される。甕は口縁部が「く」の字状を呈する長甕（0262），口縁部が「コ」の字状を呈する長甕（0113），口縁部が緩やかな「く」の字状を呈し，器肉の厚い長甕（0362），口縁部が内湾する大形の土釜（0417），「く」の字状の口縁部を持つ丸底の甕は口径10cm以下（0051）から口径10cm以上～20cm以下（0249）など4段階に分類される。台付甕は，体部ヘラケズリ技法のもの（0102）と体部刷毛目技法のもの（0070）に分類される。

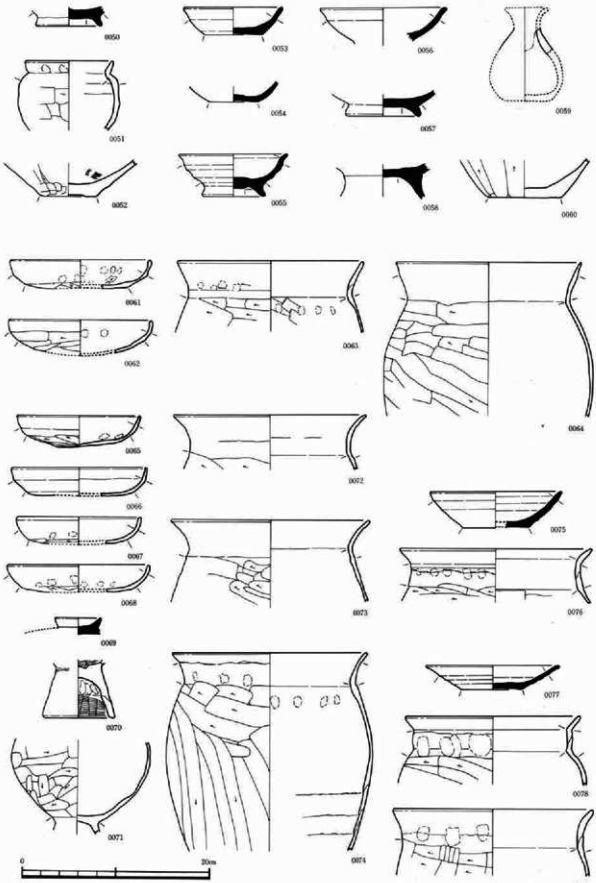
須恵器は器種別に杯，甕，瓶，壺，短頸壺，蓋，皿，内黒に分類される。杯は平底で底部切り離し技法が糸切りだけのもの（0455），底部切り離し技法が糸切り離し後回転ヘラ削りの調整技法があるもの（0106），酸化炎焼成に近く底部切り離し技法が糸切りのみのもの（0263），酸化炎焼成に近く底部，体部下半部が手持ちヘラケズリのもの（0304），平底で底部切り離し技法が静止糸切りのもの（0464），酸化炎焼成に近く平底の底部は糸切りのみのかわらけ状のもの（0383）がある。杯には他に高台の一群がある。いわゆる硬質で須恵器といえるつくりのしっかりしているもの（0110），灰白色のやや胎土の軟質のもの（0315），酸化炎焼成に近く底部切り離しに糸切り技法の残るもの（0046），酸化炎焼成に近く体部下半を手持ちヘラケズリにより調整するもの（0346），酸化炎焼成に近いが製作技法は明らかに轆轤成形により胎土も良好なもの（0083），酸化炎焼成に近く胎土の良好な皿形に近い器形のもの（0383），酸化炎焼成に近く体部の深い椀で足高高台のもの（0041）がある。甕には水甕と考えられる大形の甕（0186）と，羽釜の甑と考えられる口縁部の開放するもの（0086），羽釜の長甕と考えられる内湾気味の口縁を持つもの（0399）がある。瓶には肩部の張る小形のもの（0019），壺としたものには肩部が張り自然釉の流れる大形のもの（0133），短頸壺には口径10cm位の中形のもの（0090）がある。蓋はつまみの宝珠の退化して受け部のかえりの無い段階のもの（0180），皿には胎土の軟質な口径15cm大のもの（0077）がある。内黒土器は胎土の良好なもので酸化炎焼成に近い（0466）。施釉陶器は釉によって灰釉陶器と緑釉陶器に分けられる。灰釉陶器の椀は，口径15cm大で深さのある大きめの高台椀（0369），口径12cm大で体部の浅い高台椀（0471）がある。皿には口径12cm大で高台部を含めた高さが2cm位のもの（0443）がある。皿には他に径7cmに復元できる耳皿（0389）もある。瓶は大小あり大きめのものは肩部の張る作りのしっかりしたもの（0096）と，肩のなだらかな小形のもの（0059）がある。緑釉陶器は，全面施釉の径15cm位に復元できそうな椀で高台部は直立気味で四角く張る。



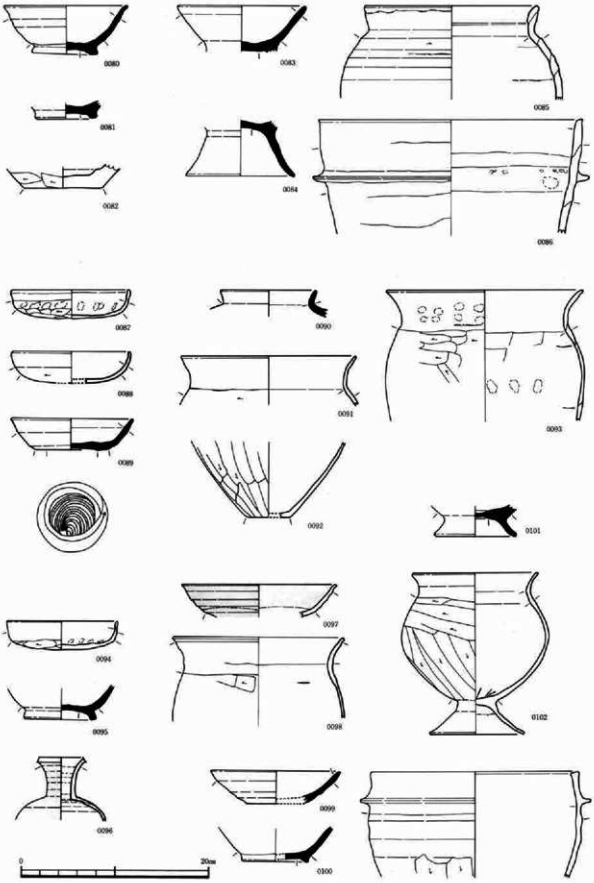
Fig・95　土器実測図（1）　SB001～SB005



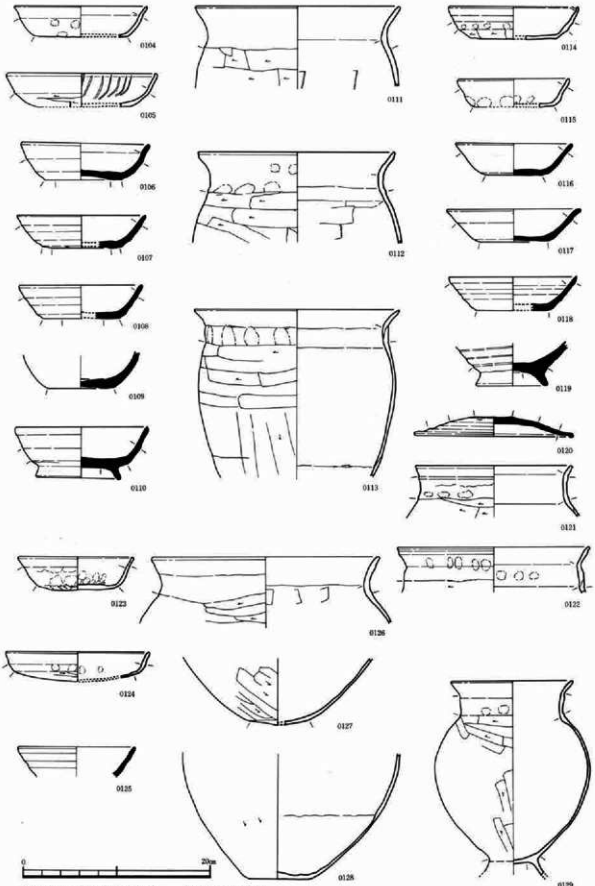
Fig・96　土器実測図（2）　SB006～SB009



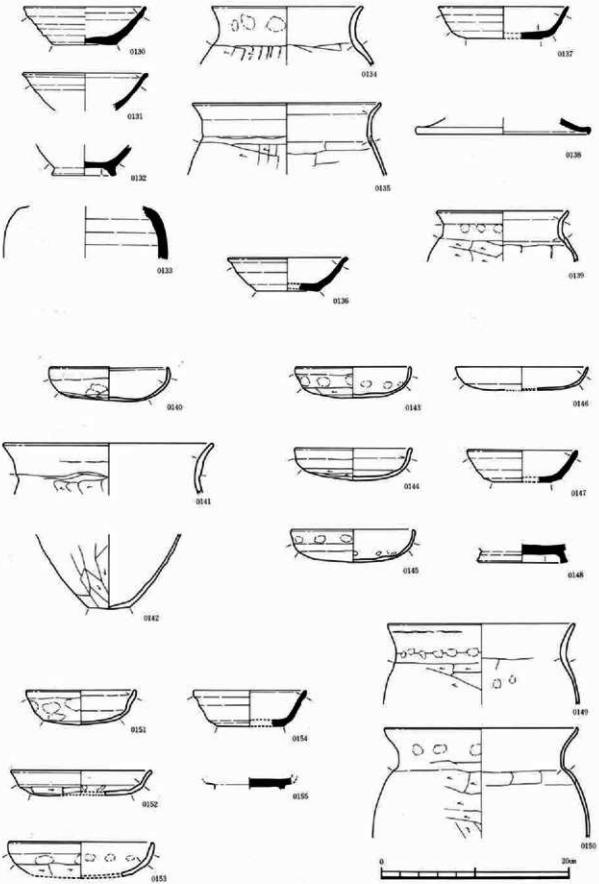
Fig・97　土器実測図（3）　SB010～SB015



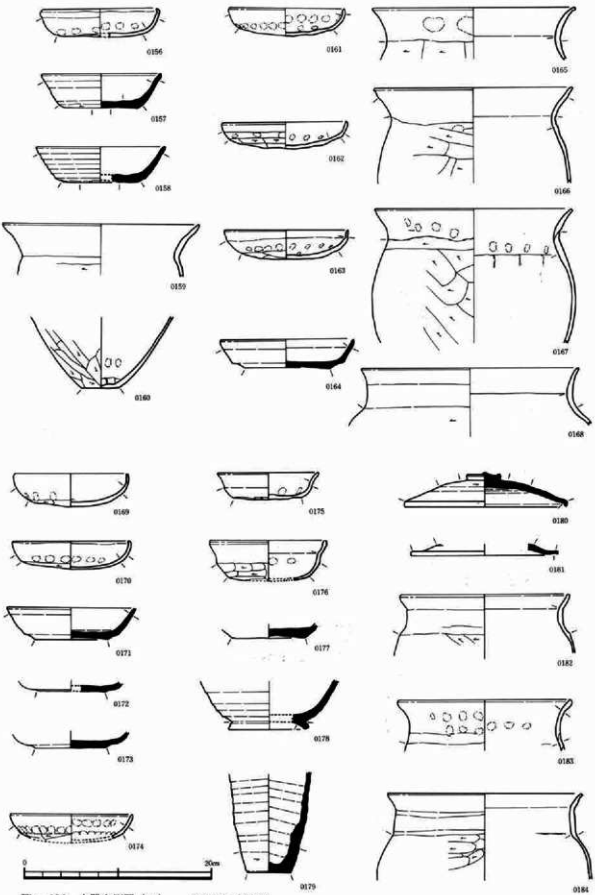
Fig・98　土器実測図（4）　SB016～SB021



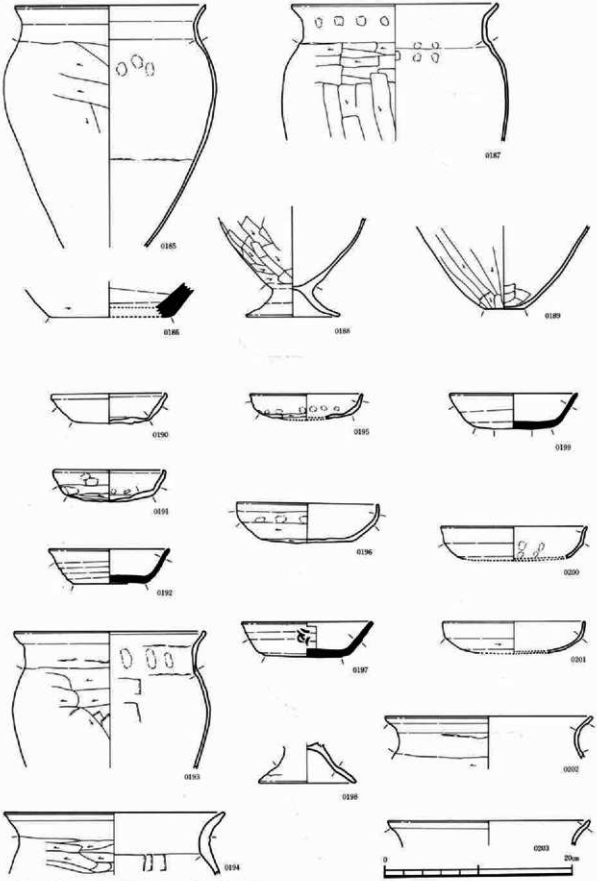
Fig・99　土器実測図（5）　SB022～SB025



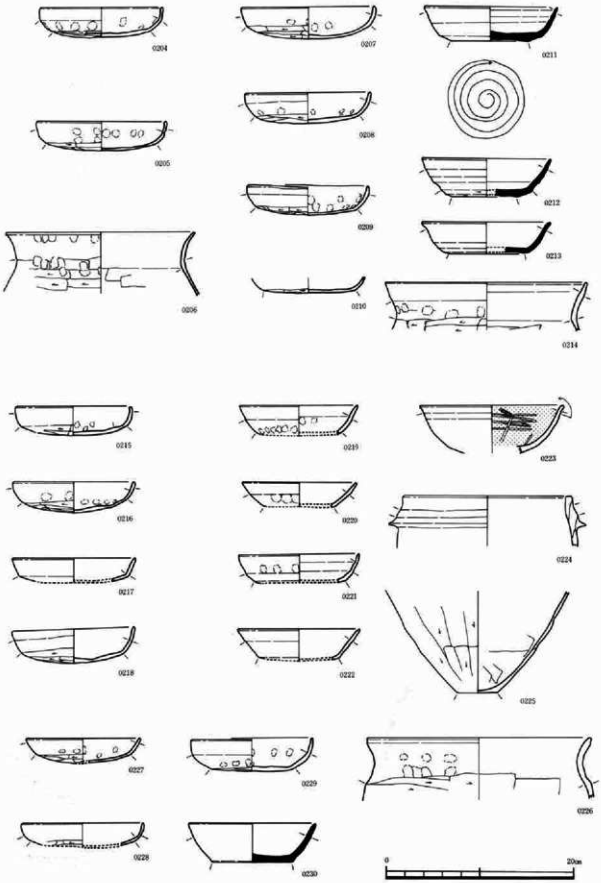
Fig・100　土器実測図（6）　SB026～SB032



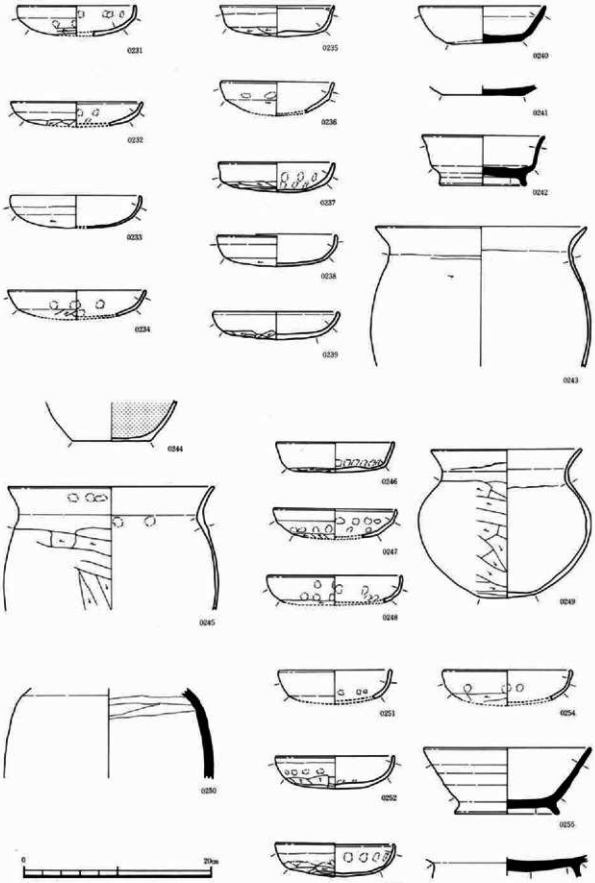
Fig・101　土器実測図（7）　SB033～SB037



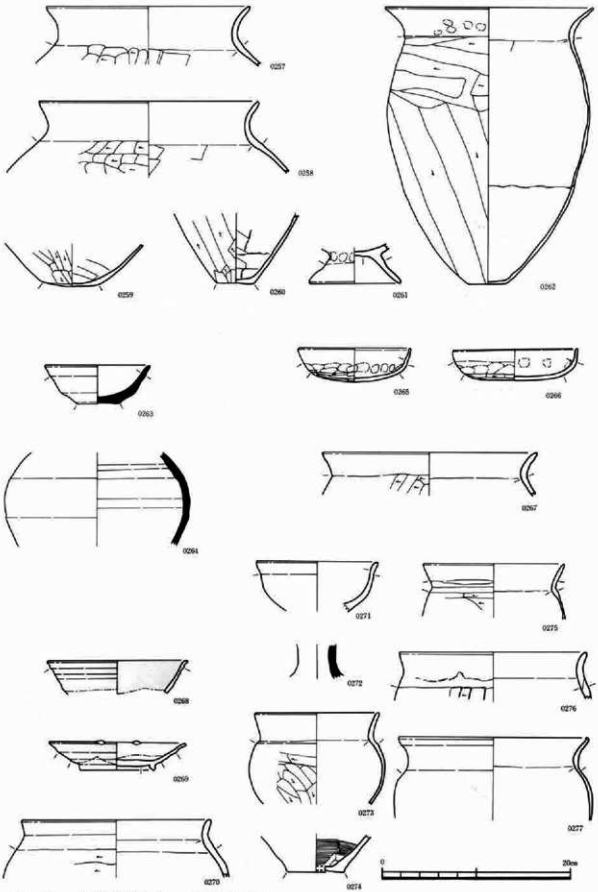
Fig・102　土器実測図（8）　SB037～SB041



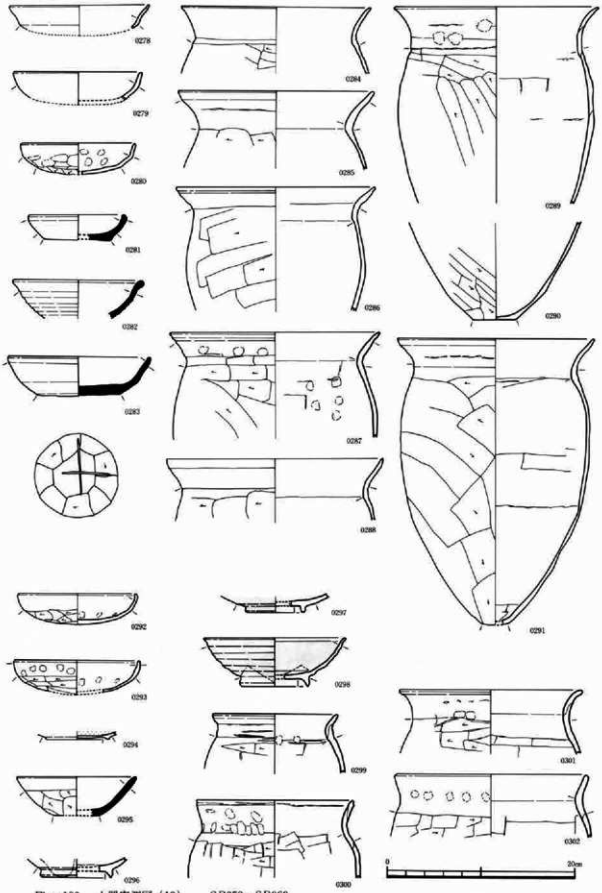
Fig・103　土器実測図（9）　SB042～SB046



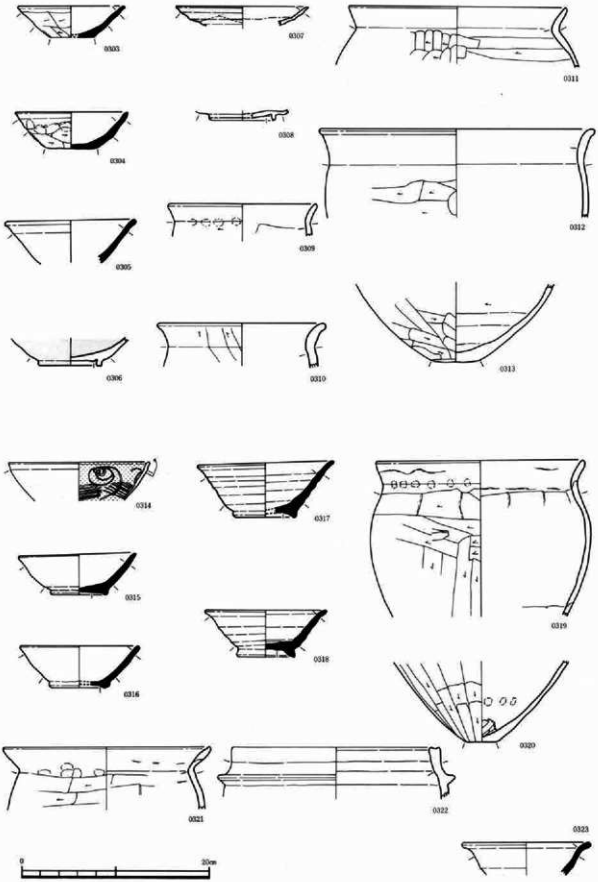
Fig・104　土器実測図（10）　SB047～SB052



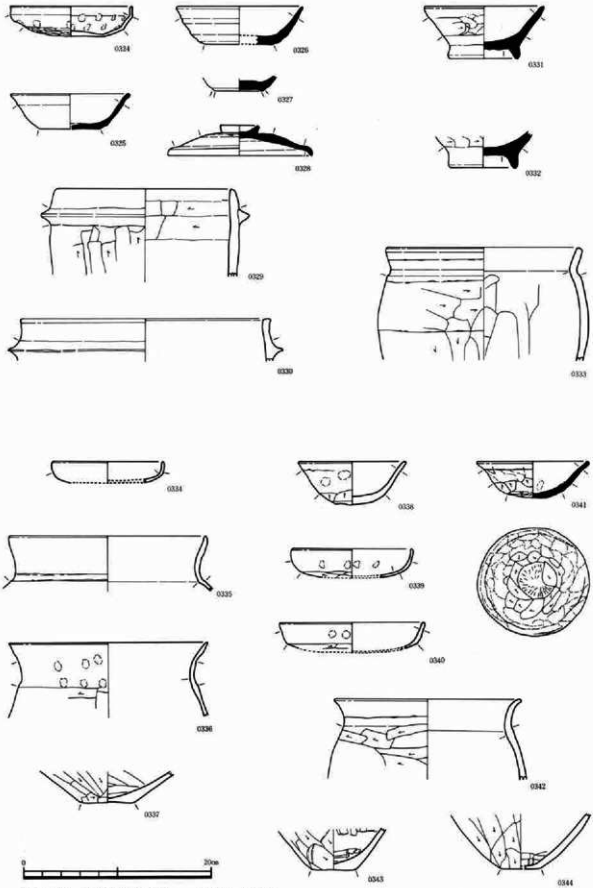
Fig・105　土器実測図（11）　SB052～SB058



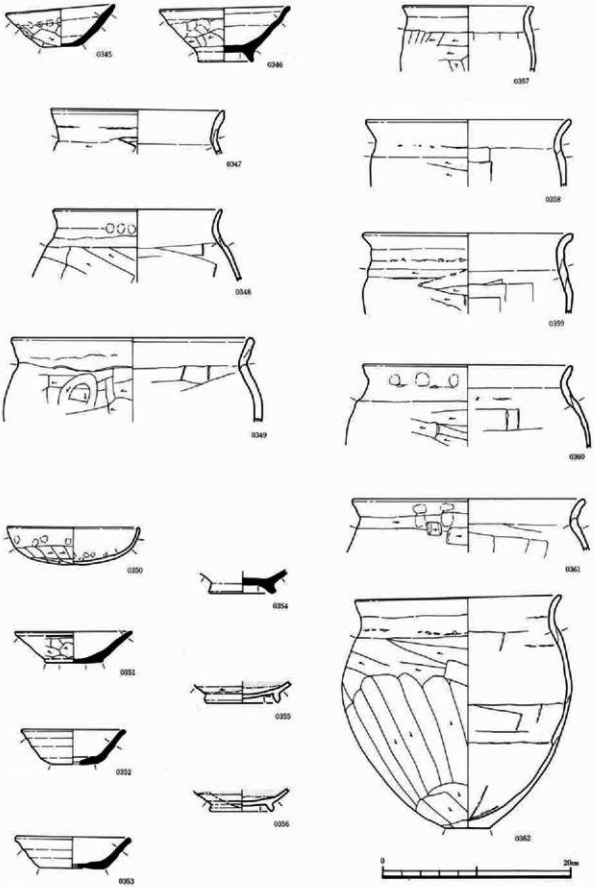
Fig・106　土器実測図（12）　SB059～SB060



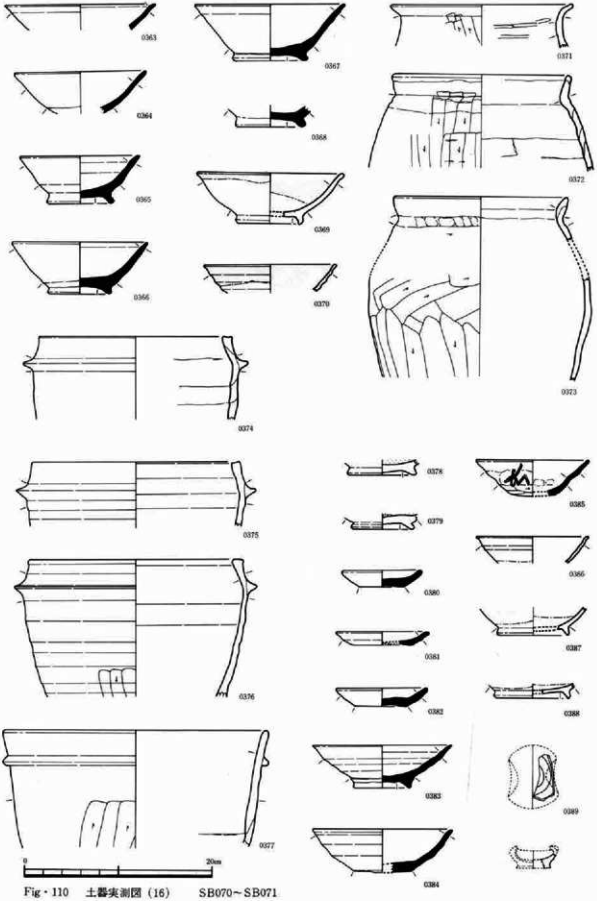
Fig・107　土器実測図 (13)　　SB061～SB063



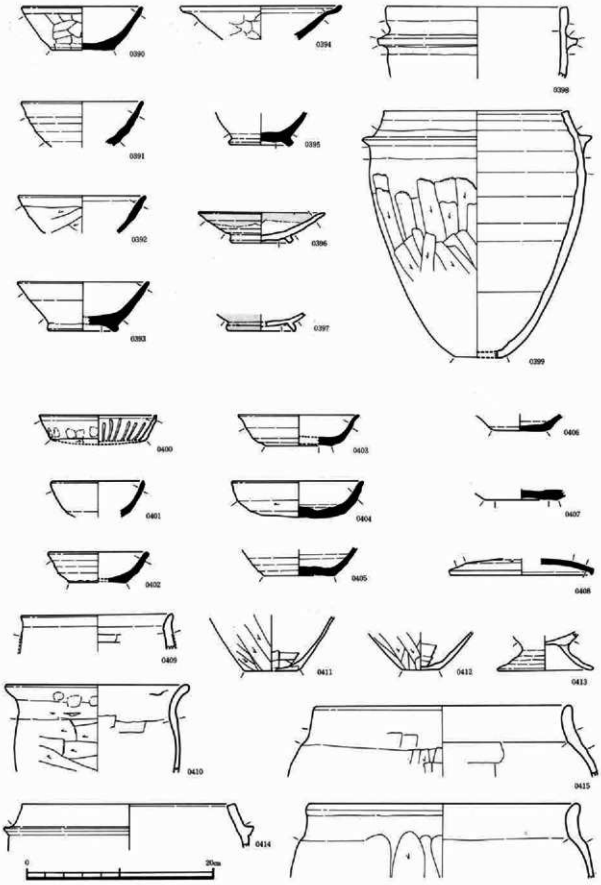
Fig・108　土器実測図（14）　SB064～SB067



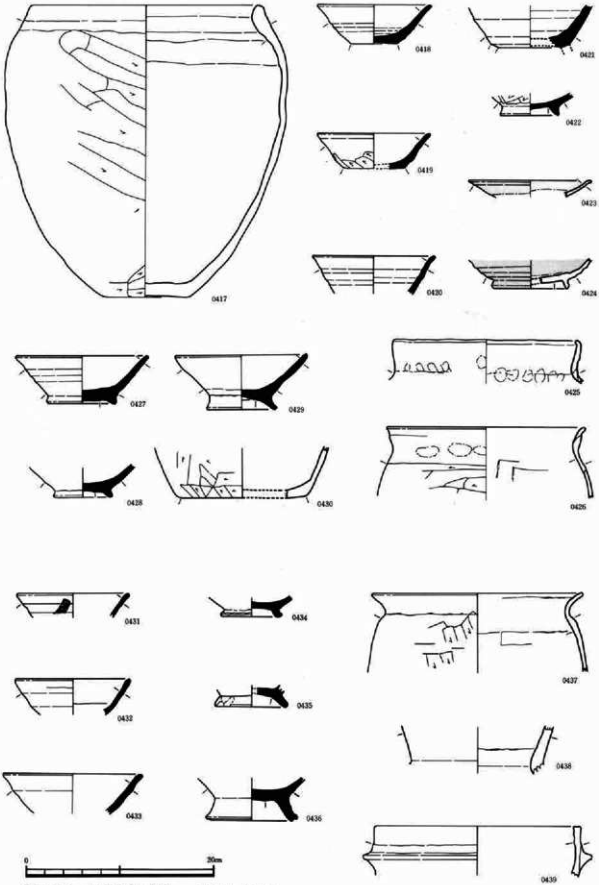
Fig・109　土器実測図（15）　SB068～SB069



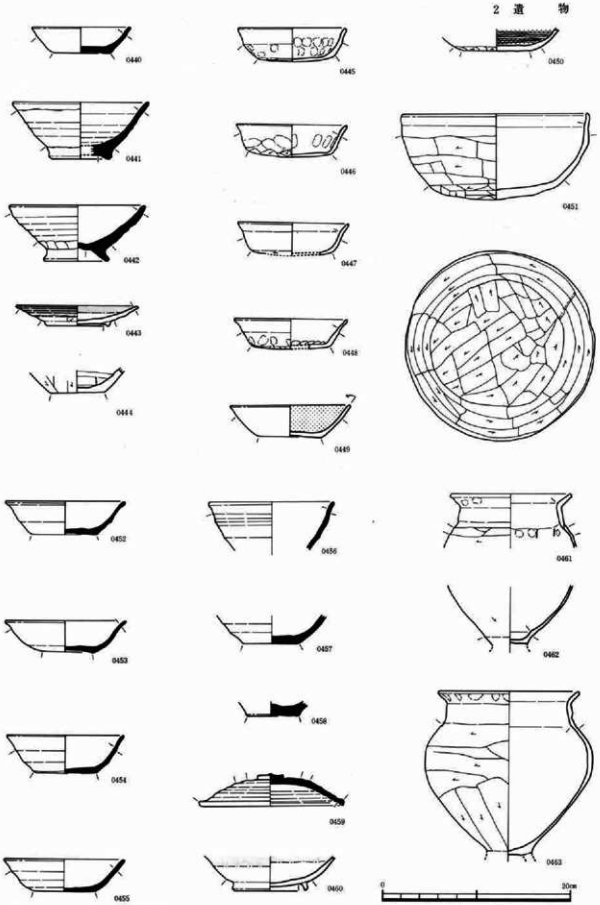
Fig・110　土器実測図（16）　SB070～SB071



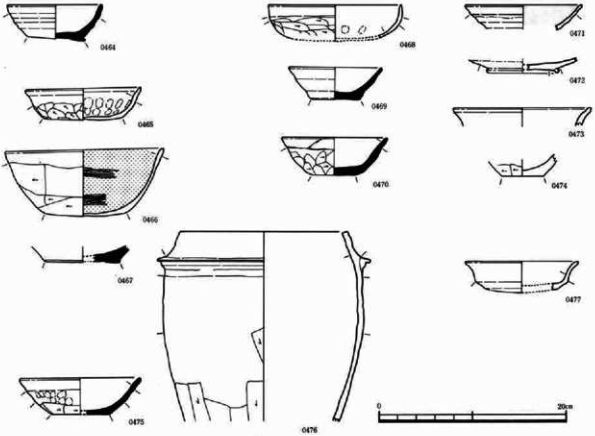
Fig・111　土器実測図（17）　SB072～SB073



Fig・112　土器実測図（18）　SB073～SB076



Fig・113　土器実測図（19）　SB077～SB078



Fig・114　土器実測図（20）　SB079～SB083

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0001 S B001 ○	杯 土師器	(2.5) (12.0) —	丸底の底部から直立して笑る口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁一体部写残存
0002 S B001 ●	杯 土師器	4.0 12.3 —	丸底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、短く立つ口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒を含む	浅黄橙　良好	写欠損
0003 S B001 ○	杯 土師器	— (14.4) —	丸部の底部から、内湾する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁～胴部写残存
0004 S B001 ○	杯 須恵器	3.5 13.1 6.6	一定した器厚の底部を持ち、屈曲気味に強く内湾して立ちあがり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　石回転ヘラ調整 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂含む	灰　良好	口縁～胴部写残存
0005 S B001 ○	杯 須恵器	— — 7.0	底部は厚く、腰部に凹面をもつ。	底部　外面　回転ヘラ切り 底部周辺磨滅	細砂含む	青灰　良好	ロクロ回転方向不明
0006 S B001 ●	甕 土師器	— (11.0) —	口縁部は外反し、端部で薄くなり沈線が入る。	胴部　外面　ヘラナデ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい黄橙　良好	口縁写残存から図上復元
0007 S B001 ●	甕 土師器	(15.3) 13.5 (6.3)	胴部は内湾気味に立ち上がり、やや球形を呈し、コの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	淡橙　良好	口縁～胴部一部、底部欠損
0008 S B001 ●	甕 土師器	— — 4.2	平な底部は内湾して立ち上がり、胴部は肩部に張りを持つ。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ	細砂多量含む	赤褐	底部～胴部のみ完形
0009 S B001 ●	甕 土師器	— (18.0) —	張りを持つ胴部から、直立気味の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・1mmの砂粒含む	橙　良好	口縁～胴部小片
0010 S B001 ●	甕 土師器	— (20.0) —	口縁部は強く外反し、端部で尖る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁部写残存
0011 S B001 ●	甕 土師器	— (20.3) —	はとんど張りを持たない胴部から強くくの字状に外反する口縁部に到る。	胴部　外面　横ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁部のみ写残存
0012 S B001 ●	甕 土師器	— — (4.0)	器肉の厚い小さい底部は、直線的に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ後ナデ 内面　ヘラナデ	砂粒含む	にぶい赤褐　良好	外面煤付着
0013 S B002 ●	杯 須恵器	3.7 (12.0) 7.1	器肉の薄い底部から絞り込みを持ちながら強く内湾して立ち上がり口縁部は肥厚する。	底部　外面　石回転ヘラ調整 胴部　外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	長石・雲石・砂粒等含む	青灰　良好	口縁～底部写残存
0014 S B003 ○	杯 須恵器	— (11.2) —	胴部は内湾しながら、外反気味の口縁部に到る。	胴部　外面　ロクロ目痕 内面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	灰褐　良好	口縁部のみ残存
0015 S B003 ●	台付椀 須恵器	7.0 (16.8) —	しっかりした高台を貼付する底部から屈曲して立ち上がり、直線的に口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂含む	外面灰 内面灰白　良好	口縁部写残存
0016 S B004 ●	杯 土師器	3.0 (14.8) —	扁平な丸底の底部は短かく内湾気味に立ち上がり、直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 同部　外面　指ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	明赤褐　良好	写残存
0017 S B004 ○	台付椀 須恵器	— (12.1) —	高台は欠損し、一定した器厚の底部からやや屈曲して立ち上がり、直線的に口縁部に到る。	高台部　欠損 底部　外面　回転糸切り後ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕	白色鉱物目立つ	灰　良好	一部欠損
0018 S B004 ○	杯 須恵器	3.5 12.7 6.6	ほぼ一定した器厚の底部から立ち上がり、直線的に開き強かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　石回転糸切り 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂粒含む	灰　良好	口縁部一部欠損 色調まだら
0019 S B004 ●	長頸壺 須恵器	— — 5.3	中央より器厚を増す底部は強く屈曲して立ち上がり、肩部で張る。	底部　外面　石回転糸切り 胴部　外面　下端ヘラケズリ←	細砂含む	青灰　良好	口縁部のみ欠損
0020 S B005 ○	杯 土師器	3.0 (15.0) (12.0)	丸底気味の底部から、内湾して立ち上がり、口縁端部で僅かに外反して終わる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・砂粒等含む	にぶい橙　良好	口縁～底部写残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0021 S B 005 ●	台付椀 土師器	— (12.4) —	内湾する胴部から、僅かに外反する薄い口縁部に到る。	胴部　外面　ロクロ目痕 内面　棒状ヘラ磨き 口縁部　横ナデ	軽石粒・赤褐色粒・砂粒含む	橙　良好	口縁～底部ほぼ残存内面黒色処理
0022 S B 005 ○	台付椀 須恵器	4.4 (13.0) 8.3	薄い高台を貼付する、一定した器厚の底部から、しっかりした立ち上がりで直線的に口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転ヘラ切り 胴部　ロクロ目痕	細砂含む	灰白　良好	口縁～底部ほぼ残存
0023 S B 005 ○	壺 須恵器	— (20.5) —	胴部は外方へ大きく開き、直に折れる口縁部に到る。	胴部　外面　ロクロ目痕 内面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂含む	外面褐灰　良好 内面にぶい橙	重ね焼き
0024 S B 005 ○	甕 土師器	— — (21.0)	口縁部は強く外反し、端部は尖る。	口縁部　横ナデ	赤褐色土・砂粒含む	明赤褐　良好	口縁部ほぼ残存
0025 S B 005 ○	甕 土師器	— — 5.0	平底の底部は、屈曲して直線的に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　下端ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ	細砂含む	橙　良好	底部のみ残存
0026 S B 006 ●	甕 土師器	— 12.6 4.0	内湾気味に立ち上がり、強く張り出す肩部を持つ胴部は、コの字状の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 内面　横ヘラナデ	細砂含む	橙　良好	胴部中位ほぼ完存
0027 S B 007 ●	杯 土師器	3.2 12.7 —	底部は丸底で腰部に張りを持ち、端部で内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ→ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁一部分欠損
0028 S B 007 ○	杯 土師器	(4.2) (12.2) —	丸底の底部から、腰部に張りを持ち、端部で僅かに尖り直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 腰部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁～底部ほぼ残存
0029 S B 007 ○	杯 土師器	5.4～5.8 14.9 9.8	丸底の底部は、やや直線的に立ち上がり、口縁部内面に面をもって終わる。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　ヘラケズリ← 口縁部　横ナデ	1mm程の黒雲母と茶色の砂粒含む	にぶ黄橙色　良好	口縁～胴部ほぼ欠損
0030 S B 007 ○	台付椀 土師器	— (15.2) —	丸底の底部から、内湾傾向を保ち僅かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	浅黄橙　良好	口縁～胴部ほぼ残存
0031 S B 007 ○	杯 土師器	4.5 (16.3) —	丸底の底部から内湾して立ち上がり僅かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　内外面　ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁～底部ほぼ残存 鉄分付着
0032 S B 007 ●	甕 土師器	— 21.8 —	やや丸味のある胴部は、強くくの字状に外反し、端部は尖る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	明赤褐　良好	口縁部ほぼ内外面鉄分付着
0033 S B 007 ●	甕 土師器	— (19.4) —	口縁部はくの字状に外反する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒を多量に含む	橙　良好	口縁小片
0034 S B 007 ●	甕 土師器	— (21.8) —	僅かに張りを持つ胴部から、くの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒を多量に含む	にぶい橙　良好	口縁部のみ残存
0035 S B 007 ●	甕 土師器	— (19.7) —	緩やかに張り出す胴部から、強く外反し端部で僅かに直立する。ややコの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	橙　良好	口縁部のみ残存
0036 S B 007 ●	甕 土師器	— (21.0) —	口縁部は直立して立ち上がり、上半で外反し、端部でやや立ち上がる。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　横ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色土・1mmの砂粒含む	橙　良好	口縁～胴部ほぼ残存
0037 S B 008 ○	台付椀 土師器	— (14.0) —	内湾する胴部から、外反気味に丸く窄まる口縁部に到る。	胴部　外面　下半ヘラケズリ← 上半指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁～胴部ほぼ残存
0038 S B 008 ●	台付椀 須恵器	6.0 (12.4) —	底部は緩やかに内湾して立ち上がり、やや外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂を多量に含む	橙　良好	高台部欠損
0039 S B 008 ●	台付椀 須恵器	— — 8.9	器高の高いしっかりした高台を貼付する底部は、内湾して立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 胴部　ロクロ目痕	赤褐色粒・砂粒含む	にぶい橙　良好	胴部内面に強いナデあり
0040 S B 008 ●	台付椀 須恵器	6.0 (13.6) 7.9	僅かに開く高台を貼付する器肉の厚い底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　右回転糸切り 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	橙　良好	横ナデ痕顕著

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0041 S B 008 ●	台付椀 須恵器	— — —	器高の高い椀やかに開く高台を貼付する底部は、強く内湾して立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　横ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕	赤褐色粒含む	橙　良好	胴内面に明瞭なナデあり
0042 S B 008 ○	甕 土師器	— (12.0) —	コの字状口縁。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	橙　良好	口縁与残存
0043 S B 008 ○	甕 土師器	— (19.0) —	丸味のある胴部は、強くくの字状に外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　横ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	橙　良好	口縁～胴部与残存
0044 S B 008 ●	甕 土師器	— (16.0) —	わずかに丸味を持つ胴部は、短く内傾する口縁部に到る。口縁端部は平坦で凹録。	胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・白色粒多量含む	橙　良好	口縁～胴部与残存
0045 S B 008 ●	羽釜 須恵器	— (19.8) —	胴部は直線的に立ち上がり、細長く水平に張り出す鍔部を貼付し、やや内傾する口縁部に到る。	胴部　外面　上半ロクロ目痕 下半ヘラケズリ↓ 内面　ロクロ目痕	砂粒含む	明褐　良好	底部欠損 内外面撥分付着
0046 S B 009 ●	台付椀 須恵器	5.0 11.9 6.1	僅かに開く高台を貼付する底部はしっかり立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	高台　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕	細砂含む	にぶい黄橙　良好	内面及び外面口縁部に油煙付着
0047 S B 009 ●	台付椀 須恵器	— — (7.0)	薄い高台を貼付し、胴部は内湾する。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り後ナデ 内面　ナデ	赤褐色粒含む	浅黄　良好	底部のみ完形
0048 S B 009 ●	台付椀 須恵器	— — 7.7	端部で丸い高台を貼付する厚いしっかりした底部は、内湾して立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り後ナデ 内面　ロクロ目痕	砂粒含む	にぶい橙　良好	底部のみ完形
0049 S B 009 ●	台付椀 須恵器	— — (7.4)	短い高台を貼付する一定した器厚の底部から、内湾して立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り	赤褐色粒・砂粒・軽石粒等含む	にぶい橙　良好	底部のみ完形
0050 S B 010 ○	台付椀 須恵器	— — 7.0	しっかりした高台は、厚い底部に貼付する。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 内面　ロクロ目痕	赤褐色粒含む	橙　良好	底部与残存
0051 S B 010 ○	壺 土師器	— (9.4) —	球形の胴部は、短く外傾する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ナデ(指) 口縁部　指オサエ後横ナデ	細砂含む	灰白　良好	口縁～胴部与残存、胴部煤付着
0052 S B 010 ○	甕 土師器	— — 6.0	厚くやや凹む底部から、屈曲して立ち上がり、胴部は大きく開く。	底部　外面　ナデ 胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	細砂含む	にぶい橙　良好	底部のみ
0053 S B 011 ●	杯 須恵器	2.8 (10.0) 6.1	平底の底部から、立ち上がり部で僅かに肥厚し、丸く終わる口縁部に到る。	底部　外面　回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒土粒含む	橙　良好	与残存
0054 S B 011 ●	杯 須恵器	— — (5.0)	僅かに凸面をなす底部から、強く内湾して立ち上がる。	底部　外面　石回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕	5mm大の石・赤褐色粒含む	にぶい黄橙　良好	底部～胴部中位まで残存
0055 S B 011 ●	台付椀 須恵器	4.5 11.6 6.8	大きく開く高台部を貼付する底部は、緩やかに内湾して立ち上がり外反する口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　糸切り後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	浅黄　良好	口縁部与欠損
0056 S B 011 ●	杯 須恵器	— (13.5) —	緩やかに内湾する胴部は、僅かに外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ロクロ目痕 内面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂含む	にぶい橙　良好	足高高台杯か
0057 S B 011 ●	台付椀 須恵器	— — (8.0)	しっかりした高台を貼付する。器肉の厚い底部から緩やかに立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕	軽石・赤褐色砂粒含む	橙　良好	
0058 S B 011 ●	台付椀 須恵器	— — —	器高の高い高台を貼付する。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　ナデ 内面　ロクロ目痕	赤褐色粒・軽石粒・砂粒含む	にぶい橙　良好	高台の接合雑である。
0059 S B 011 ○	小型瓶 灰釉	— — —	胴部はいちじく形を呈し、強く外反する口縁部に到るのではないか	頸部　外面　ロクロ目痕 内面　ロクロ目痕	精選された胎土	灰　良好	頸部与残存 施釉
0060 S B 011 ●	甕 土師器	— — —	厚くしっかりした底部から、肥厚して立ち上がる。	底部　外面　調整なし 胴部　外面　ヘラケズリ↑ 内面　ヘラナデ	細砂含む	橙　良好	底部のみ残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0061 S B012 ●	杯 土師器	(2.9) (15.8) ——	扁平な丸底の底部から、内湾して立ち上がり、直立する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	白色粒石・砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁～胴部½残存
0062 S B012 ●	杯 土師器	(3.8) (15.2) ——	丸底の底部から強く内湾して立ち上がり、直立する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 内面　横ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	½残存
0063 S B012 ●	甕 土師器	—— (20.0) ——	口縁部は、くの字状に外反する。	胴部　外面　上位ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	橙　良好	口縁～胴部½残存
0064 S B012 ●	甕 土師器	—— (19.6) ——	丸味のある胴部は、僅かに外側し端部で実る口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁～胴部上半残存
0065 S B013 ●	杯 土師器	(3.2) 13.2 ——	丸底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、短く外反する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ→ 胴部　外面　指ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	完形 外面に鉄分付着
0066 S B013 ●	杯 土師器	(2.9) (14.4) ——	平底気味の底部から、強く内湾して立ち、直線的に外反し、端部で僅かに内傾する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 内面　横ナデ	細砂含む	橙　良好	½残存
0067 S B013 ●	杯 土師器	(2.8) (13.2) ——	扁平な丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、直立する口縁部に到る。口縁端部外面に凹みを持つ	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	1/4残存
0068 S B013 ●	杯 土師器	2.9 (15.2) ——	扁平な丸底の底部から、強く内湾して立ち上がり、尖り気味の口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	明赤褐　良好	½残存
0069 S B013 ○	蓋 須恵器	—— —— 4.8	環状つまみ。	つまみ　横ナデ	細砂含む	オリーブ灰　良好	つまみ部分のみ残存
0070 S B013 ●	台付甕 土師器	—— —— (7.7)	台部はハの字状に開く。	台部　外面　ハケメ 内面　下半ハケメ 上半指オサエ	細砂・赤褐色粒含む	赤褐　良好	胴部のみ残存
0071 S B013 ●	台付甕 土師器	—— —— ——	台部を持つ底部は、内湾して立ち上がり、胴部は球形を呈す。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁～脚部欠損
0072 S B013 ●	甕 土師器	—— (20.6) ——	口縁部は直線的に立ち上がり、上部で強く外反し、端部は尖る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁部½残存
0073 S B013 ●	甕 土師器	—— (21.0) ——	口縁部は強くくの字状に外反する	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	赤橙　良好	小片
0074 S B013 ●	甕 土師器	—— 20.8 ——	長胴形を呈する胴部は、くの字状に外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂多く含む	橙　良好	口縁～胴部中位残存
0075 S B014 ●	杯 須恵器	3.8 (14.0) (6.8)	一定した器厚の底部から屈曲して立ち上がり、胴部は僅かに内湾傾向を保ち口縁部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・細砂含む	灰褐　良好	口縁～胴部½
0076 S B014 ●	甕 土師器	—— (20.4) ——	口縁部は、コの字状を呈し、端部に沈線が入る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色土・1mmの砂粒含む	橙　良好	口縁部½残存
0077 S B015 ●	皿 須恵器	2.5 14.0 6.4	中央より器厚を増す底部から、緩やかに内湾して立ち上がり、丸く肥厚する端部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	砂粒含む	灰褐　良好	口縁部½残存
0078 S B015 ●	甕 土師器	—— (18.6) ——	張りのある胴部は、コの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色土粒含む	明黄褐　良好	口縁部½残存 鉄分付着
0079 S B015 ●	甕 土師器	—— —— (21.2)	張りを持たない胴部から、ややコの状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色土砂粒含む	浅黄橙　良好	口縁～胴部½残存
0080 S B016 ●	台付鉢 須恵器	5.0 13.2 7.0	厚く短い高台を貼付する底部は、大きく内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り後ナデ 胴部　外面　ロクロ目痕	細砂含む	明褐　良好	高台低く歪みあり

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0081 S B016 ●	台付椀 — — 須恵器	— — 6.6	短い高台を貼付する。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 回転糸切り 内面 ロクロ目痕	輝石・赤褐色粒・砂粒含む	にぶい橙 良好	底部のみ残存
0082 S B016 ●	甕 — — 土師器	— — (8.3)	しっかりした底部から肥厚して立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ロクロ目痕	砂粒含む	にぶい黄褐 良好	底部のみ残存
0083 S B017 ●	台付椀 — (13.6) 土師器	— — —	高台を貼付する一定した器厚の底部から、緩やかに立ち上がり、直線的に口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	細砂含む	橙 良好	高台部与欠損
0084 S B017 ●	足高椀 — 須恵器	— — (11.0)	器高の高い高台は、緩やかにハの字状に開き、器肉の薄い底部に貼付する。	高台部 横ナデ 底部 外面 回転糸切り 内面 ロクロ目痕	細砂含む	にぶい褐 良好	
0085 S B017 ●	甕 — 土師器	— (18.5) —	張りのある胴部から、直立気味の口縁部に到る。	胴部 外面 荒いロクロ目痕 内面 ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい赤褐 良好	口縁部与残存
0086 S B017 ●	羽釜 — 須恵器	— (28.0) —	直線的に外傾する胴部は、断面三角形で水平に張り出す鍔を貼付し直立気味に立ち上がる。	胴部 外面 横ナデ 内面 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	細砂含む	淡黄 良好	口縁～胴上部与残存 口唇平坦
0087 S B018 ●	杯 12.7 土師器	3.0 — —	丸底の底部は強く内湾して立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ 口縁部 横ナデ	細砂含む	橙 良好	完形
0088 S B018 ●	杯 (12.6) 土師器	(3.3) — —	丸底の底部から、内湾して立ち上がり、僅かに内傾する口縁部に到る。	底部 外面 手持ちヘラケズリ 胴部 外面 手持ちヘラケズリ 口縁部 横ナデ	細砂含む	橙 良好	口縁～底部与残存
0089 S B018 ●	杯 13.0 須恵器	3.3 — 7.7	底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。	底部 外面 右回転糸切り、周縁部ヘラケズリ調整	細砂含む	灰黄 良好	完形 内外面鉄分付着
0090 S B018 ○	壺 — 須恵器	— 10.2 —	張りのある胴部は、短く外反する口縁部に到る。口縁端部は尖る。	胴部 外面 ロクロ目痕 内面 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	細砂含む	灰 良好	口縁部与残存
0091 S B018 ○	甕 (18.6) 土師器	— — —	器肉の薄い口縁部は、コの字状を呈す。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	細砂を多量含む	橙 良好	口縁部小片
0092 S B018 ●	甕 — 土師器	— — 4.4	小さい平底の底部は、外方へ開き気味に直線的に立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ↓ 内面 ヘラナデ	細砂含む	明赤褐 良好	胴部下位～底部与残存
0093 S B018 ●	甕 20.9 土師器	— — —	やや丸味を持つ胴部は、直立して立ち上がり、端部で強く外反する口縁部に到る。	胴部 外面 上位ヘラケズリ← 中位ヘラケズリ← 内面 横ヘラナデ	赤褐色粘土粒・紅物粒・輝石含む	橙 良好	口縁部与～胴部一部残存
0094 S B019 ●	杯 11.8 土師器	3.0 — —	丸底の底部は、僅かに屈曲して立ち上がり口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オデ 口縁部 横ナデ	細砂含む	橙 良好	口縁一部欠損
0095 S B019 ○	台付杯 — 須恵器	— — 7.3	しっかりした高台を貼付する底部は、強く内湾して立ち上がる。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 右回転糸切り 胴部 内外面 ロクロ目痕	小石多量含む	灰 良好	胴部～高台残存
0096 S B019 ●	小瓶 — 灰釉	— 5.2 —	やや張り を持つ胴部は、直線的に長く立ち上がり、外反しつまみあげ口縁部に到る。	胴部 外面 ロクロ目痕 内面 ロクロ目痕	精選された中に砂粒含む	灰 良好	原始灰釉
0097 S B020 ○	椀 16.4 灰釉	— — —	内湾する胴部から端部で僅かに外反する口縁部に到る。	胴部 外面 上半ロクロ目痕 下半回転ヘラケズリ 口縁部 横ナデ	黒色斑点	灰 良好	口縁部与 流け掛け 焼きはせ有
0098 S B020 ●	甕 (17.0) 土師器	— — —	やや張りのある胴部は、緩やかに外反し、端部に沈線の入る口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	細砂・赤褐色粘土粒含む	橙 良好	口縁部与残存
0099 S B021 ●	杯 (13.8) 須恵器	— — —	直線的な胴部から、尖り気味の口縁部に到る。	胴部 外面 ロクロ目痕 内面 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	赤褐色粘土粒・輝石砂粒含む	黄灰 良好	口縁～胴部与残存
0100 S B021 ○	台付椀 — 土師器	3.6 — (7.0)	小さい三角形の高台を貼付する底部は、内湾して立ち上がり、上部で緩やかに外反する。	高台部 付高台 横ナデ 底部 内外面 ナデ 胴部 内外面 ナデ	細砂含む	橙 良好	与残存 生地は硬質である

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高/口径/底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0101 SB021 ●	台付椀 —— 須恵器	—— —— 8.8	高台は緩やかに開き、中央で器肉の薄くなる底部に貼付する。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　ナデ 内面　ナデ	赤褐色粒・砂粒含む	にぶい橙　良好	高台底部指頭圧痕あり
0102 SB021 ○	台付甕 土師器	17.0 (13.5) (10.2)	開く台部を持つ底部は、内湾して立ち上がり、胴部は球形を呈し、ややコの字状に口縁部に到る。	底部　外面　横ナデ 内面　ヘラナデ 胴部　外面　ヘラケズリ	細砂を多量に含む	にぶい赤褐　良好	口縁一台部与欠損
0103 SB021 ○	羽釜 須恵器	—— (22.1) ——	やや内湾する胴部は、鍔長く水平に張り出す鍔部を貼付し、直立気味の口縁部に到る。	胴部　外面　上半ロクロ目痕 下半ヘラケズリ↓	1mmの砂粒含む	淺黄　良好	外面の胴部下半に煤付着
0104 SB022 ●	杯 土師器	—— (14.0) ——	平底気味の底部から内湾して立ち上がり、僅かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	にぶい橙　良好	底部ー口縁部与残存
0105 SB022 ○	杯 土師器	(3.6) (16.0) (10.6)	扁平な丸底の底部から内湾して立ち上がり、直線的に開き、端部で内傾する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 内面　タテハラミガキ 口縁部　横ナデ	黒雲母・輝石・砂粒含む	橙　良好	内面棒状タテハラミガキ
0106 SB022 ●	杯 須恵器	3.8 13.7 8.0	底部外面に四凸を持ち、緩やかに内湾して立ち上がり口縁部に到る。	底部　外面　回転糸切り、周辺部回転ヘラ調整 胴部　ロクロ目痕	細砂含む	灰褐　良好	口縁部一部欠損
0107 SB022 ●	杯 須恵器	3.5 13.6 (8.4)	全体に一定した器厚を保ち、緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。	底部　外面　回転糸切り、周辺左回転ヘラ調整 胴部　ロクロ目痕	細砂含む	明褐　良好	与残存
0108 SB022 ●	杯 須恵器	3.5 13.2 8.0	平底の底部は、屈曲気味に立ち上がり、直線的に開く口縁部到る。	底部　外面　回転糸切り後右回転ヘラ調整 口縁部　横ナデ	細砂含む	にぶい橙　良好	与残存 内外面鉄分付着
0109 SB022 ●	杯 須恵器	—— —— (7.1)	中央より器肉を増す底部は、強く内湾して立ち上がる。杯より幅に近い。	底部　外面　手持ちヘラケズリか	赤褐色粒・砂粒含む	にぶい橙　良好	体部ー底部与残存 全体に磨滅
0110 SB022 ●	台付椀 須恵器	4.3 14.2 9.1	しっかりした高台を貼付する器肉の厚い底部は強く屈曲して立ち上がり、直線的に口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕	細砂含む	外面明青灰 内面灰白	良好　底部厚い
0111 SB022 ●	椀 土師器	—— (21.8) ——	やや張りを持つ胴部から、くの字状に外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	にぶい橙　良好	口縁部下半内外面に指頭痕あり
0112 SB022 ●	椀 土師器	—— (21.1) ——	張りのある胴部からややコの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	明赤褐　良好	口縁部与残存
0113 SB022 ●	椀 土師器	—— (21.8) ——	丸味のある胴部は、コの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	にぶい赤褐　良好	口縁ー胴部与残存
0114 SB023 ●	杯 土師器	(3.4) (13.7) (9.0)	丸底気味の底部は、屈曲して立ち上がり、端部で僅かに内湾する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁部与
0115 SB023 ●	杯 土師器	(3.1) (11.8) ——	丸底気味の底部から、強く内湾して立ち上がり、肥厚しやや内湾気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	底部は削られて薄い
0116 SB023 ●	杯 須恵器	3.3 (12.3) 5.9	内面に四凸をもつ底部から絞り込みを持ちながら内湾して立ち上がり口縁部に外反する。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	茶褐色砂粒・1mm小石含む	灰　良好	口縁一底部与残存
0117 SB023 ○	杯 須恵器	3.4 14.2 7.3	平底の底部は、屈曲気味に立ち上がり、外反する口縁部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	4mmの砂粒含む	黄灰　硬質	与残存　底部糸切りがだぶる
0118 SB023 ●	杯 須恵器	(3.5) (13.5) 7.4	やや厚く一定した器厚から屈曲して立ち上がり、直線的に開き、口縁部に到る。	底部　外面　回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂含む	灰白　良好	小片
0119 SB023 ●	台付椀 須恵器	—— —— 7.6	しっかりした高台を貼付する底部は、内湾して立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　糸切り後ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕	酸化鉄含む	淺黄橙　良好	高台部指頭痕状のくぼみあり
0120 SB023 ○	蓋 須恵器	2.0 16.8 ——	つまみを持たない平坦な天井部は大きく外方へ開き、短く直に下に折れ肥厚して縁る口縁部に到る。	天井部　外面　右回転糸切り 体部　外面　上半回転ヘラ調整	砂粒を多く含む	灰　良好	与残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0121 S B023 ●	甕 土師器	— (16.6) —	口縁部は直線的に立ち上がり、上部外面に段を持ち強く外反し端部に沈線入る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁部片残存
0122 S B023 ●	甕 土師器	— (20.3) —	コの字状に口縁部は、端部に沈線が入る。	口縁部　横ナデ	黒雲母・白色砂粒含む	明赤褐　良好	口縁部片残存
0123 S B024 ●	杯 土師器	3.5 12.2 —	平底気味の底部から強く内湾して立ち上がり、端部で僅かに直立する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	にぶい橙　良好	口縁部片残存
0124 S B024 ○	杯 土師器	— (15.2) —	丸底の底部から、腰部は緩やかに張り僅かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	細砂含む	明赤褐　良好	口縁部小片
0125 S B024 ○	杯 須恵器	— (12.5) —	僅かに内湾する胴部から、そのまま垂直に口縁部に到る。	胴部　外面　ロクロ目痕 　　内面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	微細砂粒含む	灰白　良好	口縁部片残存
0126 S B024 ●	甕 土師器	— (24.3) —	口縁部は緩やかに外反する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 　　内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	明赤褐　良好	口縁部片残存　内外面鉄分付着
0127 S B024 ●	甕 土師器	— — (6.9)	丸底気味の底部は、大きく外方へ開きながら立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ↘ 　　内面　ヘラナデ	細砂含む	橙　良好	胴下部～底部片残存
0128 S B024 ●	甕 土師器	— — 6.5	内面に凹凸を持つ平底の底部から緩やかに立ち上がり、胴部は丸味を持つ。	胴部　外面　下半ヘラケズリ↓ 　　下半ヘラケズリ← 　　内面　ヘラナデ	細砂を多量に含む	橙　良好	底部のみ残存 表面磨耗
0129 S B025 ●	台付甕 土師器	20.5 (12.9) (6.5)	底部は直線的に内湾して立ち上がり、胴部中位に最大径を持ち、コの字状の口縁部に到る。	台部　横ナデ 底部　外面　横ナデ 胴部　外面　ヘラケズリ	砂粒を多量に含む	橙　良好	台部一部分欠損
0130 S B026 ●	甕 須恵器	4.0 13.0 6.8	平底の底部は、緩やかに立ち上がり、やや直立する器肉の薄い口縁部に到る。口唇内湾気味。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	小石含む	灰白　良好	口縁～底部片残存 種痕あり
0131 S B026 ○	杯 須恵器	— (13.2) —	胴部は内湾し、短く外反し肥厚して、丸く終る口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	砂粒含む	黒　良好	焼
0132 S B026 ●	台付椀 須恵器	— — (6.9)	短く開く高台を貼付する底部は、やや内湾気味に立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　右回転糸切り 胴部　ロクロ目痕	砂粒含む	灰白　良好	胴下部片～底部、高台部片残存
0133 S B026 ●	壺 須恵器	— — —	僅かに張る肩部を持つ。	胴部　ロクロ目痕	細砂含む	灰　良好	体部小片
0134 S B027 ●	甕 土師器	— (16.2) —	口縁部は、直立気味に立ち上がり、上部で強く外反する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 　　内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁部片残存
0135 S B027 ●	甕 土師器	— (20.2) —	口縁部はコの字状を呈し、端部で短く立ち上がる。	胴部　外面　ヘラケズリ← 　　内面　ヨコナデヘラナデ 口縁部　横ナデ	2mmの砂粒含む	橙　良好	口縁～胴部片残存
0136 S B028 ●	杯 須恵器	3.5 (12.7) (6.6)	平底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、外反する口縁部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	砂粒含む	灰白　良好	底部～口縁部片残存
0137 S B029 ○	杯 須恵器	3.4 (13.8) (7.9)	一定した器厚の底部から絞り込みを持ちながら強く屈曲して立ち上がり、直線的に開き口縁部に到る。	底部　外面　切り離し後右回転 　　ヘラ調整	細砂含む	灰白　良好	片残存 周辺ヘラ調整か
0138 S B029 ○	壺 須恵器	— (18.7) —	大きく外方へ開く胴部は、短く直に折れる口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂含む	灰白　良好	小破片
0139 S B029 ●	甕 土師器	— (14.0) —	丸味を持つ胴部は、コの字状の口縁部に到り、端部で短く立ち上がる。	胴部　外面　ヘラケズリ↖ 　　内面　ヨコナデヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	淡赤橙　良好	口縁部片残存
0140 S B030 ●	杯 土師器	3.5 12.6 —	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	黒雲母・砂粒含む	橙　良好	ほぼ完形 口縁部に煤付着

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0141 S B030 ●	甕 土師器	— (22.4) —	口縁部は強く外反する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 外反　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	軽石粒・紅物質粒・雲砂含む	橙　良好	口縁部までヘラケズリ痕残る↘
0142 S B030 ●	甕 土師器	— — 4.4	小さい平底の底部は、直線的に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ↘ 内面　ヘラナデ	赤褐色粘土粒・軽石粒・紅物質粒含	にぶい橙　良好	胴部一底部の一部残存 底部黒斑
0143 S B031 ●	杯 土師器	3.3 13.2 —	丸底の底部は、強く屈曲気味に内湾して立ち上がり、口縁部端部で短く内傾する。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　無調整 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	部分的に指頭痕残す
0144 S B031 ●	杯 土師器	3.4 12.4 —	扁平な丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、やや外反する短い口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒・ガラス質紅物含む	橙　良好	完形
0145 S B031 ●	杯 土師器	3.3 12.2 —	丸底は、強く内湾して立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂を多く含む	橙　良好	口縁部写欠損
0146 S B031 ●	杯 土師器	(2.5) (14.0) —	扁平な丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、端部の尖る口縁部に到る。器内は薄い。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	赤褐色砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁一底部残存
0147 S B031 ○	杯 須恵器	3.3 (12.4) (6.2)	一定した器厚の平底の底部からつ屈曲気味に強く内湾して立ち上がり、口縁部に到る。	底部　外面　切り離し後回転ヘラ調整 胴部　外面　ロクロ目痕	細砂含む	灰白　良好 黒色斑点含む	口径の復元困示は小さめ
0148 S B031 ●	台付杯 須恵器	— — (9.6)	器肉の厚い底部は、貫通で短い高台を貼付する。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転ヘラ切り後回転ヘラ調整	細砂含む	灰白　良好	底部のみ残存
0149 S B031 ●	甕 土師器	— 19.9 —	僅かに丸味のある胴部から緩やかに外反するする口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	鉱物粒・軽石粒含む	明赤褐　良好	口縁部写残存
0150 S B031 ●	甕 土師器	— (20.7) —	強く張る胴部は、コの字状をし、端部で短く立ち上がる口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヨコヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁一胴部一部分残存
0151 S B032 ○	杯 土師器	3.6 11.7 —	丸底気味の底部は、屈曲気味に立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	精選されている	明赤　良好	ほぼ完形 内外面黒分付着
0152 S B032 ○	杯 土師器	(2.7) (14.9) —	扁平な丸底の底部は、屈曲気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部　外面　ヘラケズリ→ 胴部　外面　指ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	にぶい橙　良好	口縁一体部写残存
0153 S B032 ○	杯 土師器	(3.7) (15.3) —	丸底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。口縁端部に沈線入る。	底部　外面　ヘラケズリ→ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	口縁部写残存
0154 S B032 ○	杯 須恵器	(3.8) (12.0) (7.0)	厚い平底の底部は、強く屈曲して立ち上がり、外面の胴部上位に凹面を持ち、丸く終る口縁部に到る	底部　外面　切り離し後回転ヘラ調整 胴部　内外面　ロクロ目痕	細砂含む	青灰　良好	口縁一底部写残存
0155 S B032 ○	台付杯 須恵器	— — —	底部は器肉が一定で高台を貼付する。	底部　外面　磨耗 内面　ロクロ目痕	細砂含む	褐灰　良好	底部小片
0156 S B033 ●	杯 土師器	2.8 (12.7) —	丸底気味の底部は、強く内湾して立ち上がり短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ→ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	写残存
0157 S B033 ●	杯 須恵器	3.6 12.8 8.2	平底の底部は、強く内湾して立ち上がり、緩やかに外反して端部で短く直立する口縁部に到る。	底部　外面　回転糸切り、周縁右回転ヘラ調整 胴部　内外面　ロクロ目痕	細砂含む	灰　良好	ほぼ完形 内外面に火襷痕あり
0158 S B033 ●	杯 須恵器	3.7 (13.8) (8.4)	厚くしっかりした底部から屈曲して立ち上がり口縁部に到る。	底部　外面　回転糸切り後周縁回転ヘラ調整 胴部　外面　ロクロ目強く残す	小石含む	オリーブ灰　良好	口縁一底部一部残存
0159 S B033 ●	甕 土師器	— (21.0) —	口縁部は、強くくの字状に外反する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	砂粒を多量に含む	灰褐　良好	口縁部写残存
0160 S B033 ●	甕 土師器	— — (4.0)	平底の小さい底部は、やや直線的に立ち上がる。	胴部　外面　ヘラケズリ後ヘラナデ 内面　ヘラナデ	赤褐色土・2mmの砂粒含む	外面にぶい褐　内面橙　良好	底部一胴部写残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0161 S B034 ○	杯 土師器	2.8 12.4 —	丸底の四凸のある底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、短く直立し端部が尖って終る口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ 内面 指オサエ後ナデ	細砂含む	橙 良好	底面を中心に磨滅が激しい
0162 S B034 ●	杯 土師器	2.8 13.6 —	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、短く立ち上がる口縁部に到る。稜平。	底部 外面 ヘラケズリ→ 胴部 外面 指オサエ 口縁部 横ナデ	細砂含む	にぶい橙 良好	完形
0163 S B034 ●	杯 土師器	3.1 13.3 —	丸底から、緩やかに内湾して立ち上がり、短かく直立する口縁部に到る。口唇部は尖る。	底部 外面 ヘラケズリ→ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	黒色ガラス質鉱物含む	淡橙 良好	ほぼ完形
0164 S B034 ○	須恵器	3.0 14.2 —	広い底部から絞り込みを持ちながら強く内湾して立ち上がり、口縁部で優かに立つ。	底部 外面 切り離し後石回転ヘラ調整 口縁部 横ナデ	細砂含む	灰白 良好	3/4残存
0165 S B034 ○	甕 土師器	— (21.4) —	口縁部は強く外反する。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	細砂含む	にぶい橙 良好	口縁部一部残存
0166 S B034 ●	甕 土師器	— (21.0) —	やや丸味のある胴部は、緩やかに外反し、端部で強く外傾する口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	細砂含む	にぶい橙 良好	口縁部一部残存 外面鉄分付着
0167 S B034 ●	甕 土師器	— (21.0) —	丸味を持つ胴部は、強くくの字状に外反する口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ 内面 横ヘラナデ 口縁部 横ナデ	細砂含む	淡橙 良好	口縁～胴部残存
0168 S B034 ○	甕 土師器	— (23.0) —	口縁部は直立に立ち上がり、端部で短く外反する。	胴部 外面 ヘラケズリ←	細砂含む	橙 良好	口縁部一部残存
0169 S B035 ●	杯 土師器	3.4 12.2 —	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり短く内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	細砂含む	淡赤橙 良好	3/4残存
0170 S B035 ●	杯 土師器	2.8 12.7 —	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、口縁端部で短く内傾する。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	細砂含む	にぶい橙 良好	3/4残存
0171 S B035 ●	杯 須恵器	3.35 (13.7) 7.7	一定した器厚の底部から絞り込みを持ちながら強く屈曲して立ち上がり優かに外反する口縁に到る。	底部 外面 切り離し後回転ヘラ調整 胴部 ロクロ目痕	細砂含む	灰白 良好	3/4残存
0172 S B035 ○	須恵器	— — (7.2)	平底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	底部 外面 右回転赤ヘラ調整 内面 ロクロ目痕	砂粒含む	にぶい黄橙 良好	底部3/4残存
0173 S B035 ●	杯 須恵器	— — (7.7)	平底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	底部 外面 全面右回転ヘラ調整	細砂含む	灰白 良好	胴下部～底部3/4
0174 S B036 ○	杯 土師器	— (13.0) —	丸底の底部は、外稜を持って緩やかに内湾し、口縁端部で短く立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁部3/4残存
0175 S B037 ○	杯 土師器	(2.8) (10.8) —	平底気味の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、強く外反する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ↑ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	浅黄橙 良好	口縁～底部3/4残存
0176 S B037 ○	杯 土師器	(4.3) (12.5) —	扁平な丸底の底部は、屈曲し直線的に立ち、緩やかに外反して端部で短く直立する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ← 口縁部 横ナデ	鉱物・軽石粒含む	橙 良好	3/4残存
0177 S B037 ○	杯 須恵器	— — (7.8)	器肉の厚い平底の底部は、緩やかに立ち上がる。	底部 外面 右回転赤切り	赤褐色粒・砂粒含む	表面にぶい黄橙 断面にぶい橙 良好	底部3/4残存
0178 S B037 ○	台付鉢	— — (8.6)	内面が内湾する高台を貼付する底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	高台部 付高台 横ナデ	2～3mmの白色石を含む	青灰 良好	3/4残存
0179 S B037 ●	瓶 須恵器	— — 4.7	平底の底部は、直線的に立ち上がり、長胴形を呈す底部から胴部下位の器肉は厚い。	底部 外面 回転赤切り 内面 強いロクロ目痕 胴部 外面 下位回転ヘラ調整	小石含む 黒色斑点目立つ	灰 良好	胴部外面に指紋が数ケ所見える
0180 S B037 ●	壺 須恵器	3.5 (17.3) (3.7)	瓶状つまみを貼付する天井部は、緩やかに外方へ開き、短く直に折れる口縁部に到る。	体部 外面 回転ヘラ調整	石英・小石 赤褐色結土粒含む	灰白 良好	ほぼ完形

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0181 S B 037 ○	壺 須恵器	—— (15.6) ——	大きく外方へ開く胴部は、ほぼ水平になり、丸く折れる口縁部に到る。	天井部　外面　回転ヘラ調整 内面　ロクロ目痕 胴部　内外面　ロクロ目痕	細砂含む	暗緑灰　良好	小破片
0182 S B 037 ○	甕 土師器	—— (17.9) ——	口縁部はコの字状を呈す。	胴部　外面　ヘラケズリ〜 内面　ヘラナデ 口縁部　指オサエ後横ナデ	赤褐色粘土粒・雲石含む	にぶい橙　良好	口縁部写残存
0183 S B 037 ●	甕 土師器	—— (18.6) ——	口縁部は、ややコの字状をし、端部で短く立ち上がり、内面に稜を作る。	口縁部　横ナデ	赤褐色土含む	橙　良好	口縁部写残存
0184 S B 037 ●	甕 土師器	—— (20.6) ——	丸味のある胴部は、コの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	鉱物質粒・白色石を含む	赤橙　良好	口縁写残存 内外面鉄分付着
0185 S B 037 ○	甕 土師器	—— 20.4 ——	直線的に立ち上がる胴部は、上位に最大径を持ち、ややコの字状をなす口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	淡赤橙　良好	口縁写残存 胴部中位に煤付着
0186 S B 037 ○	甕 須恵器	—— —— (12.8)	高台の剥落したと考えられる底部から立ち上がり、やや肥厚する。	胴部　外面　ヘラケズリ	赤褐色土・1mmの砂粒含む	灰　良好	胴部〜底部写残存
0187 S B 037 ●	甕 土師器	—— (22.0) ——	稜かに肩部を持つ丸味のある胴部は、コの字状をし、端部で短く立ち上がる口縁部に到る。	胴部　外面　上位ヘラケズリ← 中位ヘラケズリ↓ 内面　横ナデ	赤褐色粘土粒・鉱物粒石含む	橙　良好	口縁〜胴部 中位写残存
0188 S B 037 ○	台付甕 土師器	—— —— (10.0)	円盤形の台部を持つ底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	台部　横ナデ 胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	鉱物粒含む	橙　良好	台部〜胴部 写残存
0189 S B 037 ●	甕 土師器	—— —— (4.4)	小さい平底の底部は、やや内湾気味に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ↓ 内面　ヘラナデ	1mmの砂粒含む	橙　良好	底部〜胴部 写残存 外面煤付着
0190 S B 038 ●	杯 土師器	3.1 12.3 8.2	平底気味の底部は、立ち上がり部で器厚が薄くなり、直線的に立ち上がり、口縁端部で短く内傾する	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　無調整 口縁部　横ナデ	細砂含む	淡赤橙　良好	口縁〜底部 写残存
0191 S B 038 ●	杯 土師器	(3.3) (12.1) (8.9)	中心部で器内の薄い丸底気味の底部は稜かに屈曲して立ち上がり、口縁端部で短く内傾する。	底部　外面　ヘラケズリ〜 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	細砂・黒色ガラス鉱物含む	明赤褐　良好	口縁〜底部 写残存
0192 S B 038 ●	杯 須恵器	3.6 12.8 7.6	やや厚い底部から強く内湾して立ち上がり、口縁部で稜かに外反する。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	1〜2mmの砂粒含む	灰白　良好	口縁〜底部 写残存
0193 S B 038 ●	甕 土師器	—— 20.3 ——	肩部を稜かに持つ凹凸の著しい胴部は、コの字状の口縁部に到り、端部で短かく立ち上がる。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂含む	淡黄橙　良好	口縁部写残存
0194 S B 038 ○	甕 土師器	—— (23.4) ——	口縁部は強く外反し、端部が外面に段を持ち、先端は器内が薄く尖る。	胴部　外面　ヘラケズリ〜 内面　横ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粘土粒・鉱物粒・細砂含む	橙　良好	口縁部小片
0195 S B 039 ●	杯 土師器	(2.7) (12.0) ——	丸底の底部は肥厚して立ち上がり外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ〜 胴部　内外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	橙　良好	写残存
0196 S B 039 ●	杯 土師器	4.2 (15.0) ——	丸底気味の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、直立気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ〜 胴部　外面　上半指オサエ後ナデ下半ヘラケズリ	細砂含む	橙　良好	写残存
0197 S B 039 ●	杯 須恵器	3.2 (14.0) (8.0)	底部は厚く、緩やかな絞り込みを持ちながら強く内湾して立ち上がり、直線的に開く。	底部　外面　右回転ヘラ切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	細砂含む	内面灰　外面黒　良好	写残存 墨書あり
0198 S B 039 ●	台付甕 土師器	—— —— (5.4)	台部は円盤形を呈し、上半は緩やかに下半では大きく外方へ開く。	台部　横ナデ 底部　外面　ナデ 内面　ヘラナデ	砂粒を多量に含む	橙　良好	台部のみ写残存
0199 S B 040 ●	杯 須恵器	3.7 13.6 7.8	一定した器厚を保つ底部から、緩やかに内湾して立ち、直線的に開く口縁部到る。	底部　外面　回転ヘラ調整 胴部　内面　ロクロ目痕 胴部　ロクロ目痕	細砂含む	明赤褐　良好	口縁写残存 外面鉄分付着
0200 S B 041 ○	杯 土師器	(3.5) (15.5) ——	胴部は屈曲して立ち上がり、直立し中程で外反する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ 口縁部　横ナデ	細砂含む	橙　良好	全体的に薄い

土器番号 遺構番号 出土地点	器形分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0201 S B041 ○	杯 土師器	(3.3) (15.0) ——	緩平な丸底の底部は、緩やかに内湾し、直立気味に立ち上がる口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ 口縁部 横ナデ	細砂含む	橙 良好	口縁部写残存
0202 S B041 ○	皿 土師器	—— (22.0) ——	口縁部は強く外反し、端部でやや立ち上がる。	口縁部 横ナデ	細砂・黒色ガラス鉱物含む	にぶい赤褐 良好	口縁写残存 内外面鉄分付着
0203 S B041 ○	皿 土師器	—— (21.6) ——	口縁部は強く外反し、端部は外後を持ち短く立ち上がる。	口縁部 横ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁部写残存
0204 S B042 ●	杯 土師器	3.1 13.0 ——	丸底の底部は、緩やかに内湾し、短く立ち上がる器肉の薄い口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ→ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	2mmの砂粒含む	橙 良好	写残存 内面底部に刻書？あり
0205 S B042 ●	杯 土師器	(3.0) (13.8) ——	緩平な丸底の底部は、内湾し外面に僅かな段をもって立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	口縁～底部写残存
0206 S B042 ●	皿 土師器	—— (20.0) ——	口縁部は緩やかに外反して立ち上がり、端部では強く外反する。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 指オサエ横ナデ	砂粒を多量に含む	橙 良好	口縁部のみ写残存
0207 S B043 ○	杯 土師器	3.3 (14.4) ——	緩平な丸底の底部は、直立気味に立ち上がり、端部が僅かに内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	黒雲母・軽石・赤褐色粒・砂粒含	橙 良好	約5残存
0208 S B043 ●	杯 土師器	3.5 12.8～13.3 ——	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	ほぼ完形
0209 S B043 ●	杯 須恵器	3.1 12.9 ——	緩平な薄手の丸底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい黄橙 良好	口縁～胴部写残存
0210 S B043 ○	杯 土師器	—— —— ——	平底気味の底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ→ 胴部 外面 指オサエ	砂粒含む	橙 良好	底部破片
0211 S B043 ●	杯 須恵器	3.6 14.1 8.1	厚い平底の底部は、強く突出する膨部を持ち内湾して立ち上がり、口縁部に到る。	底部 外面 回転ヘラ切り後右回転ヘラ調整 胴部 ロクロ目痕	雲母・風物・粗石砂粒・赤褐色粒含	灰白 良好	完形
0212 S B043 ●	杯 須恵器	4.0 13.6 6.3	底部は、やや突出し、緩曲して立ち上がり、胴部は僅かに内湾して薄手で尖る口縁部に到る。	底部 外面 右回転ヘラ調整？ 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	細砂含む	淡黄 良好	写残存
0213 S B043 ●	杯 須恵器	3.3 (13.6) 8.0	一定した器肉を保ち、強く内湾して立ち上がり、口縁部で外反する。	底部 外面 回転ヘラ切り 胴部 内外面 ロクロ目痕	長石・細砂含む	青灰 良好	写残存
0214 S B043 ●	皿 土師器	—— 21.4 ——	口縁部は、緩やかに外反し、端部でやや立ち上がる。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	1mmの砂粒を多量に含む	橙 良好	口縁～胴部写残存
0215 S B044 ●	杯 土師器	(3.0) (12.5) ——	緩平な丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、内傾気味の口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	黒雲母・砂粒含む	橙 良好	写残存
0216 S B044 ●	杯 土師器	3.3～3.8 13.1 ——	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、やや直立する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ←	砂粒含む	にぶい黄橙 良好	完形
0217 S B044 ○	杯 土師器	—— (13.0) ——	緩平な丸底と思われる底部は、外後を持ち、やや直線的に立ち上がる器高は浅い。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 横ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁部のみ写残存
0218 S B044 ●	杯 土師器	3.2 (12.8) ——	丸底の凹凸のある底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	底部内面凹凸めだつ
0219 S B045 ●	杯 土師器	—— (12.6) ——	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、外面に後を持ち外反する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	口縁～体部写残存
0220 S B045 ●	杯 土師器	—— (12.2) ——	直線的に大きく開く胴部は、外面に後を持ち、僅かに立ち上がる口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁部小片

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0221 S B045 ●	杯 土師器	— (12.8) —	胴部は、屈曲して立ち上がり、直立気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁部のみ残存
0222 S B045 ●	杯 土師器	— (13.0) —	直線的に大きく開き胴部は、外面に稜を持ち口縁部に到る。器高は浅い。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	底部は指られて薄い
0223 S B045 ●	台付椀 土師器	— (15.2) —	緩やかに内消する胴部は、短く外反し、端部が丸く終わる口縁部に到る。高台付と考えられる。	胴部　外面　ロクロ目痕 内面　ヘラミガキ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・4mmの石・砂粒含む	にぶい橙　良好	内面部色処理、外面に及ぶ
0224 S B045 ●	羽釜 須恵器	— — (18.0)	口縁部は、短く内傾し、上部で立ち上がり小さく水平に張り出す鍔部を備げる。	口縁部　横ナデ	2mmの砂粒含む	灰白　良好	
0225 S B045 ●	甕 土師器	— — (4.0)	平底の底部は、やや直線的に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ↓ 内面　ヘラナデ	1mmの砂粒含む	橙　良好	底部～胴部残存
0226 S B045 ●	甕 土師器	— — (23.8)	口縁部はややコの字状を呈し、端部に沈線が入り尖る。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	浅黄橙　良好	口縁～胴部残存
0227 S B046 ○	杯 土師器	(2.7) (12.2) —	丸底の底部は、緩やかに内消して立ち上がり口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	長石・黒雲母・輝石・砂粒含む	橙　良好	残存
0228 S B046 ○	杯 土師器	(2.5) (13.0) —	扁平な丸底は、屈曲して内消気味に立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。器肉は非常に薄い。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁部残存
0229 S B046 ○	杯 土師器	(3.4) (13.0) —	扁平な丸底の底部は、緩やかに内消して立ち上がり、直立気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁～底部残存
0230 S B046 ●	杯 須恵器	4.2 (13.5) (8.6)	一定した器厚を保つ平底の底部は屈曲気味に強く内消して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　右回転ヘラ調整 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	長石・鉱物砂粒含む	灰白　良好 黒色斑点あり	残存
0231 S B047 ●	杯 土師器	— (12.6) —	丸底の底部は緩やかに立ち上がり直立気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁部のみ残存
0232 S B047 ●	杯 土師器	— (14.0) —	扁平な丸底の底部は、緩やかに内消して立ち上がり、外面に稜を作って直立気味に立つ口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ↙ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	にぶい橙　良好	口縁部残存
0233 S B047 ●	杯 土師器	(3.4) (14.0) —	丸底の底部は、強く内消して立ち上がり短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	にぶい橙　良好	約5残存
0234 S B047 ●	杯 土師器	— (14.7) —	扁平な丸底の底部は、強く内消して立ち上がり、直立気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ↗ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 内面　指オサエ後横ナデ	黒雲母・輝石砂粒含む	橙　良好	約5残存
0235 S B048 ●	杯 土師器	3.2～3.5 12.2 —	丸底気味の底部は、強かに内消して立ち上がり、口縁部で外反し、短く立ち上がる端部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	にぶい橙　良好	口縁～底部残存 器高に段差
0236 S B048 ○	杯 土師器	— (12.0) —	丸底は、強く内消して立ち上がり直立気味で端部が短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	輝石・黒雲母砂粒含む	橙　良好	5残存
0237 S B048 ●	杯 土師器	3.1 12.3 —	扁平な丸底の底部は、屈曲気味に強く内消して立ち上がり、直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁～底部一部欠損
0238 S B048 ●	杯 土師器	3.4 12.6 —	扁平な丸底の底部は、緩やかに内消して立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁部5欠損
0239 S B048 ●	杯 土師器	2.9 13.3 —	扁平な丸底の底部は、緩やかに内消して立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	にぶい橙　良好	5残存 外面飲分付着
0240 S B048 ●	杯 須恵器	3.9 (13.5) 8.0	厚く内消した底部から絞り込みを持ちながら強くて内消して立ち上がる。	底部　外面　切り離し後回転ヘラ調整 胴部　ロクロ回転	細砂含む	灰白　やや不良	5残存 ロクロ回転方向不明

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0241 S B048 ●	杯 須恵器	—— —— (8.6)	一定した器厚の底部から，緩やかに屈曲して立ち上がる。	底部 外面 切り離し後回転ヘラ調整 胴部 ロクロ目痕	細砂含む	灰白 良好	底部写残存 ロクロ回転方向不明
0242 S B048 ●	台付杯 須恵器	5.2 (13.0) 9.2	高台を貼付し器厚する底部は，強く張る腰部を有し直線的に立ち上がり，僅か外反する口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 右回転糸切り 胴部 ロクロ目痕	小石含む	明灰白 良好	口縁～底部一部欠損
0243 S B048 ●	甕 土師器	—— (22.4) ——	丸味のある胴部から，強くくの字状に外反する口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケリ後ナデ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粒を多量に含む	橙 良好	口縁～胴部写残存
0244 S B049 ●	杯 土師器	—— —— (8.2)	平底の部は，立ち上がり部で器厚し，強く内湾して立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ 胴部 内面 ヘラミガキ	赤褐色粒含む	浅黄橙 良好	内面黒色処理，外面底部黒斑あり
0245 S B049 ●	甕 土師器	—— 22.0 ——	やや丸味を持つ胴部は，くの字状に外反するする口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	砂粒を多量に含む	橙 良好	口縁部写残存
0246 S B050 ○	杯 土師器	3.2 12.5 11.7	凹凸のある平底の底部は，直立気味に立ち上がり，短く外傾する口縁部に到る。器肉は非常に薄い。	底部 外面 ヘラケズリ→ 胴部 横ナデ 口縁部 横ナデ	白色軽石・砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁部写欠損
0247 S B050 ●	杯 土師器	—— (13.1) ——	丸底の底部は，外面に稜を作り緩やかに立ち上がり，外稜を持ち直立し端部で内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ↑ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁～体部残存
0248 S B050 ●	杯 土師器	(3.3) (14.4) ——	丸底の底部は強く内湾して立ち上がり，短く内傾気味の口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁 横ナデ	赤褐色粒含む	橙 良好	口縁のみ写残存
0249 S B050 ●	甕 土師器	15.6 16.0 6.7	やや丸い底部から，球形を呈する胴部に到り，口縁部はくの字状に大きく外反する。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	砂粒を多量に含む	明赤褐 良好	口縁部写残存
0250 S B051 ●	壺 須恵器	—— —— (22.2)	器厚は一定で，肩部に張りを持つ。	胴部 外面 ロクロ目痕 内面 ロクロ目痕 肩部ヘラナデ	長石・細砂含む	表裏灰 断面灰赤 良好	胴部のみ一部残存
0251 S B052 ○	杯 土師器	(3.5) (12.0) ——	丸底の底部は強く内湾して立ち上がり，直立する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	口縁～胴部写残存
0252 S B052 ●	杯 土師器	3.4 12.8 ——	丸底の底部は，強く内湾して立ち上がり，短く直立する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ↖ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒・雲母含む	橙 良好	ほぼ完形 口縁が歪んでいる
0253 S B052 ●	杯 土師器	3.3～3.4 12.8 ——	扁平な丸底の底部は，強く内湾して立ち上がり，短く内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ↙ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	1mの砂粒含む	橙 良好	底部約写欠損
0254 S B052 ●	杯 土師器	—— (13.8) ——	丸底の底部は強く内湾して立ち上がり短く内傾する口縁部に到る。器肉は薄い。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	口縁部写残存
0255 S B052 ●	台付瓶 須恵器	(7.0) (7.8) (10.8)	短く開く高台を貼付する底部は，直線的に立ち上がり，口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 回転ヘラ切り後ナデ調整	細砂含む	灰 良好	口縁～底部写残存
0256 S B052 ●	台付皿 須恵器	—— —— ——	僅かに開く高台を貼付する平底の底部は，中心部に行く程器肉が厚い。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 右回転ヘラ調整 内面 ロクロ目痕	細砂含む	灰白 良好	底部のみ残存
0257 S B052 ●	甕 土師器	—— (21.6) ——	口縁部は強く外反し，端部は尖る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粒・砂粒含む	赤褐 良好	頸部外面に煤付着
0258 S B052 ●	甕 土師器	—— (23.2) ——	張りのある胴部は強く外反する口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	砂粒を多量に含む	橙 良好	口縁～胴部写残存
0259 S B052 ●	甕 土師器	—— —— 6.0	丸い底部から緩く内傾して立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ↓ 内面 ヘラナデ	赤褐色土・砂粒含む	明赤褐 良好	底部～胴部残存
0260 S B052 ●	甕 土師器	—— —— (4.0)	小さい平底の底部は，直線的に立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ↖ 内面 ヨコヘラナデ	赤褐色土含む	橙 良好	底部～胴部写残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0261 S B052 ●	台付甕	—— —— ——	台部はハの字状に大きく開く。	台部　横ナデ 底部　外面　横ナデ 内面　ヘラナデ	砂粒を多量に含む	明赤褐　良好	台部のみ定形
0262 S B052 ●	甕	29.2 22.6 3.7	小さい平底の底部は、直線的に立ち上がり、長胴化した胴部をし、くの字状に外反する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	赤褐色土粒・砂粒を多量に含む	橙　良好	ほぼ完形
0263 S B054 ○	杯 須恵器	3.9～4.2 11.3 4.6	平底の底部は、強く内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・砂粒を多く含む	に ぶい橙　良好	底部磨滅
0264 S B054 ●	壺 須恵器	—— —— (19.5)	球形を呈する胴部は、中央部に最大径を持つ。	胴部　ロクロ目痕	長石・雲母砂含む	青灰　良好	体部小片外面に自然釉
0265 S B055 ●	杯 土師器	3.5 (12.0) ——	丸底の底部から、内湾して立ち上がり、端部が内傾気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁～底部ラ残存
0266 S B055 ●	杯 土師器	3.5 13.3 ——	丸底の底部は、屈曲気味に立ち上がり、ほぼ直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	橙　良好	ほぼ完形
0267 S B056 ●	甕 土師器	—— —— ——	口縁部は強くくの字状に外反し、端部は尖る。	胴部　外面　横ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの赤褐色粒・砂粒含む	浅黄橙　良好	口縁ラ残存 頸部に指頭圧痕有り
0268 S B057 ●	台付鉢 灰釉	—— (14.8) ——	胴部は内湾して立ち上がり、短く外反し、丸く肥厚して終る口縁部に到る。	胴部　外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	精選された胎土	灰白　良好	口縁部のみ一部残存
0269 S B057 ●	輪花皿 灰釉	3.9 14.4 8.0	短かい高台を貼付する器肉の厚い平底の底部は、緩やかに立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　回転ヘラ調整 内面　ロクロ目痕 胴部　外面　回転ヘラ調整	長石粒目立つ	灰白　良好	輪花4ヶ所あり 歪り掛け
0270 S B057 ●	土釜 土師器	—— (20.1) ——	一定した器厚で強りのある胴部から、短く外反する口縁部に到る。	胴部　外面　横ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	軽石・赤褐色粒・砂粒質粒含む	赤褐　良好	口縁ラ残存 内外面鉄分付着
0271 S B058 ○	台付鉢 須恵器	—— (13.0) ——	胴部は強く、内湾して立ち上がり緩やかに外反し、端部で丸く終る口縁部に到る。	胴部　ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	に ぶい橙　良好	口縁～胴部ラ残存
0272 S B058 ○	長頸瓶 須恵器	—— —— ——	頸部は、直立気味に立ち上がる。	頸部　ロクロ目痕	白色針状物質含む	青灰　良好	
0273 S B058 ●	甕 土師器	—— (13.3) (14.5)	球形の胴部は、緩やかに外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	赤褐　良好	口縁～胴部ラ残存
0274 S B058 ○	甕 土師器	—— —— (6.2)	上げ底気味の底部は、立ち上がり部で肥厚し、直線的に立ち上がる。	底部　外面　本葉痕 胴部　外面　ナデ 内面　ハケメ	1mmの砂粒含む	に ぶい橙　良好	底部～胴部ラ残存
0275 S B058 ●	甕 土師器	—— (15.0) ——	やや丸味のある胴部は、くの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	砂粒を多量に含む	明赤褐　良好	口縁ラ残存 外面鉄分付着
0276 S B058 ○	甕 土師器	—— (19.8) ——	口縁部は短く外傾し、端部は尖り気味。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	赤褐　良好	巻き上げ痕明瞭
0277 S B058 ●	甕 土師器	—— (20.0) ——	僅かに肩部を持つ胴部は、緩やかに外反し、上位でやや立ち上がる口縁部に到る。器肉は薄い。	胴部　外面　ヘラケズリ後ナデ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・砂粒含む	橙　良好 硬質	口縁～胴部ラ残存
0278 S B059 ●	杯 土師器	—— (15.6) ——	丸底の底部は外面に稜を作って、外反して立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ← 胴部　外面　指オサエ後ナデ 内面　横ナデ	砂粒含む	に ぶい橙　良好	口縁部ラ残存
0279 S B059 ●	杯 土師器	—— —— ——	丸底の底部は、直立気味に立ち上がり、口縁部に到る。	胴部　磨滅 口縁部　横ナデ	白色・軽石・赤褐色粒・砂粒含む	橙　良好	口縁ラ残存 全体に磨滅
0280 S B059 ●	杯 土師器	13.3 (12.2) ——	丸底の底部は、緩やかに立ち上がり、直立する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ↙ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	口縁～底部ラ残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0281 S B 059 ○	杯 第恵器	2.7 10.5 7.0	平底の底部は強く内誘して立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。器高は浅い。	底部 外面 右回転糸切り 胴部 内外面 横ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁、底部一部欠損
0282 S B 059 ●	杯 第恵器	— (14.0) —	緩やかに内誘する胴部は、短く外反し、肥厚する口縁部に到る。	胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	赤褐色粒含む	灰黄 良好	口縁～胴部1/4残存 漆
0283 S B 059 ●	杯 第恵器	4.0 15.2 9.0	器厚で平底の底部は、強く屈曲して立ち上がり、直立気味の口縁部に到る。	胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	雲母含む	灰白 良好	体部に彫ヘラ記号あり
0284 S B 059 ●	甕 土師器	— (18.0) —	強りのある胴部は、直立し端部で短く外反する口縁部に到る。器肉は薄い。	胴部 外面 ヘラケズリ↖ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	1mmの砂粒・赤褐色土粒含む	にぶい橙 良好	口縁～胴部小片
0285 S B 059 ●	甕 土師器	— (20.9) —	口縁部はくの字状に外反し、端部でやや立ち上がる。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	砂粒を多量に含む	にぶい橙 良好	口縁部3/4残存
0286 S B 059 ●	甕 土師器	— (21.2) —	やや丸味を持つ胴部から、強く外反し、端部に沈線が入る口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ↗ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色土粒・砂粒を多量に含む	橙 良好	口縁部1/2～体部1/4残存
0287 S B 059 ●	甕 土師器	— (22.2) —	僅かに丸味のある胴部は、強くくの字状に外反し、端部で段を持つ器肉の薄くなる口縁部に到る。	胴部 外面 上位ヘラケズリ← 中位ヘラナデ 内面 ヘラナデ	赤褐色砂粒多量含む	橙 良好	口縁部3/4残存
0288 S B 059 ●	甕 土師器	— (23.0) —	口縁部は外反し、端部で短く立ち上がる。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色土粒・砂粒を多量に含む	橙 良好	口縁部3/4残存
0289 S B 059 ●	甕 土師器	— (21.75) —	胴部は長胴形を呈し、直立気味に立ち上がり、口縁部に到る。最大径は口縁部にある。	胴部 外面 ヘラケズリ↖ 内面 ヨコヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色土粒含む	赤橙 良好	口縁3/4～胴部3/4残存
0290 S B 059 ●	甕 土師器	— — (4.4)	凹凸のある薄い平底の底部は、緩やかに立ち上がり、直線的に開く。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ↘ 内面 ヘラナデ	黒雲母含む	橙 良好	底部～胴部3/4残存
0291 S B 059 ●	甕 土師器	30.1 (21.0) (3.3)	小さい平底は、直線的に立ち上がり、長胴を呈し、くの字状に外反する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ 内面 ヨコヘラナデ	砂粒を多量に含む	橙 良好	口縁～底部3/4残存
0292 S B 060 ○	杯 土師器	3.3 (12.5) (12.8)	丸底の底部は、強く内誘して立ち上がり、短く内傾する器肉の薄い口縁部に到る。	底部 外面 ヨコヘラケズリ← 胴部 横ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	約3/4残存
0293 S B 060 ●	杯 土師器	— (13.4) —	丸底の底部、強く内誘して立ち上がり、口縁部で短く内傾する。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	口縁～体部3/4残存
0294 S B 060 ○	杯 土師器	— — (6.4)	底部は短い三角高台を貼付し、器肉は非常に薄い。	底部 内面 棒状ヘラミガキ	白色軽石粒含む	にぶい黄 良好	底部残存 内面黑色処理
0295 S B 060 ●	杯 土師器	4.1 12.8 (4.8)	平底の底部は、緩やかに立ち上がり、端部の尖る口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ↖ 口縁部 横ナデ	赤褐色粒含む	浅黄橙 良好	3/4残存 内面に微分付着
0296 S B 060 ○	台付椀 — 灰釉	— — (7.8)	三日月形高台を貼付する底部は、大きく開いて立ち上がる。	高台 付高台 横ナデ	精選されている	灰 良好	底部3/4残存 釉が高台部分に及ぶ
0297 S B 060 ●	杯 — 灰釉	— — (6.4)	僅かに外傾する高台を貼付する底部は、大きく外方へ開きながら立ち上がる。	高台部 付高台 横ナデ 胴部 ロクロ目痕	精選されている	灰白 良好	重ね焼き痕あり
0298 S B 060 ●	台付椀 — 灰釉	5.1 15.0 7.2	三日月の高台を貼付する底部は、緩やかに内誘して立ち上がり、短く外反する口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 口縁部 横ナデ	精選されている	灰白 良好	流し掛け 重ね焼き痕あり
0299 S B 060 ●	甕 土師器	— (13.3) —	丸味のある胴部は、コの字状をし端部で器肉の薄くなる口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粒含む	橙 良好	口縁～胴部3/4残存
0300 S B 060 ●	甕 土師器	— (16.6) —	強りのある胴部は、緩やかに外反し、端部で段を持ち立ち上がる口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁～胴部残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0301 S B060 ●	甕 土師器	— (19.5) —	口縁部は直線的に立ち上がり、端部で強く外反する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヨコヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	灰白　良好	口縁3残存
0302 S B060 ●	甕 土師器	— (20.0) —	僅かに外反する口縁部は、端部で短く立ち上がる。	胴部　外面　ヘラケズリ→ 内面　ヨコヘラナデ 口縁部　横ナデ	細砂粒・小礫含む	外面黒褐　不良 内面暗褐	口縁3残存
0303 S B061 ●	杯 土師器	3.3 (11.4) (4.6)	平底の底部は、立ち上がり部で肥厚し、大きく外方へ開き、口縁部で短く外反する。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ← 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・長石砂粒含む	橙　良好	一部黑斑あり
0304 S B061 ●	杯 土師器	3.8～4.2 12.0 —	平底の底部は、屈曲気味に立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　上半指オサエ 下半ヘラケズリ←	赤褐色粒・黑雲母・軽石・砂粒含	淡橙　良好	粘土紐巻き上げ明瞭
0305 S B061 ●	台付椀 赤釉	— — (7.4)	台形の高台を貼付する平底の底部は、立ち上がり部で肥厚し、緩やかに立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 胴部　外面　ロクロ目痕	精選された胎土	オリーブ灰　良好	全体に硬毛塗り施釉 トチ痕残す
0306 S B061 ●	杯 須恵器	— (13.9) —	緩やかに立ち上がる胴部は、外反気味の口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	砂粒含む	淡黄橙　良好	底部一体部与残存
0307 S B061 ●	皿 灰釉	— (14.0) —	胴部は大きく外方へ開きながら立ち上がり、短く外反する口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	精選されている	灰　良好	口縁小片貼付掛け
0308 S B061 ●	杯 灰釉	— — (7.1)	三日月高台を貼付、中央部で器高の低くなる平底の底部は、緩やかに立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転ヘラ調整 内面　横ナデ	精選された胎土	灰　良好	歪みあり 重ね焼痕あり
0309 S B061 ●	甕 土師器	— (16.0) —	口縁部は短く外反する。	口縁部　横ナデ	赤褐色土・砂粒含む	赤褐　良好	口縁は与残存　内面に煤付着
0310 S B061 ●	甕 土師器	— 17.8 —	口縁部は、緩やかに外反し、端部でやや強く反る。	口縁部　外面　ハケナデ後ヘラケズリ↑ 内面　ハケナデ	赤褐色粒含む	赤橙　良好	口縁部のみ与残存
0311 S B061 ●	甕 土師器	— 23.0 —	張りのある胴部は、短くくの字状に外反する口縁部に到る。	胴部　外面　上位ヘラケズリ← 中位ヘラケズリ← 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・砂粒多量含む	橙　良好	口縁部与残存
0312 S B061 ●	甕 土師器	— (29.1) —	張らない胴部から、緩やかに外反して立ち上がり、端部で強く外反して肥厚して終る口縁部に到る。	胴部　内面　ヘラケズリ← 内面　ナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・軽石・鉱物質粒含む	赤　良好	口縁部与残存
0313 S B061 ●	甕 土師器	— — 5.1	丸底気味の底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	底部　外面　無調整 胴部　外面　ヘラケズリ↘ 内面　中位ヘラケズリ←	2mmの砂粒含む	赤褐　良好	底部～胴部与残存
0314 S B062 ●	台付椀 土師器	— (15.0) —	胴部は内湾して立ち上がり、上位で肥厚し、短く直立する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ後ヘラによる文様を施文	赤褐色粒含む	淡黄橙　良好	内面黑色処理　外面に黑色及ぶ
0315 S B062 ●	台付椀 須恵器	4.1～4.4 (12.5) (6.2)	短い高台を貼付する中央より器厚を増す底部は緩やかに内湾して立ち上がり外反気味の口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り後ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕	砂粒含む	灰　良好	与残存　胴部に黑斑あり
0316 S B062 ●	台付椀 須恵器	4.5 12.7 6.4	短いだった高台を貼付する器肉の薄い底部は、緩やかに内湾して立ち上がり外反気味の口縁部に到る	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　ナデ 胴部　ロクロ目痕	軽石砂粒含む	にぶい黄橙　良好	約与残存
0317 S B062 ●	椀 須恵器	6.0 (14.6) (6.8)	短い高台を貼付する底部は、大きく外方へ開きながら立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・軽石・雲母（黑）・石英	黑褐　良好	与残存 煤
0318 S B062 ○	台付椀 須恵器	5.0 13.0 6.2	しっかりした高台を貼付する底部は、外方へ直線的に立ち上がり、外反する口縁部に到る。	高台部　付高台　ロクロ目痕 底部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	にぶい黄橙　良好	口縁与欠損 内面煤付着
0319 S B062 ●	甕 土師器	— (22.2) —	僅かに肩部をもつ丸味のある胴部は、短く外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヨコヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・黑雲母含む	にぶい橙　良好	口縁～胴部与残存
0320 S B062 ●	甕 土師器	— — (3.8)	小さい平底の底部は、緩やかに立ち上がる。	底部　外面　砂底 胴部　外面　ヘラケズリ↓ 内面　ヘラナデ	赤褐色と1mmの砂粒含む	にぶい黄橙　良好	底部～胴部与残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0321 S B 062 ○	甕 土師器	—— (22.0) ——	口縁部は、強くくの字状に外反し端部で短く立ち上がる。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヨコヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粒・1mmの砂粒含む	淺黄橙 良好	口縁部1/6の破片を図上復元
0322 S B 062 ○	羽釜 須恵器	—— (22.1) ——	口縁部は短く直立し、断面三角形で上向きに張り出す鍔を貼付する。	口縁部 横ナデ	長石粒目立つ	灰黄 良好	口縁部小片
0323 S B 063 ○	台付鉢 須恵器	—— (13.6) ——	胴部は内湾して立ち上がり、強く外反する口縁部に到る。	胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	砂粒・赤褐色粒含む	にぶい黄橙 良好	口縁部のみ1/4残存
0324 S B 064 ●	杯 土師器	3.1 (12.9) ——	中央部で器厚になる丸底の底部は屈曲気味に強く内湾して立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 内面 指オサエ横ナデ	白色粒石粒・砂粒含む	にぶい橙 良好	1/4残存
0325 S B 064 ●	杯 須恵器	3.7 (12.7) (5.6)	中心部が器肉の薄い平底の底部は強く内湾して立ち上がり、外反気味で丸く終る口縁部に到る。	底部 外面 回転糸切り痕 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	砂粒含む	黄灰 良好	口縁～底部1/4残存
0326 S B 064 ●	杯 須恵器	4.0 (13.6) (7.5)	平底の底部は、強く内湾して立ち上がり口縁部に到る。	底部 外面 静止糸切り 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	赤褐色粒・砂粒を多く含む	にぶい褐 良好	口縁～底部1/4残存
0327 S B 064 ●	杯 須恵器	—— —— 4.8	歪みのある平底の底部は、強く内湾して立ち上がる。	底部 外面 静止糸切り 内面 ロクロ目痕 胴部 ロクロ目痕	赤褐色粒含む	灰 良好	底部のみ1/4残存
0328 S B 064 ○	蓋 須恵器	3.3 15.4 4.2	環状のつまみを貼付した天井部は緩やかに開き、口縁端部は短く直に折れる。	天井部 回転ヘラ調整後つまみ貼付	砂粒を多く含む	灰 良好	内面に径9cmの重ね焼痕あり
0329 S B 064 ●	羽釜 須恵器	—— (19.0) ——	胴部は直線的になり、断面三角形で水平に張り出す鍔を貼付し、短く立ち上がる口縁部に到る。	胴部 外面 タテヘラケズリ	4mmの砂粒含む	橙 良好	内外面とも指オサエ目立つ
0330 S B 064 ●	羽釜 須恵器	—— (26.5) ——	直立気味の口縁部は、細長く水平に張り出す鍔を貼付する。端部は水平。	口縁部 横ナデ	軽石・鉱物質粒・小石含む	灰 良好	口縁部小片
0331 S B 065 ●	台付鉢 土師器	5.5 (12.7) 3.6	外傾するしっかりした高台を貼付する平底の底部は緩やかに立ち上がり、やや直立する口縁部に到る	高台部 付高台 横ナデ 胴部 外面 上半指オサエ 下半 ヘラケズリ	赤褐色砂粒・黒雲母を含む	にぶい橙 良好	底部に竹管状の刺突あり
0332 S B 065 ●	台付鉢 土師器	—— —— (7.4)	直立気味の高台を貼付する器厚で平底の底部は、緩やかに立ち上がる。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 ナデ調整 胴部 外面 ヘラケズリ	赤褐色粒・砂粒含む	橙 良好	底部～体部小片
0333 S B 065 ●	土釜 土師器	—— (20.9) ——	胴部は僅かに丸味を持ち、短く外反する口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ↓ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粘土粒・軽石・鉱物質粒含	灰白 良好	口縁1/4残存 内外面鉄分付着
0334 S B 066 ○	甕 土師器	—— (12.0) ——	丸底の底部は強く内湾して立上がり、短く内傾する口縁部に到る。	胴部 外面 指オサエ 内面 ヨコナデ 口縁部 横ナデ	0.5～1mmの砂粒・黒雲母少量含む	にぶい橙 良好	口縁のみ残存
0335 S B 066 ●	甕 土師器	—— 21.2 ——	口縁部は、緩やかに外反し、端部で僅かに立ち上がる。	胴部 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粒含む	橙 良好	小破片の口縁のみから復元実測
0336 S B 066 ●	甕 土師器	—— (21.0) ——	口縁部は、緩やかに外反し、上部でやや立ち上がり、端部は尖る。	胴部 外面 ヘラケズリ← 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色土を含む	明赤褐 良好	口縁1/4残存
0337 S B 066 ●	甕 土師器	—— —— 5.8	やや上げ底気味の底部は、大きく外方へ開きながら立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	赤褐色土を含む	橙 良好	底部～胴部1/4残存
0338 S B 067 ○	杯 土師器	4.5 (11.5) 4.4	丸底の器肉の薄い底部は、内湾して立ち上がり、外反する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ↑ 胴部 外面 指オサエ 口縁部 横ナデ	雲母(黒)・赤褐色粒・軽石砂粒含む	にぶい橙 良好	
0339 S B 067 ●	杯 土師器	—— (12.8) ——	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、短く内傾する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁～底部1/4残存
0340 S B 067 ●	杯 土師器	—— (15.4) ——	扁平な丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ→ 胴部 外面 指オサエ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	橙 良好	口縁部小片

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0341 S B067 ●	杯 土師器	3.8 11.3～12.0 4.0～4.15	丸底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、短く外反する口縁部に到る。	底部　外面　中央無調整 周縁ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ	赤褐色粒含む	淡黄橙　良好	定形　粘土紐巻上げ明瞭
0342 S B067 ●	土師器	—— 20.1 ——	強かに丸味のある胴部は、直立気味に立ち上がり端部で強く外反するロ縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	鉱物質粒・軽石・赤褐色粒含む	にぶい橙　良好	口縁～体部与残存
0343 S B067 ●	壺 土師器	—— —— 4.8	平底の底部は、やや直線的に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ↘ 内面　ナデ	赤褐色土・2mm砂粒含む	にぶい橙　良好	底部残存 外面に煤付着
0344 S B067 ●	壺 土師器	—— —— (4.4)	器肉の薄い平底の底部は、緩やかに立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 内面　ナデ 胴部　外面　ヘラケズリ↓	赤褐色土・砂粒を含む	にぶい橙　良好	底部～胴部与残存
0345 S B068 ●	杯 土師器	3.6～4.4 11.6 4.4	丸底気味の底部は、緩やかに立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　砂底 胴部　外面　上半指オサエ 下半ヘラケズリ↘	5mm程の白色素物・黒雲母含む	橙　良好	外面底部に黒斑あり
0346 S B068 ●	台付椀	5.7 13.9 6.0	しっかりした高台を貼付する底部は、大きく外傾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　砂底 胴部　外面　上半指オサエ 下半ヘラケズリ←	赤褐色粒含む	にぶい橙　良好	高台に棒状物をのせた痕あり
0347 S B068 ●	壺 土師器	—— (18.4) ——	口縁部に短く外反し、端部に沈線が入る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	明赤褐　良好	口縁部与残存
0348 S B068 ●	壺 土師器	—— (18.0) ——	張りのある胴部は、上半で強く外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ↖ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・1mm砂粒含む	明赤褐　良好	口縁～胴部小破片
0349 S B068 ○	壺 土師器	—— (25.7) (27.4)	丸味のある胴部は、短く外反し端部が丸く終わる口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ←後一部ナデ 内面　ヘラナデ	鉱物質粒・軽石粒・赤褐色粒含む	橙　良好	口縁部与残存
0350 S B069 ○	杯 土師器	(3.8) (14.0) ——	丸底の底部は、直線的に立ち上がり、短く内傾する口縁端部に到る。	底部　外面　手持ちヘラケズリ 口縁部　外面　指オサエ後ナデ 口縁端部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	約与残存
0351 S B069 ●	杯 土師器	(3.3) 12.3 6.0	中央より器厚を増す底部は、やや突出して立ち上がり、直線的に口縁部に到り端部に沈線入る。	底部　外面　中央部砂底、周縁手持ちヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ	赤褐色粒・砂粒多含む	にぶい橙　良好	約与残存
0352 S B069 ●	須恵器	3.7 (10.9) (4.4)	平底の底部は中央より器厚を増し内湾して立ち上がり、強かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	橙　良好	底部～口縁与残存
0353 S B069 ●	須恵器	(3.3) (12.2) 3.5	中央より器厚を増す底部は、緩やかに立ち上がり、口縁部で丸く肥厚して終る。	底部　外面　回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・砂粒含む	橙　良好	約与残存 黒斑あり
0354 S B069 ○	台付椀 須恵器	—— —— 7.0	しっかりした高台から、胴部は直線的に立ち上がる。	高台部　ヨコナデ 底部　外面　回転糸切り後ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕	黒雲母・赤褐色粒・軽石・長石含	にぶい黄橙　良好	内面に煤付着
0355 S B069 ●	台付椀 灰釉	—— —— (8.0)	一定した器厚の内湾する底部からそのまま胴部に続く。高台は三日月形。	底部　外面　回転ヘラ調整 胴部　外面　回転ヘラ調整 口縁部　横ナデ	精選された粘土	灰白　良好 硬質	底部与　施釉方法不明 焼きにぶい
0356 S B069 ○	台付椀 灰釉	—— —— (7.0)	一定した器厚の底部から、内湾して立ち上がる。高台は三日月形。	底部　外面　回転糸切り後ナデ 調整 口縁部　ロクロ目痕	長石粒目立つ	灰　良好	底部与残存
0357 S B069 ○	壺 土師器	—— (14.0) ——	胴部は強かに丸味を持ち、口縁部は上半で外反し、端部は平坦。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヨコヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色土を含む	にぶい赤褐　良好	口縁～肩部与残存
0358 S B069 ●	壺 土師器	—— (21.8) ——	胴部は張りを持たず、ややコの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・1mm砂粒含む	赤　良好	口縁与残存
0359 S B069 ●	土釜 土師器	—— (17.2) ——	一定した器厚の胴部から、ややコの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヨコナデ 口縁部　横ナデ	鉱物質粒・赤褐色粘土粒・軽石含	明赤褐　良好	口縁部小片
0360 S B069 ●	土釜 土師器	—— 22.1 ——	肩部に稜を持ち、ややコの字状の口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　指オサエ後横ナデ	軽石・赤褐色粘土粒・細砂粒含む	橙　良好	口縁部小片

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0361 S B 069 ●	甕 土師器	—— (24.8) ——	胴部は器厚を増しながら、短く外反する口縁部に到る。口縁部の器肉は厚い。	胴部 外面 ヘラケズリ→ 内面 ヘラナデ 口縁部 指オサエ後ナデ	赤褐色土・2mmの砂粒含む	赤褐 良好	口縁部与残存
0362 S B 069 ○	甕 土師器	24.0～24.5 (21.9) (4.8)	小さい平底の底部から緩やかに内湾して立ち上がり僅かに肩部を持ち、短く外反する口縁部に到る。	底部 外面 砂成 胴部 外面 ヘラケズリ 内面 ヨコヘラナデ→ 口縁部 横ナデ	赤褐色土粒含む	橙 良好	与残存
0363 S B 070 ○	杯 須恵器	—— (16.0) ——	大きく外方へ開く胴部は、短く外反する口縁部に到る。端部は尖る。	胴部 内外面 ロクロ目痕	石英・赤褐色粒・砂粒含む	にぶい黄橙 良好	口縁のみ与残存
0364 S B 070 ○	杯 須恵器	—— (14.0) ——	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり口縁部に到る。	胴部 ロクロ目痕 下半一部ヘラケズリ 口縁部 横ナデ	白色軽石粒・砂粒含む	にぶい黄橙 良好	表面変れている
0365 S B 070 ○	台付椀 須恵器	5.0 (12.8) 7.1	短く開く高台を貼付する底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 回転糸切り 胴部 ロクロ目痕	赤褐色土粒・砂粒含む	にぶい黄橙 良好	与残存
0366 S B 070 ●	台付椀 須恵器	5.5 (14.6) 6.8	しっかりした高台を貼付する底部は、緩やかに立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部 外面 回転糸切り 胴部 ロクロ目痕	砂粒含む	灰 良好 硬質	口縁～胴部にかけて与欠損
0367 S B 070 ●	台付椀 須恵器	6.6 (16.0) 7.5～8.0	短くしっかりした高台を貼付する器肉の厚い底部は、緩やかに立ち上がり、外反する口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 回転糸切り 胴部 ロクロ目痕	砂粒多量に含む	灰黄 良好 硬質	底部完形 口縁～胴部与残存 焼
0368 S B 070 ●	台付椀 須恵器	—— —— 7.5	やや代れ気味の高台を貼付する底部から、緩やかに立ち上がる。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 回転糸切り 内面 ロクロ目痕	砂粒含む	にぶい橙 良好	底部のみ完形
0369 S B 070 ●	台付椀 灰釉	(5.3) (15.4) (7.2)	高台を貼付する底部は、僅かに腰部に張りを持ち、内湾して立ち上がり短く外反する口縁部に到る。	底部 外面 ナデ調整 内面 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	精選されている	灰白 良好	口縁～底部与残存 漬け掛け
0370 S B 070 ●	台付椀 灰釉	—— (14.1) ——	胴部は緩やかに内湾し口縁部に到り、端部は丸く終る。	胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	精選されている	灰 良好	口縁部小片 施釉方法不明
0371 S B 070 ○	甕 土師器	—— (19.4) ——	口縁部は短く強く外反し、端部で短く立ち上がる。	胴部 外面 ヘラケズリ↑ 内面 棒状具によるナデ 口縁部 横ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい黄橙 良好	口縁与残存
0372 S B 070 ○	土釜 土師器	—— (19.0) ——	僅かに丸味を持つ胴部は、短く外反して立ち上がる口縁部に到る。口縁端部は平坦。	胴部 外面 ヘラケズリ↓ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粘土粒・軽石粒含む	浅黄橙 良好	口縁部与・体部小片残存
0373 S B 070 ●	甕 土師器	—— (18.6) ——	僅かに肩部を持つ胴部は、頸部で強くくびれ、短く外反して内面に面を持つ口縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 頸部 外面 指ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい橙 断面黒灰	良好 口縁～胴部与の小片
0374 S B 070 ○	羽釜 須恵器	—— (20.4) ——	やや直線的な胴部は、断面三角形で水平に張り出す鍔を貼付し、内傾する口縁部に到る。端部は平坦	胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ 口縁部 横ナデ→ヘラケズリ	細砂粒・小礫含む	灰 良好	口縁～胴部残存
0375 S B 070 ○	羽釜 須恵器	—— (22.2) ——	口縁は短く内傾し、断面三角形の鍔部を貼付する。口唇部は平坦。	口縁部 横ナデ	4mmの軽石含む	灰 良好	口縁部与残存
0376 S B 070 ●	羽釜 須恵器	—— (22.9) ——	胴部は直線的に立ち上がり、小さく水平に張り出す鍔を貼付し、短く内傾する口縁部に到る。	胴部 外面 上半ロクロ目痕 下半タテヘラケズリ 口縁部 横ナデ	小石・軽石・赤褐色粘土粒含む	灰白 良好	口唇部平坦
0377 S B 070 ○	甑 須恵器	—— (28.0) ——	直線的に外反する胴部は丸く小さい鍔を貼付し、口縁部は丸く終る	胴部 外面 タテヘラケズリ 内面 ヨコヘラケズリ 口縁部 横ナデ	0.5mmの砂粒含む	灰黄 良好	小片
0378 S B 071 ●	台付椀 土師器	—— —— (7.4)	底部は短い三角形の高台を貼付し器肉は厚い。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 回転ヘラ調整 内面 ヘラミガキ	金雲母含む	にぶい橙 良好	底部のみ完形 内面黒色処理
0379 S B 071 ●	台付椀 須恵器	—— —— 6.8	短い高台を貼付する底部は内面に凹凸を持つ。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 ナデ 内面 棒状ヘラミガキ	赤褐色土含む	にぶい橙 良好	底部のみ残存 内面黒色処理
0380 S B 071 ●	杯 須恵器	(1.7) (8.5) (5.0)	平底の底部は、短く内湾して立ち上がり、口縁部に到る。	底部 外面 石回転糸切り 内面 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	細砂粒含む	にぶい橙 良好	底部～口縁部与残存

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0381 S B071 ●	灯明皿 —— 須恵器	1.4 10.0 6.4	平底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部端部は丸く終る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　横ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	与残存
0382 S B071 (黒)	杯 —— 須恵器	2.0 9.7 5.3	平底の器肉の厚い底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、直線的に開く口縁部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　内外面　ナデ 口縁部　横ナデ	細砂粒含む	にぶい橙　良好	ほぼ完形 生地脆い
0383 S B071 ●	台付椀 —— 須恵器	4.5 14.8 (6.1)	三角形の高台を貼付する底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 胴部　外面　ロクロ目痕	砂粒含む	橙　良好	雑な高台が付く
0384 S B071 ●	杯 —— 須恵器	4.5 (15.0) ——	平底の器肉の厚い底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、僅かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　回転糸切り 胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	精選されている	橙　良好	高台剥落とも考えられる
0385 S B071 ●	杯 —— 土師器	3.8 (11.9) ——	丸底の底部は、屈曲気味に立ち上がり、口縁部に到りつつ端部で短く立つ。	底部　外面　ヘラケズリ→ 胴部　外面　指オサエ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	にぶい黄橙　良好	口縁～胴部 1/4残存 墨書あり
0386 S B071 ○	椀 —— 灰釉	—— (11.8) ——	胴部は緩やかに内湾し、短く外反する口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	精選されている	灰白　良好	小片 漬け掛け
0387 S B071 ○	椀 —— 灰釉	—— —— (7.6)	三角形の高台を貼付する底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 胴部　ロクロ目痕	精選されている	灰　良好	施釉方法不明
0388 S B071 ●	椀 —— 灰釉	—— —— (8.1)	底部は三日月形の高台を貼付する。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　切り離し技法不明	精選されている	灰　良好	漬け掛け 重ね焼き痕 あり
0389 S B071 ○	耳皿 —— 灰釉	—— —— ——	器肉の厚い平底の底部から、強く内湾して立ち上がる。	底部　外面　回転糸切り 内面　ロクロ目痕	精選されている	灰白　良好	胴部与残存 施釉方法不明
0390 S B072 ○	杯 —— 須恵器	4.6 (12.9) (6.9)	平底の底部は、緩やかに立ち上がり口縁部に到る。	底部　外面　砂底 胴部　外面　指ナデ、オサエ 口縁部　横ナデ	1～3mmの砂粒を多く含む	にぶい橙　良好	与残存
0391 S B072 ●	椀 —— 須恵器	—— (13.0) ——	胴部は緩やかに内湾して立ち上がりやや矢玉口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	赤褐色粒・軽石粒含む	にぶい橙　良好	高台欠落か
0392 S B072 ●	杯 —— 須恵器	—— (13.5) ——	胴部は緩やかに内湾して立ち上がり口縁部で短く外反する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ナデ 口縁部　横ナデ	黒雲母・砂粒含む	にぶい橙　良好	粘土紐巻き上げ調整
0393 S B072 ●	台付椀 —— 須恵器	5.2 (14.0) (7.5)	だれた高台を貼付する器肉の厚い底部は、直線的に立ち上がり、僅かに外反する口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 胴部　ロクロ目痕	砂粒含む	淡黄　良好	高台の貼付は雑である
0394 S B072 ○	杯 —— 須恵器	—— (17.2) ——	胴部は、ハの字状に大きく開いて立ち上がり、強く外反し端部で短く立ち上がる口縁部に到る。	胴部　外面　指オサエ 内面　ナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色土・金雲母含む	にぶい橙　良好	胴下半部へラケズリかう
0395 S B072 ○	椀 —— 須恵器	—— —— (6.9)	短く開く高台を貼付する器肉の厚い底部は強く内湾して立ち上がる。	高台部　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 内面　ナデ	軽石・赤褐色砂粒含む	褐灰　良好	内外面荒れている
0396 S B072 ●	皿 —— 灰釉	(3.2) (13.2) (6.7)	台形の高台を貼付する底部は、大きくハの字状に開き、僅かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　回転ヘラ調整後ナデ調整 胴部　外面　下位回転ヘラ調整	精選されている	灰　良好	部分的に焼きはぜあり
0397 S B072 ○	台付椀 —— 灰釉	—— —— (7.3)	三日月高台を貼付する底部が、緩やかに立ち上がる。	高台部　横ナデ 底部　外面　回転ヘラ調整 内面　ロクロ目痕	精選されている	灰白　良好	重ね焼き痕 あり
0398 S B072 ●	羽釜 —— 須恵器	—— (19.1) ——	胴部は断面台形のしっかりした鍔を貼付し、直立気味に立ち上がる口縁部に到る。	鍔部　横ナデ、凸部のみヘラケズリ 口縁部　横ナデ端部ヘラケズリ	細砂粒混入	青灰　良好	口縁与残存 鍔先端部へラケズリ
0399 S B072 ●	羽釜 —— 須恵器	25.9 19.6 (5.5)	小さい平底の底部は、直線的に立ち上がり、小さく上向きの鍔を貼付し、短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 内面　ロクロ目痕 胴部　外面　下半ヘラケズリ↓	4mmの石を含む	浅黄橙　良好	定形に近く重要
0400 S B073 ○	杯 —— 土師器	(3.1) (12.1) (10.0)	胴部は直線的に立ち上がり、短く立ち上がる口縁部に到る。	胴部　外面　指オサエ後ナデ 内面　棒状ヘラミガキ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	橙　良好	底面は割られて薄い

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0401 S B073 ●	杯 須恵器	(10.6) —— ——	底部との境に稜を持つ胴部は、強く内湾して立ち上がり、短く直立して立ち上がる。	底部 外面 回転糸切り 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	細砂含む	灰 良好	図示復元小さめ
0402 S B073 ○	杯 須恵器	3.2 (10.2) (6.2)	器肉の薄い平底の底部は、強く内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部 外面 回転糸切り 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	砂粒等含む	にぶい橙 良好	約1/4残存
0403 S B073 ○	杯 須恵器	3.2 (12.8) (7.0)	器肉の厚い平底の底部は、強く内湾して立ち上がり、外反気味の薄い口縁部に到る。	底部 外面 回転ヘラ切り 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	長石・雲母含む	灰 良好	約1/4残存
0404 S B073 ●	杯 須恵器	3.8 (14.0) 9.5	内面に凹凸を持つ厚い丸底は、強く内湾して立ち上がり器肉の減ずるロ縁部に到る。端部は欠る。	底部 外面 手持ちヘラケズリ 胴部 内外面 ロクロ目痕	細砂含む	灰白 良好	約1/4残存 底面ケズリゆるく雑減
0405 S B073 ○	杯 須恵器	—— —— 7.5	器肉の厚い平底の底部は、緩やかに立ち上がる。	底部 外面 左回転ヘラ調整 内面 ロクロ目痕 胴部 ロクロ目痕	小石含む	緑灰 良好	底部のみ完形
0406 S B073 ●	杯 須恵器	—— —— 5.7	平底の底部は緩やかに立ち上がる。	底部 外面 石回転糸切り 内面 ロクロ目痕 胴部 ロクロ目痕	細砂含む	灰白 良好	底部のみ1/4残存
0407 S B073 ○	杯 須恵器	—— —— (8.2)	底部は僅かに上げ底気味で、周縁部は器肉を増す。	底部 外面 石回転糸切り、周縁左回転ヘラ調整 内面 ロクロ目痕	細砂含む	明褐灰 良好	底部のみ1/4残存
0408 S B073 ●	蓋 須恵器	—— (15.0) ——	天井部は扁平で、口縁端部は短く直に下に折れる。	体部 外面 上一中位ヘラ調整	石英・砂粒を多く含む	灰白 良好	約1/4残存
0409 S B073 ●	甕 土師器	—— (16.2) ——	口縁部は短く外傾し、端部は欠る。	口縁部 横ナデ	赤褐色土含む	明赤褐 良好	口縁小破片から図上復元
0410 S B073 ●	土釜 土師器	—— 19.6 ——	やや丸味を持つ胴部は、直立気味に立ち上がり上部で外反する口縁部に到る。口縁端部の器肉は厚い	胴部 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	赤褐色粘土粒・雲母粒	赤 良好	口縁～胴部上位1/4残存
0411 S B073 ○	甕 土師器	—— —— (6.0)	平底の底部は、強く直線的に立ち上がる。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ↘ 内面 ヘラナデ	2mmの砂粒・黒色鉱物含む	明赤褐 良好	底部～胴部1/4残存
0412 S B073 ●	甕 土師器	—— —— (3.8)	小さい平底の底部は、緩やかに立ち上がる。	底部 外面 砂底後ヘラケズリ 胴部 外面 ヘラケズリ↘ 内面 ヘラナデ	2mmの砂粒含む	にぶい橙 良好	底部1/4残存
0413 S B073 ○	台付甕 土師器	—— —— (10.2)	台部はハの字状に大きく開く。	台部 横ナデ 底部 外面 ヘラナデ 内面 横ナデ	1mmの砂粒含む	橙 良好	台部1/4残存 内外面煤付着
0414 S B073 ○	羽釜 須恵器	—— (23.1) ——	口縁部は内傾する。上向きの小さい鍔を貼付する。	口縁部 横ナデ	軽石・鉱物質粒含む	灰 良好	口縁部小片
0415 S B073 ●	羽釜 土師器	—— 27.4 ——	口縁部は僅かに内傾し、器肉は厚い。	胴部 外面 ヘラケズリ↓ 内面 強いヘラナデ 口縁部 横ナデ	小石・鉱物質粒含む	赤 良好	口縁部1/4残存
0416 S B073 ○	甕 土師器	—— (29.0) ——	僅かに肩部を持つ胴部は、短く立ち上がり、上部で強く外反する器肉の厚いロ縁部に到る。	胴部 外面 ヘラケズリ↑ 内面 ヘラナデ 口縁部 横ナデ	小石を多量含みガサガサしている	赤褐 良好	口縁～胴部1/4残存
0417 S B073 ●	土釜 土師器	30.6 (24.4) 8.7	小さい平底の底部は、直線的に立ち上がり、僅かに肩部を持ち、短く内傾する。	底部 外面 無調整 胴部 外面 ヘラケズリ↘ 内面 強いヘラナデ	鉱物質粒・小石・石英含む	暗赤褐 良好	口縁部1/4～底部完形
0418 S B074 ○	杯 須恵器	4.1 (12.1) (5.0)	中央より器厚を増す平底の底部はやや強く屈曲して立ち上がり、僅かに外反する口縁部に到る。	底部 外面 回転糸切り後ナデ 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	砂粒含む	灰黄褐 良好	1/4残存 底部磨滅
0419 S B074 ○	杯 須恵器	3.8 11.0 (6.4)	平底の底部は、屈曲気味に立ち上がり、外反気味に口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 上半指オサエ 下半ヘラケズリ	赤褐色粒・砂粒含む	明赤褐 良好	約1/4残存
0420 S B074 ●	杯 須恵器	—— (13.0) ——	直線的に立ち上がる胴部は、短く外反する口縁部に到る。	胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	赤褐色粒・砂粒含む	にぶい橙 良好	生地良好

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0421 S B074 ○	台付甕 須恵器	— — —	高台の痕を残す器肉の厚い底部は直線的に立ち上がる。	胴部　ロクロ目痕	細砂粒含む	灰　良好	底部か片焼きはぜ有黒色斑点有
0422 S B074 ●	台付椀 土師器	— — (6.3)	短く開く高台を貼付する底部は、緩やかに立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 胴部　外面　ヘラケズリ↙ 内面　ナデ	赤褐色粒・石英粒等含む	橙　良好	底部のみは定形
0423 S B074 ○	皿 灰釉	— (13.0) —	胴部は、大きくハの字状に開き、短く外反する口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	精選されている	灰　良好	口縁与残存漬け掛け
0424 S B074 ●	台付椀 灰釉	— — (8.2)	三日月高台を貼付する器肉の厚い底部は、緩やかに内湾して立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　切り離し後回転ヘラ調整後ナデ調整	長石粒目立つ	灰　良好	底部与残存重ね焼き痕
0425 S B074 ●	甕 土師器	— (20.0) —	口縁部は直立し、端部で短く内傾する。	頸部　指オサエ後横ナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	にぶい橙　良好	口縁与残存口縁部歪む
0426 S B074 ●	甕 土師器	— (21.0) —	丸味のある胴部は、緩やかに外反し、端部で短く強く外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	赤　良好	口縁～胴部の破片
0427 S B075 ●	台付椀 須恵器	(5.1) (14.1) 7.4	短い高台を貼付する器肉の厚い底部は、大きく外傾して立ち上がり、短く外反する口縁部に到る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り後ナデ 胴部　内外面　ロクロ目痕	黒雲母含む	にぶい黄橙　良好	約与残存内面に黒斑有
0428 S B075 ●	台付椀 須恵器	— — (6.2)	短い高台を貼付する器肉の厚い底部は、緩やかに立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り 胴部　ロクロ目痕	砂粒含む	淡黄　良好	底部のみ与残存
0429 S B075 ●	台付椀 須恵器	5.7 (14.1) (7.5)	緩やかに開く高台を貼付する底部は、大きく外傾しながら立ち上がり、口縁部はえく終る。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　切り離し後ナデ消 胴部　外面　一部ヘラケズリ	赤褐色粒・白色軽石粒含む	淡黄橙　良好	約与残存内外面に煤付着
0430 S B075 ○	甕 土師器	— — (13.6)	大きい平底の器肉の厚い底部は、直線的に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ナデ	3.5mmの砂粒多量含む	にぶい黄橙　良好	底部～胴部与残存
0431 S B076 ●	杯 須恵器	— (12.0) —	胴部は内湾し、肥厚する口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	砂粒含む	淡黄橙　良好	墨痕あり
0432 S B076 ●	杯 須恵器	— (12.2) —	胴部は内湾して立ち上がり、肥厚する口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	砂粒含む	淡黄橙　良好	生地軟質で軽い
0433 S B076 ○	杯 須恵器	— (14.8) —	緩やかに内湾する胴部は、短く外反する口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	3mmの赤褐色粒含む	にぶい橙　良好	口縁～胴部与残存
0434 S B076 ●	台付椀 須恵器	— — 6.6	だら気味の高台を貼付する底部は緩やかに立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　ナデ調整 内面　ロクロ目痕	軽石・赤褐色粒・2～3mmの小石含	橙　良好	台部のみ残存
0435 S B076 ○	台付椀 須恵器	— — 7.8	高台部は、短く緩やかに開く。	高台部　付高台　指オサエ後ナデ 底部　内外面　ナデ	赤褐色粒・軽石・砂粒含む	灰褐　良好	底部のみ与残存 爆
0436 S B076 ○	椀 須恵器	— — 9.8	器高の高い高台を貼付する底部は緩やかに立ち上がる。	高台部　付高台　横ナデ 底部　外面　回転糸切り後ナデ調整	石英・軽石・黒雲母・砂粒含む	浅黄橙　良好	
0437 S B076 ○	甕 土師器	— (22.4) —	僅かに肩部を持つ胴部は、短く強く外反する口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ↓ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	2mmの砂粒多量含む	赤　良好	与残存のものから図上復元
0438 S B076 ○	甕 須恵器	— — —	胴部は直立して立ち上がる。	胴部　外面　上位ヘラケズリ 下位横ナデ 内面　横ナデ	1mmの砂粒含む	灰　良好	内面に黒色部分あり
0439 S B076 ○	羽釜 須恵器	— (22.0) —	口縁部は直立し、断面三角形の鍔を貼付する。	口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい橙　良好	
0440 S B077 ●	杯 須恵器	2.7 10.4 6.6	一定した器厚の底部から、緩やかに立ち上がり、後かに外反する口縁部に到る。	底部　外面　右回転糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	1～2mmの砂粒含む	にぶい橙　良好	約与残存外面煤付着

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高・口径・底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0441 S B077 ●	台付椀 須恵器	5.9 14.4 6.7	やや だれている短かい高台から、緩やかに内湾して立ち上がり、素直に口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 回転糸切り 胴部 外面 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	2mの砂粒含む	浅黄 良好	底部～胴部写残存
0442 S B077 ○	台付椀 須恵器	5.4～5.9 (14.5) 7.1	緩やかに開く高台部を貼付する底部は、内湾気味に立ち上がり、口縁部は、短く立ち上がる。	底部 外面 切り離し後ナデ 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	0.5～1mの茶色の砂粒含む	にぶい橙 酸化 良好	口縁～胴部写欠損
0443 S B077 ●	台付皿 灰釉	2.2 12.8 7.0	三角形の高台を貼付する底部は緩やかに開いて立ち上がり、短く外反しえく終る口縁部に到る。	高台部 付高台 横ナデ 底部 外面 右回転糸切り後ナデ調整	2mの砂粒含む	灰白 硬質 良好	胴を掛け重ね焼痕あり
0444 S B077 ●	壺 土師器	—— —— (5.6)	内面に四凸を持つ底部から、しっかりと立ち上がる。	底部 外面 一部砂底残す 胴部 外面 ヘラケズリ↓ 内面 ナデ	1mの砂粒含む	にぶい赤褐 良好	底部写残存
0445 S B078 ●	杯 土師器	3.6 11.4 8.3	一定した器厚の丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、やや外反する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	細砂・黒色鉱物・粗石含む	橙 良好	体部写欠損
0446 S B078 ●	杯 土師器	(3.5) (11.8) (8.5)	丸底気味の底部から、内面に凹部を作って立ち上がり、口縁部で僅かに外反する。	底部 外面 手持ちヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	1mの砂粒含む	橙 良好	底部～口縁部写残存
0447 S B078 ●	杯 土師器	(3.5) 11.8 (8.8)	丸底気味の底部は、強く内湾して立ち上がり、外反する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ 胴部 外面 指ナデ 口縁部 横ナデ	3mの砂粒含む	にぶい橙 良好	口縁部写、底部欠損
0448 S B078 ●	杯 土師器	(3.2) (12.0) ——	丸底気味の底部から、緩やかに立ち上がり、口縁端部で短く立つ。	底部 外面 手持ちヘラケズリ 胴部 外面 指オサエ後ナデ 口縁部 横ナデ	砂粒含む	にぶい橙 良好	底部～口縁部写残存
0449 S B078 ●	杯 須恵器	3.1～3.4 12.9 6.6	平底の底部は、緩やかに立ち上がり、口縁部でやや直線的に開く。	底部 外面 右回転糸切り 胴部 内面 ヘラミガキ 口縁部 横ナデ	赤褐色粒・砂粒含む	橙 良好	写残存 内面黒色処理
0450 S B078 ●	杯 土師器	—— —— (7.0)	厚くしっかりした底部から、強く内湾して立ち上がる。	底部 外面 手持ちヘラケズリ 胴部 外面 下半横ヘラケズリ	赤褐色粒含む	橙 良好	内面ヘラミガキ後黒色処理
0451 S B078 ○	杯 土師器	9.0 20.0 14.4	丸底の底部は、強く内湾して立ち上がり、短く直立する口縁部に到る。	底部 外面 ヘラケズリ← 内面 ナデ 口縁部 横ナデ	1mの砂粒含む	橙 良好	完形
0452 S B078 ●	杯 須恵器	3.5 (12.8) 6.7	平底の底部は、内湾気味に立ち上がりやや外反する口縁部に到る。	底部 外面 右回転糸切り 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	赤褐色粒含む	にぶい橙 良好	写残存
0453 S B078 ●	杯 須恵器	3.2 12.9 5.9	薄い底部から、緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は強く外反する。	底部 外面 右回転糸切り 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	長石・小石含む	灰白 良好	完形
0454 S B078 ●	杯 須恵器	4.0 12.5 6.6	肥厚する底部から、やや強く屈曲して立ち上がり、内湾傾向を保ちながら口縁部に到る。	底部 外面 左回転糸切り 胴部 内外面 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	2～3mmの小石含む	灰 良好	完形
0455 S B078 ●	杯 須恵器	3.4 12.8 6.2	底部から腰部は内湾して立ち上がり、胴部は直線的に開き、口縁端部は丸い。一定した薄い器厚。	底部 外面 右回転糸切り 胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	長石多量に含む	灰 良好	完形 黒色斑点あり
0456 S B078 ○	杯 須恵器	—— (13.3) ——	胴部は、一定の器厚で内湾し、口縁部で強かに外反し丸く終る。	胴部 ロクロ目痕 口縁部 横ナデ	小石含む	灰 良好	口縁～胴部写残存
0457 S B078 ●	杯 須恵器	—— —— 6.0	一定した器厚の底部から緩やかに内湾して立ち上がり、胴部は外方に向かって開く。	底部 外面 右回転糸切り 胴部 ロクロ目痕	細砂粒含む	灰白 良好	口縁部のみ欠損 鈍く重い
0458 S B078 ○	杯 須恵器	—— —— 5.7	厚くしっかりした底部から、屈曲して立ち上がる。	底部 外面 右回転糸切り 胴部 内外面 ナデ	石英・砂粒等含む	にぶい橙 良好	底部のみ残存
0459 S B078 ●	蓋 須恵器	3.3 15.2 15.3	環状つまみを貼付する扁平な天井部は、緩やかに開き、短く直に折返される口縁部に到る。	体部 外面 上半回転ヘラ調整 後つまみ貼付	砂粒・黒色鉱物粒含む	灰白 良好	完形
0460 S B078 ●	台付椀 灰釉	—— —— (8.0)	内湾する底部から、丸味を持つ胴部へ続く。高台部は端部で丸く終わる。	底部 外面 切り離し技法不明	精選されている黒色斑点有り	灰白 良好	

土器番号 遺構番号 出土地点	器形 分類	法量 器高-口径-底径	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土	色調・焼成	備考
0461 S B078 ●	甕 土師器	— (12.8) —	口縁部は、コの字状を呈する。	胴部　外面　ヘラケズリ← 内面　ヨコヘラナデ 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	赤　良好	口縁与残存 煤付着
0462 S B078 ●	甕 土師器	— — —	全体的に器厚は薄く、小さい底部から内面に稜を持って立ち上がり緩やかに内湾しながら胴部に続く	底部　外面　ナデ 胴部　外面　縦ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	砂粒多量含む	にぶい赤褐　良好	底部～体部のみ残存
0463 S B078 ●	甕 土師器	— (14.9) —	直線的に立ち上がり、強く張り出す肩部を持つ胴部は、コの字状を呈す口縁部に到る。	胴部　外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ 口縁部　横ナデ	砂粒を多量に含む	橙　良好	与残存 胴部外面煤付着
0464 S B079 ○	椀 須恵器	3.3～3.8 10.1 6.1	中央より器厚を増す平底の底部は強く内湾気味に立ち上がり、口縁部に到る。	底部　外面　静止糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	軽石・石英・赤褐色鉱物・砂粒含む	にぶい橙　良好	完形 全体的に歪んでいる
0465 S B080 ○	杯 土師器	3.0～3.5 12.3 8.4	丸底気味の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、外反し端部で短く立ち上がる口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　指オサエ後ナデ 口縁部　横ナデ	黒雲母・砂粒含む	橙　良好	与残存
0466 S B080 ●	杯 土師器	7.0 16.9 8.9	丸底気味の底部は、強く内湾して立ち上がり、やや外傾する口縁部に到る。器高は深い。	外面　ヘラケズリ← 内面　ヘラケズリ後ヘラミガキ	赤褐色粒・砂粒含む	にぶい橙　良好	与残存 内面黑色処理
0467 S B080 ○	杯 須恵器	— — (8.0)	端縁で器肉の厚くなる平底の底部は、内湾して立ち上がる。	底部　外面　回転糸切り 内面　ナデ 胴部　ナデ	軽石・砂粒含む	にぶい橙　良好	底部与残存
0468 S B081 ○	杯 土師器	(3.8) (14.2) —	緩やかに内湾して立ち上がる胴部は、直立する口縁部に到る。	胴部　外面　上半指オサエ 下半ヘラケズリ→ 口縁部　横ナデ	黑雲母含む	橙　良好	口縁部約与残存
0469 S B081 ●	杯 須恵器	3.4 (10.0) 5.2	一定の器厚の底部から屈曲して立ち上がり、薄い口縁部に到る。	底部　外面　静止糸切り 胴部　内外面　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	1mmの砂粒含む	にぶい橙　良好	与残存
0470 S B081 ●	杯 土師器	4.0 (11.2) (4.6)	平底の器肉の厚い底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ→ 口縁部　横ナデ	赤褐色粒含む	にぶい橙　良好	約与残存 粘土紐巻き上げ痕
0471 S B081 ●	台付椀 灰釉	— (17.5) —	胴部は、緩やかに内湾して立ち上がり、外反気味の口縁部に到る。	胴部　ロクロ目痕 口縁部　横ナデ	精選されている	灰白　良好	小破片 漬け釉付
0472 S B081 ●	皿 灰釉	— — (7.7)	台形の短い高台を貼付する器肉の厚い底部は、大きく外方へ開きながら立ち上がる。	底部　外面　右回転糸切り 内面　ロクロ目痕 胴部　ロクロ目痕	精選されている	灰白　良好	底部与残存
0473 S B081 ●	甕 土師器	— (14.8) —	口縁部は外反し、端部で短く立ち上がる。	口縁部　横ナデ	赤褐色土含む	浅黄橙　良好	口縁部小片
0474 S B081 ●	甕 土師器	— — 4.4	平底の底部は、直線的に立ち上がる。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　ヘラケズリ	1mmの砂粒含む	橙　良好	底部小破片
0475 S B082 ●	杯 土師器	— (12.8) 6.1	平底の底部は、緩やかに内湾して立ち上がり、外反し端部で短く立ち上がる口縁部に到る。	底部　外面　ヘラケズリ 胴部　外面　上半指オサエ 下半ヘラケズリ→	赤褐色粒・砂粒含む	浅黄橙　良好	底部～口縁部与残存
0476 S B082 ●	羽釜 須恵器	— (18.0) —	胴部は、直線的に立ち上がり、小形で水平に張り出す鍔を貼付する。短く内傾する口縁部に到る。	底部　外面　上半ロクロ目痕 下半縦ヘラケズリ 口縁部　横ナデ	2mmの砂粒含む	浅黄橙　良好	口唇部平坦
0477 S B083 ○	杯 土師器	— (12.0) —	胴部は外面に稜を作って立ち上がり、口縁部で強く外反する。	胴部　外面　ナデ 内面　ナデ 口縁部　横ナデ	砂粒含む	にぶい橙　良好	表面は荒れている

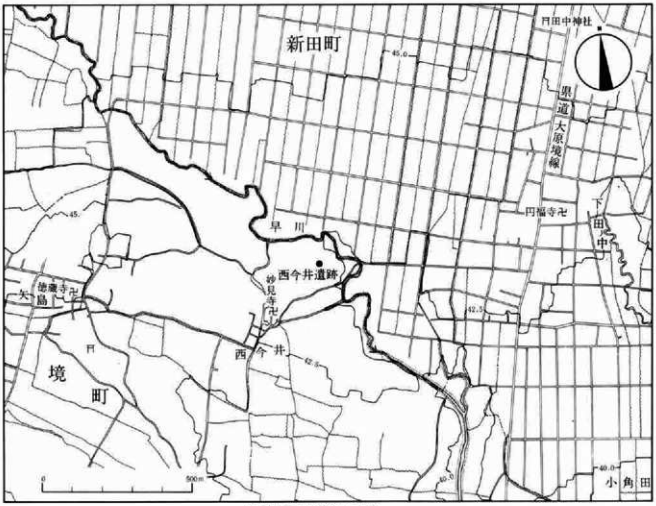
註　観察表のうちで出土地点の表現については以下の如くである。

●印　出土位置が明確なもので図示してあるもの。

○印　帰属遺構は明確であるが発掘中に住居覆土として取り上げてしまったもの。

写 真 図 版

西今井遺跡周辺の空中写真　昭和22年10月　米軍撮影



空中写真の地形解説（上図）

PL. 2　遺構全景

1　Ⅲ区　43～45号住居付近

2　Ⅲ区　46～48号住居付近

1　Ⅳ区　50～57号住居付近

2　Ⅳ区　55,56号住居付近

PL. 4　遺構全景

1　Ⅳ区　62~65号住居付近

2　Ⅳ区　70,71号住居付近

1　1号住居　全景

2　1号住居　竈

3　2号住居　全景

4　2号住居　竈

5　3号住居　全景

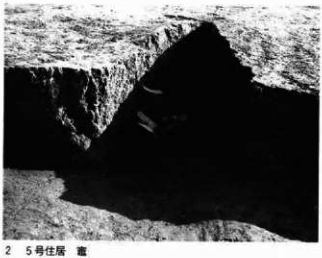
6　3号住居　竈

7　4号住居　全景

8　4号住居　竈

PL. 6　住居

1　5号住居　全景



2　5号住居　竈

3　6号住居　全景

4　6号住居　竈

5　7号住居　全景

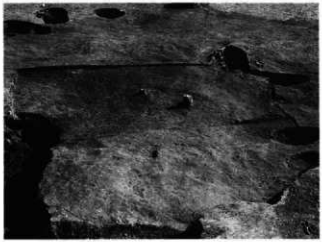
6　7号住居　竈

7　8号住居　全景

8　8号住居　竈

1　9号住居　全景

2　10号住居　全景

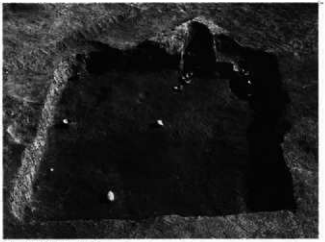


3　11号住居　全景

4　11号住居　竈

5　12号住居　全景

6　12号住居　竈



7　13号住居　全景

8　13号住居　竈

PL. 8　住 居

1　14号住居　全景

2　15号住居　竈

3　16号住居　全景

4　16号住居　竈

5　17号住居　全景

6　17号住居　竈

7　18号住居　全景

8　18号住居　竈

1　19号住居　全景

2　19号住居　竈

3　20号住居　全景

4　21号住居　竈

5　21号住居　全景

6　22号住居　全景

7　23号住居　全景

8　23号住居　竈

PL. 10　住　居

1　24号住居　全景

2　24号住居　竈

3　25号住居　全景

4　25号住居　竈

5　26号住居　全景

6　26号住居　竈

7　27号住居　全景

8　27号住居　竈

1　28号住居　全景

2　28号住居　竈

3　29号住居　全景

4　29号住居　竈

5　30号住居　全景

6　30号住居　竈

7　31号住居　全景

8　31号住居　竈

PL. 12　住　居

1　32号住居　全景

2　32号住居　竈

3　33号住居　全景

4　34号住居　全景

5　35号住居　全景

6　35号住居　竈

7　36号住居　全景

8　36号住居　竈

1　37号住居　全景

2　37号住居　竈

3　38号住居　全景

4　38号住居　竈

5　39号住居　全景

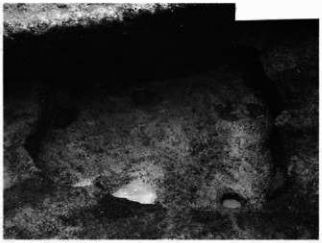
6　40号住居　全景

7　41号住居　全景

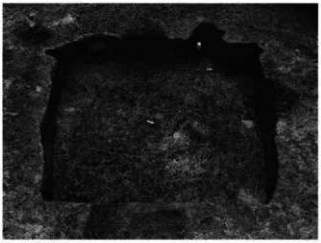
8　41号住居　竈

PL. 14　住　居

1　42号住居　全景



2　43号住居　全景



3　44号住居　全景

4　44号住居　竈

5　45号住居　全景

6　45号住居　竈

7　46号住居　全景

8　46号住居　竈

1　47号住居　全景

2　47号住居　竈

3　48号住居　全景

4　48号住居　竈

5　49号住居　全景

6　49号住居　竈

7　50号住居　全景

8　50号住居　竈

PL. 16　住　居

1　51号住居　全景

2　51号住居　竈

3　52号住居　全景

4　53号住居　竈

5　54号住居　全景

6　55号住居　竈

7　56号住居　全景

8　56号住居　竈

1　57号住居　全景

2　57号住居　竈

3　58号住居　全景

4　58号住居　竈

5　59号住居　全景

6　59号住居　竈

7　60号住居　全景

8　60号住居　竈

PL. 18　住 居

1　61号住居　全景

2　61号住居　竈

3　62号住居　全景

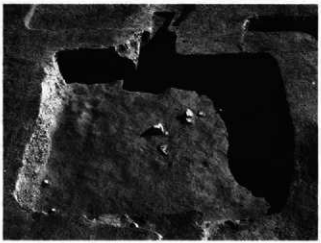
4　62号住居　竈

5　63号住居　全景

6　64号住居　全景

7　65号住居　全景

8　65号住居　竈



1　66号住居　全景

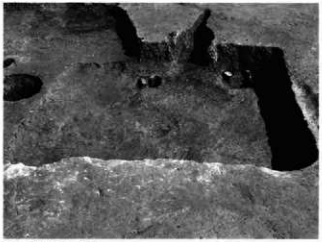
2　66号住居　竈

3　67号住居　全景

4　67号住居　竈

5　68号住居　全景

6　69号住居　全景



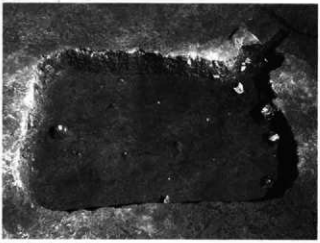
7　70号住居　全景

8　70号住居　竈

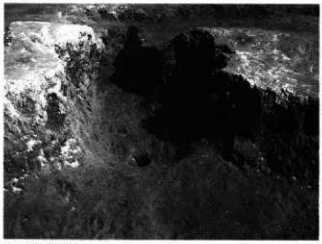
PL. 20　住　居

1　71号住居　全景

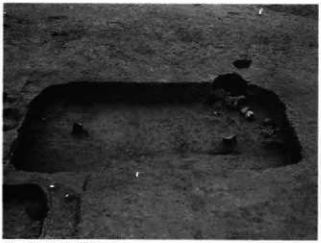
2　71号住居　竈



3　72号住居　全景

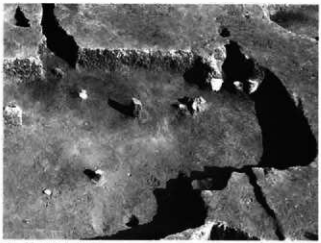


4　72号住居　竈



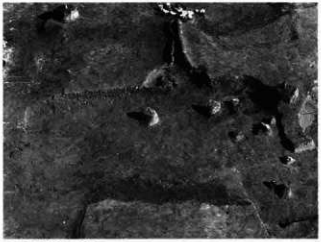
5　73号住居　全景

6　73号住居　竈



7　75号住居　全景

8　76号住居　全景



1　77号住居　全景

2　77号住居　竈

3　78号住居　全景

4　78号住居　竈

5　79号住居　全景

6　79号住居　竈

7　80号住居　全景

8　80号住居　竈

PL. 22　遺　物

1　土師器　杯　0002　SB001　　口径約12.3cm

2　土師器　甕　0007　SB001　　口径約13.5cm

3　須恵器　杯　0015　SB003　　口径約16.8cm

4　土師器　杯　0016　SB004　　口径約14.8cm

5　須恵器　杯　0017　SB004　　最大径12.1cm

6　須恵器　杯　0018　SB004　　口径約12.7cm

7　須恵器　長頸瓶　0019　SB004　　最大径9.1cm

8　須恵器　杯　0022　SB005　　口径約13.0cm

1　土師器　甕　0026　SB006　　口径約12.6cm

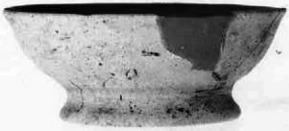
2　土師器　杯　0029　SB007　　口径約14.9cm

3　須恵器　杯　0038　SB008　　口径約12.4cm

4　須恵器　杯　0040　SB008　　口径約13.6cm

5　土師器　甕　0044　SB008　　口径約16.0cm

6　須恵器　杯　0046　SB009　　口径約11.9cm



7　須恵器　杯　0055　SB011　　口径約11.6cm

8　土師器　杯　0065　SB013　　口径約13.2cm

1　土師器　甕　0074　SB013　　口径約20.8cm

2　須恵器　杯　0075　SB014　　口径約14.0cm

3　土師器　皿　0077　SB015　　口径約14.0cm

4　須恵器　杯　0080　SB016　　口径約13.2cm

5　土師器　杯　0087　SB018　　口径約12.7cm

6　須恵器　杯　0089　SB018　　口径約13.0cm

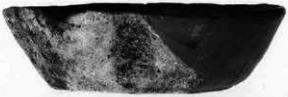
7　土師器　甕　0093　SB018　　口径約20.9cm

8　土師器　杯　0094　SB019　　口径約11.8cm

1　灰釉陶器　長頸瓶　0096　SB019　　口径約4.7cm

2　土師器　甕　0102　SB021　　器高約17.0cm

3　須恵器　杯　0106　SB022　　口径約13.7cm



4　須恵器　杯　0108　SB022　　口径約13.2cm

5　須恵器　杯　0110　SB022　　口径約14.2cm

6　須恵器　杯　0117　SB023　　口径約14.2cm

7　須恵器　甕　0129　SB025　　器高約20.5cm

8　土師器　杯　0140　SB030　　口径約12.6cm

1　土師器　杯　0144　SB031　口径約12.4cm

2　土師器　杯　0151　SB032　口径約11.7cm

3　須恵器　杯　0157　SB033　口径約12.8cm

4　土師器　杯　0162　SB034　口径約13.3cm

5　土師器　杯　0163　SB034　口径約13.3cm

6　土師器　甕　0167　SB034　口径約21.0cm

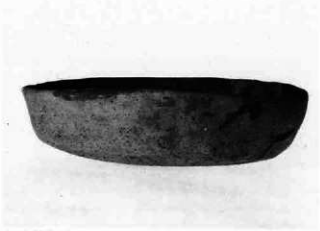
7　須恵器　蓋　0180　SB037　最大径17.3cm

8　土師器　甕　0185　SB037　口径約20.3cm

1　土師器　杯　0190　SB038　　口径約12.3cm

2　土師器　杯　0196　SB039　　口径約15.0cm

3　須恵器　杯　0197　SB039　　口径約14.0cm



4　土師器　杯　0208　SB043　　口径約13.0cm

5　須恵器　杯　0211　SB043　　口径約14.1cm

6　須恵器　杯　0213　SB043　　口径約13.6cm

7　土師器　杯　0216　SB044　　口径約13.1cm

8　土師器　杯　0235　SB048　　口径約12.2cm

1　土師器　杯　0239　SB048　　口径約13.0cm

2　須恵器　杯　0240　SB048　　口径約13.5cm

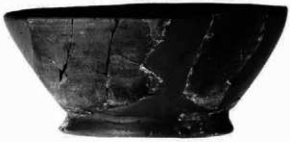
3　須恵器　杯　0242　SB048　　口径約13.0cm

4　土師器　甕　0245　SB049　　口径約22.0cm

5　土師器　甕　0249　SB050　　口径約16.0cm

6　土師器　杯　0252　SB052　　口径約12.8cm

7　土師器　杯　0253　SB052　　口径約12.8cm



8　須恵器　杯　0255　SB052　　口径約17.8cm

1　土師器　甕　0262　SB052　　器高約29.2cm

2　土師器　杯　0263　SB054　　口径約11.3cm

3　土師器　杯　0266　SB055　　口径約13.3cm

4　灰釉陶器　皿　0269　SB057　　口径約14.4cm

5　須恵器　杯　0281　SB059　　口径約10.5cm

6　須恵器　杯　0283　SB059　　口径約15.2cm

7　土師器　甕　0289　SB059　　口径約21.8cm

8　土師器　甕　0291　SB059　　器高約30.1cm

1　灰釉陶器　杯　0298　SB060　　口径約15.0cm

2　須恵器　杯　0304　SB061　　口径約12.0cm

3　須恵器　杯　0315　SB062　　口径約12.5cm

4　須恵器　杯　0317　SB062　　口径約14.6cm

5　須恵器　杯　0318　SB062　　口径約13.0cm

6　須恵器　杯　0326　SB064　　口径約13.6cm

7　須恵器　蓋　0328　SB064　　最大径15.4cm

8　土師器　甕　03331　SB065　　口径約20.9cm

1　土師器　杯　0338　SB067　　口径約11.5cm

2　須恵器　杯　0341　SB067　　口径約11.3cm

3　須恵器　杯　0345　SB068　　口径約11.6cm

4　須恵器　杯　0346　SB068　　口径約13.9cm

5　土師器　甕　0362　SB069　　器高約24.0cm

6　須恵器　杯　0365　SB070　　口径約12.8cm

7　須恵器　杯　0366　SB070　　口径約14.6cm

8　灰釉陶器　杯　0369　SB070　　口径約15.6cm

1　須恵器　羽釜　0376　SB070　　口径約22.9cm

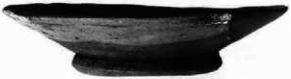
2　須恵器　杯　0381　SB071　　口径約10.0cm

3　須恵器　杯　0382　SB071　　口径約9.7cm

4　須恵器　杯　0383　SB071　　口径約14.8cm

5　須恵器　杯　0384　SB071　　口径約15.0cm

6　須恵器　杯　0390　SB072　　口径約12.9cm



7　灰釉陶器　杯　0396　SB072　　口径約13.5cm

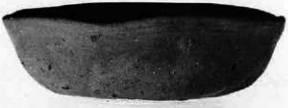
8　須恵器　羽釜　0399　SB072　　器高約25.9cm

1　土師器　甕　0417　SB073　　器高約30.6cm

2　須恵器　杯　0418　SB074　　口径約12.1cm

3　須恵器　杯　0427　SB075　　口径約14.1cm

4　須恵器　杯　0429　SB075　　口径約14.1cm



5　土師器　杯　0445　SB078　　口径約11.4cm

6　須恵器　杯　0449　SB078　　口径約12.9cm

7　土師器　鉢　0451　SB078　　口径約20.0cm

8　須恵器　杯　0453　SB078　　口径約12.9cm

1　須恵器　杯　0454　SB078　　口径約12.5cm

2　須恵器　蓋　0459　SB078　　最大径15.2cm

3　土師器　甕　0463　SB078　　口径約14.9cm

4　須恵器　杯　0464　SB079　　口径約10.1cm

5　須恵器　杯　0466　SB080　　口径約16.9cm

6　土師器　杯　0468　SB081　　口径約14.2cm

7　須恵器　杯　0469　SB081　　口径約10.0cm

8　須恵器　羽釜　0476　SB082　　口径約18.0cm

昭和62年3月25日　印刷
昭和62年3月30日　発行

西今井遺跡

——一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行　群馬県教育委員会
前橋市大手町1丁目1－1

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2

印刷　上毛新聞社出版局